

博士学位論文（東京外国語大学）  
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	ナザランカ カチャリーナ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 319 号
学位授与の日付	2021 年 10 月 13 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	〈新しい女〉をめぐる日露の比較文学論的考察

Name	Katsiaryna Nazaranka
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 319
Date	October 13, 2021
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Comparative Russian-Japanese Literary Study on the “New Woman”

〈新しい女〉をめぐる日露の比較文学論的考察

ナザランカ カチャリーナ

## 目次

序章	2
第1章 ロシアにおける男尊女卑社会の危機	13
1. 「女性問題」	13
1.1 「女性問題」の提起及びその発展	13
1.2 文学におけるニヒリストカのイメージ	19
2. トルストイと『アンナ・カレーニナ』	23
2.1 「ミソジニスト」トルストイ	23
2.2 家族の危機、トルストイ一族及びトルストイの作品を中心に	34
2.3 『アンナ・カレーニナ』	51
第2章 日本の過渡期	76
1. 明治末期～大正時代の新しさ	76
1.1 ジェンダー思想の変化、キリスト教の影響	76
1.2 変化する女性像	84
1.3 トルストイの受容、白樺派を中心に	97
2. 有島武郎と『或る女』	109
2.1 フェミニスト有島武郎、彼の恋愛観	109
2.2 『アンナ・カレーニナ』から『或る女』へ	118
第3章 〈新しい女〉の登場	137
1. ロシアにおいて	137
1.1 十月革命と女性解放、アレクサンドラ・コロンタイの「新しい女」論	137
1.2 コロンタイの小説における〈新しい女〉像及び恋愛論	143
2. 日本において	153
2.1 日本における〈新しい女〉、平塚らいてう及び『青鞥』	153
2.2 『青鞥』の作品が描く女性の葛藤	164
終章	173
参考文献	179
[日本語文献]	179
[英語文献]	182
[ロシア語文献]	183

## 序章

長年にわたって、女性は家族を通して、結婚を通してしか社会に特定の地位を占めることが出来なかった。妊娠や出産という女性の生来の機能、そして子育ては女性の聖なる使命であり自然な役割と見なされてきた。男女の一般人は言うまでもなく、知識人たちの多くは母親であること、妻であることは女性の先天的な本質であるという考えに疑問を抱かなかった。もし女性が科学や芸術、就職などの家族以外の分野で自己を確定しようとするれば、それは「元来の運命」に逆らうことであるかのように捉えられてきた。このジェンダー規範に逆らった〈新しい女〉が本論文のテーマである。

では、女性の運命を左右してきた「結婚」とは何だろうか。日本語の「結婚」及び「婚姻」ということばは、ロシア語で«брак»と訳される。ロシア語のウラジーミル・ダーリの『詳解ロシア語辞典』によると、«брак»は「夫と妻の法的結合、結婚、婚配機密、教会による夫婦の合一」（«законный союз мужа и жены; супружество, таинство венчания, соединение четы церковью»）<sup>1</sup>となる。この定義は、「機密」という、宗教の専門用語が用いられていることが注目に値する。「機密」というのは、ブロックハウス・エフロン百科事典によると、「目に見えぬ神の恵みが、目に見えるイメージを通じて信者に伝えられる、神によって成された神聖な行為」（«таинства суть богоучрежденные священные действия, в которых под видимым образом сообщается верующим невидимая благодать Божия»）<sup>2</sup>とされている。結婚が機密として認められているというのは、結婚の儀式及び夫婦の交際、そして結婚の目的（キリスト教によると、出産とお互いの道徳的成長の支えとされる）が達成されることを通して、「神の恵みが通信される」ということになる。つまり、結婚という機密によって成り立つ夫婦関係は人と神の関係に直接対応する。夫婦の神秘的で聖なる繋がり、聖書でも強調され、夫婦の交際はキリスト（神）と教会の関係に例えられている。さらに、キリスト教の主張によると、夫と妻は一体である。このような主張は、旧約聖書にてすでに取り入れられ、新約聖書の中でイエスによって再び明言されている。旧約聖書

---

<sup>1</sup> Даль В. Толковый словарь живого великорусского языка в четырёх томах. Т. 1. М., 1989. С. 122.

日本語訳は本論筆者による。以降もロシア語のテキストが引用される際は、ただし書きがない限り同様である。

<sup>2</sup> Брокгауз Ф., Ефрон И. Энциклопедический словарь Брокгауза и Ефрона (Т-Ф). М., 2014. С. 26.

の創世記によると、

また主なる神は言われた、「人がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう。」(…)主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものだから、これを女と名づけよう。」それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。(創世記2:18～24)<sup>3</sup>

つまり、聖書によると、妻は文字通り夫の体の一部から生まれ、彼と一生不可分に繋がっているということになる。キリスト教による浮気や離婚の否定は、この概念に端を発している。十月革命までのロシアでは、離婚や再婚は道徳的にだけでなく、法的にもほとんどの場合において認められていなかった。夫婦が別れることに値する唯一の理由として、キリスト教がイエスの言葉に基づいて「不品行」(浮気)、つまり夫婦の一体を損なう行為を認めていた。ただ、19世紀のロシアで離婚が許されるためには、不倫を目撃した二人の証人が必要とされており、それは事実上不可能に近いことだった。社会学の概念である「ロマンチック・ラブ」の、恋愛対象を「運命の相手」として扱うという点も、上記のキリスト教の概念に関係があると考えられる。夫婦は一体であるというキリスト教の概念は本稿で頻繁に用いるが、以後これを簡潔に「夫婦一体」と呼ぶこととする。

アブラハムの宗教では男女両方の婚外の性行為は罪と見なされている一方、事実上社会では女性のほうがそれで罰されていたことが多い。それに関する新約聖書のエピソードがある。

(…)律法学者たちやパリサイ人たちが、姦淫をしている時につかまえられた女をひっぱってきて、中に立たせた上、イエスに言った、「先生、この女は姦淫の場でつかまえられました。モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたはどう思いますか」。(…)イエスは身を起して彼らに言われた、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」。そしてまた身をかがめて、地面に物を書きつづけられた。これを聞くと、彼らは年寄から始めて、ひとりひとり出て行き、ついに、イエスだけになり、女は中にい

---

<sup>3</sup> 『聖書(旧約聖書)』日本聖書協会、1991年、2-3頁。

たまま残された。そこでイエスは身を起して女に言われた、「女よ、みんなはどこにいるか。あなたを罰する者はなかったのか」。女は言った、「主よ、だれもごいません」。イエスは言われた、「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」（ヨハネによる福音書 8：3～11）<sup>4</sup>

イエスキリスト本人は、姦淫は罪であると認めながら、そうした罪を犯した人に、男性か女性を問わず悔い改めるチャンスを与えるべきであり、非難するべきではないと説いていたが、世論の目も法律も女性に対して残酷だった。女性が夫以外の人の子を産まないように、女性の婚前の処女性も、結婚後の貞操も男性の場合よりはるかに重視されていた。キリスト教的社会にとって驚くべきことではあるが、18～19世紀のロシアでは若い男性が性交渉をしていないというのは不健康と見なされ、労働者から貴族まで、当時の男性にとっては売春宿に通うことがいたって普通だった。貞操に対する二重基準は例えばトルストイの『アンナ・カレーニナ』に見られ、兄妹であるアンナとステイーヴァはふたりとも不倫をするが、社会の反応は、それぞれの場合で著しく異なる。そういった二重基準の例は日本の近代史にも見られ、偏った基準による「姦通罪」は1947年まで存在していた。この法律は有島武郎の人生において致命的なものとなった—自らの愛人だった波多野秋子の夫に姦通罪で告訴すると脅迫され、有島は秋子と共に心中したのである。

そうした女性差別、言い換えれば「男尊女卑」の理由は、キリスト教にあるのだろうか。「キリスト教会が正当化してきた歪んだ人間像」<sup>5</sup>がヨーロッパの家父長制の基になっているという意見はフェミニズムの研究者の間にしばしば見られる。キリスト教の枠組みの中で、夫が妻の「保護者」と見なされ、妻が夫の「助手」として一般的に扱われているのは事実である。ただし、「助手」というのは、「お使い」や「奴隷」などという、無条件に従属するものではない。新約聖書が書かれたおよそ2000年前は、奴隷制は言うまでもなく、姦通が日常茶飯事であり、古代ギリシアもローマも、女性にとって極めて残酷な環境だった。そうした状況は長い間続き、産業革命のころまでは、一般女性は自立した生活のために必要なお金が一人で稼げず、親か夫に守られるしかなかった。キリストが生まれる以前もそうであり、キリスト教の影響が大きい国々も同様だった。使徒の聖パウロは、次のような言葉を残している：

---

<sup>4</sup> 『聖書（新約聖書）』日本聖書協会、1991年、150—151頁。

<sup>5</sup> 岡野治子「中世的男女の関係性とは」『歴史の中のジェンダー』藤原書店、2001年、79頁。

もはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。  
あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。(ガラテヤ人への  
手紙 3 : 28) <sup>6</sup>

言い換えれば、神にとっての人というのは、民族性、社会階級、男女を問わず皆同等であるという主張なのである。イエスキリスト自身にもマグダラのマリア、マリアとマルタ姉妹など、女性弟子が少なくなかった。復活後の彼を初めて見たのも男性弟子ではなく、マグダラのマリアだったと聖書は伝えている。体質的にも、経済的にも弱者だった女性に対して極めて厳しい社会においては、神の目から見ると女も男も、同等であるという主張はむしろ急進的に見えてくる。

では、女性の本質は産む性に過ぎないという一般論は、聖書に由来しているのだろうか。確かに、新約聖書の中で、「女が慎み深く、信仰と愛と清さを持ち続けるなら、子を産むことによって救われるであろう」(テモテへの第一の手紙 2:15) <sup>7</sup>と聖パウロは主張している。他方で、キリスト教に崇敬される女性の聖人は多くの場合子供を持っていなかった。おそらく、「子を産むことによって救われるであろう」は、肉体的な行為である出産を通して自動的に救われるのではなく、苦しい出産や多忙な子育てという利他的行動によって精神を清め、「信仰と愛と清さ」を保ちつつ子供をキリスト教徒として育てれば、キリストの教えを実践し、普及させることによって救われると解釈できる。女性は出産の機能を備えた動物のようなものであるという考えは聖書の中では見当たらない。神にとっては「男も女もない」、つまり、男性の魂も女性の魂も同等であり、死後は人が性を持たない天使のようなものになると信じられている。ただ、当時の女性が活躍できる分野が限られていたため、出産や子育てを通して社会に仕える、神に仕えるというのは最も明快かつ一般的な方法だった。「男尊女卑」の原因は、男女の身体の差異や経済的状况など様々であるが、それらにはあまり注意が向けられずにキリスト教の教義だけが取りあげられて悪者にされているのではないかと思われる。

宗教や風俗などの生活の様子は言うまでもなく大きく異なる世界中の諸国において、女性の使命は家庭に仕えることであるという見方は長きにわたって共通していた。妻や母という役割を果たすために、特定の性質を持つことがあらゆる社会において女性に要求されてきた。

---

<sup>6</sup> 『聖書(新約聖書)』日本聖書協会、1991年、296頁。

<sup>7</sup> 同上、328頁。

キリスト教社会が理想としていた女性像は新約聖書の中で次のように描かれている。

(…)若い女たちに、夫を愛し、子供を愛し、慎み深く、純潔で、家事に努め、善良で、自分の夫に従順であるように教えることになり、したがって、神の言がそしりを受けないようになるであろう。(テトスへの手紙2:4~5)<sup>8</sup>

聖パウロによるこのキリスト教的理想女性像の描写は日本の「良妻賢母」の女性モデルを思い起こさせる。本論文では、ロシア及び日本の文化や文学を対象にしているが、上記の描写は多神教の社会からアブラハムの宗教の社会まで、普遍的に女性の理想像とされてきたと言える。

長年にわたって社会に認められるべく、良い結婚相手を捕まえるためには、女性の美貌が一つの不可欠な条件だった。生殖能力を仄めかす丸いヒップや豊かな胸、健康の印象を与える長い髪やなめらかで透明な肌、女性ホルモンのバランスが保たれている証拠である手足の毛の薄さなどが普遍的な女性の理想像を構成してきた。男性が持ち得ない特徴、母親の役割が果たせると示すような体格を備えていることは、結婚、言い換えれば玉の輿を通して社会の高い地位を獲得できると約束していた。若さと美貌は長年社会的出世のもっとも重要な要素になっていたため、多くの女性は教育などよりも、ファッションやコスメチックスの力を借りてその資源を磨いていた。また、その資源をできるだけ高く「売る」ために、生殖能力のピークである10代後半から20代前半までの青春の時期に相応しい結婚相手を見つけ、妻や母としての自身の社会的地位を獲得するというのが理想的な社会的モデルだった。

美貌や見た目の若さは古代から現在まで女性に求められてきた。現在でも何の病気もない女性が麻酔をかけられ、美容手術を受けることが増える一方であるというのは、その社会からの期待の結果であろう。第1章第1節第2項でロシアの男性作家が描く急進的な女性のイメージに触れるが、そういう女性たちが女らしくない、美しくないということは女性解放運動の反対者たちが第一に強調する点であった。“The Ugly Feminist”というカリカチュアはフェミニズムの第一波から現在まで生き続けてきた。<sup>9</sup> 長年にわたって女性のほぼ唯一の武器で主な資源だった美貌を急進的な女性たち、フェミニストたちが持っていないという主張

---

<sup>8</sup> 『聖書（新約聖書）』日本聖書協会、1991年、339頁。

<sup>9</sup> Wolf, Naomi. *The Beauty Myth: How Images of Beauty are Used Against Women* (Berkshire: Vintage, 1991), pp. 208–209.



によって、一般女性をこうした運動から切り離そうと目論んだのである。女性の美貌は結婚によってより高い社会的地位を得るためだけのものではなく、女優や歌手など、女性に許されていた少数の職業のためにも不可欠な条件だった。現在もテレビアナウンサーから会社の受付まで、女性が外見に基づいて雇われる例は少なくない。

産業革命までは女性が自立するのに十分な収入を得る手段がほとんどなかったが、その数少ない方法の一つは、自分の身体を売ることだった。売春は歴史上最も古い「職業」の一つであるとされているが、それは女性にとってどのようなものなのだろうか。フェミニズム運動や共産主義においては、売春は女性を抑圧する現象と見なされ、それを完全になくすことが課題の一つとなっていた。キリスト教において売春は姦淫罪と見なされ、女性はその罪深い稼ぎ方を自分で選んだのなら、彼女は軽蔑に値し、残酷に罰されることがあった。古代ユダヤ社会から近代ヨーロッパへと、娼婦に対する見方は徐々に変化してゆき、娼婦はその「汚らわしい」職業を選ばざるを得ず、社会に抑圧された哀れな存在として描かれるようになった。社会から疎外された存在でありながらも、ヴィクトル・ユゴーの小説『レ・ミゼラブル』やアンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレックの絵などをはじめ娼婦は様々な芸術・文学作品の中で描かれている。ロシアの場合、売春は1843～1917年に合法化されていたが、十月革命後、非合法になり、娼婦の人数は大分減ったが、完全になくなったわけではない。ソ連における〈新しい女〉のイメージづくりに大きく関わったアレクサンドラ・コロンタイは短編小説『姉妹』（1923年）に娼婦を登場させ、他の方法で稼げない女性のもどかしさ、女性同士の人間関係のあり方を、フェミニズム論的な視点から描き出した。

日本では第二次世界大戦後まで売春は合法であった。1872年に芸娼妓解放令が布告され、娼婦が自由意思で営業しているという建前になったが、前借金によって娼婦たちが縛られているという状況は事実上ロシアと変わらず、彼女たちはある意味で売春宿の奴隷になっていた。ただ、日本は明治時代までキリスト教が禁止されていたため、姦淫などの罪についての教えを含むキリスト教の道徳の影響もなかった。そのために、売春は罪深いことや汚らわしいことと見なされず、遊女は元々宗教的な意味を成しており、観音菩薩に比較されていた。<sup>10</sup> 遊女との交際は、西洋文化と異なり、墮落や穢れであるとはされず、遊女自身も惨めで抑圧されている存在ではなく、優美の理想であるとされていた。井原西鶴の『好色一代女』（1686年）から、永井荷風の多くの作品まで、日本文学も西洋文学と異なる角度から娼婦をヒロインとして登場させる例が多い。明治時代になり、西洋の考え方が入ってくるにしたが

---

<sup>10</sup> 佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』岩波書店、1998年、18-19頁。

って売春に対する見方が変わっていった。

芸者の位置づけに似ている「クルチザンヌ」はロシアの文化にとっては馴染みがないが、フランスなどの西洋社会に確かに存在していた。並はずれた才能や美貌のあるクルチザンヌは一般の女性よりも教養があり、こうした女性が上流社会で振舞い、政治にまでも影響を及ぼしていたという例は古代ギリシアのヘタイラに始まり、マリオン・デロームやニノン・ド・ランクロなど、ヨーロッパの歴史に多数見られる。「家庭」に縛られていた一般女性よりも社会の活躍の幅が広く、自己表現ができたクルチザンヌはほぼ男性のような自由な存在であり、ある意味で自立していたとシモーヌ・ド・ボーヴォワールが主張している。<sup>11</sup> この視点から見ると、上流の娼婦だったクルチザンヌを〈新しい女〉の先駆けとして捉えることは、あながち的外れではないだろう。

このように、歴史をたどってみると、女性にとっての売春の二面性を読み取ることができるのである。現在は女性が自身の身体を自由に使う権利があると主張され、オーストラリアやニュージーランド、ヨーロッパの多くの国々では売春が合法化されている。2015年に、国際人権団体アムネスティ・インターナショナルが合意に基づく性の売買を支持する方針を決定した。しかし、売春に関わっている女性は本当に自由にその道を選んだのだろうか。実際にその稼ぎ方で満足しているのか。9カ国において、800人以上の売春に関わっている女性を対象とする研究によると、そのうちの68%は心的外傷後ストレス障害を持ち、89%は売春を避けたかったが、生き残るためにそれ以外の選択肢がなかったそうである。<sup>12</sup> それを踏まえ、売春を現在の奴隷制として捉える考え方も妥当であろう。

貞操の要求や美貌の絶えない追求、母親の役割の押し付けなどを拒否する〈新しい女〉が特に19世紀後半～20世紀初頭から益々公に現れはじめた。日本の歴史においては、平塚らいてうをはじめとする『青鞥』(1911～1916年)の活動家たちが自然と思ひ起こされるが、ロ

---

<sup>11</sup> Бовуар С.де. Второй пол. СПб., 2017. С. 727—728.

<sup>12</sup> Farley, Melissa and others. *Prostitution and Trafficking in Nine Countries. An Update on Violence and Posttraumatic Stress Disorder* (Journal of Trauma Practice Volume 2, 2003), pp. 33—34.

[<http://www.prostitutionresearch.com/pdf/Prostitutionin9Countries.pdf?fbclid=IwAR10w5MpXmuwMQpS22RD5pz7t3RLLbViJ0Cx00jsNq5IvSoWMYx0jQE1aL0>] 2021年5月19日閲覧。以下、URLの最終閲覧日は全一である。

シアの場合、10月革命の前後に活躍した、アレクサンドラ・コロンタイをはじめとする女性革命家たちは〈新しい女〉だったと言えよう。ただ、女性が男性と肩を並べて活躍ができるようになるよりも前、文学における「新しいタイプのヒロイン」がロシアにも日本にも現れはじめた。本論文では、「旧い女」とほんの少し異なっている程度の新しいヒロインたちから、らいてうやコロンタイのような急進的な女性にいたる、その道的一端に注目したい。

日本やロシアの女性が積極的に公の場に姿を現すようになるまでは、男性作家や社会活動家がそのための土台を作ったと言える。ロシア文学においては、そうしたものとしてロシア革命家を激励したニコライ・チェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』が挙げられる。日本文学の場合は、有島武郎の『或る女』における葉子像は現在にいたるまで〈新しい女〉の代表と見なされてきた。チェルヌイシェフスキーや有島というリベラルな知識人かつ女性解放運動の支持者と同列で、「アンチフェミニスト」として度々批判される保守主義者のレフ・トルストイの名前を本論文で挙げるのは一見不可解に見えるかもしれない。しかし、有島がトルストイの『アンナ・カレーニナ』の女主人公にヒントを得、〈新しい女〉とされる葉子を描いたというのは日本の文学研究者の間で広く知られている事実である。つまり、「アンチフェミニスト」トルストイが描いた女性像こそが日本の〈新しい女〉の先駆けになったと言えよう。トルストイが活躍した19世紀後半～20世紀初頭は、ロシアにおいて「女性問題」が提起され、またそれが活発に議論された時期でもあったが、それについてはロシアを巡る第1章第1節で述べる。つづく第1章第2節では、そもそも、アンナの何が新しかったのか、「アンチフェミニスト」であるはずのトルストイはなぜその女性を描けたのか、また、トルストイ自身はどれほど「アンチフェミニスト」だったのか、考察を加える。

日本におけるトルストイの受容が始まったのは19世紀の終わりの頃で、まずトルストイの社会的、哲学的なエッセーや評論、続いて小説が好評価を得た。平和主義を信条としたトルストイが、1904年に始まった日露戦争について書いた「悔い改めよ」という評論は、日本におけるトルストイの人気をさらに高めた。戦争を含むいっさいの暴力に対する彼の無条件な咎立ては、有島を惹きつけ、大正期にもトルストイの思想は「トルストイアン」と呼ばれた武者小路実篤を含め白樺派の文学者を中心に、日本の知識人に影響を与え続けた。トルストイの思想の信奉者だった「白樺派」のメンバーたちが関わっていた『白樺』誌は『青鞥』誌とほぼ同じ時期に発行されており、自由結婚や男女関係の新しい在り方を説き、男性作家の立場から変化しているジェンダー観や新しいタイプの女性像が形成され

ていくのに一役買っていた。白樺派の創始者武者小路実篤をはじめ、夏目漱石や田山花袋などといった、男性作家に描かれたヒロインについては、第2章第1節で述べる。また、同第2章第1節では有島武郎を中心に、トルストイが影響を与えた当時の日本の文学者にも触れる。『或る女』の葉子のイメージには『アンナ・カレーニナ』のアンナ像がどれほど影響したのか、そして葉子はどの程度〈新しい女〉だったのか、二人のヒロインの類似点や相違点には第2章第2節で触れたい。

「青鞥」の女性たちが活躍したのは、女性教育が進められていた明治末期から、「大正デモクラシー」と名付けられたリベラルな時代にかけてである。この時代、女性に関する社会的意識が変わりはじめ、日本社会そして文学においては〈新しい女〉という概念が確立された。キリスト教が日本の社会に与えた影響はあまり深くないと現在考えられがちであるが、明治時代から大正時代にかけて、以前禁止されていたキリスト教的思想が日本に入り、女性教育や一夫一妻制の確立をはじめとするジェンダー思想の変化など、形は様々だが、当時の知識人全員に例外なく影響を及ぼした。女性の活動家も例外ではなかった。キリスト教は女性を抑圧し、保守的な世界観を押し付けるものとして、現在の欧米や日本のフェミニズムの研究者に否定的に捉えられることが多いが、明治末期～大正時代の日本においては、キリスト教思想は逆に日本のフェミニストたちを鼓舞するものだったと言える。その例として、キリスト教婦人矯風会の活動、そして『青鞥』に翻訳を投稿していた瀬沼夏葉のキリスト教的フェミニズム論が挙げられる。

ロシアの場合、言うまでもなくキリスト教は法律や思想、芸術や文学というロシアの文化の根幹となり、民族意識の中心ともなっていた。ただ、日本でキリスト教に対する関心が高まっていたちょうどその頃、ロシア社会においては十月革命が勃発し、正教を含めすべての宗教を禁止した。無神論が新生ソビエト連邦の公式方針になり、教会が爆破され、キリスト教徒が迫害された。同時に、十月革命を機に女性たちに多くの新しい権利が与えられた。社会主義と女性解放運動を結び付けた「マルクシズム的フェミニズム」という新たな路線が生まれ、その代表者として精力的な活動を見せたのが、アレクサンドラ・コロンタイであった。彼女は「新しい女」という論文を書いたほか、小説ではプロレタリアートやインテリゲンチヤといった〈新しい女〉をヒロインとして描いた。日本において彼女の作品は、社会的論争を引き起こすなど、大きな反響を呼び、『青鞥』に関わっていた山川菊枝などの日本の女性作家、特に社会主義の活動家に影響を与えた。本論文の第3章では、コロンタイのフェミニズム論や彼女が描いた〈新しい女〉像、そして『青鞥』の女性

作家が描いた〈新しい女〉の葛藤について論じ、両国のジェンダー規範と戦っていた女性たちが抱えていた悩みを比較する。

フェミニズムの視点からトルストイと有島、コロンタイとらいてうという人物を同時に扱う先行研究はおそらくないが、トルストイや彼の著作は言うまでもなくロシアや西欧、日本で幅広く研究されてきた。近年のパーヴェル・バシンスキーの『レフ・トルストイ——天国からの脱出』<sup>13</sup>（2010年）はトルストイの家族の中の葛藤をテーマとし、ロシア文学賞『ポリシャーヤ・クニーガ』を受賞した。続く『聖者対ライオン』<sup>14</sup>（2013年）はレフ・トルストイとロシア正教会に聖人として認知されるクロンシュタットの聖イオアンとの対立をテーマにしている。モスクワ国立大学などの研究所でトルストイの著作を論文にする研究者は少なくない。ジェンダー論的アプローチを取ったマイヤー・マーチンによって書かれた博士論文「トルストイの1850～1870年の作品における家族のテーマ」<sup>15</sup>

（2000年）ではトルストイの人生と作品との関連が明確に提示されている。他に、マリコーヴァ・ヤナの「レフ・トルストイの著作における『家族問題』と19世紀終わりから20世紀初頭にかけての批評書ならびに出版書における議論」<sup>16</sup>（2006年）があり、ジャーナリズムを専攻する研究者の観点から見たトルストイの作品とその批評をテーマにしている。日本の場合、2020年の佐藤雄亮の『トルストイと「女」——博愛主義の原点』は「トルストイ的美女」とトルストイによる母親への憧憬の矛盾に、トルストイの「改心」の理由を見出した、オリジナルで説得力のある評論である。

有島武郎研究は言うまでもなく日本では発達しており、その中でトルストイの影響も指摘されてきた。阿部軍治の『白樺派とトルストイ——武者小路実篤・有島武郎・志賀直哉を中心に』はトルストイへの有島の憧れと疑問に詳しく触れている。『或る女』と『アンナ・カレーニナ』の比較文学的な分析論書も存在し、小坂晋の評論「『或る女』と『アンナ・カレーニナ』——比較対比研究序説」（1966年）、そしてトドロヴァ・アルベナの論考

---

<sup>13</sup> *Басинский П.* Лев Толстой: Бегство из рая. М., 2010.

<sup>14</sup> *Басинский П.* Святой против Льва. Иоанн Кронштадтский и Лев Толстой: история одной вражды. М., 2013.

<sup>15</sup> *Мейер М.* Проблема семьи в творчестве Л.Н. Толстого (1850-е – 70-е годы). М., 2000.

<sup>16</sup> *Малькова Я.* «Семейный вопрос» в творчестве Л.Н. Толстого и его обсуждение в критике и публицистике конца XIX – начала XX века. М., 2006.

「同棲生活という世界—『アンナ・カレーニナ』と『或る女』における同棲生活について」（2012年）がその例であるが、『或る女』に『アンナ・カレーニナ』の影響が広く認められているにもかかわらず、二つの長編を比較する考察が極めて少ないことは驚嘆に値する。「青鞥」についての研究の中でも、堀場清子『青鞥の時代—平塚らいてうと新しい女たち』（1988年）、新・フェミニズム批評の会の『『青鞥』を読む』（1998年）、そして「新しい女」研究会の『『青鞥』と世界の「新しい女」たち』（2011年）が本論文に不可欠な参考文献になった。コロンタイの紹介は、「青鞥」の山川菊枝などによってされてきたが、日本のメディアによってコロンタイの思想は歪められてきたため、導入がうまくいったとは言えない。その経緯、そしてコロンタイの文学作品や評論の解説は杉山秀子の『コロンタイと日本』（2001年）で詳しく述べられている。

〈新しい女〉や「フェミニズム論」と並んで「キリスト教」は本論文のキーワードの一つとなっており、その理由については既に述べた。他に、長年女性に許された唯一の活躍の場であった「家族」や「家庭」の概念、それに関係する結婚及び離婚の問題、また「プラトニック・ラブ」、「エロス」（性欲の要素が強い恋愛感情、性交渉を前提とする恋愛関係）、「嫉妬」などのジェンダー的概念も用いる。「フェミニズム論」及び「恋愛論」を参考としつつ、〈新しい女〉はどのような女性のことを指してきたのかという疑問に答えることを目的とする。20世紀初頭の〈新しい女たち〉はロシア及び日本において、「古い」ジェンダー規範と戦い、どれだけ苦勞してきたのか、文学のレンズを通して注目したい。〈新しい女〉は特に何が新しかったのか、女性及び男性作家はどのように新しいタイプのヒロインを描いたのか、また、日本及びロシア（ソ連）では、どのような相違点があったのか考察する。未だに、女性を差別する発言や行為が毎年話題になっていながら、「フェミニズム」や「フェミニスト」は罵り言葉であるかのような捉え方が残念ながら一般的である。〈新しい女〉の登場から100年以上経った現代社会の「新しさ」や「旧さ」を考えるにあたり、本論文が一助となることを願っている。

# 第1章 ロシアにおける男尊女卑社会の危機

## 1. 「女性問題」

### 1.1 「女性問題」の提起及びその発展

ロシア社会において「女性問題」が初めて提起された年として、リチャード・スタイツは1855年を挙げ、それをクリミア戦争に従軍していた女性看護師と関係づけている。<sup>17</sup> だが、それ以前にも「女性解放」はロシア社会において話題として提起されることがあった。フランス革命（1789～1799年）のころから、思想的にも文化的にもフランスに幅広い影響をうけていたロシア帝国には女性の権利についての新しい声が届いてきていた。ヨーロッパの啓蒙主義や自由主義の影響で1825年にロシアの貴族に率いられたデカブリストの乱が勃発した。それを起こした「デカブリスト」と名付けられた貴族の将校たちはシベリアに流刑された。彼らの妻の多くは名誉や社会における位置を捨て、暮らしぶらい厳寒の地へ夫に付き添って旅立った。その勇敢な行為は社会に反響を及ぼし、ニコライ・ネクラソフの『デカブリストの妻』（1873年）などで賛美された。

女性解放の思想は文学作品を通して行きわたることが多かった。1830年代から「心の自由」を唱えていたフランスの女性作家ジョルジュ・サンドの小説はロシアの知識人に影響を与えていた。ジョルジュ・サンドのヒロインたちを一義的に〈新しい女〉と見なすことができるかどうかは疑問が残るが、少なくとも恋愛に関して彼女たちは自由な価値観を持ち、離婚を受け入れない当時のブルジョワジーの道徳に疑いをさしはさんでいた。男女を問わず当時のロシア貴族はジョルジュ・サンドの小説を愛読しており、それは恋愛や離婚の自由について論じるきっかけになった。また女性解放の先駆者であるアレクサンドル・ゲルツェンの小説『誰の罪か？』（1846年）も、ジョルジュ・サンドの小説から着想を得たものであるとされる。

クリミア戦争（1853～1856年）における敗戦は、ロシア帝国が政治的及び社会的に劣っていることを国際社会、そしてロシア人自身に知らしめた。戦争中、教育者であり外科医のニコライ・ピロゴフは、女性問題に関する話題を提起した。彼は女性看護師を戦線に派遣することを提案し、上級の軍人がそれに反発していたにも拘らず、163人の女性を含むボランティア

---

<sup>17</sup> Stites, Richard. *The Women's Liberation Movement in Russia* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1978), pp. 29–31.

ィアのグループを作って、己の意志を貫いた。看護婦の積極的な援助については、トルストイの『セヴァストポリ物語』の中で語られている。戦争が終わってからも、看護婦派遣の成功に自信を得たピロゴフは女性問題について論じ、特に女性に対する教育の重要性を主張していた。

ロシアでは女性問題は特に60年代から文学やジャーナリズムの分野で話題になっていた。ロシア社会において思想的な影響力を持っていた文学雑誌『祖国雑記』（«Отечественные записки»）はその時期から女性解放を巡る多数の記事を掲載し、ロシアと外国の社会における女性の地位を比較していた。1860年に、『同時代人』（«Современник»）には、ミハイル・ミハイロフによる女性解放運動を支持する評論「女性、女性教育、そして家族及び社会における女性の重要性」（«Женщины, их воспитание и значение в семье и обществе»）が掲載された。それ以前はファッションや美容というテーマに限られていた婦人向けの雑誌はロシア社会の要求を満たしきれなくなり、文学や科学の記事を中心とした新しいタイプの婦人雑誌が誕生した。当時、このような雑誌は短命に終わることが多かったが、その種の最初の試みとして『夜明け』誌（«Рассвет»）（1859～1862年）、そして初の女性出版者による雑誌『女性報知』誌（«Женский вестник»）（1866～1868年）が挙げられる。

60年代のロシアの女性解放運動にとって、ニコライ・チェルヌイシェフスキーの先駆的な小説『何をなすべきか』（1863年）は最も重要な作品の一つに相違ない。精神的な面及び経済的な面における女性解放、コミュニオンで実現される自由な労働、結婚や恋愛の自由などというテーマが当時のロシア社会に極めて率直な形で提起された。刑務所でチェルヌイシェフスキーによって書かれ、検閲官の目をすり抜けて出版されたこの小説はロシア社会でセンセーションを巻き起こした。空想的社会主義のいささかナイーブな思想を持っている『何をなすべきか』の主人公たちの話は、一見恋愛小説に似ていたが、実際は革命家の物語であり、出版されてから1917年の十月革命に至るまで、急進的な若者たちにとってある種の「聖書」になったと言える。

チェルヌイシェフスキーを始め、西欧主義の知識人が一般的に女性解放運動を支持していた一方、トルストイやドストエフスキーなど、多くの最も知られている19世紀のロシア人作家や思想家はどちらかというと保守的な立場を取っていた場合が多かった。急進的な女を度々あざ笑うトルストイによって同時期に書かれた『伝染した家庭』という戯曲は『何をなすべきか』に対する批判的な応答であった。この戯曲には本節の第2項、そして本章の第2節第1項でより詳しく触れることにする。



イギリスの社会思想家ジョン・スチュアート・ミルが 1869 年に執筆した『女性の解放』“The Subjection of Women”は、その翌年にロシア語版が出版され、西欧主義者とスラブ主義者の間に議論を誘発し、ロシアにおける「女性問題」の転換点となった。スラブ主義者であった思想家のニコライ・ストラホフが『女性の解放』への回答として「女性問題」(«Женский вопрос») という評論を同年『曙』(«Заря») 誌に投稿した。ミルは、男女の相違点と共通点について論じ、男性の優れた体力によって男女の間に力関係が生まれ、女性はずっと抑圧されてきたと述べている。その力関係のせいで、女性の性質の中では何が先天的であるか、何が社会によって規範として植え付けられたのか、判断できないという結論に至る。結局、女性と男性は、生理的な違いや体力の差を除き、実際に相違点を持っていない可能性があり、男性と同じ法的権利を女性にも与えるべきだとする主張である。

それに答えるストラホフは、イギリスとロシアのそれぞれの社会で女性が占めている地位を比較しながら、女性を相続者として認めるロシアの相続権を例として挙げ、ロシア女性のほうが法的に有利であると述べている。そのために、ロシアでは「女性問題」がイギリスほど深刻ではないという結論になる。同時に、ストラホフは法的権利がミルの『女性の解放』において中心的な位置を占めていることを嫌がり、自己犠牲や己の家族に対する利他的な愛情こそが女性の先天的な気質に他ならないとミルに反論しながら、「優れた精神的な品性では、男性は女性に比肩できない」(«мужчины не могут равняться с женщинами в достоинствах сердечных чувств») と主張する。<sup>18</sup> 他の保守主義者も女性の特徴として利他的な愛情を強調し、それによって女性の先天的な役割は家族の日常の世話をすることであると証明しようとしていた。ナショナル・ロマンティシズムに近いスラブ主義の保守派の代表者だったストラホフはイギリス人の唯物論をあまりにも厭っていたが、彼自身の論理付けはやや空想的に見える。女性が精神的にいくら優れていても、彼女の愛情がいくら利他的であっても、それは完全な法的権利を与えないという口実にはならず、ストラホフの単純で一般化された理論に従えば、女性は逆に男性よりもその権利に相応しいように見える。

60年代のロシア社会で女性問題は深刻な話題の一つになっていたが、多くの場合、ニヒリズムや Kommunismus などの一般的に恐れられている運動に関連づけられていたため、公の場

---

<sup>18</sup> Страхов Н. Женский вопрос. // Мужские ответы на женский вопрос в России. Вторая половина XIX в. – первая треть XX в. Антология. Том II / Под ред. В. Успенской. Тверь, 2005. С. 73.

[[http://tversocium.ru/library/data/downloads/book7\\_2.pdf](http://tversocium.ru/library/data/downloads/book7_2.pdf)]

で真面目に議論することさえ難しかったとスタイツは指摘している。<sup>19</sup> ニヒリズムやその  
体現者たちが如何に文学作品においてあざ笑われていたのかは本節の次項で詳しく論じる  
こととする。それに先立ち、「女性問題」という概念がどのような内容を含むものであった  
かを明確にしたい。

女性の立場に関して、一番際立つのは、ミルが論じていたように、法的権利が十分に与え  
られていないことであろう。一例として、離婚は事実上不可能であり、それが男女両方の人  
生において悲劇を招く原因になることは珍しくなかった。上記の『誰の罪か?』(1846年)  
や『何をなすべきか』(1863年)、イワン・ツルゲーネフの『貴族の巢』(1859年)というリ  
ベラルな作者の作品から、保守的な思想を持っていたトルストイの『アンナ・カレーニナ』  
(1878年)まで、この問題をテーマとした作品は数多く見られる。既婚の女性が夫以外の人と  
恋に落ち、それに悩んでいるというのがそれらの基本的なプロットである。『何をなすべき  
か』の楽観的な成り行きと異なり、アンナ・カレーニナの場合、それは自殺という悲劇的な  
結末を招く。

当時のロシア法は正教に大いに影響されていた。夫婦が別れるに値する唯一の理由として、  
キリスト教は「不品行」、言い換えれば、不倫を認めていたが、離婚が許されるためには、不  
倫を目撃した二人の証人が必要とされており、それは事実上不可能に近いことだった。他に  
女性が法的に縛られていた例として、未婚の女性が結婚したり、外国に行ったりするため  
には両親の承諾が必要であり、結婚後は夫の承諾が必要だったことが挙げられる。現在からみ  
ると、未成年者のような扱いを受けていた女性は、貴族の未亡人という例外を除き、自立し  
た人生を送ることはおろか、自由に移動することさえできなかった。言うまでもなく、選挙  
権を含む参政権も 19 世紀のロシア人女性は持っていなかった。当時の女性は「娘」、「妻」、  
「母」という「家族」に関連する役割の枠組み内においてしか存在できなかったのである。

「女性問題」が孕む内容として、次に経済的依存を挙げることができる。女性は中等教育  
を受けていたが、1860年代までは大学に入学することも、聴講することも許されていなかっ  
た。良妻賢母を育成するために、当時の女性教育では家事や社会的スキルに焦点が当てられ  
ていた。そのため、男性と同じ仕事をするのは不可能になり、経済的に親や親戚、もしくは  
夫に依存する以外の道はほとんどなかった。チェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』

---

<sup>19</sup> Stites, Richard. *The Women's Liberation Movement in Russia* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1978), p. 73.

では、当時の社会における女性の立場について主人公ヴェーラは次のように語っている：

社会生活の殆どすべてが、正式にハッキリと我々に閉されている。そしてハッキリとした形式によって閉されていない事柄は、実際の困難のために閉されている。家族だけが、我々には残されている。家族の外に、どんな職業に従事することが出来るだろう？ 家庭教師の職業が、殆ど唯一の職業である。多分、我々にもう一つの仕事—時間定めで教える仕事（しかもそれは男達が選び残した余りの）がある。

20

例外は女性農民であり、彼女たちは男性と同様に幼いころから農作業に従事していたが、それは経済的な自立に繋がることはなかった。人口の四分の三を農民が占めていた19世紀末のロシアでは、女性に対する家庭内暴力も伝統と見なされ、たいていの場合文盲であった女性農民たちは町の女性よりも息苦しい状況に置かれていた。当時の女性農民の辛い人生についてはニコライ・ネクラソフの『誰にロシアは住みよいか』（1876年）で確認できる。1861年の農奴解放令後、産業化が進み、女性農民たちはより良い生活を探しに、田舎の狭い空間から町に行こうとしたが、到着先の鉄道駅では当時合法であった売春のあっせんをする人が彼女たちを出迎え、巧みな弁舌で説得し、その女性の一部を売春に巻き込んでいった。教育不足のために一度売春に巻き込まれ、通称「黄色い鑑札」と呼ばれる娼婦のパスポートをもらった女性がそこから抜け出すことは極めて難しかった。

この時期にロシアの文豪たちは売春婦をヒロインにすることが少なくなかった。その例として挙げられるのは、フョードル・ドストエフスキーの『罪と罰』（1866年）の「聖なる娼婦」ソーニャ、そして自然主義的に売春宿の息苦しい日常を描いたアレクサンドル・クプリーンの『魔窟』（1909～1915年）の惨めなヒロインたちである。トルストイの『復活』（1899年）も、貴族の男性の無責任な行為によって、下女のカチューシャが売春に巻き込まれ、客を殺したという嫌疑をかけられシベリアへ流刑になるというエピソードが描かれる。ここに挙げた3人の作家はみな、売春に巻き込まれた女性を卑しめるのではなく、彼女たちに同情し、売春という辛い道を選ばせた社会や女性の貧しさを悪用する男性を非難していた。

女性の経済的自立について初めて公に説いたのはマリヤ・ヴェルナーツカヤだとされて

---

<sup>20</sup> チェルヌイシェフスキー『何を為すべきか』（神近市子訳）南北書院、1932年、584頁。

いる。<sup>21</sup> 教授をしていた夫から経済学を学んだ後に、夫婦が一緒に出版していた『経済指標』誌（«Экономический индекс»）（1857～1861年）にマリヤは女性労働についてなどの評論を投稿していた。農奴解放令が出たことはロシアの産業化を促進した一方、農奴に長年頼ってきた貴族の経済力を脅かした。女性を含め労働力の需要が高まり、女性の教育を巡る議論や活動も一層活発になった。ロシアのフェミニストたちは参政権や法的権利よりも、まず女性が男性と同等の教育を受ける権利の獲得に尽力した。実際に、「フェミニスト」を名乗ってはいないものの、女性の教育権利、労働権利のために活動していた貴族の女性たちがいた。その中には、アンナ・フィロソフオヴァ、マリヤ・トルブニコヴァ、ナデジダ・スターソヴァの名前が認められる。彼女たちの努力は「貴族の慈善」に過ぎないとしてより急進的なニヒリストやナロードニキに批判されていたが、その努力の結果女性労働を支える「安いアパートの会」や「女性翻訳者の会」が生まれ、1878年に初めての女子大学、「ベストウージェフ学院」が開かれた。革命家ナデジダ・クルプスカヤもそこで学んだ。

女性を抑圧していた他の要素としてはジェンダー的偏見と身体の不自由が挙げられる。19世紀のロシアでは女性が就ける職は限られていたが、皆無というわけではなかった。それは例えば、助産婦、家政婦、（主に音楽や言語の）家庭教師、メイド、裁縫師、歌手、女優などだった。ただし、中流及び上流の女性にとっては、その職を含め、一般に就職は「恥ずかしい」こととされていた。女性の運命は家族に尽きるとというのが、少数の例外を除き当時の一般常識だった。トルストイやストラホフをはじめとするスラブ主義者の知識人もその見方を持ち、家族を作らなかった女性の人生は社会から「失敗」と見なされていた。他方、結婚した場合、子育てや家事に追われ、それ以外の活動に使える時間がないのが普通であった。

そうした社会的偏見や伝統を破ろうとしたのは、ニヒリズム運動の代表者たちだった。ラテン語の“nihil”（「無」）に由来するニヒリズム（虚無主義）は西欧主義の基に60年代にロシアで生まれたが、本来の西欧主義より一層急進的だった。名前からもうかがえるように、ニヒリストたちは社会の常識、伝統やしきたりを拒絶することを特徴としていたが、他にも自然科学への関心、女性解放及び革命運動への参加といった傾向が見られた。ニヒリストは社会に恐れられ、またこの言葉が罵り言葉になるほど軽蔑されてもいた。当時のロシア文学

---

<sup>21</sup> Stites, Richard. *The Women's Liberation Movement in Russia* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1978), p. 73.

においてもニヒリストは極めて否定的なイメージを与えられていた。それについての具体的な解説を次項で加える。

## 1.2 文学におけるニヒリストカのイメージ

19世紀ロシアの様々な社会運動の代表者たちから、もし平塚らいてうに代表される日本の「急進的な女」かつ〈新しい女〉という概念に当てはまる女性像を見つけ出そうとするならば、最も近いイメージは女性のニヒリスト、つまりロシア語でいえば「ニヒリストカ」(«нигилистка»)となるだろう。ただ、日本と異なり、彼女たちは革命運動に強く関連付けられていたため、日本における急進的な女性たちよりも一層一般に受け入れられ難い存在だったと言える。スラブ主義者はおろか、ツルゲーネフのような西欧主義者の作家たちですら、自身の作品でニヒリストの代表者たちを極めてアイロニカルに描いていた。

文学においても、世論においても、ロシアの〈新しい女〉の一般的なイメージはメガネをかけ、短い髪形をし、清潔感のない衣装をするなどだらしない恰好をしている女性、喫煙の習慣を持つ女性だった。内的な特徴を挙げると、家族の概念や女性らしさを完全に拒絶し、乱交を含む墮落した生活を好むように彼女たちは描かれていた。自身の醜さから結婚できずまた家族を持たないがために、独立を求め解放運動に彼女たちは身を投じるとというのが当時の世論であった。その一つの例はツルゲーネフの『父と子』(1861年)でうかがえる。虚無主義者クークシナの家と彼女自身は次のように描かれている：

彼等が足を入れた部屋は客間というよりも、むしろ仕事部屋に近かった。書類、手紙、分厚なロシア語の雑誌、(それは大抵ページを切ってなかった、) こういうものが、方々に据えた埃だらけのテーブルの上にごろごろしていた。どこにもかしこにも紙巻煙草の吸殻が白く目立った。革の長椅子の上には、まだ若い髪の白っぽい婦人が、半ば身を横たえていた。幾分とり乱した身なりで、絹の着物は少しよごれ目が見え、短い両手には大きな腕環が光って、頭はレースの肩掛けで包まれていた。彼女は長椅子から身を起し、やや黄ばんだ貂の毛皮で縁を取った、ビロードの小外套を無造作にひっかけながら、大儀そうに口を切った。<sup>22</sup>

「埃だらけ」、「紙巻煙草の吸殻」、「少しよごれ目が見え」というのは全て急進的な女性の

---

<sup>22</sup> ツルゲーネフ『父と子』(米川正夫訳) 修道社刊、1958年、56-57頁。

イメージに関連付けられた「だらしない恰好」、「墮落した生活」を想起させるものである。切っていない分厚いロシア語の雑誌は、科学などに興味を持っているかのように気取っているクークシナが、取り寄せた雑誌を読んでいないということで、彼女の浅はかさを仄めかしている。

主人公のバザーロフもニヒリストであるが、彼でさえクークシナを含め、急進的な女をあざ笑っている。バザーロフこそ男女平等や女性解放の支持者であるはずだが、彼の言葉「僕の観察によると、女の自由思想家というのは、みんなすべたばかり」<sup>23</sup>（ここで「すべた」と訳されている語は、ロシア語の原文では“уроды”となり、「ブス」「フリーク」といったかなり過激な意味を持つ）は極めてシニカルで、皮肉なことにニヒリストを扱き下ろす世論と同様である。こうした世論は20世紀にわたっても“Ugly Feminist”というフェミニズムの第一波から現在まで女性解放運動代表者のカリカチュアとして存在し続けてきた。

ツルゲーネフとは大いに異なる社会思想の持ち主であったトルストイの小説においても、同じようにニヒリストの否定的なイメージがうかがえる。その内の一つ、1864年に書かれた戯曲『伝染した家庭』は劇作家アレクサンドル・オストロフスキーに厳しく批判され、1928年まで未刊のままだった。トルストイ自身も結局、この作品は失敗作であるという認識に至ったが、ニヒリストに対する彼の偏見や敵意はどの作品よりもこの戯曲でよく表されている。

ヴェネローフスキイ：では、いいですか—ぼくはね、この前あなたと会った時に話したことについて、考えたのですよ。婦人についてね、考えたのですよ。つまり現世紀のおもなる使命のひとつ—それは婦人が圧迫されている野蛮な奴隷状態から彼女たちを解放することにあるのですからね。

リューボチカ：そうですね、どうして二度目の結婚をしてはいけないのでしょうか？ わたしもときどきそれを考えましたわ。もし急にひとりの夫に飽きがきて、いやになったら、わたしはすっかり愛を失って……

ヴェネローフスキイ：やれやれ、いやはやどうも、群衆の口にかかるとう婦人解放の偉大なる教理も、そこまで歪曲されてしまうんですかね。それはちがいますよ、まるでちがいます。婦人の自由とは、婦人が男子と同権になって、永久に、父親の、のちには夫のお荷物にならないことをいうのです。婦人も社会の中にあって、自分

---

<sup>23</sup> ツルゲーネフ『父と子』（米川正夫訳）修道社刊、1958年、65頁。

の足の上にしっかりと立ち、この社会をまともに正視する力を持たなければいけません。<sup>24</sup>

ここでのヴェネロフスキイの発言は、現在の読者から見ると妥当で合理的なものに見えるだろう。しかし、作品のコンテクストにおいて、ヴェネロフスキイはナルシストで偽善者であるなど否定的な性格を持つ主人公であるため、彼の発言がいかにも正しくても、読者にはそのように受け取られない。「野蛮な奴隷状態」や「婦人解放の偉大なる教理」などのわざとらしい誇張表現からも、トルストイが女性解放に対する皮肉を言語手法によっても表そうとしていることが分かる。

女性解放思想においてトルストイが最も恐れていたのは、「自由恋愛」つまり無責任な肉体関係だった。『伝染した家庭』では、ヴェネロフスキイはカテリーナと肉体関係を持っていたにも拘らず、彼女の女性解放運動への傾倒を利用し、責任から逃れようとしていた。そして、カテリーナに告白されても、「正直に」断り、彼女の従姉妹リューチカと結婚することに決める。結局のところ、それは男女平等の概念を悪用した欺瞞のようなもので、周りの人を傷つける行為でしかなかった。

トルストイを含め、当時の知識人の多くが離婚を受け入れていなかったことは、おそらく「自由恋愛」、言い換えればニヒリストに関連付けられている「乱交」に対する彼らの恐れに関係していた。ここには婚外の性交渉を「不品行」と見なすキリスト教の影響がうかがえる。また、当時の避妊手段やその知識の不十分さを考慮したとき、それはある程度妥当な考え方でもあった。子供、そして社会からの軽蔑や排除などを含む婚外の肉体関係の結果の責任を負っていたのは大抵の場合女性だった。婚外の肉体関係の場合、女性は盲目的になっていたか、強者だった男性に説得させられていたか、何らかの事情のためにそうした関係にやむを得ず巻き込まれていたことが多かったため、トルストイを含むキリスト教的な思想家は婚外の男女関係を非難する形で女性に対する配慮を示していたとも言える。

おおむね女性教育を支持していたドストエフスキーも、小説の中でトルストイ及びツルゲーネフと同様にニヒリストをあざ笑い、「男女平等」などの彼らの原則に疑問を抱いている。例えば、『罪と罰』(1866年)では、急進主義者レベジャートニコフはルージンに女性と殴り合いをしたことで笑われ、次のように答える：

---

<sup>24</sup> トルストイ全集、12巻『伝染した家庭』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年、313頁。

「あなたは、自分が気が立っていらいらしてるもんだから、それでいちゃもんをつけるんですね……そんな話ぜんぶでたらめで、婦人問題なんかともいっさい関係ありません！ あなたは誤解しているんです。ぼくなんかこう考えています。もし女性が男性とあらゆる面で平等、体力も平等ってことなら（これはもう確認されていますが）、あの場合だって平等であるべきなんです。むしろあとになって、じっさいこういう問題は起こりえないなって思いましたけどね。だって、けんかなんてあっちゃならないし、未来社会じゃ、けんかが起こる機会なんて考えられませんもの……（…）ぼくが法事に行かないのは、ああいう不愉快な件があったからじゃないんです。自分の信念にしたがって行かないだけです、法事なんていう、いまましい迷信に加担したくない、それだけのことです！ だけど、べつに行ってやってもいいんですよ、といっても、ちゃかしてやるためですがね……（…）」<sup>25</sup>

レベジャートニコフはチェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』の主人公たちと同様、理想主義者で、争いのない明るい未来を信じている。ただ、チェルヌイシェフスキーが描いた人物たちはナイーブでありながらも、優しく、誠実で、お互いを尊敬し合う人たちであったのに対し、レベジャートニコフは、亡くなった夫の法事という同情を誘うような場面でも、行くのはただ「ちゃかす」ためであると断言する。いくら社会のしきたりを拒絶する虚無主義者とはいえ、未亡人を冷笑するという人が実際にいたのか、それともドストエフスキーが誇張して描いているのか、判然としない。

20世紀では特に、革命家や急進主義者が肯定的に描かれるようになっていった。例えば、プロレタリア文学の作家ゴーリキーの『母』（1906年）においては、虐げられた文盲の女性が理想のために犠牲になるほど熱心な革命家へ転身したことが描かれている。ただ、既に論じてきたとおりに、19世紀後半ロシアの一流の作者たちが多くの場合急進主義者を受け入れていなかったことは確かである。

---

<sup>25</sup> ドストエフスキー『罪と罰 3』（亀山郁夫訳）光文社文庫、2009年、23-24頁。



## 2. トルストイと『アンナ・カレニナ』

### 2.1 「ミソジニスト」トルストイ

トルストイは偉大な教育者であり、日本を含め世界中の知識人に影響を与えた思想家で人道主義者だったが、女性の社会的な役割に対する彼の姿勢は保守的だったことがよく知られている。青年期から晩年まで、トルストイは男女関係や女性解放などに関する自身の思想を日記、手紙、評論や文学作品などで率直に表現していた。ロシアの研究者の間では、トルストイの「女性恐怖症」(«женофобия») <sup>26</sup>というのは決まり文句になっており、トルストイに「アンチフェミニスト」というレッテルが付されているが、それは果たして彼の複雑な思想を描写するのに妥当といえるだろうか。

1850年代後半から、トルストイはロシアの文学界で作家として名を上げ始め、家族や社会における女性の役割についてのロシア社会で起こった議論に加わっていた。人間の本質や使命、男女関係やジェンダー的相違点などについて絶えず考えていたトルストイは、日記をつけ始めた1847年に、19歳当時の自らのジェンダー的思想を記している。

В самом деле, от кого получаем мы сластолюбие, изнеженность, легкомыслие во всем и множество дурных пороков, как не от женщин? Кто виноват тому, что мы лишаемся врожденных в нас чувств: смелости, твердости, рассудительности, справедливости и др., как не женщины? Женщина восприимчивее мужчины, поэтому в века добродетели женщины были лучше нас, в теперешний же развратный, порочный век они хуже нас. <sup>27</sup>

実際、官能性、柔弱さ、全体的な軽率さと多数の悪質な不徳を受けているのは、女性からでなくて、誰からだろう？ 勇気、気骨、合理性や正義など、我らの先天的な資質を失ってしまうのは、女性でなくて、誰が悪いのだろうか？ 女性は男性よ

---

<sup>26</sup> Бабаева Н. Комментарий к докладам первой части международного симпозиума «Лев Толстой: сквозь рубежи и межи» // Лев Толстой: сквозь рубежи и межи / Под ред. Т. Накамура. Саппоро, 2011. С. 44;  
Бушканец Л. Лев Толстой и женский вопрос.

[<http://kpfu.ru/news/lev-tolstoj-i-39zhenskij-vopros39-73577.html>]

<sup>27</sup> Толстой Л.Н. Собрание сочинений в 20 т. Т. 19. М. 1965. С. 41.

り受容性が高いので、善の世紀には彼女たちは我らより優れていたが、今のふしだらな世紀には我らより劣っている。

この箇所は一見トルストイが過激なアンチフェミニストであるという意見を証明しているように見える。しかし、青年のトルストイは男性の一義的な優位性を断言しているのではなく、ある条件の下で「女性は男性より優れている」ということを主張しているのは注目に値する。女性の本質を批判するというより、彼自身を含め男性の道徳心に対する愛情や性欲の否定的な働きかけ、そして 19 世紀社会が女性に与えている道徳的にネガティブな影響を咎めている印象をうける。理解しづらい女性に対する青年の混迷、トルストイらしいアンビヴァレンスと世界を極端に整理したいという欲望がこの記述に現れている。

トルストイが若い頃からエロスやその性的対象だった女性を恐れていたのは事実である。年を重ねるごとにエロスや肉体関係に対するその傾向は強まっていくばかりだった。その見方が形成される上で決定的な役割を果たしたのは、初めての辛い性体験だったと推測できる。当時の習慣通り、14 歳のトルストイは二人の兄に売春宿につれて行かれた。<sup>28</sup> 貞操を重んじる正教の教えのもとで育てられ、子供のころから道徳心の強かったトルストイにとって、それは非常に衝撃的で辛い経験になった。ショックで泣いてしまい、晩年までその経験について後悔していたようである。序章で検討したように、婚外の肉体関係はキリスト教によって「不品行」とされ、罪と見なされている。それに加え、伯爵の家柄に生まれたトルストイは一生搾取に反対しており、農奴など抑圧されている人に子供の頃から同情していた彼は当時出会った娼婦もそうした経済的理由で性的抑圧を蒙る人たちだと実感したとも考えられる。当時ロシアで合法化されていた売春宿の惨めな日常については、クプリーンの『魔窟』（1909～1915 年）にうかがえる。トルストイ自身も晩年の作品『復活』（1899 年）では売春に巻き込まれた元メイドのカチューシャの悲劇やその経緯、彼女を誘惑した男性、ネフリュードフの決定的な役割や彼の責任、女性の本質に売春が与える破壊的な影響について検討している。

売春を通して初めてエロスに接触したという体験は、性欲と肉体関係がトルストイの中で汚いものと強く結び付けられ、エロスを否定的に考えるようになった主な理由の 1 つであると推測できる。14 歳の時に娼婦と性交渉を経験して以降、自らの性欲に苦しみながら、性欲との戦いで絶えず負けてしまい、主に農民や娼婦と肉体関係を持っていたトルストイは自分

---

<sup>28</sup> Басинский П. Лев Толстой: Бегство из рая. М., 2010. С. 218.

自身を絶えず咎めていた。女性に対するこうした自然な欲求を「鹿の気持ち」と呼び、それによって己を激しく罵っていた。<sup>29</sup> 晩年の回想録の中でも14歳の初体験を皮切りに自らの生活の時代区分を設定し、当時を猛省している。

Я теперь испытываю муки ада: вспоминаю всю мерзость своей прежней жизни, и воспоминания эти не оставляют меня и отравляют жизнь. (...) Правда, что не вся моя жизнь была так ужасно дурна, – таким был только один 20-летний период ее (...). Вспоминая так свою жизнь, то есть рассматривая ее с точки зрения добра и зла, которые я делал, я увидел, что моя жизнь распадается на четыре периода: 1) тот чудный, в особенности в сравнении с последующим, невинный, радостный, поэтический период детства до 14 лет; потом второй, ужасный 20-летний период грубой распущенности, служения честолюбию, тщеславию и, главное, – похоти (...)<sup>30</sup>

現在は、地獄の苦しみを味わっている。前の生活の醜態を思い出すと、その記憶は私を放っておかず、私の人生を毒してしまう。(…)たしかに、私の全ての人生がそれほどひどかったわけではなく、ひどかったのは、20年間だけだった(…)。このように自分の人生を思い出し、私のやってきた善と悪という観点から人生を見たら、私の人生は4つの時代に分かれていることが見えてきた。1) 特に次に続く時代と比較すると、素敵で、無邪気で、楽しく、詩的な14歳までの幼小期。次の2番目は、20年間のおぞましく野蛮な道楽の時期で、野望、虚栄と、主に肉欲への奉仕の時期であった(…)

まだ無邪気で、「詩的」で、精神的に幼かったトルストイにとって、そのような形で初めて女性に接触したことは大きなショックであり、まさにそれが、彼がその後抱くに至った、女性に対する振る舞いや性についての考え方、エロスの否定的な捉え方といったものに直結していったのであろう。そうした背景があって、トルストイの考えでは咎めるべき罪深い性欲の対象だった女性そのものに対しても若い彼が恐怖感を抱くようになったということは、想像に難くない。性欲に対する軽蔑を一般的に女性に転嫁してしまうことは不当ではあるが、22頁に引用した記述当時の年齢と短気さを考慮すれば、無理もないだろう。エロスに対する罪悪感や憎しみは、生涯を通じてトルストイの思想を貫いていたが、

---

<sup>29</sup> Басинский П. Лев Толстой: Бегство из рая. М., 2010. С. 127–130.

<sup>30</sup> Толстой Л. Н. Собрание сочинений в 22 т. Т. 14. М., 1983. С. 379–380.

女性に対する恐怖は、特に結婚後のトルストイの人生や作品にはうかがえない。

ただ、浅はかで無責任な男女関係という意味での「自由恋愛」や「新しい結婚」などの急進的な思想に対してはトルストイは明らかに批判的な姿勢を取っていた。ロシアでは〈新しい女〉だけではなく、「新しい人間」、つまり理想的な革命家の表象を『何をなすべきか』(1863年)で作り上げたチェルヌイシェフスキーとトルストイは互いに反目しあっていた。傑作とは呼びがたい作品であるが、前節で取り上げたトルストイの戯曲『伝染した家庭』はニヒリストの男女を嘲笑うだけでなく、当時のロシアにおいては急進的な思想の代表者だったチェルヌイシェフスキー自身を皮肉をこめて描く目的があったとされている。

『伝染した家庭』のストーリーの元には、同時期にロシアの社会や文壇において議論を巻き起こしたイワン・ツルゲーネフの『父と子』(1862年)を思わせる対立構造、つまり、「古い」価値観を否定する高い理想を持ち、大学教育を受けた「新しい人」と伝統や日常生活の小さい出来事を重んじる「古い人」の対立がある。小地主のプリビシェフの家では、性平等、自由恋愛などの新しい思想に染まった26歳の姪カテリーナが暮らしている。また、息子の家庭教師のアレクセイ、そして娘リュボチカと結婚したがっているニヒリストであるアナトーリイ・ヴェネロフスキーも同様の理念を抱いている。二人の若い男性が掲げている思想には、チェルヌイシェフスキーと共通点が多い。アレクセイはチェルヌイシェフスキーと同様に神学校出身であり、さらに戯曲の草稿では、「チェルトコフスキー」という響きの似ている名字が採用されていた。つまり、その両ニヒリストの表象によってトルストイはチェルヌイシェフスキーや急進的な思想を嘲笑的に提示するつもりだったというのは間違いない。

その急進的な思想のせいで、「古い人」プリビシェフの家は混乱する。息子がニヒリズムの影響に染まり、家出してサンクトペテルブルグのコミューンに逃走することを決意すると同時に、リュボチカはヴェネロフスキーの自由な思想に惹かれ、彼と結婚してしまうが、結婚の直後夫の実際の軽率さと自己陶醉に気づき、失望してしまう。一方、姪のカテリーナはもう1人の急進主義者アレクセイから性的なハラスメントを受け、急進的な思想に幻滅する。息子と娘を見つけたプリビシェフが彼らを家に連れて帰るところで戯曲が終わる。

この戯曲からうかがえるように、「女性解放」においてトルストイにとって一番恐ろしかったのは、おそらく「自由恋愛」であり、それは彼のエロスに対する恐怖感に関連付けられる。道徳や結婚によってエロスの「暗い力」を抑え、抑制したいという願望に彼の文学

作品も、私生活も貫かれていたが、それについて次項でより詳しい考察を加える。「自由恋愛」、言い換えれば家族を作ること、子供を産むことを前提にしない肉体関係における、女性だけでなく、特に男性の浅はかな態度をトルストイは絶えず咎めていた。

一方でトルストイが家族や社会における女性の役割に対しては保守的な姿勢を保っていたことも否定できない。前節で述べたように、ミルの『女性の解放』がロシアで出版され、トルストイの親友だったスラブ主義者ストラホフがその論文への回答として「女性問題」(«Женский вопрос»)という評論を『曙』誌に投稿した。女性問題に関してストラホフに近い見解を持っていたトルストイは、その『曙』の評論に答え手紙を書くが、結局送りはしなかった。この未送信の手紙<sup>31</sup>からは、社会における女性の役割に関して、トルストイはストラホフ以上に保守的なスタンスを取っていたことが明確になる。ストラホフが、政治的・社会的活動に参加することが許されるのは、家族を持つことのできない女性だけであると主張するのに対し、トルストイはそのような女性にも政治的な活動を容認するつもりはなかった。彼の理屈によると、子供や家族がいない女性でも、「需要が供給を超えている」<sup>32</sup>から、彼女たちにとって相応しい職の他には仕事を考え出す必要がないという。トルストイのこの手紙によれば、常に女性の需要がある相応しい職業というのは、助産婦、乳母、家政婦、そして思いがけないことに売春婦である。

男女両方にエロスの破壊的働きかけを恐れており、強い道徳心を持っていたトルストイが、女性にとって適切な仕事の中で売春を挙げているのは、エイヘンバウムやシモンズといった研究者も驚くべきだと述べている。エイヘンバウムが、そういった思想はトルストイが当時心酔していたアルトゥル・ショーペンハウアーから借りてきたものではないかと推測している。地方から出稼ぎに都会に行く男性が多い中、売春のおかげで家族が遠距離でも存続できるとトルストイがおそらくショーペンハウアーの影響を受けて述べているという。<sup>33</sup> シモンズの仮説によると、トルストイは当時最も重んじていた「家族」をいかなる手段を用いても守るべきだと考えていたから、売春を正当化していたとされる。<sup>34</sup> ただ、家族を守るた

---

<sup>31</sup> Толстой Л. Н. Собрание сочинений в 20 т. Т. 17. М., 1965. С. 335.

<sup>32</sup> 同上。

<sup>33</sup> Эйхенбаум Б. Лев Толстой. Семидесятые годы. Л., 1974. С. 118—119.

<sup>34</sup> Simmons, Ernest J. *Leo Tolstoy. Volume 1. The Years of Development. 1828-1879* (New York: Vintage Books, 1960), p. 334.

めのやむを得ない手段としての売春に関するこうした理論が道徳的に見るとやはり疑わしいことはトルストイ自身が意識していたからこそ、その手紙を結局送らなかったと推測できる。

上記の手紙を書いた当時、トルストイはショーペンハウアーに心酔していたが、彼の全てのジェンダー的思想を受け入れたわけではない。例えば、ショーペンハウアーのジェンダー思想の基礎になっている女性の先天的なモノガミーと男性の先天的なポリガミーという観念にトルストイは注意を向けていない。<sup>35</sup> トルストイによる夫婦の理想はやはりキリスト教的な「一夫一婦」なのである。同時に、夫婦だけでは家族が成り立たないこと、子供が家族の主な意味、男女の「罪深い」肉体関係を正当化できる唯一なものであるとトルストイは信じていた。もう一人の西欧思想家、ジュール・ミシュレを同じ手紙で引用しながらトルストイは次のように述べる：

Призвание женщины все-таки главное — рождение, воспитание, кормление детей. Мишеле прекрасно говорит, что есть только женщина, а что мужчина есть le mâle de la femme.<sup>36</sup>

女性の主な使命はとにかく、子供の出産、教育、育児である。存在するのは女性のみであり、男性は「女性の雄」とであるとミシュレが素晴らしく述べている。

母親という役割が女性にとって使命であるという考えは、何世紀にもわたって維持されてきた通説と同様ではあるが、トルストイの視点は女性に対する一般的な性差別とは異なるという点に注目すべきであろう。女性の使命は家族や子供に限られているなど、トルストイの理念は極めて性差別的に見える一方、「存在するのは女性のみ」また「男性は〈女性の雄〉である」という主張は、当時慣例となっていた男女の優先順位を逆転させる。その短い文章はトルストイの当時の思想における基本的な観念も暗示している。トルストイは当時、出産による人類の継続が人間の最も重要な役割であると確信していた。男性より直接に出産に関わる女性は、人間にとってあり得る一番高い地位を占めているという理屈である。人類の存続と比べ、政治や社会、文学などは当時のトルストイにとって優先順位の低いものであったので、家族に尽くすことの代わりに社会で働きたいという女性の願望に、彼は共感しかねたの

---

<sup>35</sup> Эйхенбаум Б. Лев Толстой. Семидесятые годы. Л., 1974. С. 118—119.

<sup>36</sup> Толстой Л.Н. Собрание сочинений в 20 т. Т. 17. М., 1965. С. 337.

だろう。

「当時」というのは 1870～1880 年代にかけて起きたトルストイの精神的・思想的な転向の以前を示すが、あえてこのように書いているのは、「転換前のトルストイ」と「転換後のトルストイ」を区別する必要があると思われるからである。その例の一つは、転換前のトルストイによるショーペンハウアーの賛美が転換後、逆転したということである。転換後のトルストイは、家族とそれによる人類の継続よりも個人的な成長と神への奉仕を重んじていたため、女性問題の捉え方も変わったと考えられる。次項ではトルストイの家族及びその危機についてより詳しく述べるが、人間の成長や幸せの不可欠な条件が家族であると主張してきたトルストイであるが、1870 年代からは、自身の家族だけでなく、概念としての「家族」に失望し始めた。だからこそ、その時期に書かれた『アンナ・カレーニナ』は不倫した女性を咎める説教じみた作品にとどまらず、当時のロシア社会で起きている結婚制度の危機やその害を被ったひとりの女性の悲劇を描いた傑作になったと言える。

70 年代以降、トルストイのジェンダー観がどのように変わったかということ把握するにあたって、『クロイツェル・ソナタ』（1890 年）は一つの重要な示唆を与えてくれる作品である。『クロイツェル・ソナタ』は出版段階で政府から発禁が命じられたが、皇帝からの許しを得て出版されることになった。しかし出版許可が下りるよりも前に、既に手稿が広まっており、禁止されていたためにかえって、たいへんな人気を博した。一方で、この作品は聖職者に激しく非難され、結局破門に終わるトルストイとロシア正教との葛藤も、これに端を発するものであった。<sup>37</sup> この作品やその解釈を巡る議論が大きく広がっていたことは、トルストイが人生で初めて、出版後の作品に対して「後書き」を加えたことによって示されている。

この論争を呼ぶ、扇動的な物語は、特に、トルストイがアンチフェミニストと見なされる原因にもなった。例えば、佐藤雄亮は、トルストイにとって、女性性は破壊的なものと捉えられるようになり、さらに『クロイツェル・ソナタ』でそれは「女性恐怖症」の形を取った

---

<sup>37</sup> Малькова Я. «Семейный вопрос» в творчестве Л.Н. Толстого и его обсуждение в критике и публицистике конца XIX – начала XX века. М., 2006. С. 58–61.

と述べている。<sup>38</sup> 同じような視点はロシア人研究者の間でも珍しくはない。<sup>39</sup> 確かに、恋愛やエロス、家族の拒否だけではなく、男女平等や女性解放という当時のロシア社会における重要な概念に対する作者の異常な敵意が感じ取れる。作品冒頭では、フェミニスト的な女性が明らかに皮肉めいた表現で描かれ、彼女の恋愛思想に対し、一般民衆の代表者である年配の商人が当時の性差別的な一般論を述べている。

「でも、愛のない人とどうして暮らしていけますでしょうか？」と、婦人はますますせき込んで、自分の意見を発表しようとした。どうやらそれを、非常に新しい意見とでも思っている様子であった。

「もとはそんな詮索はしませんでしたよ」と、さとすような調子で老人は言った。

「それは、近ごろになってはじまったことですよ。なにかあると、もうさっそく、女房のほうで『わたし出ていきます』とくる。そんな柄でもない百姓のあいだにまで、近頃は同じことがはやりだしましたからね。『さあ、これがお前のシャツともも引きだよ、わたしはワーシカ（原文：ワーニカ）といっしょにいきます、あの人のほうが髪が房々してるだもの』とこうですからな。話になりませんよ。やっぱり女にゃ、第一番に、恐れというものがなくちゃいけませんな」<sup>40</sup>

「女にゃ、第一番に、恐れというものがなくちゃいけません」というのは、現在の問題でもある家庭内暴力を暗示している。物議を醸しそうなこうした対話から小説が始まり、最大限の家庭内暴力を実行したポズドネイシェフによる妻の殺害で終わる。今日の読者はもとより、当時の読者にも衝撃を与え、作品の解説を巡る激しい議論を巻き起こしたのも頷ける。しかし、作品の冒頭で登場する年配の商人は主人公ではないということもあり、暴力の全てを否定していたトルストイの思想をそのまま表していたとは考え難い。妻を殺した『クロイツェル・ソナタ』の語り手であるシニカルなポズドネイシェフもトルストイの考えを所々表現しているが、彼の完全な分身ではないことは明確である。トルストイが如何に嫉妬深い人

---

<sup>38</sup> Сато Ю. Толстовские героини и непреодолимые «границы» // Лев Толстой: сквозь рубежи и межи / Под ред. Т. Накамура. Саппоро, 2011. С. 23.

<sup>39</sup> Бабаева Н. Комментарий к докладам первой части международного симпозиума «Лев Толстой: сквозь рубежи и межи» // Лев Толстой: сквозь рубежи и межи / Под ред. Т. Накамура. Саппоро, 2011. С. 44.

<sup>40</sup> トルストイ全集、第9巻『クロイツェル・ソナタ』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年、9-10頁。



柄だったとしても、それは妻を殺すことに導いたポズドネイシェフの病的な不信感とは異なっていた。多数の喧嘩にもかかわらず自分の妻を晩年まで愛し、さらに隣人愛を何よりも重んじていたトルストイは、愛情を否定するつもりはなかっただろう。

一方のポズドネイシェフは完全なミソジニストであるとも言えない。彼の列車の中のモノログでは、彼の妻に対する態度に深い反省が現れている。

「さて、わたしの愛の第一の徴候とは、果たしてどんなものでしょう？ ほかでもない、わたしが自分の中の動物的過剰を恥じないばかりか、なぜかその肉体的過剰の可能性を誇りながら、おまけに、彼女の精神生活ばかりでなく、肉体生活のことすら少しも考えないで、それに身をまかせてしまったことです。わたしは、わたしたちの相互的悪意はいったいどこからきたのか、それに驚いていたのですが、それはもう、少しも驚くにはあたらずに—この悪意こそとりもなおさず、動物性に抑圧された人間的本性の抗議にほかならなかったのですよ。(…)」<sup>41</sup>

過度の嫉妬の結果、彼は衝動で妻を殺したが、その後二人の結婚生活を顧みながら、自分のエロスの働きである「肉体的過剰」や妻に対する思いやりのなさを反省し、彼女に同情している。無制限に性的交渉を重ねることは、女性の身体にとって有害であり、ヒステリーを起こすというのもポズドネイシェフの一つの主張である。興味深いことに、それは第2章第2節第2項で論じる有島武郎の『或る女』においても一つの不可欠な概念になっている。

『クロイツェル・ソナタ』の後書きは、文学作品自体とは違った形で、トルストイの実際の姿勢をそのまま表している。その姿勢は女性恐怖症と正反対に、女性への深い配慮に満ちていることが明白である。

(…)性交の当然の結果である子供を忌避したり、そうした結果の重荷をぜんぶ女に負わせたり、または、子供出生の可能性を予断したりするような性交にはいること、—そうした性交は、もっとも単純な道徳の要求をふみにじることであり、卑しむべき行為であること、したがって、卑しく生きることを欲しない独身者はそれを行なってはならぬことなどを、理解する必要があるのである。

---

<sup>41</sup> トルストイ全集、第9巻『クロイツェル・ソナタ』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年、34-35頁。

(…) 出産に反対する方法の実施はよくないことである。第一にそれは、肉の愛のあがないをつとめる子供についての配慮と苦勞から人間を解放するからであるし、第二にそれは、もっとも人間の良心に反する行為—殺人に酷似したなにかであるからである。また、妊娠および哺乳中の不節制もよろしくない、なんとなれば、それは、婦人の肉体力、主としては精神力を破壊するからである。<sup>42</sup>

後書きのこの部分では、トルストイによるエロスの咎めがふたたび見られる。子供出生を予防してはならない理由として、例えば子供は人生の意味であるということや国家の将来のために人口を増加させるべきなどという一般的に納得しやすいことをトルストイが挙げるのではなく、子供は「肉の愛のあがないをつとめる」からであると主張している。「罪」である性交渉を人間が起こしたのなら、その結果生まれた子供の世話をさせられるのは然るべき「罰」になるという論理である。子供は人生の一つの苦しみであるというトルストイの考え方は、私生活において自分の子供と親しくなれず、次項で論じる家族の危機を促した原因の一つだったかもしれない。

ロシア語の原本のこの箇所が使われている *«искупление»*<sup>43</sup> という言葉は、「苦行」とも訳すことができる。この見方がトルストイのキリスト教的な模索に促された可能性は高い。キリスト教徒の間でも、家族やその中のエロスを肯定的に捉える立場から、結婚や性交渉を完全に否定するような立場まで多岐にわたる。教会の教えの基盤となる原則（例えば、十戒）は厳守しないといけませんが、その一方、寓話を含め、聖書の曖昧かつ隠喩の多い表現は、そうした解釈の自由を生み出す。キリスト教は婚外の性交渉を「姦淫」と見なしているが、結婚内の肉体関係はどうであろうか。創世記から引用する。

神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。神は彼らを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」。(創世記 1 : 27~28) <sup>44</sup>

---

<sup>42</sup> トルストイ全集、第9巻『クロイツェル・ソナタ』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年、84-85頁。

<sup>43</sup> Толстой Л.Н. Собрание сочинений в 22 т. Т. 12. М., 1982. С. 199.

<sup>44</sup> 『聖書（旧約聖書）』日本聖書協会、1991年、2頁。

この記述に従い、性行為による人間の生殖は、神によって祝福されているという解釈が現在の正教会には一般的である。一方、エロスを恐れるトルストイは聖パウロの言葉（「ひとりであれば、それがいちばんよい」<sup>45</sup>）をより重視し、結婚内の性行為でも、「動物のもの」と見なし、それに罪悪感を抱いていた。このような視点はトルストイだけではなく、貞操を特に重んじるプロテスタント宗派、特にピューリタン派にも見いだせる。肉体関係はそもそも穢れであるという思想は、「プラトニック・ラブ」の崇拜にも影響を与えたとされる。

『クロイツェル・ソナタ』に戻ると、30頁に引用した後書きではまた、女性の身体や精神への配慮の他に、『伝染した家庭』のように、無責任な性交渉、特にそれを女性に求め責任を負わない男性の態度が咎められている。当時の一般論でもあったが、女性はいくまでも「肉の愛」を受ける、消極的に性行為をさせられるものであるという考え方が、トルストイの後書きから読み取れる。性行為が、男性にとって動物的な本能の実現であるように、女性にとっては妻・母親という社会的役割と結び付けられるものだった。当時の女性が『クロイツェル・ソナタ』でうかがえるように過剰な性交渉の結果ヒステリーに陥るといのは、女性自身にとって嫌な「苦行」をさせられていたからという論理である。女性の心理を鋭く見抜いていたトルストイは、女性のエロスを当時の男性作家のほとんどと同様に完全に把握できなかったと言えるが、『クロイツェル・ソナタ』などを通して女性が性的対象としてのみ扱われることに対してトルストイは激しい批判を浴びせる。男性による性的に乱暴な扱いは夫婦の悲劇だけでなく、社会の墮落の原因であると、ポズドネイシェフを代弁者にトルストイは述べている。女性による社会的活動を容認できなかったトルストイは、少なくとも男女の性的関係においては女性の味方だった。

ジェンダーを巡る、トルストイの極端で、時には偏った思想は広く知られ、しばしば批判的とされてきた。彼はエロスに対して恐怖や嫌悪感を抱いていたことから、女性そのものにも恐れを感じていたと誤解されがちだが、男女を問わずキリスト教的な「隣人愛」を何よりも信じており、特に晩年の作品で隣人愛の重要性を説いていたトルストイの思想は、それとはかけ離れている。女性を男性の奴隷か性的対象のみにするのではなく、男女にはそれぞれのはっきりとした役割があると信じ、正教会に破門されたトルストイのジェンダー観はキリスト教の姿勢と事実上多くの点で似通っている。エロスを咎めながらも、隣人愛を重んじていたトルストイは『クロイツェル・ソナタ』の主人公ポズドネイシェフと異なり愛の全て

---

<sup>45</sup> 『聖書（新約聖書）』日本聖書協会、1991年、263頁。

を否定すること、愛は性欲に過ぎないと主張することをしなかった。彼の女性に対する見方は多面的で複雑でありながら、決して否定的で恐怖症的ではないと言える。

## 2.2 家族の危機、トルストイ一族及びトルストイの作品を中心に

トルストイ自身の人生・著作のどちらにおいても、男女関係や夫婦に基づく「家族」は中心的な位置を占めている。トルストイ本人は1901年に正教会に破門されたが、彼のジェンダー観だけではなく、結婚や夫婦に関する姿勢は序章で検討したキリスト教的な視点に事実上似通っていた。彼は夫婦を「一体」と見なし、離婚や別居を認めず、婚外の肉体関係を一切認めていなかった。そして、エロスに関するトルストイの元々ネガティブな見方は晩年に至ると男女の性交渉全ての否定まで強まっていった。前項でとり上げた14歳の初めての性的体験がその一つの決定的な出来事になり、それが彼のエロスに対する敵愾心を促したと推測できる。エロスに対する彼の否定的な見方が強くなっていった結果、かつてはずっと重んじていた結婚までも晩年に否定するに至る。それには彼自身の家族に危機を及ぼした夫婦内の葛藤が大きな役割を果たしたと考えられる。

トルストイは、1862年に子供のころから知り合いだったソフィア・ベルスと結婚してからおよそ10年間は、安定した家庭に恵まれ、そして作家としての名声が高まる中で、『戦争と平和』(1869年)という代表作を仕上げるに至った。70年代はまだ家庭生活は比較的平穏だったものの、その頃から夫婦内のお互いに対する不満や何人かの新生児の死亡という辛い状況が重なり、トルストイの人生の中で最も深刻な家族の危機はこの時期から始まったと、トルストイの研究者バシンスキーが指摘している。<sup>46</sup> 同時にトルストイの転換も始まり、世界中で愛されている「作家トルストイ」から、一般読者にとってやや受け入れにくい「哲学者トルストイ」への変容の時期でもあった。トルストイ自身はその転換を未完の回想録の中で「私の精神の誕生」<sup>47</sup>と呼んでいるが、自らの以前の作品だけでなく、シェイクスピアなどの世界の文化的遺産を否定するに至り、必ずしも肯定的な転換だったとは断言できない。多くの研究者は、子供のころから抱き続けていた形而上学的な疑問を、その精神的な危機の理由と見なしているが、トルストイの私生活、特に、この時期の家族の危機が引き金になっていることは無視できない。むしろ家族に対して高まっていく不満、夫婦間の危機こそが、

---

<sup>46</sup> Басинский П. Святой против Льва. Иоанн Кронштадтский и Лев Толстой: история одной вражды. М., 2013. С.226, 229, 249.

<sup>47</sup> Толстой Л. Н. Собрание сочинений в 22 т. Т. 14. М., 1983. С.380.

その転換の直接的な理由になったのではなかろうか。

晩年のトルストイは精神的苦痛に苛まれ、そして自らの社会的思想に基づき、著作権と遺産を「国民に移譲する」とする遺言状の作成を試みた。それがソフィアをはじめ家族の反感を生み、後に彼女のそうした態度はトルストイの伝記研究者たちによる激しい批判の対象となった。しかし、多数の草稿を筆記するなど、彼の作品に対する妻ソフィアの献身的な振舞いを否定することはできないと主張している研究者もいる。<sup>48</sup> トルストイの家族生活は48年間続き、最終的には彼自身が家出の果てに死亡するという悲劇に終わったが、何より妻ソフィアと、彼女との夫婦関係こそが、彼の家族や結婚、愛情やエロスの概念に関する思想を形成し、結果として、ほとんどの場合において男女関係をプロットの中心に置く彼の作品に大きく影響したと言える。以下にはトルストイの家族に起きた危機やその理由に触れ、それがトルストイのジェンダー思想にどのような変化をもたらし、どのように彼の作品の中で現れたのか、明らかにしたい。

若い頃のトルストイは、自身の両親の家族を模範とし、自分の家庭の幸せを夢見ていた。叔母のタチヤーナ宛てに1852年に送った手紙の中で、彼はそのことについて述べている。

(...)думая о том счастье, которое меня ожидает. И вот как я его себе представляю.  
(...) Знакомых у нас не будет; никто не будет докучать нам своим приездом и привозить сплетни. Чудесный сон, но я позволю себе мечтать еще о другом. Я женат — моя жена кроткая, добрая, любящая, и она вас любит так же, как и я. Наши дети вас зовут «бабушкой»; вы живете в большом доме, наверху, в той комнате, где когда-то жила бабушка; все в доме по-прежнему, в том порядке, который был при жизни папа, и мы продолжаем ту же жизнь, только переменив роли: вы берете роль бабушки, но вы еще добрее ее, я — роль папа, но я не надеюсь когда-нибудь ее заслужить; моя жена — мама, наши дети — наши роли.<sup>49</sup>

(…) 私を待っている幸せについて考えている。次のようにそれを想像している。  
(…) 私たちに知り合いはおらず、誰も厄介をかけに来ることもなく、うわさを持って来ることもない。素敵な夢だが、他のことも夢見てもいいだろう。私は結

---

<sup>48</sup> Полнер Т. Лев Толстой и его жена. История одной любви. Екатеринбург, 2000. С. 200.

<sup>49</sup> Толстой Л.Н. Собрание сочинений в 20 т. Т. 17. М., 1965. С. 55—56.

婚していて、妻は柔和で、優しく、愛情深い人で、あなたのことも私と同様に好きだ。私たちの子供はあなたを「おばあちゃん」と呼んでいて、あなたは大きな家の、おばあちゃんが前住んでいた上の部屋に住んでいる。家の全ては、以前のままで、お父さんが生きていた時と同じだ。私たちも、役割だけを代えて同じ人生を続けている。あなたはおばあちゃんの役割であるが、彼女よりも優しい。私はお父さんの役割だが、それにいつか値するとは期待していない。妻はお母さんの役割、子供は私たちの役割。

この手紙では、自身を自らの父親に、将来の妻を自らの母親になぞらえている。トルストイが1歳半の時に亡くなった母親がずっと彼にとっての女性の理想像だったというのは、ルース・クレゴ・ベンソン<sup>50</sup>を始めとし、バシンスキーなどの研究者が指摘してきた。母親の記憶がトルストイになかっただけでなく、黒い横顔を除き、彼女の肖像画も残っていなかったため、彼女のイメージはさらに理想化しやすかったのだろう。残っていたのは、彼女の書いた詩、手紙、日記であり、それをもとにトルストイの内で形成された母親の理想像は浪漫的で神秘的な色合いを帯びていた。回想録の中でトルストイは、母親の存在を崇高かつ清らかに思っており、彼女の魂に捧げていた祈りは辛い時よく慰めになっていたと述べている。<sup>51</sup> 母親はこの世の人間なのではなく、天使か聖母マリアのような霊妙な存在としてトルストイに思い浮かべられていたということである。

回想録の1章もやはり母についての記述から始まる。母のイメージはいくつかの作品で結実し、『戦争と平和』のマリヤ・ボルコンスカヤはその一つの例である。読者にとっては『戦争と平和』の他の登場人物、ナターシャのほうが強い印象を残しているかもしれないが、トルストイの実際の母親の名前を受け継いだマリヤは当然作者自身の一番好きなヒロインだという。この長編における彼女のイメージについては後に考察していく。上記の手紙からもうかがえるように、トルストイが将来の妻に期待していたのは、自分の母親の代わりに理想の家族の「母親」になること、つまりほとんど覚えていなかった想像上の母親になりきることだった。その理想化された母親をもとに考え出した理想の女性を実際に見

---

<sup>50</sup> Benson Crego R. *Women in Tolstoy. The Ideal and the Erotic.* (Urbana: University of Illinois Press, 1973), pp. 4-9.

<sup>51</sup> Толстой Л. Н. Собрание сочинений в 22 т. Т. 14. М., 1983. С.387.

つけ出すのは言うまでもなく不可能であるため、トルストイの将来の夫婦生活は最初から非現実的な期待に脅かされていた。

このように、ソフィアと出会う前から、トルストイは理想的な妻を自身の母親像に似ていることを望み、「柔和で、優しく、愛情深い人」のように思い描いていた。本章の第1節第1項で検討した保守主義者ストラホフが賛美していた女性の「優れた精神的な品性」も、おそらく愛情深さ、優しさ、柔和などの女性の「先天的な」特質を意味していたと推測できる。「女性の唯一の道徳的な武器は愛情である」（«У женщин есть одно только нравственное орудие (...) – это любовь»<sup>52</sup>）と1865年の手紙で主張していたトルストイは、男性の理性と女性の感情性を対比しながら、愛情の深さは女性全員の特徴であるかのように思いこんでいた。

女性の特質としての愛情はトルストイやストラホフの場合、エロスを含む「妻」という役割より、純粋な愛の実現者である「母」の役割に関連していたと考えられる。自分の子供を愛し、世話をするために生まれたとされていた女性は、子供の有無にかかわらず、優しさなどの「優れた精神的な品性」を先天的に持っているという理屈であろう。トルストイの処女作『幼年時代』（1852年）に描かれたトルストイの分身であるニコレンカの母親のイメージにおいては、愛情がほぼ唯一の特色として挙げられている。

「あなたにたいし、また子供たちにたいするわたくしの愛は、この生活といっしょに終わるのでしょうか？（…）それがそうあるべきでないことをさとりました。それなしにはわたくしが生存を理解することもできないこの感情が、いつかは滅びてしまうかもしれぬと考えるには、この瞬間わたくし自身が、あなたがたにたいする自分の愛をあまりに強く感じすぎております。わたくしの魂は、あなたがたにたいする愛情なしに存在することはできません（…）今、わたくしは堅く信じておりますの、わたくしはもうじきあなたがたといっしょにはいなくなりますけれども、わたくしの愛は永久に、終わることなく、あなたがたをはなれることはないのだと。（…）」<sup>53</sup>

ニコレンカの母親は無名であり、あくまでも「母親」の役割に制限されている。引用通り、

---

<sup>52</sup> Толстой Л.Н. Собрание сочинений в 20 т. Т. 17. М., 1965. С. 301.

<sup>53</sup> トルストイ全集、第1巻『幼年』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年、103頁。

愛情が自身の魂の不可欠な要素であると彼女は自覚している。トルストイが一生理想化していた母親は『幼年時代』の登場人物として再構成され、「我思う」の代わりに「我愛する、ゆえに我あり」と主張しているかのようだ。その上、子供と夫に対する愛情なしに彼女自身は存在できないが、彼女が亡くなっても、愛情だけは存在し続けると確信しており、その利他的な愛は明らかに彼女の自我を超えている。その神秘的な信念は病死が近づいている彼女にとって大きな慰めになっている。

死も超越するその愛は既に述べたように、エロスとは全く無関係である。主人公の父親は妻以外の女性との交際を持っていたことが仄めかされており、彼のイメージにはエロスの要素も含まれていることにひきかえ、母親像には上記のような純粋な愛の要素しか含まれておらず、自らの人生の意味を家庭の管理と子育て、無償の愛であると彼女自身は意識している。夫は異性としてではなく、子供と一緒に「家族」の一員、親戚として受け入れられている。「母」になりきった妻は、夫にとっても「異性」ではなくなるからこそ、自身のエロスの要求を夫婦内で満たせないニコレンカの父にとっては、19世紀の貴族の大半がそうであったように、不倫は特に恥じらう必要のない普通のことだった。それをトルストイは『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』においても非難し、そのため上流階級との交わりを私生活でも避けていた。

婚外の肉体関係を全て咎めていたトルストイは男性の不倫を一切正当化しようとしていないが、妻に満たされないエロスの要求が男性に存在しているということは、当時のロシア社会においては当たり前のことと見なされていた。『幼年時代』においては、父親の不倫に対して子供を含む家族が何の反応も示していないことが、それを物語っている。夫のことを誰よりも分かっていた妻の愛情も、彼の浮気によってなくなるどころか、減ることすらない。彼女自身はエロスの要求があるという兆しは全くない。こうしたエロスの要素を無くした、あくまでも「母」としての女性像は、トルストイのそれ以降の作品にも度々登場している。1859年の『家庭の幸福』のマーシャとセルゲイ・ミハイロヴィチの関係、『戦争と平和』の結婚後のナターシャの変容、『アンナ・カレーニナ』のドリー像などはその例である。女性のエロスが現れることは、トルストイの作品の場合、『戦争と平和』のエレンのような否定的な登場人物の特徴であるか、肯定的なヒロインが深刻な結果につながりかねない過失“faux pas”を犯す原因となるか、という二つのパターンに分けられる。

トルストイの家族観、特に女性のエロスに対する彼の恐怖感を理解するには、現在あまり読まれていない中編ではあるが『家庭の幸福』を取り上げる必要がある。1859年にこの



作品を書く動機となったのは、1856年のトルストイとヴァレリヤ・アルセニエヴァとの関係である。<sup>54</sup> 「田舎に行って、早く結婚することにした」（«Я решаюсь ехать в деревню, поскорей жениться»<sup>55</sup>）と日記に書いたトルストイは、当時極めて強い結婚願望を持っていた。そこで田舎の地主の娘ヴァレリヤに接近し、彼女と文通を行い、家を訪問するようになる。友人に彼女の性格を誉められ、トルストイ自身も彼女が妻として一番相応しい相手であるとしながらも、結婚することをためらっていた。彼女の言動を絶えず分析し、彼女に対する自らの態度も「ほぼ恋患い」かと思えば「うんざり」であるなど、常に移り変わっている。彼女に対する自身の気持ちを確かめるために、トルストイは付き合いの半年後、距離を置くことに決め、モスクワに移動する。ヴァレリヤに宛てた手紙の中で、トルストイは家族や恋愛、そして幸せに関する自らの意見を押し付け、ヴァレリヤの至らぬ点を指摘し、説教までしている。彼によれば、情熱的な恋に身を委ねるのは愚かであり、努力（труд）によってのみ、幸せな家族が築けるといふ。さらに、ヴァレリヤに“faux pas”（社交上の言動の過失）について忠告し、自らの結婚相手として社交界に足を踏み入れないで欲しいと述べる。<sup>56</sup> 上記の点は、『家庭の幸福』のプロット、そしてトルストイの当時の道徳観、恋愛観を理解するための重要な伏線である。

ヴァレリヤとの恋愛関係は一年弱で終わったが、それがもし結婚に至っていたらという仮定から『家庭の幸福』が生まれた。<sup>57</sup> 若い女性マーシャによって語られるという手法は、トルストイの作品にしては珍しい。ストーリー自体はやや単調であり、結婚前の男女の恋愛と、結婚後の夫婦関係のいきさつが内容となっている。マーシャは父親ほどの年齢差のあるセルゲイ・ミハイロヴィチと恋に落ち、結婚してから数ヶ月間は共に穏やかな田舎生活を送るのだが、やがて退屈を感じ始める。トルストイはヴァレリヤに己の意見を押し付けていたのに対し、彼の分身セルゲイ・ミハイロヴィチはマーシャに自らの生き方を押し付けず、サンクトペテルブルグへの上京を提案する。

その上京によって、マーシャはペテルブルグの社交界に足を踏み入れることを余儀なくされる。それがおそらく、トルストイの考えでは最初の“faux pas”であろう。社交界の浅はかさ

---

<sup>54</sup> Басинский П. Лев Толстой: Бегство из рая. М., 2010. С. 636.

<sup>55</sup> Толстой Л.Н. Собрание сочинений в 20 т. Т.19. М., 1965. С. 161.

<sup>56</sup> Толстой Л.Н. Собрание сочинений в 20 т. Т.17. М., 1965. С. 139—141.

<sup>57</sup> Басинский П. Лев Толстой: Бегство из рая. М., 2010. С. 121.

や安逸な生活、偽善、不倫がごく一般的に行われていることなどをトルストイは咎めていた。マーシャの社交界デビューは、夫婦間の価値観の齟齬をあらわにし、夫との喧嘩や疎遠の原因になる。田舎に暮らしていた時、素直で質素だったマーシャは、都の社交界において一瞬で人気者になり、その人気は彼女の目をくらます。次の”faux pas”は、トルストイが非常に重視していた子育てにマーシャが努力をあまり払わないことである。子供が生まれても、それを子守に預け、社交界を楽しみ続けるというのは、トルストイによると「母」という女性の先天的な役割を否定することであり、女性の最も深刻な過失の一つに他ならない。この二つの過失はマーシャの最後の”faux pas”に繋がり、それは温泉でイタリア人侯爵が自分に言い寄ってくるのを許してしまい、浮気をしてしまいそうになることである。それはマーシャが家族の代わりに浅はかな社交界の付き合いを選び、「母親」になりきらなかったために、エロスを求める若い女性の欲求不満に陥った結果だったと言える。

その若い女性の欲求不満を、マーシャは夫婦内で満たすことができなかった。セルゲイ・ミハイロヴィチと侯爵に対するマーシャの感情は大いに異なっている。夫に抱く感情は、結婚前の清いプラトニック・ラブから友情を思わせる安定した愛着へ変わっていくが、エロスが全く現れない。一方、侯爵に対してマーシャが抱いている感情は、情熱的で性欲的なものである。また、トルストイの意図に沿って明らかに破壊的な本質を持っている。

(…) 手袋をはめてない彼の指は私の手にさわった。恐怖ともつかず、満足ともつかぬ、私にとって一種の新しい感情が、ぞっと私の背骨を走った。(…) そしてそのくちびるは私に近づき、手はしだいに強く私の手をしめつけて、私を灼くのだった。火が私の血管を走りまわり、目の中は暗くなり、私はただ顫えるだけで、彼をとめようと思った言葉も、咽喉にひからびついてしまった。とつぜん、私は自分の頸（原本：頬）に接吻を感じて、全身に寒気をおぼえて顫えながら、足をとめて、相手を見つめた。もう口をきく力も動く力もなく、私は恐れおののきながら何か期待し、何かを望んでいた。これらのことはすべて、一瞬間つづいただけであった。しかし、この瞬間は恐ろしかった！(…) 私は彼を憎み、恐れていた—彼は私にとって、それほど縁もゆかりもない他人だった。ところがこの瞬間には、この憎むべき無縁の他人の興奮と熱情が、あまりに強く私の身内に反応して、その粗野な、美しい口の接吻と、その細い血管の見える、指にいくつも指輪をはめた白い腕の抱擁に身を任せたいという欲望が、いかにもうちがちがたく起こり、とつぜん目の前に口をあけてさしまねく禁断の快樂の深淵へひと思いにとび込みたい気持を、強くか

きたてるのであった！...<sup>58</sup>

性欲を描くトルストイは、「恐れ」や「憎しみ」などの多数の否定的な言葉遣いでここでもエロスに対する自身の態度を読者に示している。その激しい調子には、トルストイ自身の激的な性格や婚外のエロスに対する彼の恐れや軽蔑がよく表れている。マーシャは結局浮気することはなかったが、最後に描かれている彼女とセルゲイ・ミハイロヴィチとの関係は恋愛というより、むしろ友情か親戚関係に近い。このことはマーシャの台詞「愛人ではなくて古い親友が私を接吻したのだった」<sup>59</sup>から明らかである。同時に、マーシャは子育てに没頭し、自分の子供に対する強力で嫉妬深い愛情に集中し、エロスを完全に拒否しても満足しているように見える。結局、マーシャはエロスを夫婦内で味わうことができず、あくまでもそれは浮気相手に対するその破壊的な「恐ろしい瞬間」に限定されている。

このような「清らかな」家族関係がトルストイにとって実際に幸せなものであったのか、不明である。この小説は『家庭の幸福』と名付けられ、一見すると主人公が調和のとれた穏やかな家庭を築け、「ハッピーエンド」で終わるが、トルストイ自身の姿勢は一義的ではない。最終的にマーシャのプロトタイプだったヴァレリヤを愛せず、彼女との打算的な結婚を諦めた彼はおそらく、より充実した夫婦関係を求め、小説で描いたのと異なる「家庭の幸福」を作りたかったのではなかろうか。つまりトルストイは性欲を恐れながらも、実生活では友情的な愛だけでは物足りないように当時感じたのかもしれない。情熱的で過激な性格の持ち主であったといわれるトルストイには、セルゲイ・ミハイロヴィチにとっては満足のいくものであった、エロスを欠いた穏やかな夫婦関係は不可能に近いものだろう。

34頁で引用した手紙からうかがえるように、実際に結婚する10年前から、家庭の秩序がトルストイの頭の中で決められていた。しかし「柔和で、優しく、愛情深い人」という理想の結婚相手を見つけるという打算的な目論見をトルストイは貫徹しなかった。ヴァレリヤは素晴らしい性格の持ち主であっても、彼女に対する愛情はなかなか生まれず、その愛情なしで彼女はトルストイの理想のパートナーにやはりなれなかった。34歳という、同時代の男性の平均的結婚年齢からすると、比較的遅い年齢で結婚したトルストイは、理想の結婚相手を探し続けた。結局幼馴染のベルス一族を訪れ、子供から女性へと変貌を遂げ

---

<sup>58</sup> トルストイ全集、第3巻『家庭の幸福』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年、73-74頁。

<sup>59</sup> 同上、85頁。

た18歳のソフィアと狂気の愛の結果、1ヶ月の内に結婚が決まった。エロスを一生恐れながらも、やはり性愛なしでは「家庭の幸福」が成り立たないとトルストイも直感的に分かっていたのかもしれない。

将来の妻をじっくり観察する時間をトルストイは取らなかったが、運よく彼が手紙で描いた田舎の静かな家庭の生活には、若いソフィアは同意していた。それは、10年以上に及ぶ夫婦の幸せな時期に繋がった。多数の草稿を書き直したり、執筆を促したり、作品について助言したりするなど、トルストイの創作活動においても、日常生活においても、妻のソフィアの役割は不可欠だった。当時書いた『戦争と平和』（1864～1869年）は世界中の人々に傑作として認められているが、その登場人物たちはトルストイの家族や親戚にインスパイアされている。『戦争と平和』のテーマは、戦争でもありながら、家族の在り方でもある。ストラホフをはじめとするロシアの批評家達にこの長編は「家族年代記」とであるとされていることから、当時のトルストイの人生や世界観には家族がどれだけ重要な位置を占めていたのかがえる。

この小説は、19世紀初頭の貴族の価値観や習慣だけでなく、様々なタイプの家族を描いている。エルネスト・シモンズは、1812年のナポレオン戦争という歴史的な出来事は貴族の家族史における単なる背景として意図されたと述べている。<sup>60</sup> 作中の登場人物は500人を超えるが、3つの家族を中心に、物語が展開していく。クラーギン一家から物語が始まるが、トルストイはこの家庭を明らかに否定的なものとして扱っている。家長であるヴァシーリー公爵は息子たちを”imbécile”(白痴)と罵り、彼らを自らの罰のように認識している。彼の妻は、娘エレンの結婚に対し嫉妬を抱いている。このことに加えて、エレンとアナトーリの間にインセスト的な関係が存在していることが暗示されている。エレンとアナトーリは、この作品における明確な悪役であり、暗いエロスの象徴でもある。この二人のエロティシズムによって、肯定的な主人公ピエールとナターシャが致命的な過ちを犯す。ピエールはエレンの肉体的な魅力に惹かれてしまう。彼女を愛していないことを意識していたので、彼は彼女との結婚を考えていなかったのに、クラーギン一家の陰謀によって結婚してしまう。ピエールがエレンに惹かれる場面では、「暗い力」としてのエロスがあからさまに描かれている。

「じゃあ、あなたは、今までお気がつかなかったの、あたくしがどんなに美しい

---

<sup>60</sup> Simmons, Ernest J. *Leo Tolstoy. Volume 1. The Years of Development. 1828-1879* (New York: Vintage Books, 1960), p. 296.

かということに？」こうエレンは言っているようであった。「あなたはお気がつか  
なかつたの、あたくしが女だってことに。ええ、あたくしは女ですわ、だれのもの  
にでも、あなたのものにでもなれる女ですわ」(…) 彼女はおそろしく彼に近いもの  
となった。彼女は早くも、彼にたいして支配力を持ってきた。そして彼と彼女との  
あいだには、もはやどんな障害もなかった (…)((だが、あの女はばかだ、あいつ  
はばかだ、おれは自分で言ってたじゃないか))と彼は考えるのだった。((あの  
女がおれの心に呼びさました感情のなかには、何かけがらわしいようなものがある、  
許されないようなものがある。(…))<sup>61</sup>

この場面では、ナターシャがアナトーリと初めて出会った場面と同じく、「障害」を外すこ  
とによって、暗い力である「許されないようなもの」、つまり性欲のはたらきが描写されて  
いる。許されないもの、性欲に身を委ねたナターシャとピエールは本物の愛情を裏切った結  
果、不幸に陥り、そこから長い間抜け出すことができなかつた。神の命令に背き、「原罪」を  
犯したアダムとイヴが楽園から追放されたように、2人の主人公は自分の過ちを簡単には贖  
えず、辛酸をなめつくすことになる。ここでは、破壊的な力を持つエロスに対するトルスト  
イの恐れと否定が明確に表現されている。エロスだけでは、幸せな家庭は築けないというの  
がトルストイの主張である。そのために、エレンとの結婚はピエールにとって不幸なものに  
なった。出産を望まないエレンは二人の浮気相手を持ち、その果てに性病で死んでしまう。  
その死亡によってピエールは解放され、自らの誤りを正す機会が与えられる。

暗いエロスを実現しているクラークン一家とはロストーフ一家が好対照を成している。こ  
の家庭は、上流社会のしきたりにあまり従わず、ぬくもりのある家族関係を基にした小さな  
世界を作り上げている。親も子供も無邪気であることは、長所であると同時に短所でもある。  
その無邪気さゆえ、家庭の雰囲気は小ぢんまりしており、お互いに正直であり、自らの本能  
を信じて全ての人に対して信頼を寄せている。あまりに人を信じやすいため、ロストーフ家  
の娘ナターシャはアナトーリと実家から駆けおちしようとしてしまう。彼女の運命は台無し  
になるすんでのところ、偶然に助かるが、それによって彼女とアンドレイ・ボルコンスキ  
ー公爵との婚約はなくなり、間接的にアンドレイが死亡することにも繋がる。

ボルコンスキー一家の知性はロストーフのその無邪気さとは対比関係にある。ボルコンス

---

<sup>61</sup> トルストイ全集、第4巻『戦争と平和』(上)(中村白葉訳)河出書房新社、1972年、230-231  
頁。

キーの家庭では、母親がすでに亡くなっている。家族の誰もが知的で高潔であるものの、家長であるニコライ公爵のシニカルで短気な性格のために家庭の雰囲気は息苦しい。そのシニカルな態度が息子であるアンドレイ公爵にも染み込み、彼は結婚自体を批判している。母親が不在であるという点は、アンドレイ公爵とピエールの共通するところであり、トルストイ自身にも母親がいなかったことを思い出させる。この二人の主人公は人格が大分異なっているが、二人ともトルストイの分身であるとされている。トルストイが最終的にアンドレイをナターシャと結婚させるという結末にもっていかなかった一因は、アンドレイのシニカルな性格にあると思われる。ナターシャとアンドレイ公爵の恋愛は、ナターシャとピエールの恋愛に置き換えられた。つまり、トルストイ自身は如何にアンドレイ公爵のように知的で誇り高い人であっても、ピエールの無邪気でやさしいところのほうが家庭の幸福に繋がると信じていたのであろう。

コケティッシュで魅力的な少女から色気をほとんど失った「多産な牝」<sup>62</sup>へと結婚後のナターシャが変貌を遂げたことは、有島武郎を含め多くの読者に大きな衝撃を与えた。その変貌はあまりにも烈しく、疑わしく見えるかもしれないが、実はナターシャのイメージは二人の实在の人物に由来している。結婚後のナターシャ像のもとにはトルストイの妻ソフィアのイメージが置かれ、結婚前のナターシャはソフィアの妹の面影が反映している。ピエールに対するナターシャの激しい嫉妬も、トルストイ夫婦の実生活を彷彿とさせる。

ところが、自身の家族に共通しているピエールとナターシャの関係より、ナターシャの兄ニコライとアンドレイ公爵の妹マリヤによって生み出されたもう 1 つの幸せな夫婦関係のほうがトルストイの理想的な家庭に近い。両方の肯定的な登場人物の恋愛関係においては、誘惑者エレンとアナトーリと違い、エロスが殆ど見受けられない。夫婦となったナターシャとピエール、またはニコライとマリヤは友情に近い恋愛をもとに自身の家庭生活を築いていく。上記のようにマリヤ・ボルコンスカヤの描写を通じてトルストイの母親のイメージが再構成される。その母親の理想像は亡くなった実際の母親にどれほど似通っていたのかをおしはかることはできないが、マリヤ・ボルコンスカヤは正にキリスト教における理想的女性像を体現している。高位な家柄に生まれているにもかかわらず、常に慎み深く、意地悪な父親をいつまでも愛し、尊敬し続け、最初は彼に、その後は夫ニコライに従順である。さらに、

---

<sup>62</sup> トルストイ全集、第 6 巻『戦争と平和』（下）（中村白葉訳）河出書房新社、1972 年、368 頁。

キリスト教の信仰深く、たとえ父親に非難されようと見ず知らずの貧しい人までもいたわっている。その場合彼女は愛する父親の意志より、明らかに神、キリストの教えを優先する。キリスト教徒としての良心をどんな状況においても重視するべきだというのは、彼女をある意味で残酷な家長の強圧から精神的に守っている。

マリヤはナターシャと異なり、食事や衣服などといった子供の物質的な欲求を満たすことより、道徳的な教育や精神的な成長を重んじている。子供の教育はトルストイによれば、母親の重要な役割であるため、ソフィア像に基づいたナターシャより、トルストイの母親像に基づいたマリヤのほうがトルストイの理想的な「母親」を体現していると判断できる。私生活としては、当時は穏やかな家庭の幸せが実現されていたとはいえ、それでもやはり妻のソフィアが亡くなった自分の母を完璧に体現することは不可能であるということに、トルストイ自身が気づきはじめたということ『戦争と平和』から読み取れる。

子供が多く生まれるにつれてソフィアの健康と神経は衰弱してゆき、トルストイが理想とする妻になりきることがどんどん難しくなっていた。1871年に5番目の子供である娘マーシャを産んだソフィアは、重篤な産褥熱に見舞われた。ソフィアは医者から今後出産しないように勧められたが、避妊はトルストイの思想に背くことになるため、それを拒否した。ソフィアは夫のために妥協し、翌年6番目の子供を産むが、17ヵ月後その子は病死してしまう。1874年に家族と一緒に暮らしてきたトルストイの叔母も亡くなり、1875年に生後10ヵ月で息子ニコライが死んでしまう。毎年家族の一員が死亡するという状況下で家の細かいことまで管理していたソフィアは、子供の死亡と出産の苦勞から癒える間もなく、大家族の世話を続けることを余儀なくされた。それ以降も医者忠告にもかかわらず6人の子供を産んだソフィアは生理的にも精神的にも疲弊し果て、ヒステリーの発作が頻繁に起きるようになった。そういう発作をトルストイの弟子や研究者が度々咎めてきたが、先に触れた家庭の苦しい状況や妻に対するトルストイの高い期待や要求を念頭に置けば、トルストイを頻繁に苦しませていた彼女のヒステリーを一方向的に批判することはできないだろう。

トルストイの避妊の拒否は、男女の性行為はお互いの快樂のために存在しているのではなく、それによって新しい命が生まれるためにあるというキリスト教的な考え方に基づいている。断食や機密、イエスは神である信念や魂の不滅など、キリスト教の多くの側面を否定していたトルストイであるが、性や男女関係において不思議にキリスト教の最もストイックな聖職者と同意見を示している。個人の貞操を非常に重視した、性愛は子供が生ま

れるためにのみ存在しているという見方である。トルストイにとって罪深いものであった性欲の問題は、結婚を機に解決すると思いきや、実際は妻との性交渉に対しても罪悪感をずっと抱くことになった。唯一、子供の誕生という家族における大事な役割に関しては、性交渉を正当化する理由と見なしてもよいとしていた。1871年に妻に避妊を禁じたことも彼のその根本的な思想に由来する。しかし、医師に勧められた避妊を、夫に妥協したソフィア自身も拒否したにもかかわらず、トルストイの日記では妻との性交渉は「犯罪的に寝た」(«преступно спал») <sup>63</sup> のように記述されており、晩年に至ってもそれを完全に道徳的に正当化できなかったのである。

夫婦内のエロスまでも恥じらうこと、そして母親を理想像とする理想主義に加え、更に親戚の死亡などが重なり、これらがトルストイの精神的・思想的危機へと繋がったのであろう。自らの家族の理想が遠ざかっていくことを確信したトルストイは、人生の意味を改めて探ろうとし、結婚の意味も疑問に思うようになる。その時期は『アンナ・カレーニナ』が書かれていた1870年代に重なり、『戦争と平和』で描かれた家族像と異なり、『アンナ・カレーニナ』におけるトルストイの家族の捉え方は以前より楽観的ではなくなる。『アンナ・カレーニナ』が「家族の思想」(«мысль семейная») <sup>64</sup>を軸にしているのに対し、「民衆の思想」(«мысль народная») <sup>65</sup>が根底にあるという『戦争と平和』は、『アンナ・カレーニナ』より家族における生活を肯定的に描いている。それは例えば、描かれている複数の家庭像に占める「幸せな家庭」の割合から判断できる。どちらの長編小説にもトルストイから見た肯定的な家族と否定的な家族が導入されている。『戦争と平和』の「否定的な」家庭はクラギン一家のみ、「肯定的な」家庭はベズーフとロストーフ、二つが作り上げられている。一方、『アンナ・カレーニナ』の幸せな家庭は、キティとリョーヴィンに限られ、オブロンスキー一家も、カレーニン一家も明らかに不幸で、崩壊しそうな状態にある。

この時期の社会倫理観に照らし合わせて激しく批判されていたアンナとヴロンスキーの不倫の恋、アンナとカレーニンの相互理解不足による浅薄な夫婦関係、そしてアンナの兄オブロンスキーの多数の浮気のための不幸な家庭に対し、リョーヴィンとキティのお互いの尊敬に基づいた現実的な恋愛は好対照を成している。リョーヴィンとキティの家庭のみを見れ

---

<sup>63</sup> Толстой Л. Н. Собрание сочинений в 22 т. Т.21. М., 1984. С. 356–357.

<sup>64</sup> Толстой Л. Н. Анна Каренина. Вступительная статья Э. Бабаева. М., 1986. С. 13.

<sup>65</sup> 同上。



ば、ごくありふれた普通の家族に見えるかもしれないが、否定的な家庭の話があるからこそ、リョーヴィン一家のよさが際立つのである。『戦争と平和』と比べ、『アンナ・カレーニナ』においてはエロスのイメージも一変する。エレンから引き継がれたアンナのイメージは、エレンと比べてより複雑になり、必ずしも批判すべき人物ではなくなった。それどころか、世界中の人々にとって、アンナは最も愛されるヒロインの一人になっている。トルストイの道徳観に背いたアンナは、なぜそれほどまでに魅力的に描かれたのか、次項で考察を行いより深く検討していく。

『アンナ・カレーニナ』が書かれた70年代は、同時にトルストイの転換の時期であった。家族に対して高まっていく不満は夫婦間の危機に繋がり、何よりも家族を重んじていたトルストイにとって、自殺を検討するほど精神的に極めて辛い時期になった。以前から上流社会の交際を軽蔑していた彼は、領地のヤースナヤ・ポリャーナで家族の慰めを求めたが、それは多数の出産や子供の死亡で疲弊していた妻からは得られなかったのである。転換前のトルストイは、人間の成長や幸せの不可欠な条件が家族であると主張していたが、70年代に起きた家族の危機によって、自身の家族にだけでなく、概念としての「家族」に失望し始めた。それは結局、トルストイの極端な新約聖書解釈と重なり、キリスト教的な結婚はあり得ないと、80～90年代に結婚自体まで否定するようになった。その考え方は晩年の作品に表れている。

幸福のための(…)疑いなき条件は家族である。そしてこれもまた、人々が俗世間的の成功のうちに遠ざかれば遠ざかるほど、この幸福はますます得られなくなるのである。大部分の人々は一姦通者であり、家族の喜びを意識的に拒否して、その不便さのみに甘んじている。たとえもし彼らが姦通者でないまでも、子女は彼らにとっては喜びではなく重荷であり、あらゆる、ときには最も苦痛な手段によって性交をして不妊ならしめるように努めつつみずから子供を失っている。もし子供があっても彼らは子供たちとの交渉の喜びを奪われている。彼らはみずからの法則によって子供を他人の手に、それも最初は外国人に、つぎは政府の教育者たちというぐあいに、大半はまったくの赤の他人の手に委ねなければならず、したがって家族から得るものといっは苦勞の種としての子供ばかりということになるが、その子供たちも幼いころから、両親と同じく不幸になってゆき、両親に対しては、遺産を相

続したいためにその死を願う—という感情だけしかもっていない。<sup>66</sup>

最初のフレーズから見ると、家族は幸せの条件であるとされつつも、家族のメンバーの間の愛情という理想は総じて達成できるものではないとトルストイは悲観的に述べている。実際に家庭生活で失望を味わっている者でなければ、このようには書けまい。

『クロイツェル・ソナタ』には前項でも触れたが、それはある意味で、『幸せな家庭』と対照的な関係にある。『幸せな家庭』は、妻の観点から夫婦の危機と相互妥協の話が描かれている一方、『クロイツェル・ソナタ』の語り手は妻を殺す夫、ポズドネイシェフである。『幸せな家庭』はある種のトルストイ的なハッピーエンドで終わる一方、『クロイツェル・ソナタ』は殺人事件という悲惨な終わり方である。また、マーシャとセルゲイ・ミハイロヴィッチの関係は結婚の前後でも、エロスが全く現れておらず、その代わりに友情に近い恋愛によって夫婦が結ばれるようになる。一方、あまりの嫉妬で妻を殺すポズドネイシェフは、恋愛はただの性欲であるという考えの持ち主である。性欲と男女交際を動物のものと見なしており、性欲は他のあらゆる悪の原因であるかのように描かれている。

「ところで、なかでもいちばん穢わしいのは」と彼は言いだした。「理論の上では、愛は一種の理想的な高尚なものということになっているのに、実際の上では、口にするのも思いだすのもいとわしく恥ずかしいような、穢わしい豚のようなあるものだということです。じっさい、自然がこれを穢わしく恥ずかしいものに作ったのも、けっしてただではなかったのです。ところで、もしそれが穢わしく恥ずかしいものである以上、そういうふうに理解する必要があります。ところが、世間では反対に、この穢わしく恥ずかしいものを、美しく高尚なものと思っているような顔をしている。(…)  
「わたしは、わたしたちの相互的憎悪に驚きを感じていました。が、それはほかにどうしようもないことでもあったのです。この憎悪は、犯罪の共犯者がたがいに抱く相互憎悪—煽動にたいし共犯にたいする憎悪にほかならなかったのですからね。(…)」<sup>67</sup>

---

<sup>66</sup> トルストイ全集、第15巻「わが信仰はいずれにありや」（中村融訳）河出書房新社、1974年、112頁。

<sup>67</sup> トルストイ全集、第9巻『クロイツェル・ソナタ』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年、34-35頁。

つまり、本来婚外の肉体関係はキリスト教に「不品行」か「姦淫」と見なされるが、法律的に及び宗教的に許されている夫婦の性交渉でもポズドネイシェフの口を借りたトルストイによると「穢わしく恥ずかしい」「犯罪」であり、夫婦間の肉体的過剰はあらゆる喧嘩や夫婦関係の破綻に導くものである。ポズドネイシェフのこの短いモノローグでは、「穢わしい」という言葉が5回、「恥ずかしい」が4回も使われており、それはこの箇所における最も重要な主張であると判断できる。性交渉に対するトルストイの軽蔑は既に述べたように、おそらく14歳の初体験に由来し、中年から晩年まで彼がキリストの教えを深く探求し続けた結果、そこから肉体関係に対する否定的態度を読み取ったことによって強化されたかもしれない。家族に対する疑問やセクシュアリティに対して強まる否定的な視座は、トルストイの思想でよく知られている転換、言い換えれば精神的かつ思想的変貌につながった。その結果晩年に、キリスト教的な結婚が現実にはあり得ないという考えにトルストイは至った。

一方、同じキリスト教的なパラダイムを持つ思想家であっても、必ずしも夫婦間の肉体関係を非難するとは限らない。その一つの例は家族と夫婦内におけるエロスを生涯にわたって賛美していた哲学者ローザノフである。彼はトルストイと直接会ったことがあり、トルストイが彼に言った言葉「性行為によって、人間はなんて自分を貶めているだろうか」(«Как унижается человек в любовных ласках»<sup>68</sup>) に対して、ローザノフは「このような汚く見えるものは、(…) 実際は素敵なものなのだ」(«...все сии кажущиеся грязные вещи, (...) — суть вещи превосходные») と断言した。実際、聖書による「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」<sup>69</sup>という、神が人に与えた最初の戒めから見ると、性行為自体に関しては「自然がこれを穢わしく恥ずかしいものに作った」とは必ずしも言えない。トルストイがローザノフに言った言葉は、47頁に引用したポズドネイシェフの主張と言うまでもなく極めて類似している。つまり、『クロイツェル・ソナタ』から引用した箇所は登場人物ポズドネイシェフだけではなく、恋愛やエロス、結婚自体に対して晩年のトルストイ自身の非常に否定的になってきた主張でもあったと判断できる。『クロイツェル・ソナタ』の後書きにも、トルストイのかつての主張とは一変した思想がうかがえる。

(…) 結婚にしろ未婚にしろ、愛の対象物との結合を目的とすることは、それがいかに詩化されていようとも、人間に値いしない目的だからである。(…) 肉の愛

---

<sup>68</sup> *Николюкин А. Розанов. М., 2001. С. 216.*

<sup>69</sup> 『聖書 (旧約聖書)』日本聖書協会、1991年、2頁。

がなにかとくに高尚なものででもあるように考えることをやめなければならぬということと、人間に値いする目的は、人類にたいする奉仕にしる、祖国にたいし、科学にたいし、芸術にたいする奉仕にしる(神にたいする奉仕はいうにおよばず)、すべてわれわれが人間に値いするものと考えられるほどのものである以上、いかなるものであろうとも、結婚ないし未婚における恋愛の対象物との結合によって達せられるものではなく、反対に、恋愛とか愛の対象との結合などは、(詩や散文の中でいかにその反対を証明しようとしてつとめようとも) けっして人間に値いする目的の達成を容易にするものでないばかりか、むしろつねにそれを困難にするものであることを、理解しなければならぬということである。<sup>70</sup>

ここでは、トルストイによる「人に値いする目的」は恋愛と家族以外にあるとされている。この短い引用部分でその表現は4回も繰り返されており、男女の恋愛、特にその一部である肉体関係を目的にすることは「人間に値いしない」、つまり、ポズドネイシェフも主張していたように性愛は「動物的な」ものであると仄めかされている。性愛によって成り立つ「夫婦」、そしてそれによって生まれる子供によって構造される「家族」もトルストイにとって「幸福のための疑いなき条件」でなくなるだけでなく、「人間に値いする目的の達成を困難にする」という思想に変わる。

トルストイの家族に対する姿勢はなぜ180度変わったのか。その原因はトルストイが自身の家族に失望したこととあり、そして離婚が事実上不可能であったことに起因する19世紀ロシアの家族の危機だったと言える。トルストイ夫妻の危機は特定の状況に置かれた特定の人間のケースに過ぎないという見方もできるが、家族に対する理想が高く、道徳心のあるトルストイ夫婦だけの問題だったわけではない。「夫婦一体」という概念を自身の人生に導入するかどうかは人の自由であるように、離婚もやはり人の不可欠な権利である。離婚の可能性が奪われたトルストイの家族は深刻な危機に陥り、トルストイの家出に続く病気そして死に繋がった。聖書によると、神は人間に自由の意志を与えたとされているが、十月革命まで、パートナーと別れる自由の意志はロシア人からは事実上奪われていた。キリスト教の視点から見ると、「不品行」という理由を除き離婚は罪であるとしても、罪を犯すことは同じキリスト教によると人の自由である。この自由、そしてそもそも結婚相手を選ぶ自由が奪われた19世紀ロシアの貴婦人、アンナ・カレーニナの悲劇を次項で考察する。

---

<sup>70</sup> トルストイ全集、第9巻『クロイツェル・ソナタ』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年、86頁。

## 2.3 『アンナ・カレニナ』

1870年2月、トルストイは初めて『アンナ・カレニナ』の出発点となった動機について妻に話した。<sup>71</sup> 『アンナ・カレニナ』の執筆を企図していた時、道徳的に墮落した上流社会の女性のストーリーを書こうと考えていたトルストイは、そのヒロインをどのように描き出すか、思案を巡らせていた。もともと、1870年にその意図について妻に初めて話した時は、浮気をした主人公を批判的というより哀れに描きたかったそうである。<sup>72</sup> しかし、最初の原稿の中では、当時ロシア法に反する行為であった浮気をするアンナは、やはり「嫌な女」(«отвратительная женщина»)とも呼ばれている。<sup>73</sup> キリスト教の道徳観をもとに、婚外の肉体関係、特に不倫を絶えず咎めていたトルストイは、アンナに対するこうした極めて批判的な立場から執筆を始めた。

1873年3月から1877年の夏まで書かれた『アンナ・カレニナ』は悲劇的に終わった不倫の物語でありながら、『戦争と平和』と同様にロシアの上層階級の価値観やしきたり、様々な夫婦の類型、女性の解放思想、田舎と大都会の対立、農業に基づいた世帯の管理、官僚主義や信仰心など、当時のロシアを始め全世界にとって重要なテーマに触れている。小説冒頭の有名な言葉「幸せな家族はどれもみな同じように見えるが、不幸な家族にはそれぞれの不幸の形がある」<sup>74</sup> は他の文学作品などに引用されることがあり、トルストイのこの長編は、日本や米国を含め様々な国の現代文学に影響を与え続けていると言える。

『アンナ・カレニナ』では、「良い家族」と「悪い家族」の対照を基にストーリーを構築していくトルストイの手法が『戦争と平和』から受け継がれているが、『戦争と平和』から『アンナ・カレニナ』へと幸せな家族の比率が減少したということからは、『アンナ・カレニナ』のころのトルストイはもう「家族」の概念に対して完全に楽観的ではなくなっているという結論が導ける。それは当時のトルストイの家庭内の不調和にも裏付けられ

---

<sup>71</sup> Simmons, Ernest J. *Leo Tolstoy. Volume I. The Years of Development. 1828-1879* (New York: Vintage Books, 1960), p. 346.

<sup>72</sup> Эйхенбаум Б. Лев Толстой. Семидесятые годы. Л., 1974. С. 110.

<sup>73</sup> 同上、130頁。

<sup>74</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレニナ1』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、9頁。

ている。『アンナ・カレーニナ』で描かれた「家族」に対する疑問は、キリスト教的結婚の可能性自体を否定する晩年のトルストイからはまだ遠いが、『アンナ・カレーニナ』が書かれたころにすでにその萌芽があったのであろう。『アンナ・カレーニナ』ではカレーニ一家の崩壊だけではなく、一般的な「家族」の衰えの兆しが見られると指摘されている。<sup>75</sup> さらに、エロスに対するトルストイのスタンスが『アンナ・カレーニナ』において最も矛盾を孕んでいる印象を受ける。一見、家族や恋愛の物語であるこの長編は、ジェンダー的な思想を含め、トルストイの哲学全体が大きく変容する転換点にある作品でもある。

長編の分析に入る前に、簡単に粗筋を紹介しておく。『アンナ・カレーニナ』が雑誌『ロシア報知』（«Русский вестник»）に掲載されたのは1875~77年であり、ロシアの1870年代に設定されている語りが、『戦争と平和』と対照的に当時の読者との同時代性を描いている。兄オブロンスキーの不倫で彼の家族が崩壊することを阻止するべく、社交界の名士アンナ・カレーニナがモスクワに赴く。若い将校ヴロンスキー伯爵はオブロンスキーの義理の妹キティとプラトニックな恋愛関係にあるが、彼はアンナとの初めての出会いから彼女と恋に落ち、ペテルブルグまで彼女を追いかける。ヴロンスキーに惚れていくアンナは夫と息子を捨てることによって世間から軽蔑され、完全に疎外されてしまう。一方、ヴロンスキーが他の人々との付き合いを持ち続け、社会で活躍し続けることに不安や嫉妬を感じるアンナはだんだん精神的に不安定な状態に陥る。恋人の浮気を疑い、なんとしても復讐をしてやろうと決意し、自殺を遂げる。アンナとヴロンスキーの不倫に当たる恋愛や、アンナとカレーニンの情感や深みのない夫婦付き合い、そしてアンナの兄オブロンスキーの多数の浮気のために崩壊しそうな状態になった家庭に対し、トルストイの分身であるリョーヴィンとキティのお互いの尊敬と配慮に基づいた現実的な恋愛が好対照的なストーリーラインである。リョーヴィンはキティを拝むほど熱狂的に愛しているが、彼の最初のプロポーズはヴロンスキーのために断られる。だが、アンナのせいでヴロンスキーに捨てられたキティは、ずっとリョーヴィンを愛していたことを悟り、二度目のプロポーズを喜んで引き受け、間もなく結婚することになる。長子が生まれた新婚のリョーヴィンの精神的な危機が信仰によるカタルシスに至るところで小説が終わる。

語りの基になっているのは、アンナを中心にした三角関係とトルストイ自身の夫婦関係に

---

<sup>75</sup> Толстой Л. Н. Анна Каренина. Вступительная статья Э. Бабаева. М., 1986. С. 13.

インスパイアされたリョーヴィンの一家であるが、アンナの兄スティーヴァとキティの姉ドリーの夫婦も、アンナとリョーヴィンのストーリーラインを繋ぐ大事な役割を果たしている。従って、二つの家族（オブロンスキー・スティーヴァとドリー、リョーヴィン・コンスタンチンとキティ）と一つの三角関係（アレクセイ・カレーニン、アンナ・カレーニナ、アレクセイ・ヴロンスキー）に注目してジェンダー的な観点からの『アンナ・カレーニナ』の分析を行う。はじめに、語りの時系列から見れば最初であるオブロンスキー一家を見ていきたい。スティーヴァとドリーは相互の愛情によって結婚した 30 代前半の夫婦であるが、夫の不倫によって崩壊の危機に瀕している。スティーヴァの不倫は、夫を尊んでおり、彼の愛を信じていたドリーにとって絶望的なもので世界の終末のような悲劇になる。一方、スティーヴァにとっては出産や子育てで疲れ果てた妻に対しては親戚に対するような愛情が残ってはいなくても、彼女は彼にとって女性としてのエロティックな魅力を失ったため、彼は自身の浮気を当然のものとして正当化している。

三十四歳、色男で惚れっぽいこの人物が、五人の子供の母であり、他に二人の子を亡くしている、年も自分より一歳しか若くない妻に関心を失ってしまったからといって、いまさら後悔するはずもなかった。後悔しているのは、もっとうまく妻に隠し事ができなかったことだけである。(…) 彼には漠然と、妻はもう前から彼の浮気に気づきながら、見て見ぬふりをしているような気がしていたのだ。それどころか、すでに体もやつれ、老け込んで容色もおとろえ、特に人目を引くところもない、素朴で善良な一家の母親にすぎない妻は、公平に言って当然寛大であるべきだとさえ思っていた。ところが実際は、まるで正反対だったのだ。<sup>76</sup>

スティーヴァは浮気をするということについて全く反省せず、男性の自立を表している行動として、哲学的次元に持っていかうとする。もともと本質が優しく、人を傷つけるのが嫌いな彼であるが、当然妻も、そして妻より社会的に弱い地位を占めている不倫の相手も傷つけており、刹那的かつ利己的な快楽を満たそうとしていることに気づいていない。当時のロシアの男尊女卑に基づく社会規範は、多くの男女がそういう価値観を自然で当たり前のもののように見なすことにつながっていた。オブロンスキーは、女遊びを批判するリョーヴィンに対しても、こうした差別的な世界観を唯一絶対的に正しいものとして押し付けている。

---

<sup>76</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ 1』（望月哲男訳）光文社文庫、2008 年、14-15 頁。

「だってきみと奥方の関係ひとつにしたって、ぼくにはお見通しき。聞いていれば、きみたち夫婦の間では、夫がたかだか二日獵に出かけるか出かけないかが、最重要問題になっている様子じゃないか。(…) 男は独立独歩でなくちゃ。男には男の仕事があるんだからね。男は男らしくあるべきだよ」門扉を開けながらオブロンスキーは言った。

「それは要するにどういうことだい？ 屋敷奉公の娘っことちのご機嫌をとりに出かけるのが男の仕事かい？」リョーヴィンがたずねた。

「出かけたっていいじゃないか、もしも楽しければ。何のあとくされもないことだしね。そうしたところで別に妻に嫌な思いをさせるではなし、しかもぼくは楽しい思いができるんだから。大事なのは家庭という聖域を守ること、家庭には何の問題も及ばないようにすることだ。でもだからといって自分の手足を縛っちゃいけないよ」<sup>77</sup>

上にみられるように、オブロンスキーは家庭を大事にしながらも、男の浮気に対しては軽はずみな姿勢を見せている。彼の女遊びやそれに関する嘘でドリーが傷ついているというのを彼は理解できない。夫が家庭の外へ色目を向けることに対して「寛大であるべき」はずの妻が嫉妬しているということを理解できずに、浮気を繰り返すステイーヴァは、一見極めて軽率で利己主義的な人物に見える。実際はとても寛容で優しい性格を持っており、望月哲男の言葉を借りれば「きわめて人間的な魅力に富んだ人物」<sup>78</sup> である。ステイーヴァが優しく、愛想がいい人物として描かれることによって、二重基準や差別意識は必ずしも否定的な人物のみが有しているのではなく、むしろ陽気で、愛すべき一般の人々の力によって保たれていることが強調されている。ステイーヴァの不実な態度は家庭の悲劇の原因になったが、使用人は誰一人彼を責めず、彼に騙されている妻よりも、みな彼自身の味方につく。この不思議な事情は第一に彼の優しい人柄によって説明できるが、第二は、浮気に関する当時ロシア社会の二重基準が原因として考えられる。アンナは浮気によって元々友人であった者にすら厳格に裁かれ、上流社会から追放されるのに対し、男性であるステイーヴァは妻以外の人のほとんどから簡単に許される。

ステイーヴァは当時のロシアの上流社会から見ると“*comme il faut*”、「礼儀にかなった」、

---

<sup>77</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ 3』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、388頁。

<sup>78</sup> 望月哲男『「アンナ・カレーニナ」を読む』ナウカ出版、2012年、8頁。



「あるべき」男性像を代表しているが、トルストイにとっては彼が軽蔑していた上流社会の浅はかさ、そして倫理の欠如を体現する人物である。一方、彼の妻ドリーは主婦で、母親の役割に完全に徹しており、トルストイが最も尊んでいた女性のタイプである。彼女は育児を人生の主な使命であると意識していると同時に、夫が彼女に対するエロティックな「関心を失ってしまった」ことを屈辱に思い、彼に対する嫉妬を抱いている。この点においては、ドリーは『幼年時代』の母のようなトルストイのヒロインとは違う。トルストイによって描かれた母性を表す女性像はドリー像によって立体感をえて、複雑になったと言える。失った自分の色気を惜しんでも、世話焼きで信仰心が強いドリーはトルストイから見れば間違いなく肯定的なヒロインであり、彼の以前の作品（『幼年時代』の母、『戦争と平和』のマリヤや結婚後のナターシャ）で描かれた母親像と違うところを持ちつつ、否が応でもそのヒロインを思い起こさせる。彼女はキティと同様に、トルストイの理想の女性像に近く、女性の「常識」や「知恵」の体現者でもある。例えば、『アンナ・カレーニナ』で「女性問題」が初めて明確な形で登場する場面においては、女性解放に関するトルストイ自身の思想を代弁しているのはドリーである。

「でも、家族のない娘はどうすればいいんですか？」オブロンスキーはペスツォフの意見に共鳴して応援しながら、いつも気にかけているダンサーのチービソワのことをふと思い出してこう聞いた。

「そういう娘の経歴をよく調べてみれば、きっとその娘がいつか、本来女性としての役割を果たすべき家を一自分の家か姉の家か知りませんが一捨ててきたって言うことがわかるでしょうよ」急にドリー夫人が話に加わり、苛々した口調でそう言った。<sup>79</sup>

家族を何よりも重んじており、女性の役割は家族、家庭に尽くすことであると信じているドリーは、トルストイの理想に近い女性像とはいえ、魅力的ではなく、極めて惨めな女性として描写されることが多い。彼女は子供のために夫の浮気を許そうとしているが、実際心の奥ではそれを裏切りと感じており、最後まで受け入れられない。アンナとヴロンスキーが住んでいる領地に赴くドリーは、恋愛のみに基づいた贅沢で一目自由で幸せに見えるアンナの生き方と自身の平凡な人生を比較しながら、アンナを一瞬羨む。家族を保つことが自身の使

---

<sup>79</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ 2』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、387頁。

命であると思っているドリーが、実際なぜ幸せな家庭を築くことに失敗するのだろうか。彼女自身はそれを度重なる出産で若さや美しさを失い、夫の性的関心を失ったためであると考えている。男尊女卑の社会では美しさや若さは女性にとっての主な武器であったため、30代に入り、出産や子育てで疲弊したドリーは、当時の女性にとっておそらく一般的だった恐怖感を表現しているだけである。しかし、年を取るのは人間皆変わりはないが、浮気をするのは男性の全員ではない。社交的で、煌びやかで、快楽が何よりも好きなスティーヴアは不倫について簡単に考え、それは妻に損を与えるものではないと見なしている。しかし、キリスト教の道徳からいうまでもなく、人間の心理から見ても浮気は暴露されなくても夫婦の統一性に甚大な損害を与えるものである。浮気をする方は、スティーヴアのように不倫を理論上正当化していても、それを隠すために言い訳を考えだし、多数の嘘をつくしかない。浮気された側がドリーのようにパートナーを許そうと決めても、嫉妬心からなかなか抜け出すことができない。家庭を共に築こうと考えていた相手に対する信頼を一度失えば、失望や幻滅とともに今後の浮気を恐れながら嫉妬の苦しみに陥る他に道はない。こうした悲劇的な現象はオブロンスキーの家庭が乱れていく原因になり、皮肉なことに、その乱れをなんとか止められたアンナ自身の場合はより激しい展開を見せる。浮気を伴う嘘や不信感、戸惑いや苦しみ、そして嫉妬に、アンナ、カレーニン、そしてヴロンスキーも陥っていく。

嫉妬はアンナの三角関係だけでなく、浮気されたドリーはもちろんのこと、相手に忠実なリョーヴィンとキティの場合にも明らかに見ることができ、『アンナ・カレーニナ』の最も重要なモチーフの一つになっている。トルストイ自身の実生活も、嫉妬とは切り離せぬものだった。結婚式の直前、18歳の嫁ソフィアにありのままの自分を受け入れてもらうことを望んでいたトルストイが、自らの日記を読ませたことがその一つのきっかけである。当時34歳だったトルストイは様々な女性と肉体関係を体験していた一方、ソフィアが男女の性的な付き合いについて初めて聞いたのは15歳のころで、その真実は自らの理想に一致しておらず、朝まで泣いたという。無論、このようなナイーブで男女関係の経験がない少女にとって、トルストイの日記を読むことは衝撃だった。<sup>80</sup> そのエピソードは『アンナ・カレーニナ』のリョーヴィンとキティのストーリーにも含まれている。

彼女に日記を渡すリョーヴィンに、内面の葛藤がなかったわけではない。自分と

---

<sup>80</sup> Simmons, Ernest J. *Leo Tolstoy. Volume 1. The Years of Development. 1828-1879* (New York: Vintage Books, 1960), p. 272.

彼女の間に秘密はありえないし、あつてはいけないという気持ちから、そうしようと決めたのだったが、それが相手にどんな作用を及ぼすかについては、判断し切れなかったし、また相手の立場に立つこともしえなかったのだ。その日の晩、観劇の前にシチエルバツキー家を訪れて彼女の部屋に入り、自分のもたらした取り返しのつかぬ悲しみのせいで泣きはらした、不幸な、いたいけな、いとしい顔を見たとき、彼は自らの恥ずべき過去と彼女の小鳩のような純潔さとを隔てる、底知れぬ深淵を理解して、自分のしてしまったことに戦慄を覚えたのであった。<sup>81</sup>

失望にもかかわらず、婚約者を許したつもりのソフィアはトルストイと結局結婚したが、長年経ってからも、その日記を書き移す際など、過去に対する嫉妬に苦しめられていた。トルストイの方も知り合いの男性に対してだけではなく、当時殆どの場合男性であった医者に対しても嫉妬を抱き、ソフィアの体が診察されることを嫌がっていた。<sup>82</sup> 医者に対する彼の不信感は『アンナ・カレーニナ』においてキティがヴロンスキーにふられた結果病気になり、比較的若い男性医師に診察されるエピソードに投影されている。『戦争と平和』や『クロイツェル・ソナタ』などの作品の中でも、嫉妬は人間関係に強大な影響を与え、悲劇に導く契機として描かれている。『アンナ・カレーニナ』の登場人物の衝動やアンナの悲劇の原因を理解するために、嫉妬やその働きかけに注目する必要があるだろう。

各長編において、トルストイが自身の分身を登場させていたことはよく知られており、上記のように実際にトルストイの人生に起きたエピソードに着想を得て小説の場面が構築されることが多い。『アンナ・カレーニナ』の場合、トルストイの分身は言うまでもなくコンスタンチン・リョーヴィンである。「リョーヴィン」(Левин) という名字は、作者の名前であるレフ(Лев)に由来し、この名前からしても、トルストイの分身がリョーヴィンで間違いないことは読者にとって分かりやすいものとなっている。リョーヴィンはアンナと同様に主人公として位置づけることができ、むしろ、彼の方が主要なキャラクターであるかもしれない。小説ではリョーヴィンのほうが早く登場し、またアンナが自殺してからも、彼のストーリーが続いている。リョーヴィンを通じて、トルストイは自身の気質も、経済や政治、社会、宗教、女性解放や教育など、あらゆる分野に関する思想も表明している。リョーヴィンは『戦

---

<sup>81</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ2』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、434-435頁。

<sup>82</sup> Simmons, Ernest J. *Leo Tolstoy. Volume 1. The Years of Development. 1828-1879* (New York: Vintage Books, 1960), p. 209.

争と平和』のアンドレイとピエール、そしてトルストイ自身と同様に母親を失った家庭で育った。何度も母親のいない男性主人公を自身の分身として登場させるのは、トルストイ自身、その事実が彼の性格に与えた影響の大きさを認めているからであろう。つまり、母性愛、そして普段母親が担う女性モデルの欠如によって生まれた己の性質やジェンダー的な姿勢をリョーヴィンなどの男性主人公の分身によって探ろうとし、ある意味で精神科医のように自己の心理分析を行い、「診断」を下そうとしている。

道徳心が強く、上流社会の人間としては真面目すぎるトルストイの分身リョーヴィンと対照的に、スティーヴァやヴロンスキーなどは「水中の魚のように」社会の様々な場面で要領よく振る舞っている。19世紀のロシア上流社会でうまく振る舞うスティーヴァやヴロンスキーのような人が”comme il faut”と呼ばれていた。母語であるロシア語の代わりに常にフランス語を使い、何よりも優雅や洗練を重んじており、社交界において人気であるこの種の人間はトルストイから見ると社交界自体と同様に浅はかであり、倫理観に欠けている。そういう人間の分類についてトルストイはヴロンスキーの角度から述べている。

ペテルブルグの彼の世界では、すべての人間がまったく正反対の二つの種類に分類されていた。一方は低級な種類であり、俗悪でおろかで何よりも滑稽な種族であって、その信ずるところは、夫は婚姻の絆で結ばれたただひとりの妻と添い遂げるべきであり、処女は純潔に、女は慎み深く、男は雄々しさと節度と不屈さを備え、人はすべからく子を育て、自らの糧を稼ぎ、借金を返すべし、等々といった愚劣なモラルだった。これは旧弊で滑稽な人種である。だがこのほかに別の種類の、本物の人間がいて、彼らは皆そちらに属しているのだが、この種の人間にとって大事なのは、エレガントで、美しく、心が広く、大胆で、陽気で、あらゆる情熱に大胆に身を任せ、他のすべてをあざ笑ってみせることだった。<sup>83</sup>

言うまでもなく、逆説的に「低級な種類」とここで名づけられている人こそが、トルストイ＝リョーヴィンからすると、実際の「本物の人間」であり、あるべき人間の唯一のタイプに他ならない。当時のペテルブルグの貴族、ヴロンスキーのようなエレガントで陽気な”comme il faut”の人にとっては、社交界を見下すリョーヴィン自身は決して”comme il faut”ではない。人生やその意味、恋愛関係を含め人間関係を極めて真面目に捉えていること、正直で率直であること、都会より田舎を好むことという作者から受け継いだ彼の特徴は、その

---

<sup>83</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ1』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、287-288頁

社会から見れば全て短所が変わったところであり、リョーヴィンが「重苦しい」人と見なされる所以でもある。ヴロンスキーとスティーヴァがリョーヴィンと好対照をなしていることによって、道徳性や中身より外見や礼儀作法を重んじている 19 世紀ロシアの上流社会に対するトルストイの批判的なスタンスが改めて読みとれる。

上記のように、リョーヴィンは社交界の人ではなく、ここで大都会や文明、社会に対比されている田舎や自然の人である。彼は”comme il faut”ではないからこそ、自分の感情を隠せず、気に入らない人と上手く付き合えない。新婚の夫婦の荘園を訪問したヴェスロフスキーがキティを口説こうとしたことをリョーヴィンは恨み、こうした媚を認める社交界の礼儀に反してヴェスロフスキーを追い出す。

ヴェスロフスキーの姿勢にも、目つきにも、笑顔にも、何か不純なものがあった。リョーヴィンはキティの姿勢とまなざしにさえ、何か不純なものを見てとった。それでまたもや目の前が暗くなる感じがした。またもや先日と同様に、突然、まったく何の猶予もなく、幸福と平穏と自信の頂点から、絶望と憎しみと屈辱のどん底へと、まっさかさまに突き落とされた気がしたのである。またもや彼にはあらゆる人間、あらゆるものごとが、うとましくなった。<sup>84</sup>

リョーヴィンは自身の怒りを、人妻に言い寄ろうとしたヴェスロフスキーに向けるが、キティも彼にとって一瞬罪深く見えてしまう。不公平かつ目を眩ませるほど激しい嫉妬がトルストイの作品を貫き、上記のように彼自身の本質でもあった。暗くて強烈なこの感情が、トルストイ自身、リョーヴィンそしてアンナを繋ぎ、長編におけるこの登場人物のそれぞれの行動の大きな動機の一つになり、アンナ・カレーニナの悲劇の主な原因になった。

リョーヴィンに関しては短所も長所も明確に描かれている一方、彼の人生のパートナーとなったキティの個性はやや漠然としている。キティに恋する以前、リョーヴィンはシチュエルバツキー一族、特にドリーを含めキティの 2 人の姉が好きになる。キティと会わなかった一年の間に、彼女は子供から女性に変貌し、彼を魅了したというパターンはまたもやトルストイとソフィアのラブ・ストーリーを思い起こさせる。当初、キティはリョーヴィンによって

---

<sup>84</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ 3』（望月哲男訳）光文社文庫、2008 年、408 頁。

あまりにも理想化されており、神か妖精に近い神秘的な存在にしか見られていない。

しかしリョーヴィンは恋をしていたのであり、そのためにキティのことをどこから見ても完全な、地上のすべてを超越した存在だと思い込み、一方自分は地上的で下劣な人間であると感じていた（…）<sup>85</sup>

すべてが彼女の光に照らされていた。彼女はいわば周囲をあまねく輝かす微笑であった。「あその氷のところまで下りて行って、あの人のそばまで行けるだろうか？」彼はしばし考えた。彼女のいる場所が近寄りたがたい聖域のように感じられて、一瞬このまま立ち去ろうとさえ思ったほどだった。（…）まるで彼女が太陽であるかのように長いこと見つめるのを避けながら、彼はスケート場に下りていった。<sup>86</sup>

元来現実主義者で、精神的なカタルシスを経るまでは唯物論者だったリョーヴィンが、そこまでキティに対するロマンチック・ラブに捕われたのは不思議なことであるが、トルストイの矛盾を孕んだ本質を仄めかしている。実際に、数人の候補者を拒否し、将来の妻になれる理想的な女性を絶えず追いかけていたトルストイは、ソフィアとの結婚は情熱的な恋の結果わずか数週間で決まったのである。キティがリョーヴィンの目を眩ませたように、トルストイは若いソフィアにすっかり魅了されたと推測できる。

だが会うたびに不意を衝かれたようにびっくりさせられるのは、そのおとなしい、落ち着いた、正直な目の表情だった。とりわけ彼女の微笑みはいつもリョーヴィンを魔法の世界へといざない、幼年期のまれな日々には味わった覚えがないほど、うっとりとした安らいだ気持ちにさせてくれるのだった。<sup>87</sup>

リョーヴィンはキティの家族も、彼女自身も昔から知っているが、彼女の性格や心の状態を誤解している場合がしばしば見受けられる。例えば、上記の引用から見ると外見に基づき彼女の目は「おとなしい、落ち着いた」表情を持っているので、彼女自身もおとなしくて、常に落ち着いた性質の持主であるという印象を受けるが、それは彼女がドリー

---

<sup>85</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ 1』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、61頁。

<sup>86</sup> 同上、74-75頁。

<sup>87</sup> 同上、77頁。

や、結婚後にリョーヴィンとかわしている激しい口論から察するに、間違った判断である。リョーヴィンの目を眩ませるほど強くて、妄想をともなった愛情を描くことによって、トルストイは結婚する直前の自分自身の心の状態を顧みているかもしれない。キティとリョーヴィンの付き合いはプロポーズの場面から、夫婦としての生活の事情やリズムにいたるまで、まさにトルストイとソフィア関係をなぞっている。『戦争と平和』の夫婦と比較するならば、リョーヴィン一家は間違いなく、トルストイの実生活にインスパイアされているピエールとナターシャの家族に近い。ナターシャとキティ、またはピエールとリョーヴィンの外見や性格においては相違点があるが、善と悪、人生と死、経済や政治について絶えず考えている「思想家」の夫と家事や子育てに満足し夫を支える「主婦」の妻というモデルは相似している。当時のロシア上流社会においては、それが一般的な家族モデルでもあり、トルストイのヒロインのほとんどはその社会規範に満足しているようだが、実際にはソフィアは音楽や執筆の才能を持っており、その全ての才能を夫を支えるために捨てなくてはならなかったことを不満に思っていたようである。

トルストイの妻になったソフィアがキティ像に投影されている一方、『幼年時代』の母、そして『戦争と平和』のマリヤと並び、キティはトルストイの母のイメージを基にした理想の母親像にもなっている。59頁の引用にあったように、キティの微笑みはリョーヴィンを「魔法の世界へといざない、幼年期のまれな日々にはしか味わった覚えがないほど、うっとり安らいだ気持ちにさせてくれるのだった」。つまり、のちにリョーヴィンの妻になったキティは彼に子供の頃を思い起こさせ、その時期に一番結び付けられている母親を連想させていたと考えられる。『戦争と平和』では、妻ソフィアのイメージを結婚後のナターシャとして、母親のイメージをマリヤとして、トルストイは分けて描いたのだが、『アンナ・カレーニナ』の場合こうした二つの理想像はキティ1人の女性像の中で結合された。つまり、「妻」と「母」という、女性の「先天的な役割」両方担ったキティは、以前トルストイが描いた女主人公の中で彼の理想女性像に最も近いヒロインであるとも判断できる。

同時に、結婚前キティを理想化していたリョーヴィンでも、当時の女性にとってごく普通で「相応しい」興味しか彼女が持っていないことに結婚後がっかりする。

(…) 妻の受けた教育があまりにも表面的で軽薄なのがいけないんだという考えが、ぼんやりと浮かんできた (…)

「そう、家への関心（それはたしかに彼女にはあった）、衣装への関心、それにイギリス刺繍を除いて、彼女にはまじめな関心の対象がないのだ。俺の仕事にも、農業

経営にも、百姓たちにも、かなり適性のある音楽にも、読書にも、何の関心もないのだ。彼女は何ひとつしない、十分満足していられたのだ」<sup>88</sup>

「アンチフェミニスト」であるはずのトルストイが当時の女性の浅はかな教育を批判し、彼女たちの関心の全てが家事や自分の外見に限られることを疑問に思うというのは注目値する。彼の姿勢が、一般にいわれているほど女性に対して厳しいものではないということは、次の場面によっても証明されている。

二人は食事の席でみんながしていた、女性の自由と仕事についての議論を再開した。リョーヴィンはドリーが言った、女性は結婚しなくても自分のなすべき女性としての仕事を家庭で見つけることができる、という意見に賛成だった。彼はその意見の根拠として、どんな家庭であろうと家事を手伝う女性は必要であり、貧乏と金持ちとにかかわらず、お雇いのあるいは身内の乳母役がいるのだし、また居なくてはならないと主張したのだった。

「いいえ」キティは反論した。顔を赤らめつつも、決して物怖じしない、真っ正直な目つきで彼を見つめている。「娘の立場というものはおそらく、そうして家族の一員となってしまうのを屈辱と感ずるようになってきているのです。それよりも自分で……」

リョーヴィンは彼女の言わんとすることを理解した。

「ああ、そうですね！」彼は言った。「そうだ、そうだ、そうですね、まったく、おっしゃるとおりです！」

こうして彼は、キティの胸のうちに処女性への恐怖と屈辱を読み取った時はじめて、食事の席でペスツォフが女性の自由について言っていたことを理解したのだった。それも彼女を愛しているがゆえにそうした恐怖と屈辱を感じ取り、そしてすぐに自分の見解を引っ込めたのである。<sup>89</sup>

すなわち、他の長編の主人公よりも、トルストイに背景や思想がもっとも近い分身であるリョーヴィンは、自分のスタンスを改め、女性が家族以外に選択肢が何もなければ、それは彼女にとって辛く、恥ずかしい状態をもたらしかねないということを理解する。つまり、トルストイ自身にも女性問題のこうした理解が充分あったことがうかがえる。女性の天職は家

---

<sup>88</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ 3』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、130頁。

<sup>89</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ 2』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、405-406頁。



庭を営むことに他ならないと以前断言していた彼の、その変化が愛する妻ソフィアに及ぼされたかどうかは不明確だが、『アンナ・カレーニナ』のその箇所はトルストイがアンチフェミニストだった仮説に対する異論の根拠となる。

その重大な変化を「思想家」リョーヴィンにもたらした若くて可愛らしいキティは、フェミニスト有島の主張によると、「もっと生き生きと描かれてもよい」とされる。<sup>90</sup> つまり、他のトルストイの登場人物と比べるとキティは現実性が欠けているか、もしくはあまりにも普通でありふれたタイプで、「ヒロイン」と呼べるほどの存在ではない。確かに、彼女の恋のライバルだったアンナと比較すれば、キティは個性が強くないキャラクターであるかもしれない。佐藤雄亮は、アンナがトルストイの理想的な女性像であると主張しているが、<sup>91</sup> アンナのイメージは特定の一人の女性を基にしていなくても、理想的というより現実的で「生き生き」しているからこそ、世界中の読者を魅了してきたのではなかろうか。一方、妻ソフィアのイメージに基づいた、トルストイの理想像であるキティはアンナのような精彩を欠いている。キティはあまりにもトルストイの理想の女性像に近いために、「生き生き」していないという印象を有島に与えたかもしれない。彼女の愛情深い性格は、アンナの暗いエロティシズムに勝てないのは事実である。魅力的で若い伯爵ヴロンスキーを年上のアンナが可愛らしいキティから奪ったことによってそれは強調されている。

アンナが初めて登場する場面、そして彼女が亡くなる場面も列車駅である。列車はトルストイにとって人と自然の元々の調和を脅かす文明を象徴していたため、それがアンナの運命を決める決定的なモチーフとなっているのは偶然ではなかろう。ヴロンスキーがアンナに告白するシーンもモスクワからサンクトペテルブルクへ向かう途中駅である。興味深いことに、第2章第2節第2項で分析を加える『或る女』の葉子にとって運命的なモチーフになったのは「船」だが、彼女も初めて登場するのは列車駅である。列車の中で初めてアンナを見たヴロンスキーの目には、彼女が次のように映る。

(…) 彼はその夫人の外見を一目見ただけで、相手が最上流の階級に属する女性であると判断していた。(…) 相手が自分の脇を通り抜けるときのその愛らしい表情に、なにかしら特別に優しく暖かいものが感じられたからであった。彼が振

---

<sup>90</sup> 有島武郎全集、第11巻「観想録 第11件〔訳〕」筑摩書房、1982年、331頁。

<sup>91</sup> *Сато Ю.* Толстовские героини и непреодолимые «границы» // Лев Толстой: сквозь рубежи и межи / Под ред. Т. Накамура. Саппоро, 2011. С. 22.

り返ると、相手も同じくこちらを振り向いた。まつげが濃いせいで黒にも見えるきらきらしたグレイの目が、まるで彼が誰かを見定めようとしているかのよう  
に、親しげにまじまじと彼の顔にすえられた（…）そうしてつかの間目を見交わ  
ただけで、ヴロンスキーは、抑制された生気が彼女の顔に浮かび、きらきらし  
たその目と、赤い唇をゆがめるかすかな微笑みとの間に漂うのを見て取った。あ  
たかも何か過剰なるものが彼女の存在に満ち満ちて、ついにはその意志とかかわ  
りなく、目の光の中に、あるいは微笑みの中に現れ出たかのようであった。彼女  
は故意に目の光を消したが、しかし本人の意志に逆らって、その光はかすかな微  
笑みのうちに宿っていたのである。<sup>92</sup>

目の光を消せないほど「生气」が横溢しており、「生き生き」しているアンナのその生命  
力というのは、エロスに関係していると推測できる。一見『戦争と平和』のエレン・クラ  
ーギナを思い起こさせるアンナは、エレンより複雑で人間らしい性格を持っている。気取  
っていないところ、正直なところ、子供が好きなどころなどを揃えたアンナはエレンのよ  
うな悪女的なファム・ファタールではない。同時に、ヴロンスキーやカレーニンをはじめ  
とする周りの人の人生においてアンナは運命的な役割を果たし、彼女を愛していた男2人  
にとっては破滅的な役割でもあったので、その意味では彼女もファム・ファタールに他な  
らない。ただ、エレンのように冷静に人を操るのではなく、熱愛に身を投げたアンナは自  
分自身の正直さ、妥協できないところの結果自己破滅に至る。もしエレンのように当時の  
社会規範に違反しないで、ヴロンスキーとの事情を隠していたとすれば、カレーニン夫妻  
の安定した立場も、若い愛人との関係もアンナは保てたはずである。しかし、そうした中  
途半端で曖昧な状況を彼女は容認できない。エレンと同様に、愛人ができ、若いうちに死  
亡してしまうといういきさつは変わらないが、愛情と義務の間で引き裂かれていたアンナ  
の心は、自分にとって都合よく多数の愛人を弄ぶエレンの性質とは実際大きく異なってい  
る。執筆の最初にアンナを「嫌な女」として造形しようとしていたトルストイは、おそら  
くエレンに似通うヒロインを生み出そうとしたが、息子への愛情、兄の家族への労り、不  
倫を犯した結果の心の苦しみなど、アンナの特徴を「生き生き」と描くことによって、彼  
女はトルストイの意図に逆らい、「悪女」エレンから遥かに遠く、深い人間性を備えたヒロ

---

<sup>92</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ1』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、156-157頁。

インになったのであろう。

ただ、その二人のヒロインには一つの重要な共通点があり、それはピエールを捕まえたエレンのエロティックな「暗い力」はアンナの自身の中にも、彼女が身に纏っている雰囲気にも存在しているということである。その暗い力、アンナのエロティックな魅力をヴロンスキーやリョーヴィンなどの男性主人公は当然感じており、女性主人公たちもその彼女の人を魅了する能力に気づいている。62頁に引用したアンナが登場するシーンにおいては、その力が目の光とともにまだ抑えられ、半分眠っているが、ヴロンスキーの心をキティから奪い取る舞踏会の場面ではそれが完全に解き放たれる。アンナは人を魅惑する「暗い力」、自分の熟した魅力を意識しているからこそ、舞踏会の衣装としてキティに勧められた、落ち着いた可愛らしい藤色の代わりに、彼女の独特な美しさを強調する黒いベルベットのドレスを選ぶ。ピンクの「チュールやレース」を来た妖精か天使のようなキティと対照的に、黒を着るアンナはやはり「悪女」、悪魔的な魅力を發揮している。それは恋人が奪われたキティも痛感している。

自分にもなじみの、成功にときめいている表情を、アンナの顔に見出したのである。彼女はアンナが、みずからかき立てた賞賛という美酒に酔いしれているのを見て取った。(…) たゆたいながら時折かっと燃え上がるような目の輝き、知らず知らずに唇をゆがめている幸せと興奮の笑み、そして体の動きの際立った優雅さ、確かさ、軽やかさといったものを。<sup>93</sup>

シンプルな黒のドレスをまとった彼女は魅力的だった。いくつものブレスレットをはめた豊満な腕も、真珠のネックレスをした引き締まった首筋も、鬢のほつれがうずを巻いているところも、小ぶりの手足の優雅で軽やかな動きも、生き生きとした美しい顔も、何から何まで全部魅力的だった。ただし彼女の魅力のうちには、なにかしら恐ろしく、残忍なものが含まれていた。(…)

「そう、この人には何か人間離れした、悪魔的なところと、魅力的なところがあるんだわ」キティは胸の中でつぶやいた。<sup>94</sup>

アンナの魅力は男女両方に衝撃を与えながら、その働きかけは違うように意識されてい

---

<sup>93</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ1』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、206頁。

<sup>94</sup> 同上、211-212頁。

る。ヴロンスキーはアンナとの出会いの瞬間に、彼女の「目の光」にはとくに致命的な意味を見出さないように、リョーヴィンを含む男性の主人公はアンナに魅了されながらも、彼女の正直な性格などの固定的な特徴にしか気づかない。アンナの兄スティーヴァと結婚しているドリーは当然アンナからの危険性を感じないので、最後まで彼女のほぼ唯一の女性仲間でいられる。一方、キティは恋人を奪われそうになった瞬間、自分のエロティックな魅力の勝利を惜しみなく楽しんでいる既婚のアンナを「残忍」で「悪魔的」と呼び、彼女の「暗い力」を正確に見定める。

アンナと二人のアレクセイ、ヴロンスキーとカレーニンの三角関係がもっとも複雑で矛盾が多いストーリーラインであり、長編の基礎にもなっている。人妻のアンナと若い伯爵ヴロンスキーの恋はトルストイが憎んでいた不倫に当たるが、同時にトルストイはこの「姦通罪」の責任を2人に完全に負わせるわけではない。愛したことがない、生气に満ち溢れた若いアンナは、叔母の計画によって20歳ほど年上で、感情表現がほぼできない優秀な高級官僚カレーニンと結婚させられた。当時のロシアで普通だった「不釣り合いな結婚」、つまり容貌が優れた若い女性と、はるかに年上の金持ちか身分の高い男性との結婚はヴァシーリー・プーキレフの同名の絵をはじめとする19世紀後半のロシア美術における一つのテーマになり、「女性問題」の一部だったとも言える。叔母の企てでこうした苦境に置かれ、ずっとエロスが抑圧されてきたアンナは読者の意識の中では赦すべき存在となるのだろう。

カレーニンの肩書や出世の見込みのために、当時の社会から見ると羨むべきその結婚の結果、アンナは愛しい息子を授かり、高い社会的地位を楽しんでおり、初恋の相手ヴロンスキーに出会うまでは、自分で選んでいない人と夫婦になっているという自分の「不幸」を特に意識していない。ヴロンスキーとの出会い、そして彼との公然たる情事はそれまでカレーニン夫人として尊敬されてきた立場、舞踏会や披露宴、訪問などの公的生活を彼女から奪う。かつてアンナが大事にしていた地位や社会的影響、面目やプライド、溺愛している息子までも捨ててしまうことは、異常な苦しみ、そして罪悪感を彼女に与える。しかし、最終的な悲劇に追い込まれる前に、本人が選んだ生き生きとした両想いの恋愛を楽しむ時期もある。

「わたしが不幸ですって？」彼に近寄ると、嬉しそうに微笑んで相手を見つめながらアンナは言った。「いまのわたしは、飢えきっていたあげくにやっと食べ物をもたらした人のような気持ちなのよ。もしかしたらその人は寒がっているかもし

れないし、着ているものはぼろぼろで恥ずかしいかもしれないけれど、でも不幸じゃないのよ。(…)」<sup>95</sup>

やっと満たされた自分の恋の要求は、飢えきった人が食べられたことに例えるほど、アンナの生命力にはエロスが必要なのである。感情表現に乏しく、全て理性で解決しようとするアレクセイ・カレーニンとの夫婦生活において、彼女は恋を味わえず、自分のエロスをなかなか発揮できなかった。そのため、アンナのエロティックな魅力は「暗い力」になってしまったとも考えられる。自分の安定した最上流の階級の人生を捨てるほど、アンナはエロスに飢えていた。彼女のその情熱的な恋の要求、「目の光の中に、あるいは微笑みの中に現れ出た」アンナの生命力にヴロンスキーは惹かれ、以前純粋なキティとプラトニックな関係を結んでいたにもかかわらず、既婚のアンナを追うことになる。物語の最初、ヴロンスキーはリョーヴィンとキティを含む別の三角関係に入っており、プロポーズをする気が特になく、キティとの恋の駆け引きを楽しんでいるだけである。当時の社交界では、そういう態度が未婚の女性を社会的にも精神的にも傷つけることがあったので、モラルの面から見れば思慮を欠く振る舞いだった。そしてまた、人妻を浮気させるために追いかけることもヴロンスキーの倫理感の欠如を物語っているはずである。こうした浅はかなナルシストとしてヴロンスキーを評価する研究者は珍しくない。<sup>96</sup>

しかし、彼は例えば『ボヴァリー夫人』に描かれているようなエマの軽薄で利己主義的な愛人や、『戦争と平和』のアナトーリなどの「迷惑者」とは違う。第一、ヴロンスキーは上記に触れた当時のヨーロッパ上流社会が抱えていた”*comme il faut*”という理想の罫にはまっている。もともとアンナと同様に優しく、正直な性質を持っている彼は、フランス文化に大きく影響された19世紀ロシアの上流社会のしきたりの中で育てられてきた。「エレガントで、美しく、心が広く、大胆で、陽気で、あらゆる情熱に大胆に身を任せ、他のすべてをあざ笑ってみせる」のを理想としているこうした文化はキリスト教的な道德観とは大きく異なり、不倫も容認するばかりか、奨励することも少なくない。ヴロンスキーも子供の頃から母親の多数の不倫を目撃し、それを当然なことと受け入れるようになり、「夫は婚姻の絆で結ばれたただひとりの妻と添い遂げるべきであり、処女は純潔に、女は慎み深

---

<sup>95</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ1』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、476頁。

<sup>96</sup> Whiting, Jeanna Marie. *Tolstoy and the Woman Question* (University of South Florida. Graduate Theses and Dissertations, 2006), pp. 63–64.

く、男は雄々しさと節度と不屈さを備え（…）等々」ということは「愚劣なモラル」で「滑稽」であるとは思わない。物事の浅はかな考え方を標準と見なし、そうした生き方の他には模範を知らないか、最初から「滑稽」というレッテルを貼り受け入れない。ただ、ヴロンスキーの元々の素直で高尚な本質が、アンナとの出会い以降現れるようになる。アンナが出産後死にかけていた時、カレーニンが彼女とヴロンスキーを許すエピソードの後で、ヴロンスキーはそのキリスト教的で気高い行動に感動し自殺しようとする。それは例えば『戦争と平和』のアナトーリができるような行為ではなく、浅はかな人の反応であるとは考えられない。

さらに、カレーニンに許してもらったにもかかわらず、最終的に夫を棄て、不倫の恋を選ぶアンナがヴロンスキーにとって妻のような存在になる。社会が容認できないその関係の責任を彼は取る覚悟があり、ノンシャランな好色男子からリョーヴィンのような真面目で「ひとりの妻と添い（…）雄々しさと節度と不屈さを備え」たタイプの人間に変貌しつつある。アンナとの関係、その関係の結果生まれた娘を合法化するために、ヴロンスキーはカレーニン夫婦の離婚を望んでいる。人妻との肉体関係は、当時のロシア上流社会では”comme il faut”と見なされていたが、その関係のために出世を棄て、上流社会から孤立する野心的なヴロンスキーは意識的に”comme il faut”ではなくなる。アンナとカレーニンはこの三角関係の犠牲者として見なされることが一般的だが、アンナのために独身の遊びや首都の上流社会、好きな軍務までも捨て、さらに彼女が自殺してから人生の意味を失い、死ぬ目的で戦争に赴くヴロンスキーも同じように犠牲になったと言える。

この三角関係において、アンナは二人のアレクセイ、愛人と夫のどちらからも間違いなく愛されている。ただ、軍人ヴロンスキーと違い、官僚カレーニンは情熱的な告白やロマンチックな振舞いなどができない冷静な人である。彼はアンナの不倫を疑い始める時も、嫉妬を抱くより社会の目を恐れている。カレーニンのその冷静さをアンナは冷たさと誤解し、彼のその態度をヴロンスキーの愛情表現に比べながら軽蔑する。実際、カレーニンにとって唯一親しかったアンナの不倫は、人生における最も強い衝撃となり、彼の昇進を止め、彼がスピリチュアリズムに陥る原因にもなる。宗教心が強く、「夫婦一体」を信じる彼はそのキリスト教的な義理や夫婦の破られない絆についてアンナに説教することによって、初恋で生気にあふれている彼女をかえって反発させる。嫉妬のような激しい感情を彼が一切表さないのので、愛情というものを全く知らないからだアンナは思い込み、2人之间により大きな距離が生じてしまう。

「(…) おまえも承知のように、わたしは嫉妬というのは卑しい屈辱的な感情だと思っているから、けっしてそんな感情に身を任せようとは思わない。だが一定のたしなみの法というものはあって、それを犯すと必ず罰を受けるのだ。(…)」

この人は自分ではなんとも思っていないくせに一と彼女は思った一世間の目に留まったからといって気に病んでいるのだわ。(…)

「もしかしたらわたしが間違っているかもしれないが、いいか、今言っていることはおまえのためであると同時にわたし自身のためでもあるんだ。わたしはおまえの夫であり、おまえを愛しているのだから」

一瞬アンナは顔を伏せ、目に宿っていたあざ笑うような光も消えた。だが「愛している」という言葉がまたもや彼女をむっとさせた。彼女は思った—愛している？ この人に愛することなんてできるのかしら？ もしも愛というものがあると聞いたことがなかったとしたら、この人はけっして愛なんていう言葉を使わなかったはずよ。だって愛がどんなものかもわかっていないんだから。<sup>97</sup>

アンナは夫と全く違う人柄のヴロンスキーに対する熱い愛情に全身を委ね、以前は愛情ではなくても暖かい気持ちを抱いていた夫に対しては一気に残酷で不公平になる。それは例えばヴロンスキーに告白された翌日、駅に迎えに来た夫の耳がいきなり彼女にとっておかしく見えたことからもうかがえる。実際、嫉妬を抱いていなくても、アンナと半分無理やりに結婚させられたカレーニンの妻に対する愛情を否定することはできない。不倫は許されない行為であると、スティーヴァの浮気をとがめていたカレーニンが、社会的そして精神的な侮辱を受けながらも、結局アンナとヴロンスキーを許した。さらに、不倫で生まれたアンナの娘の世話をし、アンナが自殺してから、自身の子供のように育てようとしたのは、隣人愛に基づく行為であり、気高さの表れでもあり、亡くなったアンナに対する深い愛情の表れでもある。彼の愛があまりにも利他的であるために、情熱的なエロスだけを恋愛として認めているアンナは夫のその愛情を死ぬまで理解できない。一方、カレーニンは情熱的な恋をおそらく理解できない人間である。感情を殆ど表さず、理性や宗教心にしか動かされていない彼を不倫中のアンナは「人形」や「官僚という名の機械」<sup>98</sup>といった残酷な名で呼んでいる。実際は、彼の評判を台無しにし、彼が嘲笑される原因となった不倫を犯した妻ばかりか、彼女の愛人をも許せるほど、彼は広い心の持ち主である。ただ、人との付き合いより、仕事や勉強

---

<sup>97</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ1』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、367-369頁。

<sup>98</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ2』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、317頁。

を重視してきた彼には、妻を含め人の気持ちや動機が理解できない、理解しようもしないという欠点があり、アンナにとってそれは決定的になる。

ヴロンスキーとカレーニンのアンナに対する愛情の形、その愛情表現は大きく異なるが、両者の間には共通点もある。アンナとカレーニンの家庭にも、そしてアンナとヴロンスキーとの同棲生活にも、ドリーの鋭い観察によると、「嘘くさい」<sup>99</sup> («фальшивое») ところがある。その偽りのような、嘘くさいものというのは、アンナが結局本物の「家族」、「夫婦一体」を作れなかったことを指しているだろう。相互配慮、愛情に満ちているリョーヴィンとキティの本物の家族と対照的に、アンナとカレーニンの家庭は、そもそも成立の時点でお互いに対する愛情がなかったこと、そしてカレーニンの感情を殆ど表さない性格が、相互の理解不足、そして全体的に深みのない夫婦関係に至らせたと言える。

また一方で、激しい愛情の要求に従い、ヴロンスキーを選んだアンナの新しい関係にも、深い精神的な結びつきが欠けている。それはカレーニンの場合と同じようなコミュニケーション不足や理解不足に起因し、それらはヴロンスキーに対する不信感や嫉妬に見ることができる。ヴロンスキーもカレーニンも、嫉妬を全く表していないが、アンナはあらゆる身分の知り合い女性にも、ヴロンスキーの趣味や自主性にも嫉妬している。そこでは、「悪魔」という言葉がトルストイに使われており、その嫉妬はアンナの暗い力であるエロティックな魅力の裏返しであり、彼女を結局死に導く致命的な感情でもある。

「(…)でもあなたが本当のことを言っているかどうか、どうしてわたしにわかるの……」

「アンナ！ それはぼくに対する侮辱だよ。いったいぼくのことが信じられないのかい？ 言っただろう、ぼくにはきみに内緒にしておきたいような考えは一切ないって」

「ええ、ええ」嫉妬の思いを追い払おうとするようにアンナは言った。「でも、どんなにわたしがつらい思いをしているか、もしもあなたにわかってもらえたら！ ええ、わたしは信じる、あなたを信じるわ……それで、あなたが言いたかったことは何？」

しかしヴロンスキーは、自分が言いたかったことをにわかにかに思い出せなかつ

---

<sup>99</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ1』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、169頁。



た。最近ますます頻繁に起こるようになったこのような彼女の嫉妬の発作に、彼はひどく怯えていて、嫉妬の原因が自分への愛情であるということを理解してはいても、そのせいで彼女への愛がさめていくのを隠そうとしても隠しきれないのだった。(…)

「(…) 大丈夫、もうすっかり追い払ったわ、あの悪魔は」アンナはそう言い添えた。悪魔というのは、二人の間で嫉妬を意味する隠語なのだった。<sup>100</sup>

ヴロンスキーは熱狂的な愛情を持っており、彼は彼女のために軍人の出世や元の仲間などを捨てたにもかかわらず、アンナは彼の言葉や行動を疑惑の目で見ながら、口喧嘩を仕掛けている。特に自殺の直前、アンナはアヘンの薬を乱用し、彼女の疑惑は正に中毒患者のようになり、ヒステリーを思わせる彼女の嫉妬の発作もより頻繁かつ激しく起こるようになる。アンナの不信感やヒステリーの発作は、彼女の極めて弱い立場、社会に「墮落」として軽蔑されている愛人のステータスによって説明できる。アンナが嫉妬しているものは、娘のイタリア人乳母から社交界のプリンセスまでというあらゆる社会層の女性、そしてヴロンスキーの自主性と彼の社会的活躍である。ヴロンスキーのために愛する息子や殆どの友達を棄てざるをえなかった彼女は、彼からも同様の犠牲を期待していた。しかし、ヴロンスキーに向けた社会の視線はアンナほど厳しくはなく、彼女と縁を切った人でも、彼とは問題なく社会交際を続けている。この男性と女性に対する不平等な扱い方、二重基準をアンナが痛感することによって、意識しているいないにかかわらず、トルストイは女性差別、「女性問題」を改めでテーマとして取り上げている。

ヴロンスキーは最初から執心で、大げさにロマンチックな言葉や行動によってアンナの心を掴んだが、彼女と一緒に暮らし始めてから彼の気持ちは徐々に落ち着いていく。彼は熱烈で悲劇的な恋をするより、アンナと普通の夫婦生活を送りたがっている。アンナを大事にしながらも、彼女の恋だけで満たされなくなり、地主の貴族の集まりに参加するなど、ある程度の自主性も求めるようになる。ところが、両者とも自分の気持ちを打ち明けようとしない。アンナも、ヴロンスキーも、ペテルブルグの上流社会の”*comme il faut*”の代表者であったので、中身や本音より外見や建前を重視することに慣れている。しかし、アンナとカレーニンの場合もそうだったが、都合よく本音を隠してばかりでは、夫婦としての絆は深まらない。つまり、相互的な愛情に基づいて築かれたアンナとヴロンスキーの家庭にも、カレーニン夫

---

<sup>100</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ 2』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、311-313頁。

婦の場合と同様にコミュニケーションが不足しており、それがやがて悲劇へと発展してしまう。

こうして、あえて相手の本音を確かめぬままに、彼は選挙に出かけていった。こんな風にはっきりしないままで彼女と別れるのは、付き合いだして以来これが初めてのことであった。ある意味で彼はこのことに不安を覚えたが、ある意味ではこのほうがいいとも感じたのだった。「はじめのうちは、今回のように、なんだか曖昧で秘密めかした感じになるけれど、そのうちに彼女も馴れるさ。とにかく、おれは彼女になら何でも与える覚悟はあるけれど、ただ男としての自主性だけは守らない」とそんな風に彼は思った。<sup>101</sup>

ヴロンスキーと違い、アンナは社会から完全に疎外されているため、得意な分野だった社交においてはもう己の能力を活かすことも、他の人と交流することもできず、女としての自主性はもはやない。言うまでもなく、当時の貴族の女性にとって仕事に従事することはあり得ないことと考えられていた。社会的な付き合いもなく、仕事や大した趣味がないアンナは、ヴロンスキーとのコミュニケーション以外、彼女の生气にとっての抜け道を持たないのである。ローザノフはアンナのこういう怠惰な生き方に彼女の悲劇の原因を見出している。<sup>102</sup>完全に依存しているヴロンスキーの愛情を確保するため服装を選ぶこと、彼の役に立つために本を読むことなど、一言でいえば、彼に奉仕することのみに全力を尽くすことになる。アンナの活躍の分野のすべてはヴロンスキーとの関係、彼に気に入られることに限られていたため、彼を独占したい、自身と同じ立場にさせたいという彼女の気持ちは利己的でありながら、理解できる感情であろう。似たような罫には『或る女』の葉子も嵌ってしまう。ヴロンスキーの社会的な野心、独立の要望をアンナは裏切りとして捉え、彼女に対する愛情が冷めた証拠であると思込んでいる。

いかにも自分には自由にする権利があると主張しているようなそのまなざしのことを、後になって一人であれこれ思い巡らしているうちに、アンナの気持ちはまたいつもと同じひとつの地点に達してしまっただけだ。つまり自らの屈辱を意識したのである。

「あの人には出かける権利がある。いつだろうとどこだろうと、自由自在なんだ。

---

<sup>101</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ3』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、523-524頁。

<sup>102</sup> Розанов В. В мире неясного и нерешенного. М., 1995. С. 94.

しかもただ出かけるだけじゃなくて、わたしを置き去りにしていくんだわ。あの人にはすべての権利があるのに、わたしには何の権利もない。(…)あの目つきは、気持ちが冷めかけていることを物語っているんだわ」

だが、相手の気持ちが冷めかけているのを確信したところで、彼女にはやはり打つべき手はなかった。ヴロンスキーに対する自分の態度は、何ひとつ変えるわけにはいかなかった。これまでとまったく同じように、愛情と魅力でしか彼を引き止めることはできなかった。<sup>103</sup>

社会から締め出され、自己表現できなくなったアンナは、自分の美しさを武器にヴロンスキーの愛情や意志に完全に身を任せるしかない。その依存的なあり方を結局「侮辱」に思い、彼の愛情が落ち着き始めたことを感じた時、彼女は過剰な不安と嫉妬に陥った。侮辱からくる不安定な精神状態のために、アンナはリョーヴィンを始めとし、特に目的もなく若い男性を魅了しようとするのである。こういうコケティッシュな態度は当時の若い既婚女性であれば相応しい振る舞いであるとされるが、アンナの曖昧な状態では、彼女を哀れむドリーでさえもその軽薄な態度を批判している。一方、男性を中心に置く社会規範の中で女性は若さや美しさによってしか男性の愛情を確保できないことをドリーも痛感している。当時の感覚では、30歳前後のドリーもアンナも既に女性の花盛りだと思われていた青春から離れており、ドリーは多数の出産で実際年齢よりも老け、夫の性的関心を失ってしまった。ただ、それを失ったとしても、彼女の社会的地位は結婚によって守られている。そういう保証をもっていないアンナは、避妊によって自分の美しさをなんとか守ろうとしているが、ヴロンスキーが社会で出会う多くの若い女性に勝てないことを恐れている。それによって破滅的な嫉妬が発生し、彼女自身とヴロンスキーを苦しめている。不安定感とその理由がヴロンスキーに理解されぬまま、ヒステリーの発作や憂鬱が現れるようになり、結局彼女は自殺を遂げる。

アンナが犠牲者であったのか、それとも犯罪者であったのかという点については、批評家、研究者や読者の間で、長編の出版された時点から現在に至るまで議論されてきた。「復讐するは我にあり、我これに報いん」という多義的なエピグラフがこの議論に密接に関わるとされ、『アンナ・カレーニナ』を巡る批評の殆どで触れられている。トルストイ自身は、その点においてグロメーカ (Громека М.С.) による『アンナ・カレーニナ』の解釈に高評価を与えている。その解釈によると、アンナは同情されるべき人物であるが、社会的・倫理的な「規

---

<sup>103</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ3』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、574-575頁。

則」に違反したため容赦なく自己破壊に至ったとされている。一方、エイヘンバウムを含めソビエト時代の批評家はアンナを偽善的な社会の犠牲者と見なしている。<sup>104</sup> 愛せない人と結婚させられたアンナは、「夫婦一体」の戒め、そして当時ロシアの法律を犯し、嫉妬や不信感のためにヴロンスキーとの関係もうまく結べなかった。愛する人と同棲しながら、夫婦になりきれなかったことに法律的や社会的な理由もあれば、コミュニケーション不足やアンナの独占欲などの心理的な理由もあり、それらが複合的に絡まり合っている。

アンナの自殺は、ヴロンスキーに復讐する意図もあった。同時に、カレーニンや息子に対する己の悪事に苦しみ、誰よりも己を責めていたアンナは、自殺によって自分自身にも復讐しようとしたとも言える。悪が悪に余儀なく繋がるということ、己の幸せのためにでも他人を不幸にすることができないこと、何の甘い嘘よりも真実のほうが大事であることなどの道徳的概念はトルストイに重視されており、それはアンナの物語にも反映されたと考えられる。キリスト的な愛情、利他的な隣人愛より利己主義的なエロスに熱中するアンナの誤りは致命的なものとなった。自身の息子と夫への裏切りから、「墮落した女性」という汚名を着せられ、社会から疎外されたアンナは、自主性を重んじるヴロンスキーの愛情に依存するしかなかった。こうした状態は実際に侮辱的であり、アンナの絶望は現在の読者にも理解できるであろう。元々「嫌な女」として構想されたアンナは、結局トルストイに殆ど弁護されることになった。トルストイが恐れていたエロスによる活発性、そして知性や正直な性格によって、アンナは彼の分身リョーヴィンを魅了することから、このヒロインに対するトルストイ自身の姿勢もうかがえる。

興味深い話に耳を傾けながら、リョーヴィンはずっとアンナに見とれていた。彼女の美しさ、知性、教養、そして同時に素直で打ちとけた態度にうっとりとしていたのである。<sup>105</sup>

道徳的に厳しいリョーヴィンであるが、彼女を批判することができず、「そうだ、そうだ、これが女性ってものだ！」<sup>106</sup>と不倫を犯したアンナについて心の中で叫んでしまうほど、アンナに対する好意で一杯になる。

---

<sup>104</sup> Эйхенбаум Б. Лев Толстой. Семидесятые годы. Л., 1974. С. 162.

<sup>105</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ 3』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、83-84頁。

<sup>106</sup> 同上、79頁。

社会からの女性に対するジェンダー的な期待や抑圧、男女の嫉妬や不倫に対する二重基準なども『アンナ・カレニナ』のキーワードとして見逃すわけにはいかない。愛されなくなったことを悟った女性の絶望と、男性の意志に完全に依存しているという女性の無力さを「アンチフェミニスト」トルストイは誰よりも切実に同情深く描くことができた。社会の敬意を失った後のアンナのもどかしさや自殺に至った苦悩は、存在していた社会規範がすべての女性を満足させていたわけではないということを仄めかしている。トルストイ自身は女性解放運動を応援していなくても、少なくともその問題を意識していたと言える。仕事はもちろんのこと、自身の遺産も持っておらず、カレニン夫人としての贅沢な生活に慣れてきたアンナは、自身の社会的地位も、家族も捨て、思い切って初恋に身を投げ出す。ナロードニキヤニヒリズム運動の代表者、女性革命家などの19世紀の急進的な女性にとってはこのような「社会抵抗」は貴婦人の気まぐれにしか見えなかったかもしれないが、経済的自立がなかなか手に入れられないという立場の弱い女性でありながら、感情の自由のために全ての社会保障を捨てたヒロインのその行動は勇敢であり、ある意味で革命的なものだったと言える。

アンナの恋の物語は悲劇に終わったが、感情に欠けている夫婦生活の中では得られなかったことが、ヴロンスキーとの不倫によって、ほんの一瞬とはいえ得ることができた。高い代償を払っても、アンナは自身の恋愛的要求の満足、そして生命力に満ちた束の間の至福を実感できた。同じような道を大正時代の日本で有島武郎によって書かれた『或る女』のヒロイン葉子も選び取る。当然トルストイは、その選択が唯一の正しい道であるとは決して述べようとしなかった。しかし、『アンナ・カレニナ』は、恋のために家庭を破壊した主人公アンナを一義的に批判し、同時代の女性を説教しようとする作品でもない。アンナのイメージは複雑でありながら、多くの人々にとって、彼女は社会規範に背く女性の象徴であり、極めて魅力的なヒロインになった。「ミソジニスト」トルストイは、チェルヌイシェフスキーやイプセンのように女性に自身の人生の意味、社会的地位や権利に目を向けるきっかけを与え、当時定められた社会規範とは別の道を提示した。こうした意味では、トルストイは、たとえ意識的にはなかったとしても、〈新しい女〉の先駆けと呼べるヒロインを生み出した。アンナはジョルジュ・サンドの精神的に自由で社会に逆らうヒロインの継承者となり、家出したヘンリック・イプセンの『人形の家』のノラと並び、19世紀社会にとって新しいタイプのヒロインの一人になったと言える。

## 第2章 日本の過渡期

### 1. 明治末期～大正時代の新しさ

#### 1.1 ジェンダー思想の変化、キリスト教の影響

開国に次ぐ明治時代の幕開けは、日本にとっての近代の幕開けでもあったとされている。明治維新直後、日本には西欧からの技術だけではなく、哲学や宗教も導入され始め、閉鎖状態の中で発展してきた日本社会に、外からの多種多様な、新鮮な思想が普及していった。啓蒙思想や民権思想が広まり、多くの日本人に教育や新しい民権を与えた。ただし、日本女性にとっての近代は男性と同時に始まったとは言えない。法律上の不利に加え、一夫多妻制も明治時代まで続いた。妻以外に妾、そして芸者や遊女などの性を売る女性とのつきあいは、長い間日本社会では一般的だった。日本男性のポリガミーが明治時代の新しい法律によっても改めて認められた一方、女性の場合は姦通罪として裁かれた。女性はおよそ今から100年前まではあらゆる分野において自立を得ることが困難であり、主な活躍の分野は家庭だった。女性の伝統的な役割が娘、妻、母に限られていたのは長い間世界中でみられた現象であり、日本も例外ではない。そのために、男女関係や結婚、夫婦、家族に対する社会及び国家の姿勢、それに関する世論や道徳観は男性に比べると家族や家庭への依存度がずっと高かった女性の幸福に大きく影響していた。同時に、女性の解放は恋愛の自由及び自由結婚から始まることも珍しくない。この節では、明治維新の結果、西洋思想やキリスト教の影響のもと、日本のジェンダー思想及び恋愛観はどのように変容したのか、論述する。

「文明開化」が謳われた日本の明治時代であるが、事実上は封建時代から受け継いだ要素が少なくなかった。天皇制を維持し、それに対する国民の忠実さを確保するために「家」の制度が必要だった。そのために家長権は法的に強化された一方、女性や長男以外の子供たちの人権が制限されていた。<sup>107</sup> 明治28年(1895年)の百科全書『日用宝鑑 貴女の葉』は江戸時代に読まれていた『女大学』などの女子教訓書の「三従」をはじめとする諸原則の大部分をそのまま受け継いだ。一方で、女性解放に関して急進的な男性や女性が多く現れ始めたことから、その時代は日本のフェミニズム運動及び女性史の転換点と見なされている。それにはジャン＝ジャック・ルソーの天賦人権論やジョン・スチュアート・ミルの1869年の『女性の解放』など、開国以降西洋からもたらされた人権思想が必要

---

<sup>107</sup> 藤尾健剛『漱石の近代日本』勉誠出版、2011年、352頁。

な基盤を作り、そうした思想を基に男女同権論を支持していた日本の男性知識人が少なくなかった。その例は横山雅男（1888年の『婚姻論』）植木枝盛（1889年の『東洋之婦女』）や福沢諭吉の著作である。明治32年（1899年）に福沢諭吉が当時のジェンダー関係の見直しを企図して『女大学評論 新女大学』を発行した。そこには家庭及び家族、夫婦における女性の位置づけについて画期的な思想が提示されている。

（…）本文中の耳障なるは夫に仕えてと言う其仕の字なり。元来仕えるとは、君臣主従など言う上下の身分を殊にして、下等の者が上等の者に接する場合に用うる文字なり。左れば妻が夫に仕えらば、其夫妻の関係は君臣主従に等しく、妻も亦是れ一種色替りの下女なりとの意味を丸出しにたるものゝ如し。我輩の断じて許さざる所なり。<sup>108</sup>

つまり、女性の美德として昔から賛美されてきた親、夫、そして息子に仕えることは妻を「下女」のレベルまで落とし、それは女性があらゆる差別を受けていた100年以上前に生きていた福沢の目から見ても、許されないことだった。

家庭において妻が下女ではなく、夫と平等な地位を得るには、一対一のパートナーシップ、つまり一夫一妻制が一つの必要条件となる。一夫一妻制と密接に繋がっている「ロマンチック・ラブ」のコンセプトは明治時代まで日本文化にとって馴染みのない概念であった。その代わりにエロスの自由、色や粹の世界という全く違う男女関係のパラダイムが存在していた。<sup>109</sup> 天皇をはじめとする日本の貴族が「正室」及び「側室」と名付けた数人の妻を抱えるという制度は明治時代まで存在していた。13世紀まで一般的だった「通い婚」は一夫多妻でありながら、その制度の下で女性には恋愛及びエロスの自由があったようである。一方、武家政治に伴う「嫁取婚」とともに日本女性はますます抑圧されるようになったと考えられる。武家社会において形成された家族制度では既婚女性の浮気は重罪として罰されていた。1655年の「江戸市中法度」によって不倫を目撃した夫が妻をその場で殺す権利が法によって定められたが、それ以前にも、1597年の「百箇条」は姦通罪について既に述べており、妻とその愛人を私刑にする例は「妻敵討」として村町時代から知られていた。<sup>110</sup> 夫が婚外の肉体関

---

<sup>108</sup> 福沢諭吉「女大学評論・新女大学」講談社学術文庫、講談社、2001年。

[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000296/files/43029\\_23560.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000296/files/43029_23560.html)]

<sup>109</sup> ヨコタ村上孝之『性のプロトコル—欲望はどこからくるのか』新曜社、1997年、16-17頁。

<sup>110</sup> 暉峻康隆『日本人の愛と性』岩波新書、1989年、115-116頁。

係を持ったとしても、もし相手が既婚の女性でなければ、社会問題と見なされていなかった。江戸時代の女子教訓所は、「女狂い」をした夫に対しても嫉妬を抱かないことを勧めていた。遊女との関係も不倫として見なされず、一夫多妻制の枠組みの中で「男の不倫」という概念はパラドックスに過ぎなかったと言える。

一方、文明開化によってキリスト教が解禁された結果、結婚の機密によって夫婦は一体となるという考え方に基づく一夫一妻制、そしてそれを裏付ける「ロマンチック・ラブ」の観念が日本の知識人の間で普及しはじめた。「運命」の恋愛相手に対する恋しか求めない「ロマンチック・ラブ」は妾や遊女との関係を当然容認できない。そして、エロスの自由（当然既婚女性は除く）を唱えてきた日本文化にとって馴染みのない、貞操観念を尊ぶキリスト教に由来するもう一つの概念「プラトニック・ラブ」も当時の日本に導入された。「プラトニック・ラブ」は「ロマンチック・ラブ」と似通っているが、後者と異なり肉体関係を除き、男女関係においては肉体的な関係より精神的な関係を重んじることに重点を置く。中世ヨーロッパの文学の土台になった「プラトニック・ラブ」のよく知られている例は、2回しか話したことがないベアトリーチェを一生愛したダンテ・アリギエーリ、そして出会ってから一年間で亡くなったラウラをその後の10年間にわたりソネットで描いたフランチェスコ・ペトラルカである。男女の相互的な愛の必然的な結果は性交渉であるということを前提としていた当時の日本人にとって、愛の誓いやキスも交わしていない女性に対し、そこまで情熱に燃えることは行きすぎだと感じたかもしれない。一生同じパートナーに忠実であることも多くの日本人にとっては違和感を覚えるものであっただろうことも推測できる。しかし、北村透谷をはじめとし、そうした感情に美しさを見出した日本文学者もおり、彼らの作品によって、そして一夫一妻制を支持した知識人や政治家、例えば福沢諭吉や森有礼などの活動によって江戸時代まで続いてきた男女関係に関する日本人の常識は覆されはじめた。

ただし、多数の女性との性的関係が長い歴史にわたり当然だった男尊女卑社会にとって、封建時代の意識を取り除くのは当然簡単ではなかった。明治3年（1870年）に制定された明治国家最初の刑法典「新律綱領」は、妾を二親等と認めており、一夫多妻制は法律上明治31年まで成り立っていた。妾の子供は「庶子」として認められ、彼女を妻に隠す必要がなかった。新しい時代を宣言していた日本の政治家の中には多くの場合妾を囲い、自身の特権をなかなか手放せない男性が多かったということであろう。その一つの例は、明治時代の女権の活動家であり作家の清水富子（紫琴）の人生に見いだせる。自由民権派運動に関わっていた岡崎晴正と彼女は結婚したが、彼は結婚した後も妾との関係を続けてい



た。新時代の民権活動家の夫婦だったはずだが、重婚のために紫琴は離婚届を出し、一夫一妻制や特に家庭における女権について説くようになった。自身の結婚の失敗体験について彼女は小説「こわれ指輪」で反省し、指輪が紫琴の分身である女性主人公にとって一人の男性と一人の女性を結ぶ契約、一夫一妻の約束の象徴として使われている。<sup>111</sup> 同時に、単に贈り物としてその指輪を捧げた夫には他にも女性があり、それによってヒロインは騙された気持ちになる。江戸時代までの歴史が長かった日本の一夫多妻制は、日本人女性であるヒロインに女性や社会人としての屈辱感を生み出し、自身の権利が侵害されているように感じさせたのである。結局、明治3年（1870年）に妾が公認されたが、明治15年（1882年）に実行された刑法改正においては妾に関する条項が消えたことから、妾の存在は非公認になったと判断できるが、既に入籍していた妾は以前の通りに取り扱われていた。明治31年（1898年）より戸籍面から「妾」という言い方が消えるが、明治天皇は「側室」を持ち続けていた。大正天皇以後、側室制度は廃止となり、それによって日本で一夫一妻制が成立したと言えるが、不倫は「日本の文化」とであると主張されることが現在に至っても完全に消えたとは言えない。

妻のステータスに多少近かった妾とは別に、性を売る「プロフェッショナル」の女性との既婚男性の肉体関係が日本社会においてつい最近までは一般的だった。旧来、「遊女」と「他女」に女性を区別することによって、男性はエロス、恋愛の対象を「遊女」に任せ、妻になっていた「他女」の役割は家を営むことや相続人の出産に制限されていた。<sup>112</sup> このような一般論は日本固有の文化としての男性の浮気を確定し、主に「粹」の世界、遊女との「色事」を多く描いてきた日本文学、『源氏物語』から、泉鏡花や永井荷風の近代作品によっても裏付けられてきた。婚外の性交渉は罪であるというアブラハムの宗教の考え方は、神道・仏教の影響下にあった日本社会にとって一般的ではなかった。そして、日本においては、売春とそれに関わる女性に対する態度も欧米をはじめとするアブラハムの宗教の影響を受けた社会とは著しく異なっていた。ロシア、また一般的にキリスト教文化圏では売春は無条件の悪と見なされてきたが、日本人にとっては必ずしもそうではなかった。キリスト教の思想が次第に影響力を増大していた明治及び大正時代も、永井荷風や志賀直哉などの知識人は遊女と

---

<sup>111</sup> 江種満子『わたしの身体、わたしの言葉—ジェンダーで読む日本近代文学』翰林書房、2004年、54頁。

<sup>112</sup> ヨコタ村上孝之『性のプロトコル—欲望はどこからくるのか』新曜社、1997年、57-58頁。

関係を持ち、それを己の文学に反映することも稀ではなかった。

日本語には「芸者」、「遊女」、そして「私娼」といった娼婦を意味する言葉が複数あるが、この区別によって、そのカテゴリーの間にある程度の差がつけられると言える。客との逢瀬の雰囲気や頻度、支払額、男性相手を決める自由、そしてその女性の社会的地位や名誉は大きく異なっていた。この独特な職業の最上位から最下位までの女性の道は、井原西鶴の『好色一代女』からもうかがえる。同時に、「水商売」や「風俗」とも呼ばれているものと、仕事自体が根本的に違っていたとはいえない。それは日本大百科全書(ニッポニカ)の解説によると、「対償を受け、不特定の相手に対して、性関係をもち性サービスを提供すること」<sup>113</sup>であり、いずれの場合においても要は売春である。

十月革命以前のロシアにおける売春問題には第1章第1節第1項で触れたが、そこで述べた通り、売春が合法とされていた時期(1843～1917年)、特に1861年の農奴解放令後、多くの農民女性が、騙されて売春に巻き込まれていた。女性に殆どの職が閉ざされていたため、淫売以外に稼ぐ方法が多くの場合なかったことは、キリスト教を奉るロシア帝国においては社会問題として意識されていた。トルストイやドストエフスキーなどの文豪の作品においても、娼婦が極めて惨めな存在で、自分の体を売ることは個人の悲劇であるとともに社会全体の問題であるように描かれている。売春、そして一般的に婚外の肉体関係に対する極めて否定的な姿勢は、ロシアの文化の基盤にある正教に由来していると言えよう。序章でも触れたように、キリスト教は「家族」を作る「夫婦一体」の概念を重視しており、結婚という「機密」を通して人は神から恵を与えられるとしていた。従って、売春を含む婚外の肉体関係は夫婦の一体を破り、神との関係を成り立たせる機密、つまり、ある意味で神との約束を破棄するということになる。その恐ろしい結果はトルストイの『アンナ・カレーニナ』で描かれる。婚外の肉体関係は全て重大な罪である姦淫とされ、それに関わった人はキリスト教の最も尊ばれる機密である聖餐を拒否されていた。

日本の場合、安土桃山時代に豊臣秀吉が遊女を一箇所に集めた遊郭を作って以降、遊郭は長い間、理想とされていた「粹」を象っていた。それは例えばクプリーンの『魔窟』(1909～1915年)などといった、ロシア文学が描く売春宿の暗くて恠しい世界からはかけ離れている。日本の遊女の日常はロシアの売春宿の醜さとは異なり、お客との結婚などによってその

---

<sup>113</sup> ニッポニカ「売春」

[<https://kotobank.jp/word/%E5%A3%B2%E6%98%A5-112839>]

世界から抜けられた例もあった。日本の芸者や遊女は当時の一般女性より美貌や芸の才能を備え、多くの人にとって憧れの対象となっており、日本の伝統文化の維持者とも見なされることがある。彼女たちは井原西鶴や樋口一葉、永井荷風らによって、文学作品の主人公として度々取り上げられた。遊郭とそこで行われる「色事」は芸術や文学の中心的なモチーフであり、ある意味で文化を促すところになっていた。

一方、「粹」の世界を客に提供していた遊郭は、多くの場合不本意ながら体を売る女性に対して出入り禁止の檻のような場所にもなっていた。樋口一葉の『にごりえ』(1895年)のお力はドストエフスキーの『罪と罰』(1866年)のソーニャほど惨めではないかもしれないが、その辛い空間から脱出したいと思っており、同情に値する人物として描かれている。お力は江戸時代に描かれた遊女のヒロインに一見似ているが、本質は異なり、自己意識を目覚めた女性である。遊郭の客の立場からではなく、遊郭の近くに暮らしていた樋口一葉が遊女を同情深く描いているため、彼女たちの心情や息苦しさが明確になる。

お力は一散に家を出て、行かれる物なら此まゝに唐天竺からてんぢくの果までも行って仕舞たい、あゝ嫌だ嫌だ嫌だ、何うしたなら人の聲も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうっとして物思ひのない處へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だ嫌だと道端の立木へ夢中に寄かゝつて暫時そこに立どまれば、渡るにや怕し渡らねばと自分の謳ひし聲を其まゝ何處ともなく響いて来るに、仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずばなるまい (…)<sup>114</sup>

永井荷風も自分自身が花街の常連だったにもかかわらず、『腕比べ』(1918年)で描いた芸者駒代の不安や悩み、そして身体を好きではない相手にひさぐことによる苦悩や疲弊を際立たせる。

(…)  
丁度駒代がちよつとこちらへ身動きするその胸中をば帯のままぐいと搔さうようにすくい上げて膝の上に抱きすくめた大力の、しかも早業に駒代は思わずアッと一声叫ぶと共に目をつぶれば顔一面に火のような男の息、頬もただれるかと

---

<sup>114</sup> 樋口一葉「にごりえ」『日本現代文學全集 10 樋口一葉集』講談社、1962年。

[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000064/files/387\\_15293.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000064/files/387_15293.html)]

思われる苦しさ。身をもがいてやっと両手を顔に押し当て歯を喰し食べた。(…)綿のようになっていた身を突然鬼のような対月のお客に無理無体なまねされ、怪我でもしはせぬかと思ったほどの恐しさ、ほっと息つく暇は唯ほんの車の中ばかり。今だに胸の動悸の収まらぬような気のする側から、今度は馴染重ねた旦那へのおつとめ。

(…) 何ぼ商売とはいいいながら自分ながら思い出すと耻しくなって帳場の燈火に人から顔見られるのが辛くてならない。鏡台の前に坐って白粉つけ直せば直すほどその顔はかえてきたならしく、搔けばかくほど乱れた髪はなお乱れて来るような気がする。

(…) いっそ精魂つかれ果ててこれなり死んじまったらと駒代は今方あだし男にその身を弄ばれた口惜しさの仕返しとでもいうように狂気の如く瀬川一糸の寐姿をば女の身ながらまるで男のように犇と上から抱きしめ、びっくりして目をさますその顔にさめざめとわが顔押当てて泣入った。<sup>115</sup>

この描写は日本の花柳界の唱えられた美しさの裏にある、体を売る女性の精神的及び肉体的な痛みを明るみに出す。稼ぐために望まない相手と性交渉をせざるをえないこと、自分自身をお金のために正にレイプさせることのいやらしさやもどかしさは日本人であろうと、ロシア人であろうと変わらない。娼妓解放令は明治5年(1872年)に発されたが、事実上第二次世界大戦後まで日本において売春は合法とされていた。しかしながら、こうした法令は実効力を持たぬ紙面上のものにすぎなかったとはいえ、そういう定めがあったという事実は、西洋の思想に影響され、売春に対する日本人の姿勢が明治初期から変化し始めたことを証明している。華麗で美しいイメージと異なり、遊女を惨めで同情に値する存在として描く『腕比べ』のような男性作家による描写もそれを裏付ける。

その変化の主な原動力となったのは、日本でのキリスト教の普及だったと言っても良い。上記のように、アブラハムの宗教の一つであるキリスト教では、既婚の場合は言うまでもなく、未婚の場合においても婚外の性交渉は批判され、罪と認識されている。性を買うことにせよ、売ることにせよ、キリスト教は売春を容認せず、日本でも明治28年(1895年)から活躍していたプロテスタントの救世軍は廃娼運動に積極的に関わっていた。ロシアと異なり、

---

<sup>115</sup> 永井荷風『腕くらべ』岩波書店、2006年、94-98頁。

日本で最も広まったキリスト教宗派はプロテスタンティズムだった。内村鑑三や新渡戸稲造などの日本の思想家、そして有島武郎に影響を与えた北海道でのクラーク博士の活動はその一つの例である。独特なキリスト教観を持つトルストイの作品も、日本のプロテスタントには好評を得た。「プラトニック・ラブ」及び「ロマンチック・ラブ」は日本の文化に元々固有ではなかったが、キリスト教の価値観とともに明治時代に導入されはじめた。遊郭が可能にしていた「粹の世界」、つまり複数の相手に対する欲望や執着、そして以前一般的だった親に決められた相手との結婚といったものに対してロマンチック・ラブ・イデオロギーは疑問を抱かせた。その結果、古い家族制を認めなかった平塚らいてうをはじめとする自由結婚を求める女性が現れ、「ロマンチック・ラブ」つまりモノガミーを選ぶ男性も増えた。日本の旧世界の文化や文学においては色男が理想とされていたが、一人の女への愛情を唱え、新しいモラルを提示した北村透谷をはじめとする新しいタイプの日本文学者が現れる。次節で論述する有島武郎もそのうちの一人だったに相違ない。「ロマンチック・ラブ」の理想を抱えていたそういった作者にはキリスト教徒が多かったのも偶然ではなからう。

西洋のフェミニズム論においては、宗教の女性に対する抑圧性が度々指摘されており<sup>116</sup>、キリスト教が保守的な男尊女卑の社会を支えるものとして捉えられがちである。しかし、序章で述べたように、それは必ずしもキリスト教をはじめとする宗教の本質ではない。日本の場合はキリスト教がジェンダー的な思想の変化を及ぼしただけではなく、女性解放運動や女性教育にとって大きな役割を果たした。売春問題の解決策として1956年に売春防止法が成立したことにおいては、日本キリスト教婦人矯風会の活動の功績が大きかった。<sup>117</sup> 教育の面でも、同志社を設立した新島襄をはじめとするキリスト教の活動家は教育を一般市民まで広めようとし、明治20年（1887年）から日本の各地でキリスト教系女子学校が設立されはじめた。<sup>118</sup> それは当然、女性教育を促し、大正時代に次々と平塚らいてうなどの〈新しい女〉が現れるための土台を作った。例えば、佐々城豊寿は本章の第2節第2項で分析する『或る女』の早月親佐の現実モデルになったが、彼女はキリスト教団体の活動家だった。その娘は自由恋愛を求め、社会に逆らう新しいタイプの女性で、日本文学においては〈新しい女〉の最も知られている代表者となったが、それはその母親あってこそと言えるだろう。日本の女性解放運動の前線にいた『青鞥』のメンバーの多くもプ

---

<sup>116</sup> 鹿野政直『婦人・女性・おんな—女性史の問い』岩波新書、1989年、162頁。

<sup>117</sup> 同上、44頁。

<sup>118</sup> 新・フェミニズム批評の会『明治女性文学論』翰林書房、2007年、402頁。

ロテスタンティズムの牧師だった成瀬仁蔵が設立した日本女子大学校で学び、キリスト教の思想に触れた。『青鞥』の一人瀬沼夏葉は正教学校長の妻であり、日本で正教普及に大きく関わった聖ニコライに直接的な影響を受けた。彼女の活躍には第3章第2節第1項で触れる。

上記のように、西洋から導入された思想、そしてキリスト教の普及によって、明治時代にわたり日本社会におけるジェンダーパラダイムの大きな変化が起きた。しかし、社会の弱者であった女性たちが、すぐにその変化を享受できたとは言いがたい。男性が妾を正式に囲うことが法的に許されたのに対し、女性の不倫は「姦通罪」として罰されていた。男性が次々と新しい思想を取り入れようとした一方、女性は以前と同様に無条件に親や夫に従うことが期待され、社会的権利の大部分が奪われていた。十月革命前のロシアも世界中から女性解放において遅れていると見なされていたが、女性の相続権は19世紀にわたって一般的に保証されていた。一方、日本の女性は事実上第二次世界大戦後まではそうした権利を与えられておらず、それは本章の第2節第2項で論述する『或る女』の早月姉妹の家庭の崩壊をもたらしたように、おそらく現実社会においても多数の悲劇的事件の原因になったと考えられる。さらに、新たに普及したキリスト教的な道徳にもかかわらず、男性が遊郭を訪問することは相変わらず「文化」であると考えられており、しかもその一方で女性は「良妻賢母」の道徳を義務付けられていた。こうした不平等な状況の下、女性権利の拡大化を要求する活動家が現れ始めた。『青鞥』に代表される日本の〈新しい女〉たちについては本論文の第3章第2節で述べるが、当時の文学は女性像を通してその社会変化をどのように反映していたのかという点について、次項で論じる。

## 1.2 変化する女性像

日本の歴史にとっての明治末期から大正時代までの期間は、デモクラシーが盛り上がりを見せ、女性解放運動が始まるなど、目まぐるしい変化が起こった時期であった一方、前項で見てきたように、女性に平等な権利や社会的地位を与えるはずの「近代」は、男性の場合より遥かに遅れていたと言える。法律上、性差別がないことが定められたのは第二次世界大戦後の日本国憲法第14条だった。つまり、少なくとも法令上、女性の個人の自由が尊重されることになったのは昭和20年代にあたり、それは憲法とともに米国が日本国民に課したと言える。それ以降70年経った現在も、差別的な思想が完全に消えていないことか

から見れば、日本国憲法第 14 条が成立する以前の明治～大正時代なら、封建時代から受け継いだ女性に対する抑圧が続いていたことは不思議ではない。「近代」と呼ばれるその時代の最も急進的な日本の知識人や文学者、平等主義者や人道主義者であっても、男性中心的な世界観を持つことが珍しくなかったのも当然だったかもしれない。トルストイの場合と同様に、現在の見方からすれば彼らは「アンチフェミニスト」として非難されやすい対象であり、そうした立場から彼らの文学作品を糾弾するフェミニストの研究者も少なくない。本論文では、そうした姿勢を可能な限り避け、日本の女性解放運動が生まれた時期に生きていた男性知識人が、当時のジェンダーシステムに疑いを差しはさんでいたという時点で、日本におけるフェミニズムの発展や〈新しい女〉の出現に不可欠な役割を果たしたことを認める。明治末期から大正時代にかけて、ジェンダー思想が変容していく状況の下で、まず男性作家はどのような女性像を生み出していたのか、その女性像には〈新しい女〉及び〈古い女〉の特徴がどのように合成されていたのか、という点に注目する。

文学作品は人々の普遍的な価値観や心理を表すだけではなく、作品が書かれた時代、その時代におけるジェンダー関係や思想、しきたり、そして当時生きていた人々の関心や抱負をも表すものとして、女性史、そして一般的な歴史の材料にもなり得ると考えられる。明治 30～40 年には日本における自然主義の普及とともに文学の内容も社会に認められる価値も変わり、文学は重要視されるようになると同時に、理念的に文学及び読者の共同体の男性ジェンダー化が行われていたと飯田祐子が指摘している。<sup>119</sup> 実際には、女性作家も、女性読者も当時存在していたことは言うまでもないが、理論上文学は「男の職業」として想定されていた。一方、日本と異なり欧米ではフェミニズムの第一波が既に盛んだったことや、世界中の文学に、気性の烈しく、あらゆる意味で自立を目指す新しい女性像が益々現れてきたことが明治時代以降、日本の作家を刺激せずにはおかなかった。トルストイの『アンナ・カレーニナ』(1877年)のアンナや『復活』(1899年)のカチューシャ、イブセンの『人形の家』(1879年)のノラや『ヘッダ・ガーブレル』(1890年)のヘッダ、ツルゲーネフの『その前夜』(1860年)のエレーナなどが、英国に留学した夏目漱石や米国に留学した有島武郎をはじめとする、日本の作家たちに影響を与え、同時代の日本文学のヒロインの多くを鼓舞した。本論文では特に『アンナ・カレーニナ』を中心に置き、アンナ像が日本文学の代表的な〈新しい女〉となった有島武郎の『或る女』の葉子に与えた影響に

---

<sup>119</sup> 飯田祐子『彼らの物語—日本近代文学とジェンダー』名古屋大学出版会、1998年、21-22頁。

ついて、ヒロインを比較しながら本章の第2節第2項で論じる。ここでは、明治末期から大正時代に発表されたいくつかの文学作品を取り上げ、少しでも〈新しい女〉像に当てはまると思われる部分があれば、それを引用し、作品の発表年の時系列でその分析を加える。

田山花袋の『蒲団』は明治40（1907年）年に文芸雑誌『新小説』誌上で発表され、そこには文学者を目指す芳子が文学を習いに上京し、結局好きな男性との関係のせいで田舎に返されるストーリーが、彼女を弟子として迎えた作家の時雄の視点から述べられている。芳子のモデルは現実に存在しており、それは花袋の弟子の岡田美知代だった。彼女の文学的なイメージを通して当時にとって新しいタイプだった女学生によくある家族背景や教育、性格や外見などの特徴が描かれている。

芳子の家は新見町でも第三とは下らぬ豪家で、父も母も厳格なる基督教信者、母は殊にすぐれた信者で、曾ては同志社女学校に学んだこともあるという。総領の兄は英国へ洋行して、帰朝後は某官立学校の教授となっている。芳子は町の小学校を卒業するとすぐ、神戸に出て神戸の女学院に入り、其処でハイカラな女学校生活を送った。（…）美しいこと、理想を養うこと、虚栄心の高いこと——こういう傾向をいつとなしに受けて、芳子は明治の女学生の長所と短所とを遺憾なく備えていた。<sup>120</sup>

興味深いことに、本稿の第1章で論じたロシア文学において描かれた〈新しい女〉のイメージとは、著しく異なっている点がいくつかある。先ずは、ロシアだけではないが、日本以外の諸外国、特に西欧諸国ではフェミニストは風貌が劣っているとして女性解放運動の反対者に嘲笑われることが多かったが、「明治の女学生」の一つの特徴として「美しいこと」が挙げられている。もう一つ、ロシアの無神論者のニヒリストカと対照的に、日本の〈新しい女〉はクリスチャンだったこと、もしくは日本にとって普通とは言えない、キリスト教的な家庭環境の中で育てられたことである。

キリスト教的な背景にはもう一つの相違が関係しているのだが、それは肉体関係に対して、ロシアと日本の急進的な女性が異なる態度を持っていたことなのである。ニヒリスト

---

<sup>120</sup> 田山花袋『蒲団・重右衛門の最後』新潮文庫、新潮社、1952年。

[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000214/files/1669\\_8259.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000214/files/1669_8259.html)]



カは第1章第1節第2項で述べたように、婚外の肉体関係を持つなど、当時から見ると性的に墮落した生活を送っていたことが、文学作品において仄めかされることが多かった。チェルヌイシェフスキーの『何をなすべきか』(1863年)が出たころに、家族を捨て、新しい形の男女関係を求める女性が増えた。それに応じ、イワン・ゴンチャロフは『断崖』(1869年)において、ヴェーラがニヒリストのマルクとの性交渉によって自由への跳躍をしようとするのを過ちとして描いている。十月革命のころには、一人のパートナーに制限されない婚外の肉体関係は、女性が男性との平等を強調するモチーフとして用いられることがあった。「自由恋愛」というのは、「自由セックス」を意味すると考える人も、男女問わず十月革命前後のロシアには少なくなかったようである。それは第3章で扱うアレクサンドラ・コロタイの小説にもかいま見ることができる。

一方、明治時代の日本にとっては「自由セックス」より、むしろキリスト教的な貞操の概念や中世のヨーロッパで流行っていた「プラトニック・ラブ」の崇拝といったものの方が新鮮であった。『蒲団』では、性的な面から見ると江戸時代と正反対の道德観が現れ、キリスト教の教えに倣い婚外の肉体関係は「汚れた行為」として認識されている。また、女性の自由もロシアの場合と異なる手段によって達成できるとされている。

男も折角ああして出て来たことでもあり二人の間も世の中の男女の恋のように浅く思い浅く恋した訳でもないから、決して汚れた行為などはなく、感溺するようなことは誓って為ない。(…)そして縷々として霊の恋愛、肉の恋愛、恋愛と人生との関係、教育ある新しい女の当に守るべきことなどに就いて、切実にかつ真摯に教訓した。<sup>121</sup>

〈新しい女〉の貞操について説教する時雄自身は女性解放運動の支持者の姿勢をとっており、弟子の芳子に「イプセンのノラの話や、ツルゲネーフのエレネの話」<sup>122</sup>を熱心に語る。ただ、『その前夜』のエレーナ(エレネ)に倣い両親に逆らい、好きな人と一緒になることを芳子が実際に成し遂げようとする時、彼がそれに反対したという事実は、女性の自由に対する彼の偽善的なところを示す。芳子が好きな田中と「汚れた行為」、つまり性交渉をしたことを知らされたたん、時雄は彼女を親に返すことにする。そして、恋人と肉体

---

<sup>121</sup> 田山花袋『蒲団・重右衛門の最後』新潮文庫、新潮社、1952年。

[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000214/files/1669\\_8259.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000214/files/1669_8259.html)]

<sup>122</sup> 同上。

関係を結んだ芳子自身も「墮落女学生」という自己規定に追い込まれる結果となる。

婚外の性交渉をした女学生に対する「墮落女学生」という評価は、芳子と時雄のケースに限るものではなかった。明治38年には『毎日新聞』に「女学生墮落物語」が連載され、続いて明治40年には『読売新聞』に「墮落女学生の果」という記事が現れた。<sup>123</sup> 女性の教育の促進、そしてそれがもたらすであろう女性の自己主張や性的自由に対する、男性中心的社会の恐れが、こうした形で表現されたと言えよう。19世紀ロシアにとって、文化や社会のバックボーンとなっていたキリスト教の枠組みの中で「貞操」は当然重んじられるべきものだった一方、キリスト教の道徳がまだそれほど浸透していない明治時代の日本の場合においても、なぜ女性の性的な「墮落」がそこまで騒がれたのだろうか。その理由はおそらく、宗教や文化を問わず、世界のどこにも存在した、あるいは現在も存在し続けている、女性の役割に対する狭く抑圧的な捉え方にあるのではないだろうか。つまり、特定の男性の相続人を生むべきとされる女性がもし性的な自由を手に入れた場合、彼女の子供が夫以外の男性との間にできた子供である可能性が生じる。婚外の男女の性交渉に対する二重基準が宗教と関係なく世界中に存在し、現在もなくなったとは断言できない。

『蒲団』とほぼ同時に『朝日新聞』に連載された夏目漱石の『三四郎』（明治41年/1908年）のヒロイン美禰子は一見芳子に似通う（新しい女）である。明治末期の田舎者の青年三四郎が大学勉強のために上京し、田舎では会ったこともないような様々な人と触れ合うことによって成長する。その成長には大学の授業、先生や先輩、同性の仲間との接触も必要だったが、彼にとっては理解のできない存在である女性たちとの触れ合いが、何よりも重要だったと言える。その中でも、上品かつコケティッシュで謎めいた美禰子との関わりは彼の成長にとって欠かせない役割を果たしている。『三四郎』の解説で美禰子像に触れない評論家はほとんどいないと言って良いだろう。二人の男性、三四郎及び野々宮の間に美禰子が置かれているという「漱石的三角形」がストーリーの基にある。明治日本の社会変化、そして哲学や科学、芸術などについての先生や先輩の話はさておき、三四郎にとって一番重要なのは美禰子に対する恋の問題である。彼は美禰子のおかげで異性との関係のニュアンスを少しずつ理解するようになり、世間知らずの田舎者から大人になることへの第一歩を踏み出す。

三四郎の視線を借り、読者は美禰子を「謎の女」として受け入れることになるが、この

---

<sup>123</sup> 藤森清「ジェンダーと囲い込み」『ジェンダーの日本近代文学』翰林書房、1998年、56-57頁。

女性像は、漱石門下の森田草平と心中未遂事件に関わった平塚らいてうをモデルとしていることがよく知られている。<sup>124</sup> 森田草平の『煤煙』に描かれたらいてう像と同様に、美禰子として生まれ変わった彼女は不可解な女性として描かれている。大部分が三四郎自身の視線に制限された小説の語りは、美禰子の内面世界を提示せず、多くの謎や解説のバリエーションを読者に残している。美禰子が登場する場面において、三四郎が既に恋心を抱いていると推測できるが、美禰子の顔も服装もちゃんと説明できず、「分からない」ことばかりで混乱している。小説の中で彼女は「西洋流」や「イプセンの女」と呼ばれ、それによって同時代の女性に比べ彼女の急進的な面が強調され、彼女は〈新しい女〉であることが仄めかされている。

「あの女はおちついていて、乱暴だ」と広田が言った。

「ええ乱暴です。イプセンの女のようなところがある」

「イプセンの女は露骨だが、あの女は心が乱暴だ。もっとも乱暴といっても、普通の乱暴とは意味が違うが。野々宮の妹のほうが、ちょっと見ると乱暴のようで、やっぱり女らしい。妙なものだね」

「どういうところも、こういうところもありゃしない。現代の女性はみんな乱暴にきまっている。あの女ばかりじゃない」<sup>125</sup>

与次郎も美禰子をほかの「現代の女性」と並べ、彼女が「イプセンの女」のように自由な行動ができると誤解しているようだが、広田先生はイプセンのヒロインの大胆な行動と異なる美禰子の心の「乱暴さ」について語り、男性の心をもてあそぶ彼女を「露悪家」とも呼んでいる。

美禰子は新しいタイプの女性として解釈されることが多いが、それは本当の新しさだったのだろうか。キリスト教会に通いながら聖書を自由に引用している美禰子が、恋愛に基づいた結婚を望んでいるのは、「西洋流」のロマンチック・ラブへの憧れであると同時に、愛するパートナーと生活することによって幸せを確保したいという人間の自然な願望でもある。美禰子には野々宮という愛する人が実際にいるにもかかわらず、彼は彼女に対する

---

<sup>124</sup> 山崎明子「『青鞥』の表紙絵—イメージとしての「新しい女」」『『青鞥』を読む』學藝書林、1998年、407頁。

<sup>125</sup> 夏目漱石『三四郎』角川文庫クラシックス、角川書店、1951年。

[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/794\\_14946.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/794_14946.html)]

関心を示しながらも結婚する意志を示さない。二人の将来性を疑った美禰子は、安定した社会的地位を獲得するために、よし子が断った見合いの相手との結婚を選ぶ。「あの女は自分の行きたい所でなくっちゃ行きっこない。勧めたってだめだ。(…)」<sup>126</sup>と漱石の分身である広田先生が美禰子について言っているが、結局のところ、人生のパートナーを選ぶという最も重要な決断の一つをすることで彼女はやはり旧世界の女と変わらない選択、つまり明治時代の日本社会と自身の気持ちとの「妥協」を取る。<sup>127</sup>

同時に、女性は自分の居場所を結婚によってしか確保できないという「旧き日本の圧迫」<sup>128</sup>があるため、両親を失った美禰子は他の選択肢が事実上ないのである。野々宮が美禰子に結婚を申し込まない理由について、彼女は直接には聞けず、彼にプロポーズすることもできない。その点においては、奥村博史との「共同生活」を始めるにあたって、彼との関係を潔くはっきりとさせた実物のらいてうとは大きな違いが見られる。一方、「無意識の偽善者」美禰子は、彼女を恋する三四郎を使い、野々宮を嫉妬させることによって、彼の実際の気持ちを把握しようとしている。男性の競争心に訴えかけながら「早く結婚しないと他の男性に奪われる」というメッセージを送っているように見える。好きな相手と平等かつ率直な形で話ができず、嫉妬によって早くプロポーズさせようという美禰子の作戦は結局失敗する。旧世界の女と変わらず、彼女は媚びることで男性を魅了すること、彼らに嫉妬心を抱かせること、つまり性的な魅惑によってしか自身の力を発揮できない。トルストイのアンナを思い起こさせる特質だが、美禰子は自分の性的な魔力によって社会での位置を確保しようとするだけでなく、それと同時に自己表現もしていると考えられる。社会の抑圧がある中でのその自己表現のために、三四郎を含め他人を傷つけることもためらわない美禰子は自身の振る舞い方をある程度自認し、最後に「われは我が咎を知る…」<sup>129</sup>と謝罪している。隣人愛の代わりに利己主義的なエロスの魅力によって生きようとする美禰子は真のクリスチャンからも〈新しい女〉からも遥かに遠く、愛する人に嫉妬させるために三四郎を苦しめた戦術家でありながら、結局は社会からの圧迫に耐えられなかった犠

---

<sup>126</sup> 夏目漱石『三四郎』角川文庫クラシックス、角川書店、1951年。

[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/794\\_14946.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/794_14946.html)]

<sup>127</sup> 藤尾健剛『漱石の近代日本』勉誠出版、2011年、107-108頁。

<sup>128</sup> 柴田勝二『夏目漱石—「われ」の行方』世界思想社、2015年、207頁。

<sup>129</sup> 夏目漱石『三四郎』角川文庫クラシックス、角川書店、1951年。

[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/794\\_14946.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/794_14946.html)]

性者のようにも描かれている。このような女性像からは、らいてうをはじめとする〈新しい女〉に対する漱石の皮肉めいた姿勢が読み取れる。

一方、よし子が縁談をきっぱりと断り、世間から見ると魅力的な結婚相手を拒否したというのは、明治時代の日本女性としては勇敢な行為だったといえよう。「この女に逢うと重苦しい所が少しもなくって、しかも落ち着いた感じが起こる」<sup>130</sup>という三四郎の言葉から、よし子は「女らしい特徴」と考えられてきた癒しの力を持っているが、それは誘惑者美禰子のエロティックな「暗い力」とは異なり、二つの女性性のあり方、トルストイが生み出したアンナとキティの対照を思い起こさせる。結局、家族の事情のために時代の常識に妥協した美禰子より、自分の気持ちに正直であり、男性と平等かつ素直な態度で接し、媚を一切売らず「愚な事ばかり述べる」自然体のよし子のほうが新しいタイプのヒロインであると言える。

文芸雑誌『スバル』に明治44年～大正2年（1911～1913年）に連載された森鷗外の『雁』は正に日本の過渡期の作品であるが、描かれている出来事は明治13年（1880年）に設定されているので、ここに登場する女性は、本稿で挙げてきた作品に出てくる女性たちよりも古い時代に属する。そのヒロインは、ここまで見てきた例と異なり女学生ではなく、封建時代の名残と呼べる妾である。金銭的な事情のために末造の妾になったお玉が大学生の岡田に恋をするというプロットになっている。もともと、自分の意志をはっきり表せず、男に騙され、人生の流れに任せていたお玉は末造が高利貸しという当時蔑まれていた仕事に就いていたことを発見し、それをきっかけに、今後こそ男に振り回されない決心をする。

お玉はにっこりした。「わたくしこれで段々えらくなってよ。これからは人に馬鹿にせられてばかりはいない積なの。豪気でしょう」

父親はおとなしい一方の娘が、めずらしく鋒を自分に向けたように感じて、不安らしい顔をして娘を見た。「うん。己は随分人に馬鹿にせられ通しに馬鹿にせられて、世の中を渡ったものだ。だがな、人を騙すよりは、人に騙されている方が、気が安い。なんの商売をしても、人に不義理をしないように、恩になった人を大事にするようにしていなくてはならないぜ」

---

<sup>130</sup> 夏目漱石『三四郎』角川文庫クラシックス、角川書店、1951年。

[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/794\\_14946.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/794_14946.html)]

「大丈夫よ。お父っさんがいつも、たあ坊は正直だからとそう云ったでしょう。わたくし全く正直なの。ですけれど、この頃つくづくそう思ってよ。もう人に騙されることだけは、御免を蒙りたいわ。わたくし嘘を衝いたり、人を騙したりなんかしない代には、人に騙されもしない積なの」<sup>131</sup>

それから間もなくお玉は窓から大学生岡田を見ているうちに徐々に惹かれ、彼との恋について空想するようになる。彼女だけの秘密である、大学生に対するその空想上の恋によって、ある意味気持ちに余裕を持ち、精神的にだけでも自立というものを自覚する。その変化に末造も気づき、それに改めて魅了される。

お玉は最初主人大事に奉公をする女であったのが、急劇な身の上の変化のために、煩悶して見たり省察して見たりした挙句、横着と云っても好いような自覚に到達して、世間の女が多くの人に触れた後に纔かに贏ち得る冷静な心と同じような心になった。この心に翻弄せられるのを、末造は愉快的刺戟として感ずるのである。それにお玉は横着になると共に、次第に少しずつじだらくなる。末造はこのじだらくに情慾を煽られて、一層お玉に引き付けられるように感ずる。この一切の変化が末造には分からない。魅せられるような感じはそこから生れるのである。<sup>132</sup>

末造は結局「お玉に情愛が分かって来たのだ、自分が分からせて遣ったのだと」<sup>133</sup>と都合よく彼女の感情の変化を誤解する。彼にとって分かりづらいその変化は彼との肉体関係によってではなく、岡田に対するお玉の「自立」したプラトニックな恋によってもたらされたのである。その結果、もともとナイーブでおとなしく、誰に対しても馬鹿正直に振舞っていたお玉は、末造の一日の留守を利用し、岡田に接近しようとする。だが、様々な事情が重なったため、そのチャンスがなくなってしまう。お玉に対し同じような感情を抱いていた岡田はその直後ヨーロッパに長期留学に行ってしまう、二人の両想いは結果をもたらさず、空想のままで終わる。

---

<sup>131</sup> 森鷗外『雁』新潮文庫、新潮社、1948年。

[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/45224\\_19919.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/45224_19919.html)]

<sup>132</sup> 同上。

<sup>133</sup> 同上。

言うまでもなく、お玉は〈新しい女〉ではない。むしろ、封建的な日本から明治時代に残っていた家父長制の一部である。ただ、明治初期には既に男に対する不信や一夫多妻制の拒絶はお玉の場合も、末造の正妻お常の場合も物語られている。正妻のような権利を持っておらず、周りの人と自由に接触できないお玉は、せめて恋の空想という形でその現実から逃避したい願望を持っている。空想から現実への一步を踏み出そうとした彼女と大学生の恋を、作者は実現させる形では描かなかったが、もし実現したとすれば、『アンナ・カレーニナ』や『或る女』に似通う女性のエロスの解放のストーリーになり得たであろう。その意味では『雁』は女性の反抗というより、その一步手前の反抗への意欲を描いていると言える。

大正5～6年（1916～1917年）に『文明』に連載された『腕比べ』では、永井荷風は江戸文学の伝統を受け継ぎ、ヒロインとして一般人の「他女」ではなく、恋愛の「プロ」である芸者を描いており、ここまでリストアップしてきた作品とは全く違う世界が描かれている。『雁』以外の作品は学生同士の恋愛を描いており、また半分プロと見なせる「妾」にならざるを得なかったお玉も学生岡田に恋を抱く。それとは対照的に『腕比べ』は花柳界の女性や彼女たちに近い歌舞伎の俳優、そして彼女たちの性を買うことによって花柳界の存在を支えている客という現代から見ると特異な人間や彼らの間に生じる特殊な人間関係を提示している。

日本人の固有の美意識や伝統を表現しているとされている花柳界も時代とともに変化せざるを得なかった。前項で述べてきたように、明治時代から導入されはじめたキリスト教の道徳や「ロマンチック/プラトニック・ラブ」を賛美する西洋文化とともに、日本人の「色の世界」に対する憧れが揺らぎ始めた。花柳界の賛美者とされている永井荷風でさえそれに気づかざるを得ず、芸者が自分が望まない男性に体を売ることの辛さを表している場面は前項で挙げた。ここでもう一人の登場人物、蘭花という新しいタイプの芸者に触れたい。彼女は旧世界の駒代と違い、経済的事情のためではなく好んで芸者になった。お客の前ではほぼ裸で西洋の石像を演出し、日本人に裸の体の美についてある意味で「教育活動」を行っている。花柳界のお客に蘭花は数回〈新しい女〉と呼ばれる。

(…) 一口にいえば唯お座敷で裸体を見せるんだね。西洋の寄席にゃそういう芸をするものがいくらもあるんだとき。西洋のこれは何処其処の何という名高い石像で御座いと何か口上をいってその通りな形をして見せるんだとき。真白な肉襦袢を着て髪の毛も石像に見えるように真白な鬘をかぶるんだとき。だから

ね、こいつアうっかり苦情も持込めないんだ。とにかく新しい女とかいう奴で、理窟をいわせちゃ切のねえ奴に違いない。<sup>134</sup>

裸体に対する明治時代の日本人の見解はアンビバレントであったろう。当時来日した欧米人が残した感想の中で、日本の男女の肌脱ぎや尻からげなどの日常的な裸体の習慣に対しては驚きや批判が読み取れる。したがって、明治政府が試みた欧米化の最初の対策の一つが、日本人の日常習慣をヨーロッパ的な規範に合わせようとする明治4年の裸体禁止令であったこと、そしてそれに続く地方での反対運動<sup>135</sup>から見ると、裸体の露出は大衆にとってごく普通のなじみ深いことだったと推測できる。

同時に、文明開化とともに西洋から行きわたったヌード画が当時の日本人に不思議に見えたように、蘭花のあからさまで挑発的な振舞いは花柳界好きな男性の目にスキャンダラスで「新しく」映ったのである。彼女のパフォーマンスは大人気を得るが、荷風はそれを言うまでもなく皮肉を込めて描写しているのである。その描写はロシアの〈新しい女〉だった「ニヒリストカ」像をも思い起こさせる。以前の時代の芸者の「品の良さ」と対照的な恥知らずの大胆さは、ニヒリストカの場合と同様に、乱交や墮落した本質を仄めかしている。駒代が代表している「粹」の旧世界は自墮落の蘭花や菊千代などの「新しい芸者」によって破壊されている。『腕比べ』の場合は、西洋を美的な理想などとする墮落した〈新しい女〉は、男性作家たちが親しんできた日本の美、「粹」の世界を脅かすものとして描かれているであろう。

大正8年（1919年）に『大阪毎日新聞』に掲載された武者小路実篤の『友情』は、当時ポピュラーなモチーフであった、仲間の男性二人と女性一人という三角関係のストーリーを元としている。中編は二つの部分から構成され、「上」は最終的に恋愛ゲームの敗者になった野島によって語られ、「下」は野島に対する謝罪を告げる勝者の大宮による手紙の形をとる。杉子に対する愛を友人大宮に告白してきた野島は、杉子が実際大宮を愛している上その愛は両想いであることを知り、裏切られたような感覚を味わう。この小説は夏目漱石の『それから』に対する返答として知られ<sup>136</sup>、小説の中でも、手紙で杉子が『それから』

---

<sup>134</sup> 永井荷風『腕くらべ』岩波書店、2006年、212頁。

<sup>135</sup> 江種満子「ジェンダーと身体と言説」『ジェンダーの日本近代文学』翰林書房、1998年、40頁。

<sup>136</sup> 江種満子『わたしの身体、わたしの言葉—ジェンダーで読む日本近代文学』翰林書房、2004年、231頁。



に言及しているのはそれを示唆しているといえるだろう。二人の男性と一人の女性の三角関係には、夏目漱石の小説と異なる結末、ある意味で「ハッピーエンド」を武者小路実篤は提案する。野島の未練はさておき、愛し合う二人にとってのその幸せな結末は、女性主人公杉子の直接的な行動のおかげであったという点は注目に値する。彼女が手紙の中で大宮に愛を告白する部分を、以下に引用する。

私は何もかも申します。そして私の一生をきめてしまいたく思います。それは恐ろしすぎることです。しかし黙って運命に任せるわけにはゆきません。私は死力を尽くして運命と戦います。戦うというよりは運命を開こうと思います。私は静かに門のそとに立って戸のおのずとあくのを待ちたくも思いました。しかし今はその戸をたたけるだけたたきたいと思います。私の真心が通じなければしかたがありません。ともかく私は一生の勇気をふるって戸をたたきます。<sup>137</sup>

大宮は杉子のこの力強く正直な気持ちで溢れている表現力、そして行動力のために、友人野島のために好きな女性をあきらめるという選択を改め、結局彼女に対する自身の愛を打ち明ける。彼は女性が従順で消極的であるべきだという旧世界の偏見を追い払い、新しいタイプだと言える勇敢で率直な女性を受け入れることのできる男として描かれている。一方、野島は杉子を崇拜に近い形で熱愛しているが、その愛は極めて自己中心的で、盲目的である。そもそも、彼にとっての女性は妻の役割に縛られ、あくまでも男性のために存在しているものに過ぎないというジェンダー枠組みを超えていない。

彼は女の人を見ると、結婚のことをすぐ思わないではいられない人間だった。結婚したくない女、結婚できない女、これは彼にとっては問題にする気になれない女だった。

そういう女にいい女がいると彼は一種の嫉妬さえ持ちかねなかった。女は彼にとっては妻としてよりほか、値のないものだった。結婚が彼にとってすべてであった。女はただ自分にだけたよってほしかった。<sup>138</sup>

彼は自分にたよるものを要求していた。自分を信じ、自分を賛美するものを要求していた。そして今や、杉子自身にその役をしてもらいたくなった。杉子は彼

---

<sup>137</sup> 武者小路実篤『友情』岩波書店、1994年、104頁。

<sup>138</sup> 同上、9頁。

のすることを絶対に信じてくれなければならなかった。世界で野島ほど偉いものはないと杉子に思ってもらいたかった。彼の仕事を理解し、讃美し、彼のうちにある傲慢な血をそのままぶちあけてもたじろがず、かえっていっしょによろこべる人間でなければならなかった。<sup>139</sup>

野島の「愛情」は実際、自己満足しか要求せず、美しい杉子がもし彼の妻になったら、彼女は「トロフィー」のような役割を果たすことになる。信仰に対する姿勢からして、大宮の従妹武子が思想的には彼の理想的女性に近いと野島自身は認めるが、それでも神を必要としない即物的な杉子の外見に魅了され、彼女に対するパッションを抑えられない。彼女を幸せにすると野島は宣言している、ベアトリーチェを事実上知らなかったダンテのように、まだ殆ど言葉を交わさなかった「杉子と夫婦になることを考えると、それは樂園にいることを考えるようなものだった」<sup>140</sup>と、極めて妄想的な「ロマンチック・ラブ」の虜になってしまう。彼は、愛する人と一緒になれば、幸せは絶対訪れると、非現実的な期待を抱いている。その期待は往々にして外れるというのは、例えば北村透谷の実際の生活からもうかがえる。

運よく、杉子は野島のパッションの本質を鋭く見抜き、「野島さまは私というものをそっちのけにして勝手に私を人間ばなれしたものに築きあげて、そして勝手にそれを讃美していらっしゃるのです」<sup>141</sup>と的確に判断する。代わりに、「私のいい性質を認めてくださる」<sup>142</sup>、つまり実際に彼女を愛する大宮を選び取る。若い女性にとってこうした鋭い判断力を有していることはなかなか珍しいかもしれないが、友人の愛情の本質を誤解した大宮と違い、杉子にはこうした心理の理解力、そして既述のように表現力や行動力があつた。そうでなければ、小説の結末は全く別物になってしまっただろう。武者小路が野島を勝手な妄想家で「傲慢な」主人公として描いたこと、そして結果的に彼を恋愛の敗北者にしたことは、偶然ではないように見える。旧世界の男性の自惚れ、女性の外見の美しさにとらわれすぎることで、そして女性の存在に対する狭く古い視野を武者小路は批判的な目で見ていたことがうかがえる。

---

<sup>139</sup> 武者小路実篤『友情』岩波書店、1994年、15-16頁。

<sup>140</sup> 同上、20頁。

<sup>141</sup> 同上、106頁。

<sup>142</sup> 同上。

本項の最初に述べたように、明治時代の40年代頃から、日本文学においては女性の理念的分離が行われたとされ<sup>143</sup>、理念的には女性は文学の「主体」にも「対象」にもされなかった。一方、見てきた作品からもうかがえるが、女性は文学テキストの不可欠な一部として在り続け、世界中や日本国内の女性解放思想、そして西洋の文学から日本へ流入した新しいタイプのヒロインに刺激されていた。日本文学における女性像、そしてその裏にいた実際の日本女性はどのように変わっていったのかを知るには、文壇の主な参加者だった男性が明治末期から大正時代にかけて生み出した多くの文学作品が重要な手がかりになる。江戸時代から受け継がれた家族の旧い制度の名残としての妾、花柳界の名残としての芸者が文学において描かれ続けていたと同時に、新しい女性像も現れた。明治30年代、「良妻賢母」を育てることを目的に、女子の中等教育及び高等教育に「高等女学校令」（明治32年/1899年）が出され、全国にわたり制度化された。そのために女学生は日本社会の新しい層を形成し、文学にも新しいタイプのヒロインとして次々と現れはじめた。「青鞥」のメンバーに代表される当時の文字どおりの〈新しい女〉には本稿の第3章で触れるが、ここでは男性作家がどのように当時の女性を描いていたのか、妾や芸者などはどのような「新しさ」を備えていたのか、〈新しい女〉の先駆者になった新しいタイプのヒロインはどのように文学作品において現れ始めていたのかを一通り見てきた次第である。

### 1.3 トルストイの受容、白樺派を中心に

雑誌『白樺』（1910～1923年）は『青鞥』（1911～1916年）とほぼ同時期に出版されており、両者は「大正デモクラシー」の時期とほぼ一致している。また、この時期にトルストイ・ブームも日本で起きた。『白樺』のメンバーは上流の男性だったが、伯爵だったトルストイがそうであったように、彼らは自分の特権階級の背景に後ろめたさを感じていた。彼らの人道主義や彼らが抱えていた自由の理想は、女性のみで構成された『青鞥』とさほど遠くはなかったかもしれない。『白樺』の設立者武者小路実篤は熱心な「トルストイアン」として知られており、白樺派だった有島武郎も武者小路実篤の活動を時折批判しながらも、トルストイの思想や文体に最も強い感銘を受けた一人である。後者については、『アンナ・カレーニナ』に感動したことが『或る女』の執筆に大きく影響したということについて本章の第2節でより詳しく触れるが、ここではトルストイの思想及び作品の導入に主眼を置き、武者小路実篤、

---

<sup>143</sup> 飯田祐子『彼らの物語—日本近代文学とジェンダー—』名古屋大学出版会、1998年、21-22頁。

志賀直哉、有島武郎という白樺派の広く知られているメンバーを中心に、トルストイがどのように日本で受け入れられたかということについて論述する。

欧米諸国におけるトルストイ受容は 1850 年代に小説から始まったが、日本でのトルストイ受容には、最初はエッセーや評論を通して思想家として、その後『アンナ・カレーニナ』などの物語作者として人気を得たという流れが見られる。まずはトルストイの社会的、哲学的な思想が好評を得たが、この流れを変えた 1 つの出来事として、柳富子は内田魯庵による『復活』の訳(1905 年)を挙げている。<sup>144</sup> 『アンナ・カレーニナ』も日本人にとってそのような転機的な作品になる可能性が高かったが、諸々の事情によってはそうならなかった。1902 年に『文藝』に連載され始めた瀬沼夏葉と尾崎紅葉による『アンナ・カレーニナ』の共訳は紅葉の 1903 年の死亡のために中断した。<sup>145</sup> 次の柴田流星の訳書『アンナ、カレンナ』(1906 年)は批判され<sup>146</sup>、当時の日本において広く知られることに至らなかった。同時に、有島武郎のように、英語訳によってトルストイの作品に親しむきっかけを得ることも日本の知識人にとって珍しくなかった。

トルストイの思想が日本人に広く受け入れられた理由として、八島雅彦は、明治時代の日本社会の変容や道德の危機があったと述べている。<sup>147</sup> 日本の近代と呼ばれた新しい時代が始まったが、日本社会がうまく機能するためには儒教に替わる立身出世主義や欲望充足のみでは充分ではなく、そのような状況下でトルストイの弱者を守るというパターンリズム的思考(家父長主義)が新しいものというよりはむしろ懐かしいものと感じられたため、容易に受け入れられたのだと八島は述べる。キリスト教に対するトルストイの正統ではない主張や無教会主義も、日本のプロテスタント派の知識人のなかでは好評だったようである。徳富蘆花や武者小路実篤などの文学者から一般読者までトルストイを人生の教師と見なした。トルストイの著作を始めとしたロシアの文学は、西洋化が及ぼした道德の隙間を埋め、「人間は如何に生きるべきか」を真剣に考えさせる「人生論の教科書」になったのかもしれない。隣人愛や利他主義、人間のあるべき姿などの問題を生涯追及したトルストイの思想は、日本の

---

<sup>144</sup> 柳富子『トルストイと日本』早稲田大学出版部、1998 年、50 頁。

<sup>145</sup> 加藤百合『明治期露西亜文学翻訳論攷』東洋書店、2012 年、241 頁。

<sup>146</sup> 柳富子『トルストイと日本』早稲田大学出版部、1998 年、50 頁。

<sup>147</sup> 八島雅彦「日本におけるトルストイの現象」柳富子『ロシア文化の森へー比較文化の総合研究』ナダ出版センター、2001 年、488-504 頁。

作家に現在まで影響を与えてきたと言っても過言ではない。

1904年に勃発した日露戦争は、平和主義を主軸とする信条の持ち主だったトルストイに影響を与えずにはいなかった。戦争勃発のその日、作家は自らの日記に次のように記述した。

И всем предстоит, кроме рассуждений о том, что будет от войны для всего мира, ещё рассуждение о том, как мне, мне, мне отнестись к войне? Но никто этого рассуждения не делает. (...) А делать по отношению войны ему очевидно что: не воевать, не помогать другим воевать (...).<sup>148</sup>

世界が戦争によっていかに変わるかについての議論だけではなく、自分自身が戦争をいかに扱うべきか、という議論をしなければならない。しかし、誰もその議論をしない。(…)戦争をいかに扱うべきかの答えは明らかである。つまり、戦わない、他人が戦うのを手伝わないということだ(…)

マスコミに扇動されていた日本とロシアとの相互の憎悪をあおる風潮に逆らい、最初からロシアか日本かという見方ではなく、戦争に巻き込まれた民衆に等しく同情する姿勢をトルストイは強調していた。トルストイのその姿勢、戦争に対する無条件の非難は、1904年の評論「悔い改めよ」で表明されている。日本では、「悔い改めよ」は幸徳秋水及び堺利彦の翻訳で『平民新聞』に掲載され、社会主義者を鼓舞した。また、「悔い改めよ」は与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」執筆の契機になったとされている。同じころ賀川豊彦はトルストイのこの作品を読んで反戦思想を形成することになる。戦争を含むいっさいの暴力に対するトルストイのその激しい批判は、有島がトルストイの思想や文学に惹かれる契機となった。アメリカ留学中にキリスト信者、そして一般的にキリスト教に失望し始めた彼にとってはトルストイが道徳的な人間かつ「真のクリスチャン」を代表する人物であった。その経緯については本項の最後により詳しく論じる。

トルストイは晩年まで善と悪、人間の使命、宗教について絶えず考え、その結果として生まれた評論などが日本のプロテスタントに好評を博した。実際、無教会主義や平和主義、生活の簡素化といったトルストイの基本的な思想は、明治初期にクラーク博士によっ

---

<sup>148</sup> Толстой Л.Н. Полное собрание сочинений. Т. 55. М., 1937. С. 10 – 11.

て北海道で広まったプロテスタンティズムのクエーカー派の思想に酷似しているのである。トルストイ自身もクエーカー宗派に興味を持ち、その信者と交流をしたことがある。クラーク博士が学長を務めていた北海道農学校（現在北海道大学）出身の内村鑑三や新渡戸稲造などの宗教思想家は、明治時代末期から大正時代までの日本知識人に影響を与えた。本項で扱っている有島武郎、武者小路実篤、志賀直哉という白樺派の中心的な人物たちはトルストイを愛読していた内村鑑三の家に入出入りする程、彼と親しくしており、その思想に感化を受けたことは言うまでもない。

雑誌『白樺』が創刊されたのはトルストイが死亡した同年（明治43年/1910年）であったが、それ以降も彼の思想は白樺派の文学者を中心に、日本の文壇に影響を与え続けた。大正期においてトルストイの声望を高めた出来事は、大正3年（1914年）の『復活』の上演が大成功を収めたことだった。殺人の濡れ衣を着せられ、流刑に処せられた売春婦カチューシャを演じた松井須磨子が歌った「カチューシャの唄」も広く知られるようになり、大衆層にまでトルストイの作品や思想を一層広めたのである。大正中期に月刊誌『トルストイ研究』が発行され、いわゆる「トルストイ・ブーム」が起きた。明治44年（1911年）から刊行された『青鞥』とともに展開された日本の女性作家兼フェミニストたちの執筆活動と同時に、「大正デモクラシー」と呼ばれる民主主義の発展を特徴とするこの時代は、トルストイ熱も、人道主義で知られていた白樺派の活躍も絶頂にあったと言えよう。

武者小路実篤（1885～1976年）は、徳富蘆花もそう呼ばれたように、当時の人々から「トルストイアン」と呼ばれるほど、白樺派の作家たちの中でもトルストイに最も感銘を受けた一人であった。武者小路自身は「トルストイアン」と呼ばれるのは嫌がり、それを否定していたが、1915年にトルストイから受けた影響についてこう述べている：

自分は日本のいろいろの人から感化は受けた。しかしそれを皆あわせてもトルストイから受けた感化には及ぶまい。（…）新聞や雑誌を見て片仮名のトの字があると初恋の人が恋人の名を思いがけなく見出した時のように赤面した。（…）トルストイのことをいくら他人が賞めても賞め足りないように思った。<sup>149</sup>

かなり感情的な記述に見えるが、武者小路の他のエッセーや記述、そして彼の活動を見ると、これは決して大げさではなかったことがうかがえる。彼はトルストイと直接会った

---

<sup>149</sup> 武者小路実篤全集、第3巻「感心しない作品と」小学館、1988年、483頁。

ことはなかったが、彼との「関係」は複雑で、崇拜や離反の時期を含め、親子の関係か、ときには恋人の関係を思わせる。トルストイについて夢をよく見ていたという武者小路の回想は、一般人から見ると多少奇妙なところがあり、「マニア」という言葉が思い浮かぶかもしれない。

武者小路がトルストイの文学と出会ったのは、18歳の頃、叔父を通してだった。当時訳されたばかりの『我が懺悔』や『我宗教』という宗教を巡るトルストイの評論は武者小路が最初に読み、「思想家のトルストイ」を知った。学習院時代、トルストイを賛美していた内村鑑三の家に志賀直哉とともに出入りしていた時も、トルストイを話題にしていたに相違ない。学習院においては、武者小路のトルストイ崇拜は広く知られ、彼自身が「トルストイ」というあだ名まで付けられた。1905年に『アンナ・カレーニナ』を読み、「現代の全欧羅巴の文学の中で比肩され得るもののない素晴らしい傑作」<sup>150</sup>という賛美の感想を残した。文学的な影響というより、トルストイに思想的・宗教的な著作の影響を武者小路は受けたと阿部軍治が述べているが、<sup>151</sup> 元々法学を志していた武者小路がトルストイの著作を読むことによって文学に心が引かれ文科に入ることになったことから、彼の文学への目覚めにはトルストイの文学の決定的な影響が否定できない。その後もトルストイと同様、大学を中退し、大学での勉強より読書や執筆活動を選んだのは、トルストイの影響が働いていたのではなかろうか。

トルストイの教えの大部分を受け入れた武者小路であるが、肉体の否定、言い換えれば性欲や性行為に対する、トルストイ特有のネガティブな眼差しは容認できなかったようである。トルストイ自身の思想や思索において、男女のエロスの扱いは中心的な位置を占めており、時間の経過とともにより破壊的な様相を呈し、晩年には男女の性的関係を一切否定する思想に至った経緯について第1章第2節で述べた。このような極端な見方はトルストイを崇拜していた武者小路にとっては衝撃的であった。それは『クロイツェル・ソナタ』を1906年に読み、「愛！ 結婚！ 家庭！ すべて虚偽、虚偽、虚偽！」<sup>152</sup>という残された感想からうかがえる。同時に武者小路は、トルストイの禁欲的な道徳に対して疑問

---

<sup>150</sup> 武者小路実篤『トルストイ』大日本雄弁会講談社、1936年、301頁。

<sup>151</sup> 阿部軍治『白樺派とトルストイ—武者小路実篤・有島武郎・志賀直哉を中心に』彩流社、2008年、25頁。

<sup>152</sup> 武者小路実篤全集、第1巻「彼の青年時代」小学館、1987年、216頁。

を抱くようになった。その時点までトルストイの教えを無条件に受け入れてきた武者小路は、霊も肉体も持つ人間である自分の限界に気づき、トルストイの理念を基にしながらも、独自のより寛容で穏やかな思想を発展させていった。

トルストイの言っていることにはたしかに真理がある。しかし肉体を有することにまた僕は人生の意味があると思い、トルストイは偉いが、自然はなお偉いと思わないわけにゆかなかった。<sup>153</sup>

このように、トルストイと有島の両者を苦しませていた概念、キリスト教に特徴的だとされている「霊」と「肉」の対立が武者小路にもあったが、彼はそれを乗り越えることに成功したと言える。それを機に武者小路のトルストイに対する「反発」が始まり、「何だかトルストイを卒業した気がした」<sup>154</sup>とまで述べたことがある。しかし、阿部軍治が指摘しているように、それはあくまでも「気がした」にすぎず、武者小路のそれ以降の発言からも、活動からもトルストイの絶えまない影響がうかがえる。<sup>155</sup>

白樺派の作家たちについて全般的に当てはまることだが、武者小路は特に大正デモクラシー時代の人道主義者として知られている。彼はトルストイの他にユゴーなどの世界的に認められている人道主義の作家に感化を受け、隣人愛、自己成長や自己完成といった概念に基づき、現在まで存在し続けてきた「新しき村」を1918年に創立した。それはトルストイアンの集まりではないと、武者小路自身は主張していたが、ロシアのトルストイアンからも仲間と見なされ、手紙の交換までしていた。1922年に、武者小路は「人類愛について」で自分の人道主義的世界観について以下のように述べている：

(…)自分の望む処は各個人が、人類の生命を尊敬すると同時に個人の生命を尊敬し、全体も部分も生きることである。そしてそれは各個人の正しき自覚、人類と自己、他の個人と自己の関係をはっきり会得し、他人を生かす道で自己を生

---

<sup>153</sup> 武者小路実篤全集、第15巻「自分の歩いた道」小学館、1990年、540頁。

<sup>154</sup> 武者小路実篤全集、第1巻「自分の真価」小学館、1987年、420頁。

<sup>155</sup> 阿部軍治『白樺派とトルストイ—武者小路実篤・有島武郎・志賀直哉を中心に』彩流社、2008年、80-81頁。



かすことである。<sup>156</sup>

ここでは、キリストの教えに基づいたトルストイの哲学を思わせるところもあり、独立した、集団主義も個人主義も含む武者小路の独特な姿勢がうかがえる。トルストイはどちらかというところ、個人主義に偏り、「新しき村」のようなロシアにおけるトルストイアンの集落を批判し、救いや「革命」は個人個人のなかで行われるべきであると主張していた。もう一つの相違点は、武者小路の「自己を生かす」というある意味で利己主義的なところ、言い換えれば自我を自由にさせるということである。それにひきかえ、特に晩年のトルストイは非常に厳格な姿勢を取り、真実の道は一つしかないとし、それを追及するべきだというふうに説いていた。その「真実の道」というのは、トルストイが晩年にキリスト教からやや離れたにもかかわらず、キリスト教的な理想に近く、隣人愛や貞操、そして質素を重んじる生き方なのである。思想的な面から見ると武者小路とトルストイの思想は多少離れていったが、結局隣人愛や質素などを基にする「新しき村」の生き方はトルストイの原則をなぞっていると言える。

1936年に武者小路は徳富蘆花に倣い、トルストイの評伝、『トルストイ』を発表した。そこで徳富蘆花の著作と対照的に、トルストイの文学作品に殆ど留意せず、彼の人生及び思想に焦点を当てた。その点においては武者小路のトルストイ受容の特色が現れていると言えるだろう。有島武郎もトルストイの社会的・宗教的な思想を導入したのだが、武者小路はやはりトルストイの真の弟子だった。無条件的なトルストイ崇拝を出発点に、時を経るごとに独特の思想を展開していったとはいえ、白樺派の中でも武者小路は結局文字通りの「トルストイアン」だったと言える。

志賀直哉（1883～1971年）はトルストイの作品に感化はされたが、思想的な側面から見ると、本項で取り上げている3人のうちでトルストイの影響がもっとも薄かったと考えられ、そのために彼のトルストイ受容についての資料も少ない。志賀も有島と武者小路のように資産家の家柄に生まれ、学習院に通い、武者小路と同じく帝国大学（現在東京大学）に進学したが、武者小路と同様、授業に対する興味が薄く、同じく中退する結果になる。彼も1901年から内村鑑三の家に入り出ており、そこではトルストイの話もするチャンス

---

<sup>156</sup> 武者小路実篤全集、第4巻「人類愛について」小学館、1988年、165頁。

があっただろうが、1907年から彼は内村からも、キリスト教からも離れていく。

ロシアの作家の中で志賀はトルストイの他にチェーホフ、ゴーリキー（彼の短編を訳したこともある）、ツルゲーネフを愛読していた。不思議なことに、武者小路はロシアの作家の中でトルストイの次にドストエフスキーを好んでいたのに対し、志賀はドストエフスキーを読みはしたもののあまり好まなかったようである。ドストエフスキーとトルストイの主人公を対比しながら、志賀はこう述べている：

あの人（ドストエフスキー）のものはあの人独特の気持ちの飛躍があるので分からない事がある。ところが、それがトルストイになるとよく判る。トルストイの長編は『アンナ・カレニナ』に感心した。『アンナ・カレニナ』にしても全体が好きだというわけではないけれども、実によく書いてある。出てくる少しも重要でない人物、例えば馭者と下男とかでも簡単に書いてあって、いやに浮び出す。<sup>157</sup>

いつ彼がトルストイを初めて読んだのかは、確かではないが、トルストイを弟子に推奨していた内村の家で初めて聞いた可能性が高い。1906年の有島武郎の弟である有島生馬宛ての手紙でトルストイの『復活』についての志賀の興味深い感想が書かれてある。『復活』を思い出すきっかけは、愛人からもうけた子供を墮胎し、女義太夫として活躍している広勝という女性に志賀が同情したことだった。

(…) アゝ僕等には倒れない内の広勝を倒れないようにする事は或は出来たかも知れぬが、既に倒れたカチューシャは、己れにネクリードフの概なくんばどうする事も出来ぬ、されどカチューシャに対するネクリュードフにして初めてネクリュードフになれたので今広勝の墮落に対し自分が生なかな事をし反って虚偽を行う如き事あらば、(ネクリュードフの行いには少しの虚偽はなかった、彼は彼の心に従って(良心より広い心)に従ってやった、然し僕等にはそんな心に到底なれぬ) 罪であろう、こう思つて僕は憐れなる広勝の墮落は陰ながら善きに導かれん事を祈る計りにしている、それでは悪いだろうか？<sup>158</sup>

---

<sup>157</sup> 志賀直哉全集、第9巻、岩波書店、1999年、234頁。

<sup>158</sup> 志賀直哉全集、第17巻、岩波書店、2000年、98頁。

下女カチューシャに惹かれ、彼女と肉体関係を結んで間もなく彼女を捨てたネフリュードフは、家から追い出された彼女が娼婦になる直接的な原因を作った。そのネフリュードフを志賀が上記の手紙で弁護しているということが読み取れる。「広い心」のために女性を誘惑したという志賀の捉え方は、明治時代まで日本人にとって固有だったエロスの賛美を思い起こさせる。志賀自身も当時、女中と関係を持ち、結婚を決意したことがあったが、結局彼女が郷里に返される結果となった。『復活』のプロットも、カチューシャとの再会やそれ以降の出来事を除いて、トルストイの伝記的な出来事に基づいている。彼が捨てた下女のその後の運命は実際不明だが、その出来事についてトルストイは一生悩み、反省していた。その苦悩のために、青春時代に犯した過ちを晩年にあらためて考え直す試みとして『復活』を書いたといえる。社会的地位の観点から見ても、ジェンダーの観点から見ても当時弱い立場に立っていた女性と肉体関係を結び、そして彼女を捨てることによって彼女の人生を大きく変える、つまり、自身の快樂のために個人の命をほぼ台無しにするという経緯は、トルストイと志賀の人生において奇妙に共通している。ただし、それに対する両者の異なる認識が上記の手紙の引用からもうかがえる。

志賀の唯一の長編『暗夜行路』（大正10年/1921年～昭和12年/1937年）の中では、『復活』の話にたとえられる女義太夫の話が重要な部分を占めている。そこは他の女性登場人物の場合も、主人公の時任謙作に最も近い女性だった母親や妻を含め、「女の墮落」や「女の過失」というモチーフで繋がり、長編の構造を作っている。こうしたモチーフは、トルストイの『復活』、他に志賀が感化された『アンナ・カレーニナ』や『クロイツェル・ソナタ』、そして第1章で取り上げた『戦争と平和』や『家庭の幸福』で中心的な役割を果たしている。そのモチーフの扱い方やそれに対する男性主人公の態度は大きく異なっているが、トルストイの文学の受容が志賀の長編『暗夜行路』に影響を与えた可能性は否定できない。

特に性関係の倫理観においてトルストイとは異なる立場をとり、のちにキリスト教からも離れていった志賀には、トルストイの宗教的な影響も、思想的な影響もそこまで強くなかったと考えられる。武者小路・有島の両者を苦しませていた霊肉争闘は、おそらく志賀にはそこまで切実ではなかった。『暗夜行路』において、数人の遊女との関係を含む主人公时任謙作のボヘミアン的な生き方は、志賀自身の青春のエピソードをもとにしているようである。従って、売春問題やそれに関わる女性解放には、志賀は特に関心を持っていなかったことがうかがえる。トルストイも当然フェミニストではなかったが、『復活』から明ら

かなように、彼は娼婦にキリスト教的な隣人愛の観点から深く同情していた。性関係を楽しむ志賀とそれに絶えず悩むトルストイという両者の世界観はかけ離れている。一方志賀は、トルストイの長編、特にその登場人物の現実に即した描き方に感銘を受けており、彼の著作にはトルストイの影響があった可能性が高い。西垣勤の主張によると、ロシア作家の中で志賀に最も大きな影響を与えたのは、トルストイであったという。<sup>159</sup> 思想や道徳観の相違にも関わらず、トルストイが志賀に与えた感銘は無視できないということは、上に引用した志賀の感想からも明らかであろう。

有島の場合、トルストイの文学に接したことが自身の著作、そして人生そのものにおいても大きな役割を果たした。有島は札幌の農学校で農業を勉強していたが、米国留学中にトルストイをはじめとする様々な文学を読み漁った結果、農業の代わりに文学の道に進む決意をした。こうした経緯は武者小路の場合も同様で、両者の場合においてトルストイの著作が人生を左右したと言える。トルストイの極端で激しい性格は穏やかな有島の人格とは正反対のように見えるが、思想的な面から見ると、実は二人の間には共通点が多い。育った家庭環境にも類似点があり、有島の祖母と母は信心深い仏教徒だった一方、トルストイ一家の女性は、正教を熱心に信じていた。つまり、国も、宗教も異なる家庭でありながら、どちらにおいても女性の信仰心が強く、それは両者の著作において宗教及び信仰が中心的な位置を占めるようになった原因だったのかもしれない。そして、それぞれの長編において、女性の精神や葛藤が鮮やかに描かれている。その一例である、『アンナ・カレーニナ』と『或る女』の比較分析を本章の第2節第2項で行う。ここでは有島が『アンナ・カレーニナ』から受けた印象や彼の感想も取り上げる。そして、有島がキリスト教から離れた経緯やそれに伴う彼の思想の変化については本章の第2節第1項で触れるが、ここでは、彼が『アンナ・カレーニナ』以外のトルストイの文学作品をどのように受け入れたか、それはどのような影響を彼に及ぼしたのか、見ていきたい。

いつごろから有島がトルストイに注目したのかは不明であるが、確かであるのはアメリカ留学（1903～1907年）の前に有島が『復活』をすでに読んでいたということである。有島の恩師だった新渡戸稲造がトルストイに感化を受けていたため、有島が彼から、あるいは同じく親しくしていた内村鑑三から、トルストイについて初めて聞いた可能性も考えられる。聖

---

<sup>159</sup> 西垣勤『白樺派作家論』有精堂出版、1981年、54-55頁。

書を研究し、福音を翻訳したこともあり、キリストの教えを死ぬまで信じていたトルストイは、キリスト教の儀式や教理に疑いを抱くようになった。それは晩年の作品で明確に示され、それらを読んだ有島にとっても、自身の信仰を見直すきっかけになったに相違ない。『我宗教』について 1903 年の日記に書いた有島の感想からは、キリスト教の教理と実行が一致すべきというトルストイの主張に特に賛同していたことがうかがえる。次節でも論じるが、おそらくこの教理と実行の不一致こそが、留学中に有島がキリスト教に失望したことにつながった。他に、トルストイが疑っていたキリスト教の基礎である復活の概念を有島も探求し、トルストイの宗教観、そして特に復活の概念について内村と論じ合ったこともあるが、直接的な回答を得られず、他界に関するキリスト教の解釈に疑問は残ったままだった。そのころ、有島は徳富蘆花の著書『トルストイ』を読んでおり、彼が既にトルストイに興味を持っていたということがうかがえる。

1903 年 8 月、有島が友人の森本厚吉と渡米し、シカゴで見たトルストイの『復活』に基づいた劇で感涙にむせんだ。在米中、有島は最初クエーカー派のハバフォード大学で学びながら、主に宗教を巡る読書をしていた。日露戦争が勃発し、それに対するクリスチャンである米国の人々の反応は有島を失望させ、彼のキリスト教の教えに対する疑いをさらに深刻化させた。一方、トルストイの断固とした反戦の姿勢に感動し、次の言葉を日記に残した。

帝笏ト戦フテハ我筆屈ケラレンヨリハ死スルニ若カズト云ヒ、教権ト闘ツテハ基督ノ名ヲ耻ムル唯一ノ外道ト罵リ、筆ヲ折レヨ劍ヲ捨テヨ而シテ犁ト鋤トニ帰レヨト呼ンデ自ラ其劍ト筆トヲ捨テ、貴族ノ血メグレル其長軀ヲ駆ツテ荒寥タル北露ノ麦隴ニ屹立シ、頭ニ古今ヲ収メテ手ニ塗泥ノ農具ヲ握リシ其人。(…) 神ヨ、彼ノ頽齡ノ余等ガ師ヲ憐レミ給ヘ。<sup>160</sup>

『キリスト教の教え』や『反省せよ！』などのトルストイの著作に親しんでいくなかで、有島は正教会に破門されたトルストイに真のキリスト信者を見出していた。9 月末、彼はハーバード大学大学院に移り、ロシアの無政府主義者クロポトキン、そしてエンゲルスなどを通して、社会主義に帰着した。元来芸術遊戯説の立場をとり、自己を無理矢理に宗教書などに向かわせていた有島だが、ハーバードに移った後、哲学書や宗教書ばかりでなく、文学書をよく読むようになった。その時期に、有島はその後の人生の針路を農業から文学へ大きく

---

<sup>160</sup> 有島武郎全集、第 10 卷「観想録 第 5 件」筑摩書房、1981 年、455 頁。

変えることになる。彼が読んでいた本の中では、トルストイを含めロシア文学が多く、アメリカ留学後、ロシア留学について彼は検討していた。

帰国後の 1907 年、有島は札幌の農科大学に奉職した。当時、トルストイの随筆や寓話、『ギ・ド・モーパッサン論』、『宗教と道徳』、『闇の力』を読んでいた。また大学では「北方の声」と題してトルストイとイプセンについての講義をした。1910 年に結婚し、子供が生まれ、白樺派の活動で忙しくなったため、読書の時間が減り、日記においてもトルストイの著作についての記述が少なくなる。1917 年にトルストイの作品『光は闇の中に輝く』について言及し、1918 年『神父セルギー』について講演を行った。トルストイやクロボトキンの社会主義的な思想に感化され、長い間自己の農場所有に罪悪感を持っていた有島は、1922 年に農地を解放すると新聞を通して告げた。自身の家族からの反対を受けたため、己の農地を解放できず死ぬまで悩んできたトルストイと比べ、彼の「弟子」だった有島は、トルストイの叶わなかった夢を実現できたのである。

人格及び人生、生まれた国など、トルストイと有島には一見多くの相違点があるが、復活などの要素を否定するキリスト教観、社会的正義の追及、厳しい内省への性向など、類似点も多い。裕福な家庭に生まれ、少年時代から読書に興味を持っていたところ、農業への関心、キリスト教信仰、貧しい者への深い同情、自分の家族の農場所有に対する後ろめたさを感じている点など、トルストイの思想と出会う以前から、彼との共通点の有島には少なくなかった。トルストイが強い影響を与えた白樺派の中では、武者小路がその最も熱心な「弟子」だったとされるが、宗教観やそれに関わる精神的な葛藤から見ると、有島がトルストイに極めて近かったことに気づく。トルストイはキリスト教の重要な概念や機密を否定していたため、正統のキリスト教徒とは呼び難いが、聖書や宗教について絶えず考え、信仰について多くの著作を残している。仏教の家族に逆らい、札幌農学校でキリスト教の洗礼を受けた有島は、結局教会と縁を切ったが、彼の人生も宗教についての悩みに貫かれていた。つまり、両者ともキリスト教の信者だったが、キリスト教の教理を強く疑い、キリスト自身の教えを探求し、結局身に付けた思想は正統なキリスト教的思想とは言い難いものになっている。次の第 2 節第 1 項では、それに関する有島の葛藤について考察を行う。

## 2. 有島武郎と『或る女』

### 2.1. フェミニスト有島武郎、彼の恋愛観

白樺派の中でも、明治末期～大正時代における知識人の中でも、有島武郎はキリスト教に最も深い感銘を受けた一人だったと言えよう。同時に、彼は男女平等の支持者であり、彼が書いた『或る女』の葉子は〈新しい女〉として度々言及されている。新渡戸稲造や内村鑑三という、当時の日本のキリスト教思想家に直接的に影響され、尊んでいた親の意志に逆らいキリスト教の洗礼を若い頃に受けた有島は、なぜ留学後教会から離れ、結局キリスト教が最も重大な罪と見なす自殺で人生を終えたのだろうか。トルストイに大きく影響され、自身の財産に後ろめたさを感じたほどの道徳観を持っていながら、人妻と心中することに決めた有島は、どのような恋愛観やジェンダー思想に辿りついていったのか。また、女性の苦境に同情し、女性解放を支持していたのは既述の通りだが、保守的な仏教の家庭に生まれた彼が、その先進的な思想になぜ至ったのか、有島の幼少時代まで遡って論じたい。

ほとんどの有島の研究者は、彼の「二元性」について語り、その二元性の理由を家庭内の育ち方にあると見なしている。つまり、アメリカ人牧師の家庭で英語を学び、それから横浜英和学校に通っていた有島は、リベラルな西欧的空気に触れる一方、同時に実家で体罰を受け、武士道に基づいた日本の伝統的な躰もされた。それが精神的に相矛盾するふたつの側面を持つ彼の性格を育んだのではないかと、石井三恵、上杉省和をはじめ、多くの研究者が指摘している。<sup>161</sup> 有島の自我の構造、そして彼を苦しませていた矛盾には両親の人柄の影響も見逃すことができない。記憶にないため神秘的に理想化されたトルストイの母親像とは対照的に、有島の母親像は極めて現実的であり、自己中心的で複雑な性格の持ち主だったことがうかがえる。有島家の子供たちは母のヒステリー的な発作と虚言癖を実際に見て育っていた。母親のこういう癖の多い性格については、有島が「私の父と母」でこう述べている：

(…) 想像力とも思われるものが非常に豊かで、奇体でないことを有るように考える癖がある。例えば人の噂などをする場合にも、実際は無いことを、自分では全く有るとの確信を以て、見るが如く精細に話して、時々は驚くような嘘を吐く事が母によくある。尤も母自身は嘘を吐いているとは思わず、確かに見たり聞いたりし

---

<sup>161</sup> 石井三恵『ジェンダーの視点からみた白樺派の文学—志賀、有島、武者小路を中心として』新水社、2005年、30-31頁；上杉省和『有島武郎一人とその小説世界』明治書院、1985年、9頁。

たと確信しているのである。<sup>162</sup>

ヒステリックな母に頻繁に叱られ、体罰まで受けていた有島は、ネガティブな母親像を持ってもおかしくはなかったが、実際はそうではない。「私の父と母」から見ると、母の苦しい過去に同情し、彼女の弱点を理解深く受け入れようとしていた印象が与えられる。短歌を作るなどの芸術好きで、父を励ましていたという肯定的な面に焦点を当てる。さらに、虚言癖やヒステリーの発作にもかかわらず、母親のことを「理性的」とまで呼び、自身が母親からこの特徴を受け継いだと判断していることから、有島はトルストイと同様に母親を理想化していたことがうかがえる。また、母親の本質と趣味は、専業主婦であることに絞られていたということも述べていることから、もしかするとその頃の観察は有島が女性の不平等について考え始めたきっかけとなったのかもしれない。一方、保守的な有島家では、長男であった武郎は、親の期待に応えないといけないう、異なる角度のジェンダー的な抑圧を常に感じていたようである。キリスト教の洗礼にせよ、作者になる志望にせよ、親の批判、特に父親の威圧的な権力が有島の選択にとって障壁となっていただけでなく、それによって彼の人生も大きく左右された。その例のひとつとして、新渡戸稲造の姪であった河野信子との結婚が許されずに、有島家に相応しいとされた神尾安子とお見合い結婚したことが挙げられる。

もう一つの、有島のジェンダー観とジェンダー意識に影響を与えた要因としては、同性からの性的な嫌がらせが挙げられる。学習院での同性の先輩からの性的な嫌がらせと、森本厚吉との不明瞭で深い関係のエピソードはその例である。そのエピソードは非常に曖昧な表現で描かれており、有島の「男色」がどのような形を取ったか不明確であるが、同性に性的なハラスメント、もしくは誘惑をされたことだけは事実であったと言えるようだ。そうした経験は、同時代の女性の性的な従順性に対する同情を有島に与えたのではなかろうか。性的な嫌がらせのひとつの結果として、保守的な家庭で育った彼が、アメリカ留学をきっかけに、女性の社会的及び性的な立場についてより深く考え始め、江種満子の言葉を借りれば、「その時代の男性のなかでは女性理解の先駆者」<sup>163</sup> になったのかもしれない。札幌の農学校に入学してから、森本厚吉との親密な友情関係という形で、同性愛的な要素が有島の人生に改

---

<sup>162</sup> 有島武郎全集、第7巻「私の父と母」筑摩書房、1980年、188頁。

<sup>163</sup> 江種満子『わたしの身体、わたしの言葉—ジェンダーで読む日本近代文学』翰林書房、2004年、369頁。



めて現れてくる。二人の青年は肉体関係を持っていたと、仄めかされることがあるが、<sup>164</sup> その証拠として引用される有島の日記は曖昧すぎるという印象を受ける。森本自身、有島をキリスト教入信に促したことから見ると、両者にとっての性交渉は、特に同性と結ばれる関係であればなおさら、容易に受容できるものではなかったはずだということだけ指摘しておこう。

キリスト教との出会いは言うまでもなく有島の人生を変えたが、キリスト教に対する彼の姿勢は複雑で、時間とともに大きく変わっていった。北海道でウィリアム・スミス・クラークによって普及したピューリタン派の道徳は、有島の性欲のストイックな受け入れ方に重大な影響を与えたに相違ない。学習院中等学科の最終学年のころに戻ると、有島は「このころから学業の成績が悪くなった。文学書を耽読し、汚ない空想に耽」<sup>165</sup> ていた。「汚い空想」というのは、性欲に関する否定的な表現であると推測できる。そのころの有島は、キリスト教の洗礼をまだ受けていなかったが、5歳のころから外国人宣教師とミッション・スクールで英語を習っていたので、性欲を含む欲望の抑制に関する思想に既に出会っていたのかもしれない。有島が当時既にエロスに関する否定的な思想を持っていたのか、もしくは時間が経ってから記憶を遡り、トルストイのように過去の自身を批判していたのか、明らかではないが、彼が持っていた思想は性愛を肯定する日本の古来の価値観とは対照的で、婚外の性欲を非難するキリスト教の道徳観に近いものだったことがうかがえる。結局、彼がエロスを肯定できたという経緯については、この項の後で述べる。

有島は進学した札幌農学校でクエーカー教と出会い、入信の決意をした。新渡戸稲造や内村鑑三など、日本の著名なキリスト教思想家と親しくしていた有島は彼らの後継者と見なされるようになった。そこで有島の性愛に対する否定的な思想が定着し、彼の中の「霊」と「肉」という二元的対立が明確になったことは、有島の研究者によって指摘されてきた。<sup>166</sup> その二元的対立は、もともとキリスト教に固有の概念であるが、特にピューリタン派は、体を甘やかす物に対して厳しい態度を取っている。クラーク博士から北海道農学校を基に、日本の著名人たちの間でピューリタン派のキリスト教が広がり、彼の弟子であった内村鑑三も自身の学生に節制につとめるように促していた。有島はそのピューリタン派のストイックな考え

---

<sup>164</sup> 亀井俊介『有島武郎―世間に対して真剣勝負をし続けて』、ミネルヴァ書房、2013年、13頁。

<sup>165</sup> 上杉省和『有島武郎一人とその小説世界』明治書院、1985年、20頁。

<sup>166</sup> 渡邊凱一『晩年の有島武郎』渡辺出版、1978年、22頁。

方を真面目に受け止め、結婚する 31 歳まで女性と肉体関係を持たなかった。

感受性の強い性質を持ち、異性にも同性にも好かれていた有島は、エロスから全く絶縁することは不可能だったであろう。アメリカ留学の前、有島は『明星』に掲載された与謝野晶子の『みだれ髪』を読み、1903 年（明治 35 年）の『観想録』に女性のエロティシズムを賛美するその詩の印象を記録する。

（…）「みだれ髪」を読む。余は到底此思想中の人たる事能はず。然り余は多くの点に於て此思想家の如く放縦にして自我的なる事能はず。余は此思想の上に余の行為を置く事能はず。彼女の云う所は余に取りては一面よりは異邦人の声なり。しかも「感ずる」と云う方面よりする時は、余は彼女に於て少なからざる感興を受く。彼女の思想は余が専門的研究の参考書なり。余は彼女を以て余が経行の伴侶となす事能はず。しかも余が苦旅の途上時に彼女と相遇う時彼女の振冠りたる乱髪の中に云うべからざる清純深奥の姿あるを認めて、茲に「新しき者」を拾い得たるの感なくんばあらず。 167

洗礼を受けたばかりの有島が、女性の裸画がイラストとして使われ、与謝野晶子のようなエロティックな詩を載せる『明星』を読んでいた事実は、彼の中のエロスと自己抑制の戦いが絶えず行われていたことを物語っている。そして、裸体の美を通してエロスを肯定しつつ自己主張をする女性を「異邦人」と呼びながら、彼女の性的な文学表現には穢れや不品行ではなく、「清純深奥」を見出している。与謝野晶子の表現力に新しさを認め、高い評価を下していると言えよう。彼にとってこの女性のエロスの声は「専門的研究の参考書」になったと有島自身は述べているが、おそらくそれは、『或る女』の葉子のイメージ作りにも役に立ったということを意味するのではなかろうか。

与謝野晶子のエロスを歌う詩を認めながらも、有島は自身の性欲に苦しみ、罪悪感を持っていた。一方、キリスト教的な隣人愛だけに青年の有島は満足できず、エロスの代わりにプラトニック・ラブに身を委ねる。その一つの例は、新渡戸稲造の姪、河野信子に対する初恋である。有島の旧知である信子の母親が病気になり、看病をきっかけに有島は信子と親しくなる。信子に対する恋や彼女の方からも気持ちがあったことを有島は意識し、日記には彼女

---

167 有島武郎全集、第 10 巻「観想録 第 4 件」筑摩書房、1981 年、326 頁。

について情熱的な記述を残しつつ、関係を深めようとはしなかった。<sup>168</sup> アメリカ留学の“ambition”も当時の有島にあり、信子に対する恋愛を断ち切ることに決めた。ただ、それで信子とのラブ・ストーリーが終わったわけではない。

1903～07年のアメリカ留学中も、プラトニック・ラブとしての恋愛感情が有島の中に数回芽生え、ハバフォード大学の学友の妹、13歳のフランセス（愛称はファニー）にも彼の心は奪われた。禁欲の道を選んだ有島は、肉体関係が結べるような恋愛相手になれない少女をプラトニック・ラブの対象として選んでいたのかもしれない。彼女との接触は期間的に短かったにも拘らず、有島の著作に跡を残している。日本に帰ってから8年後、「フランセスの顔」で、ファニーが少女から女性へと成長していく様子を描いている。次の場面は、少女のフランセスのもとを初めて訪れた時の様子である。

私はいきなり不思議な衝動に駆けられた。森の中に逃げ込むニンフのようなファニーを追いつめて後ろから抱きすくめた私はバッカスのようだった。<sup>169</sup>

ローマ神話の登場者である森の妖精ニンフとワインの神バッカスは、どう見てもプラトニック・ラブの象徴ではない。バッカス祭は、乱交を含む大酒盛りとして有名である。その性的なモチーフを、有島が意識的に取り入れたのかどうか、不明だが、いずれにしても、純粋なプラトニック・ラブであるはずの少女への愛情の中には、実際はエロスの要素が入り込んでいた。

留学は、様々な面で有島の人生における転機となった。日露戦争に対するアメリカ人の反応や、アルバイトをしていた精神病院での患者に対する非人間的な態度などを観察し、その結果キリスト教から離れ始めたのはその一つである。もともと留学の重要な目的として、信仰を深化させることを有島は考えていたようだが、逆にキリスト教の信者に失望し、キリスト教に対する疑いが深まったのである。その失望は、それ以降の北海道の教会との乖離にまで発展した。そして、ホイットマンの詩との出会いによって、エロスへの否定的な見方が肯定的なものに変わり始めたことも、有島の世界観にとって重要な変化であろう。その肯定的なエロス観は、本能生活論とともに、1917年（大正6年）に発表した「惜しみなく愛は奪う」

---

<sup>168</sup> 亀井俊介『有島武郎―世間に対して真剣勝負をし続けて』、ミネルヴァ書房、2013年、22頁。

<sup>169</sup> 有島武郎全集、第2巻「フランセスの顔」筑摩書房、1980年、468頁。

というエッセーによって表現されているが、それについては後で論じる。

さらに、米国で有島は初めて本格的に女性解放について考えるきっかけを得た。彼はハーバード大学大学院で聴講をしていたところに、金子喜一のパートナーで、フェミニストであり社会主義者のジョセフィン・コンガーと接触し、「男女の差異」を話題にした手紙を交換する。その手紙の中で、女性は男性と根本的に違うのかどうか、女性はそもそも職に就くべきなのかどうかという青年の有島の素朴な疑問に対し、コンガーはフェミニストの立場から返信している。<sup>170</sup> 『みだれ髪』への彼の反応からも明らかであるように、女性との接触の経験が浅かった有島にとって、女性は「謎」であり、分かりづらい「他者」だった。ただ、例えば夏目漱石や田山花袋と異なり、その謎を永遠に理解できないものとして片づけるのではなく、有島は『或る女』の早月葉子の内面を描くことによって、女性の心理を理解しようと努力していたことがうかがえる。

4年間の留学を終え、帰国した有島は父親に結婚するように促された。初恋の河野信子と結婚する意志を有島は表すが、信子の家柄は有島家に相応しくないという理由で、自由結婚は父親に許されなかった。家父長の強権的な影響、そして当時のジェンダー規範が女性のみならず、男性も抑圧していたことがこのエピソードからうかがえる。留学中忘れなかった信子の代わりに、父親は陸軍中将(後に大将)神尾光臣の二女神尾安子との見合いを提案した。有島は一目で安子を非常に気に入りに、当時の日記に次のように記述した。

告白すると、僕は批判力を失ってしまった。安子は今やあらゆる美德とすべての美を合わせ持った女性のように見える。彼女のためにいつ命を與えてもいいと思うほど僕には愛しい存在である。<sup>171</sup>

相手を理想化するロマンチック・ラブに目の眩んだ青年の有島が、後に絶望することになったのは当然の成り行きといえよう。また、愛のためなら「いつ命を與えてもいい」と言っているように、「死」と「愛」がここで結び付けられる。もしかすると、その二つの概念の関連性は、そもそも中世ヨーロッパの吟遊詩人から受け継がれたプラトニック/ロマンチック・

---

<sup>170</sup> 江種満子『わたしの身体、わたしの言葉—ジェンダーで読む日本近代文学』翰林書房、2004年、160—163頁。

<sup>171</sup> 有島武郎全集、第12巻「観想録 第14件〔訳〕」筑摩書房、1982年、446頁。

ラブに属するパトスの一部として、ロマンチスト有島に受け入れられたのかもしれない。

結婚前に、安子に対してそのような妄想的な愛情を抱いていた有島は、結婚後はやはり日常の中で妻に絶望しはじめた。世間を極めて現実的に見ていた有島であるが、恋愛に対しては浪漫的であるという性格の相反する要素を持っていた。理想が高ければ高いほど、現実の人間に向き合う時の絶望的な気持ちが強いのであろう。浪漫主義からは遠いトルストイでも、結婚直後には同じような経験をした。ただし、トルストイはプラトニック/ロマンチック・ラブを賛美したことがなく、あくまでもキリスト教的な隣人愛を追求しようとしていた。両者の間には、夫婦付き合いにおいて、類似点がある。結婚直後はエロスに身を委ね、間もなくそれで罪悪感を抱くようになるというのはその一つの例である。結婚前にも性的体験があったトルストイとは対照的に、有島は結婚後初めて性交渉を体験した。しばらくの間妻との肉体関係に耽るようになり、その結果妻に3年間で3回妊娠させることになる。自分自身の不摂生を批判的に見るようになっていた有島は<sup>172</sup>第1章第2節第2項に引用した『クロイツェル・ソナタ』の性欲を批判するモノローグを言ったポズドネイシェフを思い起こさせる。

結婚生活に絶望した結果、有島は離婚も検討することがあったが、衰弱した妻は結婚の7年後、結核で病死する。同年に父親も死亡し、それと北海道の教会との最終的な決別によって、有島が願っていた自由が実現したのである。それは彼の白樺派などでの文学活動を促し、本能生活論の形を取った思想を発展させた。自身が辿り着いた愛の理解について、1918年に彼はこう語っている：

愛は執着だ。粘り強く、執念深くその対象に嚙りつかないものは愛ではない。だから本統の芸術家の生活には人生に対して何等かの形の切ない肯定が裏づけられている。トルストイの生活には甚だしい矛盾や撞着があるにも係らず、此大事な肯定の剋路が力強く表わされていると私は思う。芸術家としての私の生活も一生かゝってあれだけの強い愛に動かされたい。<sup>173</sup>

この引用で、「トルストイ」と「愛」が同時に登場していることは興味深い。人生のその情熱的な捉え方はまさにトルストイの世界観に類似している。仏教に大きく影響された日本の

---

<sup>172</sup> 亀井俊介『有島武郎一世間に対して真剣勝負をし続けて』、ミネルヴェ書房、2013年、130頁。

<sup>173</sup> 有島武郎全集、第7巻「芸術家を造るものは所謂実生活に非ず」筑摩書房、1980年、183-184頁。

文化的土壌においては、有島のような感受性や情熱よりは、論理性、冷静さのような特質が昔から好まれてきたであろう。その上、儒教的な考えに基づく家父長的な社会体制の中で、有島が持っていた上記の特徴は「女々しい」というレッテルが貼られる。確かに、有島の作品、評論や日記などは日本の研究者に「センチメンタル過ぎる」と評価されることが少なくない。彼の空想癖、優柔不断を強調しているのは特に男性研究者が多いように見受けられる。有島自身も、その「男らしさの欠如」に悩み、1908年、『観想録』にて自身に対し「女のような同情や憐れみを捨て去れ」<sup>174</sup>と書いている。未だにセンチメンタルすぎるなどという評価を受けている有島にとって、彼が生きた時代における男らしさのジェンダー規範が如何に抑圧的なものであったかがうかがわれる。

当時の有島の恋愛思想に戻ると、知性や社会規範、道徳ではなく、人間は本能によってのみ動かされるべきであるという本能生活論は、有島本人が評価していた通り、彼の思想の絶頂<sup>175</sup>であり、「惜しみなく愛は奪う」の軸になる。ホイットマンの名がその評論の中で数回挙げられていることは偶然ではなかろう。社会に左右されない自由な人生、そしてエロスの賛美に有島が至ったことには、ホイットマンの作品の影響が不可欠であったと判断できる。

自由なる創造の世界は遊戯の世界であり、趣味の世界であり、無目的の世界である。(…) 緩慢な、回顧的な生活にのみ圍繞されている地上の生活に於て、私はその最も純粹に近い現われを、相愛の極、健全な愛人の間に結ばれる抱擁に於て見出すことが出来ると思う。彼等の床に近づく前に道徳知識の世界は影を隠してしまう。二人の男女は全く愛の本能の化身となる。その時彼等は彼等の隣人を顧みない、彼等の生死を慮らない。(…) しかもその間に、人間のなし得る創造としては神秘的な絶大な創造が成就されているのだ。ホイットマンが「アダムの子等」に於て、性慾を歌い、大自然の雄々しい裸かな姿を髣髴させるような瞬間を賛美したことに何んの不思議があろう。(…) その恋の姿は比べるものなく美しい。<sup>176</sup>

トルストイに倣いエロスを長い間拒否していた有島は、ホイットマンの詩によってそれを「本能生活」の一部として受け入れることができた。一方、「愛は惜しみなく与う」ことを信じていたトルストイの恋愛思想からは、有島は離れていった。キリスト教的な隣人愛は言う

---

<sup>174</sup> 有島武郎全集、第12巻「観想録 第14件〔訳〕」筑摩書房、1982年、436頁。

<sup>175</sup> 渡邊凱一『晩年の有島武郎』渡辺出版、1978年、24頁。

<sup>176</sup> 有島武郎集、第33巻「惜しみなく愛は奪ふ」角川書店、1970年、388-389頁。

までもなく、利他主義的な理想として存在している。その代わりに有島は利己主義的なエロスを自身の世界観の一部として選び取るのである。

同時に、以前も数回自殺を考えたことがあった有島には死への憧れも強まっていることがうかがえる。「惜しみなく愛は奪う」は、晩年の有島が「死」の魅力に捕われた<sup>177</sup>ことを示しつつ、波多野秋子とその後の自殺の「不吉な前兆」<sup>178</sup>であると、渡邊凱一は指摘している。この評論作品は、僅か数ヶ月で書き上げた作品だが、おそらく有島の長年の思想の集大成といえるだろう。またこの作品は『或る女のグリンプス』と『或る女』の間に発行され、思想的にもこれらと重なっているところが多いと考えられる。それ故、『或る女』、そしてその基に置かれている当時の有島の恋愛思想やジェンダー思想を理解するためには、「惜しみなく愛は奪う」を読み解くことが不可欠であろう。

1911年（明治44年）に発行された『或る女のグリンプス』を1919年（大正8年）に有島は『或る女』の前編として改稿するが、そこには彼のジェンダー観の変化や、同時代の女性の地位に関するより深まった理解が見られる。それは葉子に宛てた古藤の手紙、そして改稿の際に加えられた、それに対する葉子の批判によって表現されている。妻を「おさんどん」に例える古藤に対して、葉子は次のように反応する。

それにしても、新しい教育を受け、新しい思想を好み、世事に疎いだけに、世の中の習俗からも飛び離れて自由でありげに見える古藤さえが、葉子が今立っている崖の際から先きには、葉子が足を踏み出すのを憎み恐れる様子を明かに見せているのだ。結婚と云うものが一人の女に取って、どれ程生活という実際問題と結び付き、女がどれ程その束縛の下に悩んでいるかを考えて見る事さえしようとはしないのだ。<sup>179</sup>

アメリカ留学を経て、有島はキリスト教から離れたが、女性解放に対するより深い関心を示すようになり、さらにホイットマンの詩によってエロスを肯定的に捉えられるようになった。一方、「肉」と「霊」の二元性はすぐに消えたとも言えず、トルストイと同様に、若い妻との肉体関係に彼が悩んでいた時期があった。晩年のトルストイがそうであったよ

---

<sup>177</sup> 渡邊凱一『晩年の有島武郎』渡辺出版、1978年、26頁。

<sup>178</sup> 同上、185頁。

<sup>179</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、129-129頁。

うに、有島の中でエロスは死と強く結びつけられていた。ただし、トルストイと異なり、彼はエロスを「本能」として肯定したため、結局死も肯定しなければならないという結果になった。それは次項で分析する『或る女』の葉子の悲劇的な結末にも表れるが、有島自身の人生にも不可逆的な結末をもたらした。人妻の波多野秋子と情事関係を結び、当時の女性にとって差別的な法制度である「姦通罪」によって、彼女の夫に脅された話は広く知られている。本格的なキリスト教徒になれなかった有島は、その不祥事を心中という日本特有の方法によって解決しようとした。有島が45歳で自身の命を絶ったことにおいては、秋子の夫の脅しによって受けた打撃もその悲劇的な決意に影響したのだろうが、そのような感情的な要因は単なるきっかけに過ぎなかったような印象を受ける。「愛」と「死」を是が非でも結び付けたかった有島にとって、愛が永遠に続くためには、それが唯一の方法に見えたのかもしれない。

## 2.2. 『アンナ・カレーナ』から『或る女』へ

『或る女』は「日本の『アンナ・カレーナ』」とも呼ばれ、二つの長編の類似についてはしばしば指摘されてきた。女性を束縛する社会とのヒロインの葛藤は、『或る女』においても、『アンナ・カレーナ』においても中心的なモチーフになっている。『或る女』で〈新しい女〉と呼ばれる早月葉子を描くにあたり、有島がトルストイの『アンナ・カレーナ』から影響を受けたということは、彼の日記からうかがえる。「フェミニスト」有島は、なぜヒロインを描くためのインスピレーションを「アンチフェミニスト」トルストイが生み出した女性像から得られたのか、また『或る女』と『アンナ・カレーナ』は具体的にどのような類似点があるのだろうか。本項ではこれらの問題点を検討していくが、まず有島武郎がどのような経緯で『アンナ・カレーナ』に出会い、どのようにトルストイの手法を導入したのか、ということについて述べる。

1907年に、米国留学、そしてヨーロッパ旅行を終え、日本に帰国中の船の中で、有島はイギリスで購入した『アンナ・カレーナ』を読む。興味深いことに、『アンナ・カレーナ』に関する彼の初めての日記の記述はやや批判的である。トルストイの深い心理描写を賛美しながらも、ツルゲーネフを思わせるロマンチズムによってトルストイの文体は洗練されるより、むしろ妨げられていると書いた。しかし、読めば読むほど長編に感心し、強い感銘を受ける。アンナとキティのキャラクターを対比し、アンナに憧れながら、彼女の悲劇的な本質を憐れむ。



大きな満足感をもって「アンナ・カレーニナ」を読了した。これは読む者に衝撃を與えるほどの力強さと、涙を流させるほどの美しさを併せ持った、実に素晴らしい作品だ。(…) 読者はアンナやキティの運命を知る事はできる。が、トルストイの心理分析を信じるに至るまでは、それに強く同情することはできないだろう。キティはいわゆる幸福な生活を送っている。そこには学ぶべきもの、賞讃すべきもの—心の純一さ、感情の単純さ、曇りのない知性、よく均衡のとれた感情、それに世間に対する理にかなった態度—がたくさんある。アンナの場合は違う。彼女の生活は嵐のようだ、いや、大嵐と言った方がいい。自分より弱い者に会えばそれを打ちのめすし、自分より強い者に会えば彼女が打ちのめされる。しかも彼女はどちらをも避けようとしなければいか、むしろそのどちらかを捉えることを好むのだ。神はこのような人間を生み出されるが、その人間は必ず苦しむのだ。憐れな魂よ！ 生まれながらに征服者であって同時に敗北者—これはこの世の極めて悲劇的なパラドックスである。世人をして常識という低い尺度でこのような魂に審判を下さしめるなかれ。世間は彼女を知ってはいない。彼女はこの世に属してはいないのだ—人は迷える天使と呼ぶかもしれない。哀れな魂よ。<sup>180</sup>

トルストイは『アンナ・カレーニナ』の著作を企図していた時、アンナを哀れに描こうとしたということは、第1章第2節第3項で述べたとおりである。有島武郎のこの小説への反応を見ると、その意図は十分に成功したと言える。有島は『戦争と平和』のナターシャも含め、トルストイのヒロインに魅了されていたが、男性の主人公や「家族」とその中の登場人物の関係性にそれほど興味を示していなかった。リョーヴィンは有島と背景も似て、同様に農業に関心を寄せているのだが、阿部軍治が指摘しているように、この主人公は彼に「あまり気に入らなかった」ことがうかがえる。<sup>181</sup> つまり、有島によるトルストイの文学の賛美は主に心理学的な手法と女性主人公への関心に基づく結論づけられる。

トルストイの文学作品のそのような受け入れ方は直接『或る女』の文体に影響を与えたようにも見える。例えば、上記に引用したアンナの描写「自分より弱い者に会えばそれを打ちのめすし、自分より強い者に会えば彼女が打ちのめされる。しかも彼女はどちらをも避けよ

---

<sup>180</sup> 有島武郎全集、第11巻「観想録 第11件〔訳〕」筑摩書房、1982年、338-339頁。

<sup>181</sup> 阿部軍治『白樺派とトルストイ—武者小路実篤・有島武郎・志賀直哉を中心に』彩流社、2008年、260頁。

うとしないばかりか、むしろそのどちらかを捉えることを好むのだ」という箇所を見ると、アンナよりもどちらかというと葉子にあてはまるという印象を受ける。『アンナ・カレーニナ』において、アンナの周りには彼女よりも強い人物や彼女の虜にならなかった人物は殆どおらず、「自分より強い者に会えば彼女が打ちのめされる」というような場面も思い浮かばない。彼女の自殺もヴロンスキーの冷淡さに対する復讐であり、その復讐によって、彼は愛する女性を失い、人生は意味の無いものになってしまう。つまり、その自殺も、アンナが打ちのめされたというより、ヴロンスキーを打ちのめすものだった。葉子は倉地に打ちのめされたと言えるが、アンナは如何なる犠牲を払っても、恋愛のゲームにおいて常に勝者になろうとしていたのではなかろうか。

「日本の『アンナ・カレーニナ』と呼ばれている『或る女』は、前章と後章からなるが、この二章はかなり異なった評価を受けている。『或る女のグリンプス』という前章の元のバージョンは雑誌『白樺』の創刊に伴って1911年から1913年まで連載され、『或る女』自体は1919年に出版された。その間に上記のように、「惜しみなく愛は奪う」という有島の代表作が発行され、彼の恋愛思想もジェンダー思想も多少変わっていた。ちょうど1911年から『青鞥』の刊行も始まり、日本の〈新しい女〉の活動の最盛期が始まっていた。早月葉子のモデルとなった佐々城信子の出来事があった10年前と比べると、思い切った行動をする女性がより増え、新聞にスキャンダラスなこととして頻繁に取り上げられていたとはいえ、ある意味でより「普通」になっていた。そうした時代背景は、有島や『或る女』の変容に影響を与えずにはおかなかった。もともと現実の出来事に基づいて書かれた『或る女のグリンプス』は、1919年に修正・加筆を経て、前章となり、後章は数ヶ月間で書かれ、こちらは完全に有島の想像の産物であった。8年間で有島自身は思想家としても作者としても成熟し、彼の想像力によって生み出された後章のほうが、本多秋五を含め文学評論家の中で一般的に評価が高い。ただし、前田愛のように前章のほうを高く評価している文学者もいなくはない。

182

『或る女』の前章のプロットは、有島が直接的に知っている人物の実生活に基づいている。葉子に騙された婚約者木村は有島の友人だった森広、前述のとおり葉子のモデルは森広を捨てた佐々城信子に当たり、森広との婚約を促した母親親佐は佐々城豊寿である。佐々城豊寿も興味深い人柄を備えた人物で、女性が「良妻賢母」の規範によって束縛されていたこの時

---

<sup>182</sup> 前田愛『近代文学の女たち—『にぎりえ』から『武蔵野夫人』まで』岩波書店、2003年、180頁。

期に、自由な行動ができる信子のような娘が生まれたのも頷ける。豊寿は高い教育を受けた女性で、若い頃は男装し、乗馬をしており、その後キリスト教の活動家になり、キリスト教婦人矯風会の副会長としても勤めていた。その婦人矯風会の売春についての発言は「青鞥」のメンバー間に議論を起こしたが<sup>183</sup>、婦人参政権獲得運動や公娼制度の廃止運動などのフェミニズム的な運動に加わっていたことは、やはり高く評価されるべきであろう。佐々城信子自身は、若いうちに病気で亡くなる主人公葉子と異なり、倉地のモデルになった武井勘三郎とずっと同棲し、彼が亡くなってからは、71歳で亡くなるまで静かな余生を送った。結局、母か娘、どちらのほうかより〈新しい女〉だったのかという点については、議論の余地がある。

さて、有島は、知人に起きた実話から『或る女』のインスピレーションを得、そこに『アンナ・カレーニナ』から受けた感銘が重なり、さらに米国留学中に彼が興味を持ち始めた女性解放思想の要素も加わった。アンナという女性像がもたらした衝撃は有島にとって大きかったということは、上に引用した日記の記述から明らかである。有島が『アンナ・カレーニナ』に感銘を受け、その結果として『或る女』を構想し始めたことは、日本の研究者にも指摘されてきた。<sup>184</sup> では、『或る女』は果たして「日本の『アンナ・カレーニナ』」であると言えるのだろうか。「アンチフェミニスト」トルストイが19世紀末のロシアで生み出した『アンナ・カレーニナ』と「女性理解の先駆者」有島が20世紀初頭の日本で生み出した『或る女』は実際にどこまで似通っているのか、先ず類似点から分析を進めていきたい。

トルストイと有島は男性作家でありながら、女性を主人公にストーリーを描いた。女性の社会的地位や使命、そこから出てくる挫折やヒステリー、エロスを含む男女関係、性欲及び嫉妬の破壊性という概念は、どちらの長編でもキーモチーフとなっている。プロットの基には不倫という形の恋愛が置かれており、それぞれの主人公、アンナと葉子は世間からは罪深い人物と見なされるが、それぞれの作者はヒロインを哀れに描こうとしている。前述したように、『或る女』が生まれたことには、『アンナ・カレーニナ』の影響が否定できない。不倫を起こした女性は社会から批判を受け、疎外されるが、それを哀れに描くことによって社会における何らかの問題点を指摘するというトルストイの手法を、有島が取り入れたという可能性は、大いにあるだろう。

---

<sup>183</sup> 堀場清子『青鞥の時代—平塚らいてうと新しい女たち』岩波新書、1988年、246—247頁。

<sup>184</sup> 柳富子『トルストイと日本』早稲田大学出版部、1998年、199頁。

アンナが初めて登場する場面は彼女に魅了されたヴロンスキーの目を通して描かれるということについては、第1章第2節第3項で触れたとおりである。アンナがペテルブルグからモスクワへ向かう列車の中で初めて登場する一方、葉子は新橋で列車に乗る直前、同伴している古藤と一緒に現れる。アンナの場合と異なり、葉子の外見も、古藤の目に映っている彼女の印象も特に描かれず、それより駅の人込みや周りの様子に焦点があてられている。ヴロンスキーの目を借りて読者が初めて見るアンナの当時の精神状態も、ヴロンスキーが彼女に与えた印象も謎であり、彼女は魅力的な「謎の女」として登場する。葉子の場合は反対であり、彼女の精神状態や緊張感は読者に伝わっている。自分に対する周りの反応を敏感にうかがいながら、まるで全世界を魅了しようとする女優のように葉子はふるまっている。彼女のその努力は実を結ぶことが多かったとは推測できるが、古藤や倉地が直接彼女から受けた印象の描写は見られない。この手法によって、ヒロインは謎めいた他人というより、共感しやすい主人公となる。『アンナ・カレーニナ』の「多声性」と異なり、『或る女』の語りは一人称ではなくても、葉子の視点から展開されていく。葉子が初めて倉地を見る場面も、彼が彼女に与えた強い印象だけが描かれている。

(…) 目の前に立っている船員を見て、何んという事なしにぎょっと本当に驚いて立ちすくんだ。始めてアダムを見たイブのように葉子はまじまじと珍らしくもない筈の一人の男を見やった。

「随分長い旅ですが、何、もうこれだけ日本が遠くなりましたんだ」

と云ってその船員は右手を延べて居留地の鼻を指した。がっしりした肩をゆすって、勢よく水平に延ばしたその腕からは、強く烈しく海上に生きる男の力が迸った。葉子は黙ったまま軽くうなずいた。胸の下の所に不思議な肉体的な衝動をかすかに感じながら。

「お一人ですな」

塩がれた強い声がまたこう響いた。葉子は又黙ったまま軽くうなずいた。

船はやがて乗りたての船客の足許にかすかな不安を与える程に速力を早めて走り出した。葉子は船員から眼を移して海のほうを見渡して見たが、自分の側に一人の男が立っているという、強い意識から起こって来る不安はどうしても消す事が出来なかった。<sup>185</sup>

---

<sup>185</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、109-110頁。

その瞬間まで多数の男性を自由に操ってきた葉子は、「アダムを見たイヴ」のように、「唯一無二」の男性としての倉地に惹かれるのである。そういう「恋愛神話」<sup>186</sup>、言い換えれば「ロマンチック・ラブ」の幻想の前提で始まった二人の激烈な関係は最初から現実感に欠け、呪縛されていたと言える。

葉子と倉地、アンナとヴロンスキーの恋愛はどちらも不倫から始まり、社会に認められなかったことやカップル間の不調和などの理由で、それぞれアンナと葉子の死によって悲劇的に終わる。ロシアの貴族層に属するアンナ・ヴロンスキーと、日本の中産層の葉子・倉地は国も時代も異なっているが、実はカップルの中の関係性や感情には類似点が多い。例えば、同棲生活が不幸に陥る重要な原因の一つである嫉妬の破壊的な力が挙げられる。アンナはヴロンスキーの嫉妬を引き起こそうとし、リョーヴィンを含め様々な男性に媚を売っている。しかし、このカップルにおいて極端な嫉妬をするのは結局アンナ自身である。上流社会から疎外されたアンナは、ソロキナ嬢のような立場上自分よりヴロンスキーに相応しく、しかも若い女性に嫉妬をしている。また、ヴロンスキーの社会的な活動に対してアンナの嫉妬が向けられていることについては第1章第2節第3項で既に論じた。一方、葉子の嫉妬はより具体的で根拠がある感情であり、その矛先は倉地の妻と娘たちに向けられている。アンナと葉子の嫉妬は、どちらも付き合いの早い段階で現れ、時間とともに激烈になっていく。第1章で引用した通り、アンナは己の嫉妬を「悪魔」と呼ぶことによって、その感情が否定的で破壊的であることを自認していることが分かる。葉子もそれを非常に破壊的に感じているのであるが、アンナほど己の感情を内省的にとらえていない。

その倉地が妻や娘たちに取捲かれて楽しく一夕を過している。そう思うとあり合せのものを取って打毀すか、掴んで引き裂きたいような衝動が訳もなく嵩じて来るのだった。<sup>187</sup>

倉地は葉子のために妻や娘たちを捨てたが、彼女はもしかすると自分が「弄びもの」に過ぎないのではないか、また倉地は二股しているのではないかという妄想に陥り、倉地に対する愛情も一時的に逆転し、憎しみのようなものになる。倉地の愛を疑っていなかったころの葉子の感情は利他的な面も強かったが、それが嫉妬によって非常に利己主義的で破壊的なもの

---

<sup>186</sup> 江種満子『わたしの身体、わたしの言葉—ジェンダーで読む日本近代文学』翰林書房、2004年、390—391頁。

<sup>187</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、346—347頁。

のに変わる。ヒステリーの発作もそこで初めて生ずる。

なつかしみと憎しみとのもつれ合った、嘗て経験しない激しい情緒がすぐに葉子の涙を誘い出した。ヒステリーのように間歇的に牽き起こる啜り泣きの声を噛みしめても噛みしめても止める事が出来なかった。葉子はそうしたまま倉地の胸で息を引き取る事ができたらと思った。それとも自分の嘗めているような魂の悶えの中に倉地を捲き込む事が出来たらばとも思った。(…)出来るならその肉の厚い男らしい胸を噛み破って、血みどろになりながらその胸の中に顔を埋めこみたい——そう云うように葉子は倉地の着物を噛んだ。<sup>188</sup>

実際は、倉地は東京に着いた直後、離縁状を送信したが、そのことを葉子にはっきり伝えなかったため、彼女は「できるならその肉の厚い男らしい胸をかみ破って、血みどろになりながらその胸の中に顔を埋めこみたい」という残酷でグロテスクなイメージを生み出す程、家族に囲まれている倉地の幸せという妄想にしばらくの間嫉妬し、苦しむのである。

二つのカップルの間で類似している問題点としてコミュニケーション不足も挙げられる。石井三恵は心理療法論を参考に、葉子がうまくコミュニケーションをとれていないことを指摘している。<sup>189</sup> 前述のように、倉地も葉子にとって極めて重要な離縁状についての情報を彼女に直ぐ伝えず、それは結局旅館から借家に引っ越してから一週間後、話の流れの中で、さりげなく葉子に知らされる。その報告不足が生み出した不安や嫉妬は彼女のヒステリーの原因となる。離縁状が彼女にとって如何に重大な意味を持つかということは、社会から疎外された彼女の辛い立場からも、精神的な不安定さからも伺える。木村との結婚を拒否した彼女にとって、やはり結婚は社会的地位、そして自分及び妹たちの生活に必要な金銭を確保するものである。一方、倉地との不明確な恋人関係は自分がただの「弄びもの」ではないかという不安を生み出し、それは嫉妬とともに二人の間での頻繁な喧嘩へと発展し、カップルとしての行き違いに至る。倉地は彼女の不安を察することができるほど明敏な人物ではない一方、葉子は己の不安を打ち明けることができないほど繊細である。代わりに、己の感情を涙

---

<sup>188</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、355頁。

<sup>189</sup> 石井三恵『ジェンダーの視点からみた白樺派の文学—志賀、有島、武者小路を中心として』、新水社、2005年、159—160頁。

という手段で表そうとする。

「何をそう理屈もなく泣いているのだ……お前は俺れを疑ぐっているな」

葉子は「疑わないでいられますか」と答えようとしたが、どうしてもそれは自分の面目にかけて口には出せなかった。葉子は涙に解けて漂うような目を恨めしげに大きく開いて黙って倉地を見返した。(…)

何故倉地は自分の妻や子供達の事を云っては聞かせてくれないのだ。葉子は訳の解らない涙を泣くより術がなかった。葉子は突伏したままでさめざめと泣き出した。

190

第1章第2節第3項で論じたように、ヴロンスキーが選挙に行く場面では、アンナの悩みや不安について話さず、物事をはっきりさせぬままで去ってしまう。「こんな風にはっきりしないままで彼女と別れるのは、付き合いだして以来これが初めてのことであった」<sup>191</sup> という『アンナ・カレーニナ』の箇所は、『或る女』の既に挙げた場面の終わり方「葉子はその夜倉地と部屋を別にして床についた。倉地は階上に、葉子は階下に。絵島丸以来二人が離れて寝たのはその夜が始めてだった」<sup>192</sup> というところに非常に似通っている。男女のどちらかが喧嘩に近い曖昧な状況をはっきりさせず、それを解決するより、逃げることを選ぶ。二つの長編においては、それをする側（ヴロンスキーと葉子）は男女が逆だが、その誤った判断がカップルの隔たりを深めるという結果は同様である。アンナの場合、彼女は曖昧な態度をされた側であり、それ以降の悲劇的な展開がより早かったが、葉子は自身の態度を「何を私は考えていたんだろう。どうかして心が狂ってしまったんだ。こんな事はついぞない事だのに」<sup>193</sup> というふうにも一度反省したため、カップルの安定は一時的に復元される。

アンナと葉子のエロスに対するスタンスも似通っている。「エロス」を「生きること」に例え、それが自分の本能であることを二人とも強調し、浮気の原因付けとしても使っている。また、神や運命という超越的なものを両者とも信じ、自身の情熱的な恋愛を「暗い力」の働きかけのように認識している。その神秘的な世界観は、アンナの場合は予言的な悪夢に、葉子の場合は幻影、鏡が割れたエピソードや黒い夜蛾のエピソードの中に見てと

---

<sup>190</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、357-358頁。

<sup>191</sup> トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ3』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年、523-524頁。

<sup>192</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、359頁。

<sup>193</sup> 同上。

ることができる。『或る女』の場合は、そうした暗い要素が『アンナ・カレーニナ』よりいっそう強く、それは「倉地」という名前の響き自体に音韻的に「暗い力」が込められていることから明らかである。それを裏付けているかのように、倉地は有島に“diabolic”<sup>194</sup> と呼ばれている。ここで有島が破壊的な「暗い力」としてのエロスの働きをとらえているということは、前項で論じたようにトルストイのエロスに対するスタンスに極めて似ている。

『アンナ・カレーニナ』と『或る女』のどちらにおいても、エロスの力は、本来両極をなす要素である生命と死に関連づけられている。恋人同士の初めての性交渉は『或る女』においてより詳しく描かれた。葉子に魅了された倉地は船で葉子と半分無理やりに肉体関係を結ぶ。葉子自身は実際それを望んでいたようだが、もともとキリスト教の信者だったために貞操の道徳にまだ縛られていたのか、自身のエロティックな要求を何らかの理由で受け入れられず、倉地に対する性欲を被虐症的な媚態でしか表現できなかった。『アンナ・カレーニナ』の場合は、おそらく検閲の問題でアンナとヴロンスキーの初めての性交渉の場面自体は全く描かれず、『或る女』ほどドラマティックではなかったと推測するしかない。ただ、その出来事に対する二人のヒロインの反応は非常に似通い、好きな人と結ばれたことで泣き叫び、実際は望んでいたはずのそのことを、自分が殺されることに例えている。

葉子はいきなり寢床の上に丸まって倒れた。そして俯伏しになったまま痙攣的に激しく泣き出した。倉地がその泣声に一寸躊躇って立ったまま見ている間に、葉子は心の中で叫びに叫んだ。

「殺すなら殺すがいい。殺されたっていい。殺されたって憎みつづけてやるからいい。私は勝った。何と云っても勝った。こんなに悲しいのを何故早く殺してはくれないのだ。この哀しみにいつまでも浸っていたい。早く死んでしまいたい。……」

195

アンナと葉子の両者とも、不倫という形での付き合いの早い段階から、恋のおかげで生きることを実感できると言いながら、一方で不思議なほど死にも執着している。悲劇が起こる大分前の相思相愛の絶頂にあるころ、アンナも葉子も死ぬことを望むという、パラド

---

<sup>194</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、155頁。

<sup>195</sup> 同上、185-186頁。



クシカルな状況が生まれている。例えば、アンナはヴロンスキーの娘を出産することで自分は死ぬだろうと予想していたが、結局そうならなかったことを悔しがっている。葉子も倉地をグロテスクに傷つける欲望とともに、上の引用にある通り、恋する人と結ばれる直前「早く死んでしまいたい」と断言している。では、エロスによる人生の肯定とそれと対照的な死への執着は一人の人間の中でどのように両立しているのか。生きているという実感を得る手段としてエロスを欲することについては精神分析学によって説明されており、エロスが生の本能であることは、フロイトを始めとする精神分析学者たちが主張してきた。それと矛盾しているように見えるが、同時に死への執着も理論的には「デストロドー」(死への欲動)と名付けられ、生の欲動とともに人間の本質であると主張されている。死への執着とエロスを通じた生への渴望という、相矛盾する二つの欲望はアンナと葉子の両方の場合において同等に著しく表れている。

アンナは、ヴロンスキーがその立場により相応しいキティを捨ててまで自分を執拗に求めてくること、彼の情熱や心酔を喜んで受け入れているだけで、最初は浮気をしようなどという気はなかった。自分の魔術的な魅力を発揮しながら、まだ結ばれていない恋の駆け引きを楽しんでいる。ただ、時間とともにその楽しさは結局彼女にとって人生の意義になり、彼女をとらえるパッションに変わる。そうして、ヴロンスキーとのプラトニックな関係が1年ほど続き発展した結果、肉体関係に変わる。それはアンナにとってヒステリーのような鳴咽を引き起こすことになった、という経過については、すでに見たとおりである。一方の葉子は、アンナと比べるとエロスに対してオープンであるような印象を与える。葉子は倉地に出会った時、「始めてアダムを見たイヴのよう(…)まじまじと珍しくもない筈の一人の男を見やった」<sup>196</sup>。つまり、旧約聖書によると神からの最初の戒めとして「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ」<sup>197</sup>と申し渡され、全人類の基となった原初の女性と男性、言うまでもなくプラトニックな関係からかけ離れているアダムとイヴのように、葉子は最初から二人を位置づけたのである。それ以降も、船で倉地に会うにつれて、彼に対する彼女の原始的な性欲はさらに強まる。

あの無頓着そうな肩のゆすりの陰にすさまじい **desire** の火が激しく燃えている筈である。葉子は禁断の木の実を始めて喰いかいだ原人のような渴欲を我れにもな

---

<sup>196</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、109頁。

<sup>197</sup> 『聖書(旧約聖書)』日本聖書協会、1991年、2頁。

く煽りたてて、事務長の心の裏を引繰返して縫目を見窮めようとばかりしていた。

198

ここはまた旧約聖書のモチーフである「禁断の木の実」が現れ、それは葉子にとりつく“desire”、つまり性欲を表すために用いられている。前述のように、葉子と倉地の初めての性交渉の場面においては、葉子は結局泣き出すのだが、その前には彼女の性欲は絶頂に至る。

男性というものの強烈な牽引の力を打込まれるように感ぜずにはいられなかった。息気せわしく吐く男の溜息は霰のように葉子の顔を打った。火と燃え上がらばばかりに男の体からは desire の焰がぐんぐん葉子の血脈にまで広がって行った。葉子は我れにもなく異常な興奮にがたがた震え始めた。<sup>199</sup>

エロスを恐れていたトルストイは、『アンナ・カレーニナ』でこのような激しい女性の性欲を描きはしなかったが、彼のより早い時期の作品『家庭の幸福』には多少似ている描写（「火が私の血管を走りまわり、目の中は暗くなり、私はただ顫えるだけで、彼をとめようと思った言葉も、咽喉にひからびついてしまった」<sup>200</sup>）がみられ、それについては第1章第2節第2項で取り上げたとおりである。興味深いことに、両方の場合において性欲は火のイメージに例えられ、激烈で、人にとってコントロールし難く、破壊的な要素と結び付けられている。アンナの場合は、彼女のエロスはそこまであからさまに表れない。その火はより隠されたところに宿り、「目の光」として表れている。アンナと葉子、二人のヒロインのエロスの発展を比較するなら、アンナにとってはエロスがプラトニック・ラブの次の段階であったが、葉子の場合は、まさしくエロスから倉地に対する気持ちが始まったことがうかがえる。

そもそも、何故葉子にとって性欲は彼女の本質の一部でありながら、他方で「禁断の木の実」、つまり禁止されているものでもあるのだろうか。洗礼を受けた有島は葉子の背景もキリスト教と結び付けている。また、当時の日本女性にとって希少であった教育を受ける機会をミッション・スクールが提供していたことについては、本章の第1節第1項で述べ

---

<sup>198</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、156頁。

<sup>199</sup> 同上、184-185頁。

<sup>200</sup> トルストイ全集、第3巻『家庭の幸福』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年、73-74頁。

た。それは同時代の〈新しい女〉にもよくあったケースであり、キリスト教婦人矯風会の活動家のもとに生まれた葉子の場合もやはりそうだった。ただ、その学校での勉強は貴重な教育のチャンスでありながら、実際は葉子にとってポジティブな体験にはならなかった。むしろ、彼女を色欲の道へ導いてしまったとも言える。

葉子はその学校の寄宿舎で一箇の中性動物として取り扱われたのを忘れる事が出来ない。やさしく、愛らしく、しおらしく、生まれたままの美しい好意と欲念との命ずるままに、おぼろげながら神というものを恋しかけた十二三歳頃の葉子に、学校は祈禱と、節欲と、殺情とを強制的にたたき込もうとした。十四の夏が秋に移ろうとした頃、葉子は不図思い立って、美しい四寸幅程の角帯のようなものを絹糸で編みはじめた。(…)それを作り上げた上でどうして神様の御手に届けよう、と云うような事は固より考えもせずに(…)教師はしきりにその用途を問いただしたが、恥じ易い乙女心にどうしてこの夢よりも果敢ない目論見を白状する事が出来よう。教師はその帯の色合いから推して、それは男向きの品物に違いないと決めてしまった。そして葉子の心は早熟の恋を追うものだと断定した。そして恋というものを生来知らぬげな四五六の醜い容貌の舎監は、葉子を監禁同様に置いて、暇さえあればその帯の持ち主たるべき人の名を迫り問うた。

葉子はふと心の眼を開いた。そしてその心はそれ以来峰から峰を飛んだ。十五の春には葉子はもう十も年上な立派な恋人を持っていた。葉子はその青年を思うさま翻弄した。青年は間もなく自殺同様な死方をした。一度生血の味をしめた虎の子のような渴欲が葉子の心を打ちのめすようになったのはそれからの事である。<sup>201</sup>

こうして葉子は一人の教師の誤解や残酷な態度のために、キリストに対する無償の愛の代わりに極めて利己的で破壊的なエロスを選び取ったのである。多数の男性をもてあそんでから、やっと自分の「アダム」と出会った葉子であるが、男性に対する利他的な愛情の経験がなく、エロスや強烈な嫉妬などによってしか倉地に対する自身の執着を表せないのである。それは彼女自身にとっても挫折、そしてヒステリーの発作を引き起こす原因の一つになり、それが二人の離別を早めることになった。

---

<sup>201</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、85-86頁。

同時に葉子が、学校で「中性動物」として受け入れられるのを嫌がっていたことから、女性性及びエロスは彼女にとって如何に重要なものであったかがうかがえる。一方、長年女性の性欲をタブー視してきた社会規範、そしてそこに加わった誤った教育のため、葉子はその本能的欲求を簡単には容認できない。自分にとって欠くことのできない性質としてエロスをとらえながら、同時にそれを「禁断の木の実」と受けとる葉子は正に「哀れな魂」であろう。こうした矛盾をはらむエロス観によって、彼女が倉地との初めての性交渉を願いながら、同時にそれをレイプのようなものとして取り扱うことを説明することができる。倉地との肉体関係を望みながら、それを最後まで禁じられたものと見なすというエロティックな「二元性」で悩む葉子の死因が、生殖器である子宮の病であったというディテールも、偶然ではないように思われる。

エロスに完全に身を委ねた葉子及びアンナにとって、エロスから離れた隣人愛は理解しづらいものとなる。自分が愛せない元のパートナーに対する不公平さや残酷さというのもふたりのヒロインの共通点である。完全に別れられない婚約者木村・夫カレーニンに愛されながら、彼らを愛せないという理由でヒロインたちは彼らを残酷に扱う。人格から見ても社会的地位から見てもちゃんとした人間である木村及びカレーニンに優しく扱ってもらいながらも、彼らを正に憎んでいる。アンナの浮気を許し、彼女とヴロンスキーの娘を己の子供のように育てようとしたカレーニンの利他的な愛をアンナは死ぬまで理解できず、カレーニンが彼女を愛しているということ自体も否定している。葉子は木村が待っているアメリカに足を踏み入れることさえ拒む。彼女が他の男性と同棲していることを古藤から聞いても、木村は彼女を信じていると手紙で伝える。彼自身がお金に困っていても、頻繁に葉子に送金している。葉子と倉地についての新聞の記事が出て、葉子の浮気を否定できなくなるにもかかわらず、「人類の中に少なくとも一人、貴女の凡ての罪を喜んで忘れようと両手を広げて待ち設けている」<sup>202</sup> と、葉子が無条件に受け入れようとする。アンナの出産後のカレーニンの無条件な慈悲を思い起こさせる場面であり、カレーニンも木村も熱心なキリスト教徒であるという設定もこのような利他的な隣人愛の現れに無関係ではないように見える。それにもかかわらず、カレーニンの寛大さを拒否するアンナと同様に、葉子は木村の愛を疑っているのである。

葉子の倉地に対する心持ちから考えると木村の葉子に対する心持ちにはまだ隙

---

<sup>202</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、396頁。

があると葉子は思った。葉子が若し木村であったら、どうしておめおめ米国三界にい続けて、遠くから葉子の心を翻えず手段を講ずるような呑気な真似がして済ましていられよう。葉子が木村の立場にいたら、事業を捨てても、乞食になっても、すぐ米国から帰って来ないじゃいられない筈だ。(…) 木村の持つ生活問題なり事業なりが、葉子と一緒にしてから後の事を顧慮してされている事だとして見ても、そんな気持ちでいる木村には、何と云っても余裕があり過ぎると思わないではいられない物足りなさがあった。<sup>203</sup>

アンナと同様に、情熱的なエロスしか実の愛と見なしていない葉子にとっては木村の気持ちが評価できない。恋人といつも一緒にいたいというエゴイスティックな願望よりは、彼女を支えながら幸せにすることを優先する木村の無償の愛は葉子にとって理解できない感情なのである。

葉子とアンナの相違点に焦点を当てるとすれば、一つは、自分の置かれた状況に関するヒロインの正直さであると思われる。それは例えば、ヒロインが作者の分身(リョーヴィン/古藤)と会う場面に見ることができる。『アンナ・カレーニナ』の第7部第10章で初めて、リョーヴィンとアンナは出会う。そこでリョーヴィンが指摘しているのは、社会的に悲惨な己の状態を隠さないというアンナの誠実な態度である。物語のより早い段階である競馬のシーンの直後も、カレーニンにヴロンスキーについて問いただされたアンナは彼に直ぐ真実を打ち明ける。それはよく考えた上の報告ではなく、アンナの本能からくる衝動的で正直な行為であろう。葉子も古藤、つまり、有島の分身とされる登場人物に「倉地さんなんかには無い誠実な所が、何処かに隠れている」<sup>204</sup> と評価されてはいる。ただ、そうした葉子の面は奥に潜んでいるようで、倉地との関係についての新聞記事が出た後ですら、彼女はその恋愛関係を、妹という自分に最も近い人物を含め、人から隠そうとしている。婚約者の木村に実態がばれないように、彼の旧友である古藤に詭弁を用いて、真実をごまかそうとしている。

「お話を伺ってから信じられるものなら信じようとしているのです僕は」

「それはあなた方のなさる学問ならそれでよう御座んしょうよ。けれども人情づくの事はそんなものじゃありませんわ。木村に対して疚しい事は致しませんと云

---

<sup>203</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、551-552頁。

<sup>204</sup> 同上、560頁。

ったってあなたが私を信じてくださらなければ、それまでのものですし、倉地さんとはお友だちというだけですと誓った所が、あなたが疑っていらっしゃれば何の役にも立ちませんからね。……そうしたもんじゃなくって？」<sup>205</sup>

アメリカに到着した船で木村を納得させようとしていた時と、全く同じ方便を葉子は使っている。彼女の言っていること、彼女を無条件に信じてほしいということである。

「(…)でもおかしいものね、木村はあなたも信じ私も信じ、私は木村も信じあなたも信じ、あなたは木村は信ずるけれども私を疑って……」<sup>206</sup> という彼女の言葉は論理的に考えると無意味である。ある意味での三角関係では信頼関係があるのに、古藤だけが彼女を疑っているのは不公平であるかのように見せようとし、論理性より古藤の感情的なところ

(「……学問ならそれでよう御座んしょうよ。けれども人情づくの事はそんなものじゃありませんわ)に訴えようとしている。彼女を愛している木村はその畏にはまるのだが、何よりも誠実を重んじ、「世の中を sun-clear に見たい」<sup>207</sup> 冷静で合理的な古藤は、葉子の嘘を見抜くことができる。

19世紀のロシア社会においても、明治末期の日本社会においても認められていなかった男女の婚外の付き合いは、社会的な疎外をもたらした。こうした不安定で息苦しい状態にいるのはアンナも葉子も同様である。しかし、なぜアンナはその状態に対して誠実でいられるのに、葉子と一緒に暮らしている妹たちにも最後まで倉地についての真実を打ち明けられないのか。理由は葉子のより困難な金銭的な状態に見出せるが、ロシアと日本の社会規範の違いも要因であるかもしれない。日本人論でしばしば指摘される「建前」は、それに関係がありそうである。建前のおかげで「世間的な調和を保ちつつ、保身を図ることができる」<sup>208</sup> とされ、日本社会では建前はある意味で「知恵」として捉えられている。ロシアの社会にも、「建前」が全くないとは言えない。その現れである、フランスから導入された”*comme il faut*”という概念については既に第1章第2節第3項で述べた。一方、一般的に「誠実」を重んじる

---

<sup>205</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、337頁。

<sup>206</sup> 同上、340頁。

<sup>207</sup> 同上、459頁。

<sup>208</sup> 吉武正樹「ホンネとタテマエ」石井敏、久米昭元『異文化コミュニケーション辞典』春風社、2013年、395頁。

西欧の文化では、『誠実』に生きることが倫理的振る舞いとされてきた<sup>209</sup> のである。

この観点から見れば、アンナの誠実さと葉子の不誠実さという相違点がよりわかりやすくなるが、おそらく有島の意図は民族性の特徴を強調することではなかつただろう。何よりもアンナの誠実さを重んじるリョーヴィンおよびトルストイの思想は、「世の中を *sun-clear* に見たい」古藤および有島のスタンスに、実は酷似している。『或る女』の題詞（「太陽があなただを見放さないうちは、私もあなただを見放しにはしない……」<sup>210</sup>）から見ると、有島は葉子を批判するつもりがなかつたようである。彼女に深く同情していた有島は、なぜ彼女をアンナのような誠実なヒロインとして描かなかつたのだろうか。倉地・葉子は同じ日本社会で生きる者でありながら、倉地は船にいる時、男性の仲間に葉子との関係について打ち明けるが、前述したように、葉子は死ぬまでその事実を一生懸命ごまかしている。それは有島が、「建前」や嘘を含めあらゆる方法によって世間的な調和を保つべきという抑圧が、主に女性にかけられていたということ、表現しようとしたためではなかつたのだろうか。

葉子もアンナも社会から同様に疎外され、仲間の輪が非常に狭くなる。似ている環境にいる二人であるが、自身の状態について異なる態度を取っている。葉子は自身の親戚との付き合いも嘘を基に築いているため、他の人の言葉に対しても病的なほど不信感を抱いている。彼女に一番近い人物であるはずの倉地が言っている言葉を、同棲の当初から疑い、事実を確認しないまま放っておいたことが祟って、そのコミュニケーション不足と不信が彼女の死までずっと続く。アンナの世界よりは、葉子の世界のほうがはるかに暗い印象を与える。恋人を信用しないこともそうだが、男女を問わず周りの人々の殆どに対して葉子は敵意を感じているからである。

男性に対するその敵意においては、フェミニスト的な要素も見られる。例えば、前項でも触れた古藤の手紙や彼の結婚観を「結婚と云うものが一人の女に取って、どれ程生活という実際問題と結び付き、女がどれ程その束縛の下に悩んでいるかを考えてみる事さえしようとはしないのだ」<sup>211</sup>と葉子は批判している。前項で述べたように、米国で女性解放運動家コンガーと出会い、文通したことは、有島が女性解放について考えるきっかけとなった。帰国後

---

<sup>209</sup> 吉武正樹「ホンネとタテマエ」石井敏、久米昭元『異文化コミュニケーション辞典』春風社、2013年、395頁。

<sup>210</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、6頁。

<sup>211</sup> 同上、129頁。

もこの問題についての彼の見解は徐々に深まり、『或る女のグリンプス』から『或る女』に至る8年の間にも変化しつつあったことが、二つの作品の相違からも、またその間に発表した「惜しみなく愛は奪う」からもうかがえる。有島は、『或る女のグリンプス』になかった前掲の引用部分（116頁）において、彼自身の分身である古藤に向けられた葉子の批判という興味深い形で、自身が身に着けたフェミニズム思想を織り込んでいる。「惜しみなく愛は奪う」では、「人間の生活途上に於て女性は男性の奴隷となった」<sup>212</sup>という断言によって、それはより明確な形で表れている。

一回木部との結婚で失敗した葉子の嫌悪感、社会規範やその組織である「結婚」に向けられるだけではなく、男性という存在そのものへの嫌悪、ミサンドリーの形をとる。

けれども私が木村の妻になってしまったが最後、千秋の思いで私を待ったりした木村がどんな良人になるかは知れ切っている。憎いのは男だ……木村でも倉地でも……<sup>213</sup>

葉子は、男性との付き合いの始まりにある情熱的なエロスを楽しんでいるが、その付き合いの先にあるはずの結婚を全く信じていない。葉子のこの悲観的な思想は倉地との同棲生活を否応なく悲惨な方向へ導く。女性は本能として男性を好きになる一方、男性に差別されているために彼らを嫌うという矛盾については、有島は「惜しみなく愛は奪う」で詳しく述べている。その矛盾は社会が生んだ「狂った」男女関係に起因すると彼は主張する。

男女の関係は或る狂いを持っている。男女は往々にして争闘の状態におかれている。かかる僻事はあるべからざることだ。（…）

女性は男性を恨み、男性は女性を侮りはじめた。恋愛の領土には数限りもなく仮想的恋愛が出現するので、真の恋愛をたずねあてるためには、女性は極度の警戒を、男性は極度の冒険をなさねばならなくなった。（…）しかも更に悪いことには、人間はこの運命の狂いを悔いることなく、殆ど捨鉢な態度で、この狂いを潤色し、美化し、享楽しようとさえしているのだ。<sup>214</sup>

---

<sup>212</sup> 有島武郎集、第33巻「惜しみなく愛は奪ふ」角川書店、1970年、415頁。

<sup>213</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、152頁。

<sup>214</sup> 有島武郎集、第33巻「惜しみなく愛は奪ふ」角川書店、1970年、415頁。



つまり、女性は社会制度上男性の奴隷であるために彼らを恨んでしまうということは、当時のジェンダー関係の狂いのやむを得ない結果といえる。そのために、男性に対するこうした葉子の嫌悪感を、有島は批判するのではなく弁解しているのである。自分の女性性やエロスを発揮するために、男性が葉子にとって不可欠な存在でありながら、彼らを信頼できず、心の底で軽蔑しているという彼女のヒステリーを生むエロスの矛盾は、ここで改めて現れている。

男性を仲間と見なせない葉子は、女性も一般的にライバルとして扱っている。妹の愛子でさえ葉子の憎悪の対象となる。葉子の病的なヒステリックな状態が深まるにつれて、愛子に対する反感や不信が強まっていく。愛子と倉地との浮気までも疑い、葉子の破壊的な嫉妬は一層激烈になっていく。自分の性質を他人の性質と同一視してしまう彼女は、愛子も彼女を憎んでいると決め込んでしまう。

愛子は骨に徹する怨恨を葉子に対して抱いている。その愛子が葉子に対して復讐の機会を見出したとこの晩思い定めなかったと誰が保証し得よう。そんな事はとうの昔に行なわれてしまっているのかも知れない。若しそうなら、今ころは、このしめやかな夜を……太陽が消えて失くなったような寒さと闇とが葉子の心に被いかぶさって来た。愛子一人位を指の間に握りつぶす事が出来ないと思っているのか……見ているがいい。葉子は苛立ちきって毒蛇のような殺気立った心になった。<sup>215</sup>

アンナは上流社会から疎外されても、ドリーやスティーヴァをはじめとする親戚や召使に愛され続け、支えられ続けている一方、葉子が一番親しいはずの人物までも恨み、事実はともかく、彼女自身の視点から見ると同情者がほとんどいないという息苦しい空間に常にいる。この苦しい状態も、以前から現れていたヒステリーの発作を強め、今度は、ヒステリーがもたらしたうつ状態やそれに伴うパラノイアのために誰も信用できなくなるという悪循環から、葉子は抜け出せずにいる。小坂晋の仮説によると、葉子をヒステリーで破滅させるという構造を、有島はおそらく『アンナ・カレーニナ』から得たとされる。<sup>216</sup> しかし、『アンナ・カレーニナ』を船で読む以前から、有島は母親のヒステリーの発作を子供のころから見てきた。もしかするとそれをきっかけに彼は女性のヒステリーに興味を持ち、葉子像を通して同

---

<sup>215</sup> 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年、589頁。

<sup>216</sup> 小坂晋『『或る女』と『アンナ・カレーニナ』—比較対比研究序説』『岩手大学教育学部研究年報』第26巻第2部、1966年、20、26頁。

情深くヒステリーの深化を描こうとした可能性もある。

アンナもヴロンスキーに対する不信や嫉妬の結果、病的なヒステリー状態に陥り、自殺した。それは葉子との類似性を持っていながら、異なる結末に至る。アンナが自殺したのに対し、婦人病とともに数か月間ヒステリーやパラノイアで苦しんだ葉子は、手術の失敗が原因で亡くなる。葉子も長い間死を望んでいたが、自分の意思で命を絶とうとはせず、むしろ特に入院してから、生きる願望が死ぬ願望よりもはるかに強くなった。従って、小坂普を含め有島の研究者がしばしば指摘しているように、有島は葉子をヒステリーで破滅させた、とは必ずしも言えない。人付き合いから見ても、金銭面から見ても葉子はアンナより苦しい状態に置かれていた。葉子が身体的にも精神的にも疾患に陥った『或る女』の結末は、むしろ『アンナ・カレーニナ』以上に、ヒロインが自殺するという流れが自然であるようにも思われるが、有島は小説をそのような形では終わらせなかった。結局、もともとアンナより身体的にも精神的にも弱く、そして社会的地位の観点から見ても不利な状況に置かれた葉子は、アンナよりも生の欲動が強かったと言えよう。

自我に目覚め、恋愛のために社会規範に背いたアンナ・葉子であるが、両者とも完全に〈新しい女〉ではなくても、その先駆者である。その要素は葉子のイメージにおいてより強く表れた。トルストイは、完全に「アンチフェミニスト」ではなかったとしても、アンナをフェミニズムの象徴として全く意図しなかったのに対して、有島は女性解放の支持者として知られており、それは彼の論考からもうかがえることは前述の通りである。トルストイよりもはるかに女性解放に関する理解の進んでいた有島は、『或る女』において社会における女性差別を指摘している。「犠牲者」であるアンナに対し、葉子は「反逆者」であったといえるかもしれない。

### 第3章 〈新しい女〉の登場

#### 1. ロシアにおいて

##### 1.1. 十月革命と女性解放、アレクサンドラ・コロンタイの「新しい女」論

第1章で述べたように、ロシアで「女性問題」は19世紀の半ばから提起され、トルストイからツルゲーネフまで、多種多様な思想をもつ作家や知識人がその社会的議論に加わっていた。その議論においては、ストラホフやトルストイのように、女性解放思想に対して批判的な知識人たちもいたが、彼らは女性の劣位性を理由付けにしたわけではなく、家族の破壊や乱交などの道徳的墮落を恐れつつ、女性の役割は家庭を守ることであると強調することが多かった。日本ではプロテスタント派に代表されるキリスト教が女性教育をはじめとする女性解放運動を促した一方、ロシアの場合は、歴史上政府と密接に関わっていた正教会が保守的な姿勢をとり、またキリスト教的思想家は女性に昔から求められてきた妻及び母の役割を守るよう熱心に説いていた。科学や社会活動に興味を持つロシアの新しいタイプの女性は「ニヒリストカ」というレッテルを貼られ、彼女たちには様々な不徳があるとして、文学作品や新聞記事などで嘲笑されていたということは、第1章第1節第2項で見てきた。

多くの知識人や一般人の反対にもかかわらず、ロシアも全世界的な女性解放への動きに参加していくこととなった。19世紀が終わるころには、女性が高等教育を受けられる機関が増え、フェミニズム運動及び革命運動に参加する女性の数が増えた。20世紀初頭に勃発した日露戦争（1904～1905年）とそれに続く第一次世界大戦（1914～1918年）は、ロシアの女性に新しい職場を提供し、女性の自立意識を物理的に支えることとなった。戦争で亡くなった男性の代わりに、女性たちは工場の労働者や電信の職員を始めとし、あらゆる分野で益々活躍するようになった。同様のプロセスは日本を含め戦争に巻き込まれていた国々で見られ、その原因は悲惨な出来事でありながら、結果的には世界各地での女性解放に不可欠な役割を果たしたと言える。

もともと、欧州と同様に、ロシアの女性労働者の労働時間や条件は男性と等しかったが、平均給与は男性より大分低かった。<sup>217</sup> さらに、母性保護がほとんど行われず、産休が

---

<sup>217</sup> Sities, Richard. *The Women's Liberation Movement in Russia* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1978), p. 162.

与えられていなかったため、妊娠中でも有害物質に晒され、10時間以上の労働をさせられることが普通だった。そのために、女性労働者における流産の割合や乳児死亡率はブルジョワ階級の女性の数倍に達した。1905年ころから、女性労働者はフェミニズムの活動家にも、革命を企てていた社会民主主義者にも注目され始めた。ロシア社会民主労働党は女性解放を労働者解放の一部と見なしていた。改良主義のフェミニストたちは革命を支持しないがために敵であるというのが、ウラジーミル・レーニンに代表されるロシア社会民主労働党の立場だった。女性労働者が「ブルジョワ的な」フェミニズム運動に巻き込まれないようにすべく、「貴婦人」のフェミニストたちはプロレタリアの味方になれないと主張され、フェミニストのミーティングは意図的に混乱させられていた。つまり、男女という対立ではなく、ブルジョワとプロレタリアートの対立、言い換えれば階級闘争のほうが深刻であると、マルクス主義者たちは確信していた。

アレクサンドラ・コロンタイはこのようなマルクス主義的な社会民主主義の活動家の一人であった。彼女は裕福な家庭に生まれたが、ナロードニキの思想を持っていた家庭教師の影響を子供のころから受け、若いころから労働者解放運動に興味を示していた。彼女自身の言葉によると、彼女が掲げる人生の目的の一つは女性の解放で、もう一つは資本主義国家の帝国主義政策との戦いだった。<sup>218</sup> この観点から見ると、彼女は共産主義者でありながら、やはりフェミニストだったと言える。革命活動のために亡命を余儀なくされていた時期に、コロンタイは『女性問題の社会的基礎』（1909年）、そして600頁にもものぼる『社会と母性』（1916年）という論文を書いた。女性解放においてコロンタイは特に母性保護に焦点を置き、母親であることは結婚や家庭のステータスと関係なく不可欠な社会的機能であるため、産休の権利や必要な金銭を与えることなど、国家が母子の支援を行うべきだと説いていた。十月革命後、コロンタイは社会保障人民委員に任命され、彼女の尽力もあって、母子保護課が設置され、女性の産前・産後の有給休暇や母親への手当についての規定などの数々の規定や法令が制定された。このとき、母性の保護は国家の義務であると定められた。そうした制度はソ連邦で保障されており、未だにソ連崩壊の結果生まれたNIS諸国にも残っており、諸事情とは無関係に女性及びその幼児の生存を確保し、女性の自立を支えている国が多い。現在、ロシアやNIS諸国において母性を保護することが政策の不可欠な一部であることは、コ

---

<sup>218</sup> *Бреслав Е. Александра Михайловна Коллонтай. М., 1974. С. 19.*

ロンタイの尽力の成果であると言っても過言ではなからう。

コロンタイは共産主義者の立場から労働者についての評論を多数投稿していた一方、女性の社会的地位やジェンダー関係についての探求も行っていた。その中でも、小説（『三代の恋』、『姉妹』など）、論文や評論（「翼の生えたエロスに道を！」、「恋愛と新道徳」など）といった形で社会や労働、家族や夫婦関係、恋愛の新しい在り方に関する自身の考えを絶えず表明していた。レーニンに信頼されていたコロンタイは、ロシア革命の実現のために積極的な役割を果たし、革命後もソビエト連邦の政治や社会、思想界に様々な形で関わっており、日本を含め世界中の社会主義者やフェミニストに影響を与えていた。彼女は世界初の女性大臣（人民委員）になり、当時殆どいなかった女性大使にもなった。大使としての任命は左遷だったという見方もありますが、それでもノルウェー、メキシコ、スウェーデンで活躍し、第二次世界大戦中フィンランドとソ連の平和条約締結を彼女が直接実現させたことなどが、大使としてのコロンタイの業績が歴史に残るだろう。

1920年代に作られた女性政策機関「女性部」（«Женотдел»）でも、イネッサ・アルマンドの後任として、コロンタイはやはり部長を勤めていた。1926～1927年にメンバーが60万人以上に達した女性部は、現在に至るまで存続している『女性労働者』誌（«Работница»）を出版するなど、ソビエト連邦全国で社会主義のプロパガンダを行っていた。女性の生活状況を改善するため、また非識字者をなくすために尽力し、新しい形態の結婚、教育、労働法について女性を指導するという教育活動にも関わっていた。他に、ストリートチルドレンの世話、学校や職場の審査、立法活動といった形で社会において積極的かつ実践的な活動を行っていた。女性部の女性メンバーはこの活動によって自身の命を危険に晒すこともあった。イスラム教の影響が強い中央アジア地域においては、女性解放に対する反発で女性活動家の殺人事件が発生していた。それにもかかわらず、イスラム地域でも活動が続けられ、この社会主義的でありながら女性解放的な団体は益々メンバーを増やしていたが、ヨシフ・スターリン政権に代わってから、その活動は徐々に縮小させられていった。1930年に「女性部」はプロパガンダ部門の一部になった。女性を家庭に一層強く結びつけることによって家族の強化を目指していたスターリンが1934年に「女性問題は解決された」と宣言したことにより、女性部は閉鎖された。

こうしたことから、ロシアにおける「女性問題」に対するソビエト革命の二義性を指摘できるだろう。革命によってロシアの女性は、欧州を含め世界の多くの国々より早く参政権を含む男性と平等の権利が与えられた。他方で、殆どのポリシェヴィキは女性解放を労働者解

放の一部としか見なさなかつたため、当初ブルジョワのフェミニズム運動に対抗していた。コロンタイ自身、「フェミニスト」として度々批判されたにも関わらず、努力を止めなかつたため、「女性問題」はレーニンに注目されるようになった。女性を守る法律が制定され、さらに革命後は女性解放を目指す「女性部」が一時幅広い活動を行っていたが、スターリンはそれを含め全てのフェミニズム的な運動を禁止した。それでも、革命によってコロンタイのような言葉通りの〈新しい女〉が地下から公に姿を現し、ソビエト連邦だけではなく、フィンランドやスウェーデンを始め、世界中で積極的に活動し、一定の成果をもたらすことができたことを忘れてはならない。十月革命から100年を迎えた今日では、この画期的な出来事を批判する声が圧倒的に多いが、ロシアを始めとする世界の女性解放運動にとってその肯定的な役割を否定することはやはりできない。

コロンタイは社会的・政治的な活躍の他に、ロシアに〈新しい女〉の概念を導入したことで有名になった。1913年に彼女は「新しい女」という評論を発表し、当時の文学作品の女性主人公を例として取りあげながら、〈新しい女〉を「独身女性」と言い換えている。その新しいタイプの女性をコロンタイは次のように描写している。

(...) это какой-то новый (...) тип героинь, незнакомый ранее, героинь с самостоятельными запросами на жизнь, героинь, утверждающих свою личность, героинь, протестующих против всестороннего порабощения женщины в государстве, в семье, в обществе, героинь, борющихся за свои права, как представительницы пола. «Холостые женщины» — так все чаще и чаще определяют этот тип. «Die jungesellinen»...

Основным женским типом близкого прошлого была «жена», женщина-резонатор, придаток мужчины, его дополнение. Холостая женщина менее всего «резонатор», она перестала быть простым отражением мужчины. Холостая женщина обладает самоценным внутренним миром, живет интересами общечеловека, она внешне независима и внутренне самостоятельна.<sup>219</sup>

(…) これは今まで知られていなかった、新しいタイプのヒロインである。人生に対する自立の要求を持っているヒロイン、自身の自我を確立しているヒロイン、

---

<sup>219</sup> Коллонтай А. Новая мораль и рабочий класс. Новая женщина. М. 1919. С. 5.

[[http://www.pseudology.org/Bolsheviki\\_lenintsy/Kollontay\\_NovayaMoralRabochiyKlass2.pdf](http://www.pseudology.org/Bolsheviki_lenintsy/Kollontay_NovayaMoralRabochiyKlass2.pdf)]

国家や家族、社会における女性の多岐にわたる奴隷化に抵抗し、性の代表者として自身の権利のために戦っているヒロインなのである。このタイプは「独身女性」として定義されることがますます増えている。「独身女性」...

近い過去の主な女性のタイプは「妻」であり、「共鳴する女」、男性の付録、彼の補足だった。独身女性は「共鳴する女」とはかけ離れており、男性を単に反映するものではなくなった。独身女性は価値のある内心世界を持ち、一般的な人間の関心を持って生きている。彼女は外的にも独立しており、内的にも自立している。

ここでいう「独身女性」というのは、実際の結婚ステータスとは関係なく、単に女性の自立を指していることが読み取れる。コロンタイ自身も結婚したことがあり、一夫一妻制自体は否定しなかった。一方、愛情のない、生活の便宜のみのための結婚を彼女は容認できなかった。それについては「恋愛と新道徳」（1911年）で主張されており、そこでは愛情のない結婚は売淫に例えられている。

コロンタイの「新しい女」論によると、〈新しい女〉は他にどのような特徴を持っているべきとされるか、同評論から以下に簡潔にリストアップする。

- ① 感情性の代わりに内部規律を持つこと
- ② 嫉妬や疑い、独占欲の代わりに感情の自由を認めること、恋のライバルを優しく扱うこと、復讐しないこと
- ③ 男性に対するより高い要求を持ちながら、独裁を容認しないこと、自我の尊重を求めること。金銭的支援の無いことや浮気を容認できるが、自我の侵害を許さないこと
- ④ 女性として愛されるより、個人として、友達として愛されるのを重視すること
- ⑤ 自立を大事にし、結婚を求めないこと
- ⑥ 人生の意味を恋愛にではなく、自分の好きな仕事（社会思想、科学、職業、創造）に見出すこと
- ⑦ 性道徳に関する二重規範に反対すること、性的純度を重視しないこと、肉体関係を罪悪感なしで持つこと。

内部規律、言い換えれば冷静さを〈新しい女〉の特徴として重んじるこの思想に反して、

コロンタイ自身の性格は感情的で衝動的だったようである。一貫性のなさがたびたび批判されることがあったのは、もしかするとそうした理由によるのかもしれない。2点目に挙げられている「嫉妬」とその克服も、コロンタイの人生および著作において特に重要な意味を持っていたということは、コロンタイの研究者に指摘されてきた。<sup>220</sup> 二人目の年下の夫に浮気され、コロンタイ自身は嫉妬に苦しみつつ、トルストイや有島と同様に、その感情を極めて破壊的なものと見なしていた。ソ連という「新しい世界」で活躍する〈新しい女〉には、嫉妬は相応しくなく、それを「内部規律」によって根絶するべきだと、コロンタイは説いていたが、彼女自身はその理想になかなか近づけなかった。

言うまでもなく、コロンタイが作った新しい「独身女性」像は、先行するニヒリストカ像（第1章第1節第2項参照）と異なるところが多い。コロンタイはそのような女性の外見にも、自然科学への関心や喫煙などの個人的な趣味にも触れていない。代わりに、「新しい女」論でくりかえし強調されている経済的及び精神的「自立」は最も重要なキーワードになっている。19世紀ロシアの場合、精神的な自立はともかく、経済的な自立を女性に求めるのはまだ無理があったとも言える。というのも、言葉通りの〈新しい女〉が生まれるには、女性の労働環境を幅広く提供できる社会・経済システムが不可欠な条件の一つとなるからである。19世紀のニヒリストカから継承した〈新しい女〉の特徴を挙げると、上記の②及び⑦で挙げられている「感情の自由」と「性関係の自由」、言い換えれば「自由恋愛」である。トルストイを含め、19世紀の保守主義者たちはそれを「乱交」として認識していたが、コロンタイを始めとするプロレタリアの性ドクトリンを説いていたロシアの共産主義者たちにとって、それは自分のパートナーを自分で選ぶ権利、様々な理由でその関係を終わらせる権利、離婚の権利などであり、現代から見ると基本的人権を意味していたといえる。これらと内戦中にソビエトの若者の間で普及した「水一杯理論」（これについては後述する）を区別しない限り、コロンタイの思想を正しく理解できないだろう。

恋愛に対するコロンタイの見解の複雑さは、当時から現代にいたるまで彼女の思想に対する誤解を招いている。「恋愛と新道徳」（1911年）では、コロンタイが愛情を大きな力、崇拝すべきものとして肯定していることが読み取れるが、上述の「新しい女」論では、愛情は仕事より重要な位置を占めてはならず、重要な体力や時間を奪うものとして扱われてさえない。また、「新しい女」では、男女の関係において性欲より友情が重要であることが説かれて

---

<sup>220</sup> 北井聡子「コロンタイ思想にみられる『女性嫌悪』—『働き蜂の恋』におけるスチヒーヤの克服」『ロシア語ロシア文学研究 45』日本ロシア文学会、2013年、164-165頁。



いるが、「翼の生えたエロスに道を！」(1923年)では、精神的な愛情とともにやはり「身体のアトラクション」の重要性が強調されている。ただし、彼女の著作を貫いた概念の一つは、「愛情の多様性」という考え方である。「愛情の多様性」は言い換えれば「感情の自由」、「自由恋愛」であり、これがしばしば誤解を招くが、人間は自分にとって相応しい形の恋愛を選ぶ権利を持っているという、ある意味で単純な概念を指していたのではなかろうか。

コロンタイの「新しい女」の理想は彼女の文学作品のヒロインたちによっても語られている。嫉妬を克服しようとする努力を含め、〈新しい女〉にあるべきとされる特徴は、多様な女性登場人物たちの中でそれぞれの形で表れている。コロンタイの小説から例を挙げながら、彼女の恋愛観及び彼女が生み出した〈新しい女〉像について、次項でより詳しく述べる。そこで扱う『赤い恋』、『三代の恋』、『偉大な恋』は、〈新しい女〉としての女性の成長、ジェンダー偏見をうち破ること、自我を確立することを鮮やかに描いている。現実においては、コロンタイにとって、このような〈新しい女〉すなわち「独身女性」の例はドイツのマルクス主義の活動家ローザ・ルクセンブルクだったようである。<sup>221</sup> 一方、コロンタイは、たとえ自身の〈新しい女〉の理想を体現できなかったにしても、現在まで残っている彼女の努力の成果から見ると、ソ連国家が生まれたばかりの時代において最も卓越した〈新しい女〉であったと言える。

## 1.2 コロンタイの小説における〈新しい女〉像及び恋愛論

コロンタイはマルクス主義の活動家の1人であり、共産主義によって成り立つ「明るい未来」を熱心に信じていたが、彼女の小説が誤認を招き、日本を含め世界中で自由恋愛(あるいはむしろ自由性交渉)を説く「水一杯理論」に関連付けられたため、皮肉なことにマルクス主義のアンチプロパガンダのようなものになった。本項では、その経緯や理由に触れつつ、コロンタイの作品において表現された彼女の恋愛観、及び彼女が作品を通じて描いた〈新しい女〉像について論じたい。

コロンタイの思想においては特に恋愛、エロスに対する姿勢が特徴的であり、その姿勢自体も、また男女関係に対する彼女の高い注目も仲間のポリシェヴィキに批判されることが少なくなかった。しかし、女性解放及び女性史を扱う際には、男女関係を無視することはでき

---

<sup>221</sup> Бреслав Е. Александра Михайловна Коллонтай. М., 1974. С. 86.

ない。人間の歴史上、女性はいくつ最近までは従属的地位を占めてきたため、男性の何らかの形の援助がなくては家庭の外で活躍ができなかったのは事実である。そうした観点から、女性史を扱うということは、男女関係史やジェンダー史、恋愛思想を出発点にすることであると、現代のフェミニストたちも認めている。従って、コロнтаイのジェンダー関係に対する関心もごく自然なことであると判断できるが、彼女のその関心は男女を問わず共産党の仲間にも咎められていた。例えば、ポリーナ・ヴィノグラツスカヤは1923年の批評で、エロスを巡るコロнтаイの評論が当時の罵り言葉で言うところの「ブルジョワ的」<sup>222</sup>であると主張し、コロнтаイ自身を「フェミニズムの屑をかなり沢山持っている共産主義者」(«коммунистка с солидной долей феминистического хлама»<sup>223</sup>)あるいは「20世紀のジョルジュ・サンド」<sup>224</sup>と呼び、彼女の極端なロマンチズムを揶揄している。このような批判を受けることもあったコロнтаイであるが、ここでは彼女の作品の分析を通じて、その恋愛観を明らかにしていきたい。

ここで扱う『赤い恋』(原題『ワシリーサ・マルイギナ』)及び『三代の恋』は、1923年に出版された小説集『働き蜂の恋』に含められ、中編小説『偉大な恋』も同年に発行された。日本語に『赤い恋』というタイトルで訳されたコロнтаイの小説『ワシリーサ・マルイギナ』は日本で1927年にある種のセンセーションを起こし、「愛情の共産化」のように紹介された。<sup>225</sup> 同様に、『三代の恋』も、コロнтаイが「水一杯理論」を説いているかのように曲解され、社会主義への悪評をさらに定着させることとなった。「水一杯理論」というのは、「性的欲望や恋愛の満足は、一杯の水を飲むようなものだ」というもので、日本大百科全書によると、「俗に『コロнтаイズム』とよばれて世界に広まった」<sup>226</sup>とされている。労働者階級の性道徳は、革命以前も他の階級より緩かったということは、例えばゴーリキーの小説『母』からうかがえる。革命直後、内戦中のロシアではさらに、婚外の男女が肉体関係を持つことが一般的になってきていた。ブルジョワの古い道徳からの脱出を目指し、家族を否定し、恋愛は生殖本能にすぎないとするシニカルな理論を自分の都合のよい形で解釈して使っていた人も少なくなかったと推測できる。確かに、マルクス及びエンゲルスはブルジョワ的な家族

---

<sup>222</sup> *Виноградская П.* Вопросы морали, пола, быта и т. Коллонтай // Красная новь. 1923. No 6 (16). С.180.

<sup>223</sup> 同上、210頁。

<sup>224</sup> 同上、213頁。

<sup>225</sup> 杉山秀子『コロнтаイと日本』新樹社、2001年、10頁。

<sup>226</sup> 相賀徹夫『日本大百科全書(第9巻)』「コロнтаイ」小学館、1986年、669頁。

の終末を予想していたが、乱交にはレーニンに代表される共産党の指導者たちは反対していた。「自由恋愛」という概念の悪用は、アナトリー・ルナチャルスキーの評論「生き方について」<sup>227</sup>で非難されている。コロンタイ自身も「翼の生えたエロスに道を！」では感情のない肉体関係を批判している。ただ、コロンタイの小説において結婚や長期間の付き合いを最初から念頭に置かない男女関係の支持者が登場するということが、「水一杯理論」はコロンタイ自身の思想であるという誤った理解を招いた理由の1つとして考えられる。

『赤い恋』でこのような姿勢を取っているのは、〈新しい女〉であるワシリーサ（愛称形ワーシャ）ではなく、彼女の事実婚のパートナー、ヴァロージャである。ワシリーサと遠距離恋愛関係中、彼が看護婦と浮気したことはすぐ明るみに出たが、愛を誓いながら熱っぽく謝ったヴァロージャは結局ワシリーサに許される。ワシリーサは、コロンタイの「新しい女」論に従い、嫉妬を抱くべきではないと考えながら、実際は恋人の不倫を忘れられず、彼を以前のように信頼できなくなる。パートナーの浮気を「水一杯理論」を使うことによって彼女は正当化しようとしている。

結局、ヴァロージャにとって、あの女は「一杯のウオッカ」に過ぎない。「飲んでしまえば、すぐ忘れる」ものなのだ、ワシリーサは思った……

ワシリーサは、元のわが家へ帰って、直ちに仕事にとりかかった。あの時は、すべてまたもと通り、順調に運んでいるように思えた。が今ワシリーサが思い出して見ると、すでにあの時から何か心にひっかかるものがあった。どこか、心の底の底がしめつけられる。それは、あのむっちりした唇の看護婦のことで、ヴァロージャに対して感ずる憤りとも、不信ともつかぬ気持ちだった……それでもワシリーサは、ヴァロージャを熱愛している。(…) 悲しみを共に味わった今は、もっともっと心が近くなっている……にもかかわらず、この愛は、最早、明るい朝のような輝かしい喜びを、ワシリーサにもたらしはしなかった。雲におおわれたように彼女の心は暗かった。

228

このようにワシリーサは、小説のほぼ最後まで、恋人を責めたり、正当化したりを繰り返している。ヴァロージャが一時的に彼女の家を訪問した際、家事を手伝っていた少女に手を

---

<sup>227</sup> Луначарский А. О быте. Л., 1927 г.

[<http://lunacharsky.newgod.su/lib/o-byte>]

<sup>228</sup> コロンタイ『働き蜂の恋』『赤い恋』（高山旭訳）現代思潮社、1969年、79頁。

出そうとした時や、転勤先で愛人を作った時、ワシリーサは知らないふりをしながら、心の中で苦しんでいる。「嫉妬や疑い、独占欲の代わりに感情の自由を認めること」というコロнтаイの原理は、ブルジョワであろうと、プロレタリアートであろうと、実際の人の感情とは矛盾していることに、彼女自身も気づいていたに相違ない。彼女自身の二人目の夫パーヴェル・ドイベンコの不倫に気づいた時、ワシリーサのように、コロнтаイは傷つきながらも夫を何回も許したが、それでも結局夫婦の破局を止められなかったことは、不倫によって破られる「夫婦一体」という概念を理論の上では否定しようとも、それは信仰を問わず多くの人間の心理に根を下ろしていることを示している。

もう一つ、コロнтаイの「新しい女」論に受け継がれた矛盾がこの小説に表れている。「新しい女」においては、「自我の尊重を求めること。金銭的支援の無いことや浮気を容認できる(…)」と書かれているが、「尊重」と「浮気」は同時に成り立ち得るのだろうか。〈新しい女〉であるコロнтаイ及びその代弁者ワシリーサは自我の尊重を求めているが、なぜ自身の性に対する尊重を求めているのか。上記のようにワシリーサは自分自身を慰めようとしても、彼女の自我はパートナーの浮気に傷つけられている。そこには、当時のフェミニスト女性たちの多くがはまった畏があるように見える。「自由恋愛」を賛美し、旧い女性の特徴としての嫉妬を恐れていた〈新しい女〉たちは、男性にとって都合よく彼らを正当化し、事実上「自由恋愛」の代わりに自由かつ無責任な肉体関係を奨励し、自分自身の性及び体に対する尊敬の要求について忘れていたようである。〈新しい女〉であるはずのワシリーサも、コロнтаイも愛する男性の浮気を何度も許すというのは、自立する可能性を与えられず、夫なしで生活できない旧い女が仕方なく不倫を許していたことと事実上同じなのである。皮肉にもコロнтаイは、「男性のポリガミー」という旧世界の神話を、男女平等であるはずの新世界に持ち込もうとしていたのである。

ワシリーサもコロнтаイ自身も、精神的な裏切りを重く受け止め、無条件に拒否しているが、肉体的な裏切りをなぜかそれより罪の軽いものとして、結局許すことができるものと見なしている。このような「肉」と「霊」の対立は、皮肉なことにキリスト教的な発想に似通い、先に論じた有島やトルストイを苦しませていた性欲の矛盾を思い起こさせる。ここから、ソ連時代の宗教の禁止にもかかわらず、この概念は「夫婦一体」とともに、社会主義活動家を含めソ連人のメンタリティーに潜んでいたと推測できる。同様に、『赤い恋』の終わり方もキリスト教的である。浮気したヴァロージャを完全に受け入れることも、捨てることもできないワシリーサは、長い間苦しんだ結果、結局彼及び彼の浮気相手ニーナを許し、彼女にヴァロージャを譲ることに解決を見出した。まさに『アンナ・カレーニナ』のアンナとその

愛人ヴロンスキーを許すカレーニンのキリスト教的カタルシスと同じようなものに見えてしまう。

結局、「水一杯理論」という観念は、『赤い恋』における女性登場人物たちとは全く関係がなく、ヴァロージャによってしか実行されていない。ワシリーサを含め、小説のヒロインたちは彼の勝手さに弄ばれるだけである。女性の性を全く尊重せず、自分の性欲のために女性の気持ちを容易に傷つけ、なおかつ未成年者までを強姦しようとするヴァロージャは、当時の急進的な共産主義者であったにも関わらず、ジェンダー関係においてはあくまでも古い男であり、元来内面的に腐敗した人でもある。彼の振る舞いを通してコロantaiが自身の姿勢を表す意図を持っていたとは考えられない。『赤い恋』は「水一杯理論」を説くのではなく、むしろ、「水一杯理論」の二重基準や女性に対するその破壊的な本質を暴いた作品なのである。

コロantaiが「水一杯理論」を説いているという悪評の原因は特に『三代の恋』にあった。この短編小説は、主人公オリガが語り手に母親マリヤ及び自身のラブ・ストーリーを話すという形を取りながら、老婆、母、娘という同じ家族の三世代の女性の恋愛道徳を呈示している。マリヤは軍人の夫と2人の息子という家族を持っていたが、彼女と近い世界観を持つ医者との恋に落ち、不倫関係となる。結局彼女は家族を思い切って捨て、オリガの父親となる医者と一緒に暮らすことにした。その後、医者の浮気が発覚した時、マリヤはもう一度思い切って彼と別れたが、死ぬまで彼を愛していたとオリガは語る。つまり、一番年上のマリヤの恋愛観は、恋愛は家族より重要だが、一度に1人しか愛せない、浮気を許すことができないという考え方なのである。それはおそらく、コロantaiから見ると「ブルジョワ的な」愛情の捉え方なのであろう。それにひきかえ、オリガは長年夫と既婚の愛人の両方と関係を持っていた。その事情にオリガは悩みながらも、愛する2人の中から1人を選ばなければならないという母親の主張を特に気にしなかった。2人に対する同時の恋愛を容認するオリガの道徳は、コロantai自身の「愛情の多様性」という思想を想起させる。オリガは結局その2人を愛せなくなり、彼らと縁を切り、20歳ほど年下の男性と同棲生活を始めた。このプロットはまたコロantaiと17歳年下のドイベンコとの関係を思い出させる。その一致を考慮すれば、コロantaiの思想をオリガではなく、娘のジェーニャの思想に関係づけてきた従来の議論は整合性を欠くと言えよう。

ジェーニャの言葉によると、恋愛はあまりにも手間がかかるため、彼女はそれより仕事に従事し、同時に数人の男性と「自由恋愛」的な肉体関係を持つことを選ぶのだという。その

内の一人は母親の同棲のパートナーである。それを知ったオリガは当然傷つけられるが、その気持ちは娘にも夫にも分からない。ジェーニャの意見では、性行為は簡単でありふれたことであり、それに対する思い入れは強すぎない方が良いのだという。つまり、彼女のこの恋愛観こそがまさに「水一杯理論」なのである。彼女は自身の姿勢を次のように説明している。

(…) いわゆる肉欲なんてものは、はっきり言って、私がこの数ヶ月関係していた人たちと会う迄は、多分なかったのよ。今はもうこれも済んだことよ。でもあの人たちは気にいったわ。彼等の方も気に入っているって感じね……こんなことどれもとっても簡単だわ。後ぐされなんてないんですもの。ママはどうしてそんなに動揺するのか分からないわ。(…) お互いに好きな間は一緒にいて、嫌いになれば別れるだけよ。こんなことで誰にも損はないわ……損なのは墮胎のために二、三週間、仕事を中断しなきゃならないこと位よ。<sup>229</sup>

このような主張が、小説が出版された当時の読者にとって、如何にスキャンダラスで苦々しく響いたのかは、想像がつく。それによってコロンタイも、共産主義も、一般の人々の間で悪評を得ることになったとしても不思議ではない。ただ、コロンタイの他の作品を読んでいると、ジェーニャはコロンタイの思想の代弁者ではないという結論に至るだろう。この小説と同時期にコロンタイが執筆した評論「翼の生えたエロスに道を！」は、『三代の恋』と密接に繋がり、「小説の説明書きとなっている」と、北井聡子が指摘している。<sup>230</sup> 「翼の生えたエロスに道を！」から引用する。

Полигамия (многоженство), в которой не участвует чувство, может повлечь за собою ряд неблагоприятных, вредных последствий (раннее истощение организма, увеличение шансов на венерические заболевания в современных условиях и т.д.)<sup>231</sup>

感情を伴わない複婚（一夫多妻）は、有害で宜しくない結果（体の早期の疲労、

---

<sup>229</sup> コロンタイ『働き蜂の恋』『三代の恋』（高山旭訳）現代思潮社、1969年、375頁。

<sup>230</sup> 北井聡子「翼が導くユートピア — コロンタイの恋愛思想」『ロシア語ロシア文学研究 第43号』日本ロシア文学会、2011年、27頁。

<sup>231</sup> Коллонтай А. Дорогу крылатому эросу! (Письмо к трудящейся молодёжи) // Молодая гвардия. 1923. № 3. С.111—124.

[[http://az.lib.ru/k/kollontaj\\_a\\_m/text\\_0030.shtml](http://az.lib.ru/k/kollontaj_a_m/text_0030.shtml)]

現代の状況の下で性病の可能性を高めることなど)を引き起こす可能性がある。

この評論によって、コロンタイは感情のないエロス、つまり純粋な性欲に基づいた肉体関係を批判していることが分かる。代わりに、プロレタリアートの恋愛の理想としては、彼女は「友情恋愛」(«любовь-товарищество»)を称えている。このような愛情は、パートナーに対してだけではなく、人々に対する一般的な愛情、「人間愛」のような形でも存在するべきとされており、キリスト教の「隣人愛」を思い起こさせる。

また、ジェーニヤの上記の主張もスキャンダラスで反倫理的に見えるが、彼女が多数の肉体関係を結んでいたのは「肉欲」のためではなく、「お互いが気に入っている」という気持ちからだったという点は、『赤い恋』のヴァロージャの勝手に犯罪的な行動とはかけ離れている。彼の「水一杯理論」は古い時代の男性の浮気と本質的には同じものであるが、ジェーニヤの「水一杯理論」の根底には彼女なりの論理があり、それは古い道徳から抜け出そうとし、自分の身体を通して自由になろうとする試みのようなものであるため、彼女は結局コロンタイに批判されないのである。

「翼の生えたエロスに道を！」と同様のテーマで書かれた評論「恋愛と新道徳」で、コロンタイは違うタイプの愛情を提示している。それはいわゆる「遊戯恋愛」(«любовь-игра»)である。「偉大な恋」(«большая любовь»)は人間に頻繁に与えられるものではなく、「運命の稀な賜物」であるため、それを待っている間に、代わりに「遊戯恋愛」をすれば良いとコロンタイは主張している。「遊戯恋愛」は何なのかということを明確にするために評論から引用する。

Это не всепоглощающий Эрос с трагическим лицом, требующий полноты и безраздельности обладания, но и не грубый сексуализм, исчерпывающийся физиологическим актом... «Игра-любовь» требует большой тонкости душевной, внимательной чуткости и психологической наблюдательности и потому больше, чем «большая любовь», воспитывает и формирует человеческую душу.<sup>232</sup>

これは完全で無制限の占有を求め、悲劇的な顔をした、心を奪うようなエロスではなく、生理的な行為に制限された雑なセクシュアリティでもない...「遊戯恋

---

<sup>232</sup> Коллонтай А. Любовь и новая мораль.

[[http://az.lib.ru/k/kollontaj\\_a\\_m/text\\_1912\\_lubov\\_i\\_novaya\\_moral.shtml](http://az.lib.ru/k/kollontaj_a_m/text_1912_lubov_i_novaya_moral.shtml)]

愛」は、繊細な魂やきめ細かい心配り、心理的な観察力を必要としているので、「偉大な恋」よりも人間の魂を教育し、成長させる。

つまり、「遊戯恋愛」は「雑なセクシュアリティ」とも、「偉大な恋」とも異なるものである。それは2つの極の間にある感情なのであろう。もし同じ座標平面上に「友情恋愛」が置かれたら、「遊戯恋愛」とどのような関係になるのかは分からないが、どちらもコロンタイに高く評価されている感情なのである。

恋愛に関連するもう一つ概念である「偉大な恋」は、コロンタイの小説の題名となった。『偉大な恋』は日本で『三代の恋』及び『赤い恋』ほどの反響を呼ばなかったようだが、欧米の研究者の間で、この小説のプロットは、ウラジーミル・レーニン、彼の妻ナデジダ・クルプスカヤ、革命家イネッサ・アルマンドの三角関係が基になっているという仮説が普及し、この作品に対する関心が高かった。実際は、この中編はコロンタイ自身の体験に基づいている。<sup>233</sup> 小説は、コロンタイの分身と考えられる革命の活動家ナターシャと既婚の思想家セミョーン・セミョーノヴィッチ（愛称形はセーニャ）の不倫という形でのラブ・ストーリーがプロットになっている。『赤い恋』と同様に、恋に目がくらみ、自我を失いかけている女性の幻滅が描かれているため、『偉大な恋』というタイトルには皮肉が潜んでいる。

ナターシャは、コロンタイの「新しい女」論に従い、「嫉妬や疑い、独占欲の代わりに感情の自由を認める」ヒロインであるため、既婚のセーニャの告白を喜んで受け入れ、妻と別れる要求を一切しない。しかし、思想家として尊敬するセーニャとの両想いだけでも幸せになれるというナターシャの期待は結局のところ実現しない。『赤い恋』のワシリーサと違い、嫉妬をほとんど懐かないナターシャは、セーニャを愛せなくなった理由もワシリーサと異なる。セーニャは彼女の気持ちを分かろうとせず、自分自身及び妻の気持ちしか考慮しない。ナターシャとの恋は彼にとっておそらく問題が多い現実から脱出する方法であり、ある意味で幻想なのである。ナターシャも、セーニャとの恋愛に関して幻想を抱いている。もともと友情から始まった2人の関係は、「友情恋愛」であると、ナターシャは長い間信じている。恋人が彼女の本質を理解し、彼女の自我を受け入れてくれていると、ナターシャは確信している。セーニャの利己的な恋は彼女の求めている愛情から如何にかけ離れているかということに、ナターシャは最後になって気づく。

---

<sup>233</sup> Sities, Richard. *Kollontai, Inessa, and Krupskaja: A Review of Recent Literature*. (Canadian-American Slavic Studies 9(1), 1975), pp. 84–92.



ある町に逃げた2人は、世間には恋愛関係を隠し、妻に関係が発覚することを恐れるセーニャはナターシャにホテルを出ることさえ禁じている。ある日、セーニャは知り合いを訪問していた時病気にかかり、ナターシャに知らせもせず、数日間ホテルに戻らない。ホテルを出ることもできず、恋人と連絡も取れず、心配で眠れないナターシャはまさに地獄のような苦しみを味わっている。さらに、セーニャとの逢引のために借金を作り、数週間好きな仕事が全くできなくなったナターシャはストレスがたまっている。その気持ちにセーニャは全く理解を示そうとしない。

Каждое утро Наташа вставала с надеждой: сегодня Сеня посвятит ей день. Ну, не весь, хоть несколько спокойных часов, так, чтобы наладилась искренняя, душевная беседа, чтобы захотелось «раскрыть душу».

Но дни шли за днями, а часов беседы не выкраивалось. Были ласки, поцелуи, были шуточные разговоры за чаем, были ночные ласки, а беседы нет, бесед не складывалось.

Наташа пробовала работать. Надо было заготовить статью к сроку. Но работа не спорилась, шла тягуче, вяло. (...) и удивляло, даже обижало, что Семен Семенович ни разу не осведомился: а как ее работа.<sup>234</sup>

セーニャが今日の1日を彼女に捧げてくれるという希望とともにナターシャは毎朝起きていた。たとえ一日中でなくてもかまわない、せめて、誠実で心温まる会話ができるような、心を開きたくなるような、穏やかな数時間があれば。

しかし、日々が過ぎていっても、会話の時間はなかなかできなかった。愛撫やキス、紅茶を飲みながらのふざけた話、夜の愛撫もあったが、会話はできなかったのだ。ナターシャは仕事をした。締め切りまでに記事を準備する必要があった。でも、仕事はなかなか進まず、低調でダラダラしていた。(…) セミヨン・セミヨノヴィッチが彼女の仕事の調子について一度も尋ねなかったことに驚いたり、怒ったりもした。

ナターシャにとって、主な問題は恋人とのコミュニケーション不足と、彼女の自我が考慮されない、尊重されないことであろう。彼女は、自分がセーニャの聞き手や味方であるように、彼にも同じ態度を期待している。しかし、彼はまじめな話をできるだけ避けようとし、

---

<sup>234</sup> Коллонтай А. Свобода и любовь. Большая любовь. М., 2014. С. 225.

疲労や妻の不健康などを常に言い訳にしている。結局のところ、彼にとってのナターシャの価値は、気分転換のための女性にすぎず、問題からの逃避、慰めに限られている。彼女の自我は彼にとって重要ではなく、彼女は単に愛人の役割だけを果たせば良い、彼によって作られたイメージの範囲内で、いつも明るく、陽気で彼を無条件に受け入れる人でいれば良いというのが彼の望みであろう。「友情恋愛」でも「遊戯恋愛」でもなく、セーニャの愛情は利己的で、性欲に基づいたイリュージョンにすぎない。それは『赤い恋』のヴァロージャの「きめ細かい心配り、心理的な観察力」を欠いた、雑で勝手な女性に対する振舞いに似通い、「新しい男」であるはずの彼らの急進的な思想と矛盾する男性中心主義の古い倫理観なのである。それを悟ったナターシャは、幻想とともに愛情を失い、セーニャに恋人としてはもう今後会わないと決心してから、好きな仕事や仲間が待っている町に戻る。

以上、いくつかの評論や三つの小説を取りあげ、コロンタイの「恋愛観」に触れ、「新しい女」論を参照しながら彼女が描いた〈新しい女〉像について論じた。三つの小説のヒロインたちは、その性格や生活の事情は異なっているが、男尊女卑の旧世界から脱出しようとし、〈新しい女〉になろうとしているという根本的な特徴は同じである。「新しい女」という評論でコロンタイ自身が挙げた原則通り、彼女たちは感情の自由を認めていること、男に自我の尊重を求めていること、金銭的支援を求めず自立を大事にしていること、「友情恋愛」を理想としていること、自身のセクシュアリティを受け入れながら、恋愛だけではなく、自分の好きな仕事に生きがいを見出そうとしていることがその特質である。出版された当時、日本を始め、コロンタイの多くの小説はセンセーショナルで断じて許容できないものとして受け入れられたが、現代の視点から見ても、果たしてそうであろうか。コロンタイが「水一杯理論」を称えていたという、一般に広まった解釈を再検討する試みは既になされているが、今後さらに、その定着した誤解を解くための議論が、より広く行われるべきであろう。

## 2. 日本において

### 2.1 日本における〈新しい女〉、平塚らいてう及び『青鞥』

ロシアと日本の歴史的な流れや近代化の経緯、国家のイデオロギーは、特にロシアで十月革命が起きてからは言うまでもなく多くの点で異なっている。20世紀初頭に起きた日露戦争、それに続く第一次世界大戦や第二次世界大戦は共通の出来事として挙げられ、さらに世界中で19世紀後半から20世紀初頭にかけて第一波フェミニズム運動が展開されていたことも両国に影響を与えないはずはなかった。日本の場合もロシアの場合も、20世紀初頭に女性解放思想が社会において普及していたことに共通点を見いだせる。同時に、十月革命の結果、ロシアは世界で唯一の共産主義国家となった一方、日本では社会主義及び共産主義運動が政府によって抑圧されていたことは、女性の社会的地位に対するそれぞれの国家の姿勢にも違いを生み出した。大正時代が終わるころ、つかの間ながら思想の自由を享受できた「大正デモクラシー」にとって代わって、国家主義及び軍国主義が日本で普及した。それは「良妻賢母」の理想を日本国民に押し付けようとし、そのジェンダー規範に意義を唱えていた男女を抑圧していた。日本のその状況は、十月革命のおかげで男性と同じ権利を確保されたソ連女性の状態とは明らかに違っていた。ただ、「女性問題が解決された」というスターリンの宣言以降、共産主義を掲げるソ連も男女の差別を無視するという異なる形の抑圧を行っていた。日本とは形が異なっても、本質的に抑圧がソ連の場合も残っていた。

ロシアの「女性問題」の発展には第1章で触れたが、日本の女性解放運動の土台は、19世紀末の岸田俊子（中島湘煙）や景山（福田）英子、そして清水富子（紫琴）などの活動家によって築かれた。明治時代から女性教育の必要性は政府にも認められたが、その普及については既に述べたところである。しかし、フェミニズム運動の第一波が日本において本格的に始まったのは、1910年代であった<sup>235</sup>と指摘されており、ロシアの女性解放運動よりやや遅いスタートだったと言える。1917年に起きた十月革命はロシアの女性にとって少なくとも名目上では男性と同じ権利を与えたが、これは世界的に見ても前例のないことであり、日本の社会主義思想家にも、女性解放思想家にも影響を与えた。残念なことに、ソ連の〈新しい女〉アレクサンドラ・コロンタイは日本において極めて偏向的に紹介された

---

<sup>235</sup> 鹿野政直『婦人・女性・おんな—女性史の問い』岩波新書、1989年、49頁。

と杉山秀子が指摘している。<sup>236</sup> コロンタイの恋愛思想はメディアによって恐らく意図的に歪められ、前節で分析した『三代の恋』の女性主人公ジェーニャが実践している「フリーセックス」に同一視された。ジェーニャ（最初の日本語訳でゲニア）のその「水一杯理論」は、日本において「ゲニアイズム」及び「コロンタイズム」と名付けられ、批判される対象となった。したがって、コロンタイ自身も悪評的となり、彼女の評論、女性解放思想や母性保護思想は広く知られることには至らなかった。

ソ連では、コロンタイが幅広い活動を展開し、文字通りの〈新しい女〉になったことについて既に述べた。もし日本においてそれに相当する人物を見つけ出そうとすれば、それは平塚らいてうになるであろう。明治時代から日本の近代が始まったとされているが、明治も女性にとっては多くの場合封建的制度がまだ全盛といえる時代であった。その偽善的な「近代」に対しらいてうは疑問を差しはさみ、真の意味での女性解放を目指し活動を展開していった。平塚らいてう（明）が生まれたのは、コロンタイと同様に特権階級の家族で、日本初の女子高等教育機関として成瀬仁蔵によって設立された日本女子大学校で教育を受けるチャンスに恵まれた。自分とは違う恵まれていない女性に同情しつつ、彼女たちの才能を信じ、地方から『青鞥』などの活躍のために上京する女性たちに金銭的な援助を含めサポートをしていた。『青鞥』が様々な事情のために廃刊となった時も、らいてうは自分の活動を止めず、母性保護や婦人参政権獲得のために、「新婦人協会」を1919年に設立した。彼女の活動・思想にコロンタイの直接的な影響があったとは考え難いが、コロンタイと重なる点が多く見いだせる。それは歴史的に異なる状況に置かれた国家の女性たちの間に、同様の悩みや苦難を抱えていたことを物語っている。

らいてうがそもそも女性教育に興味を持ち、そして『青鞥』の人材の多くを提供した日本女子大学校に入学する動機となったのは、明治29年（1896年）に出版された成瀬仁蔵の『女子教育』であったとされている。成瀬はキリスト教の牧師で教育家であり、『女子教育』で宣言した彼の主張「女子を人として教育すること」は特に当時としては先駆的だった。現代から見るとごく当たり前の彼の主張はらいてうを感動させ、教育の道に進むことを促した。<sup>237</sup> 当時の日本の法が教育と宗教を分離していたため、日本女子大学校は

---

<sup>236</sup> 杉山秀子『コロンタイと日本』新樹社、2001年、208頁。

<sup>237</sup> 岩淵宏子「『青鞥』と日本女子大学校—平塚らいてうと成瀬仁蔵」『『青鞥』と世界の「新しい女」たち（日本女子大学叢書6）』翰林書房、2011年、16-18頁。

ミッション・スクールとして設立されなかったが、おそらく成瀬の講義を通してらいてうを含む女子生徒はキリスト教教育にも触れていたであろう。らいてうは熱心な禅の仏教徒として知られているが、明治36年（1903年）に入学した当時、内村鑑三の『聖書の研究』を読み、本郷のユニテリアン教会に通っていたことから、キリスト教に一時期強い関心を持っていたと推測できる。彼女の周りにいた女性の多く、例えば『青鞥』の賛助員上代タノや『青鞥』の誕生に大きな役割を果たした保持研などもキリスト教徒だった。後に与謝野晶子も受洗し<sup>238</sup>、「青鞥」社員の中でキリスト教に近い女性の例は他にも見受けられる。

『青鞥』の賛助員だった瀬沼夏葉は特にキリスト教との関わりが密接だった。彼女はロシア正教会が明治16年（1883年）に開いた東京女子神学校に明治19年（1886年）に入学した。日本においては初等教育がまだ整備されてない時期に、女子の中等教育施設を設けた日本正教会はプロテスタント系のミッション・スクールと並んで先駆的だったと言える。明治25年（1892年）に前述の女子学校を卒業した夏葉は母校で教鞭をとり、その月刊誌『裏錦』に発刊の言葉を含め2年間にわたり寄稿していた。<sup>239</sup> 神学校校長の瀬沼恪三郎と結婚後、彼女は尾崎紅葉門下生となった。紅葉とともに日本初の『アンナ・カレーニナ』訳に従事し、それは6回にわたり『文藝』において発表されたが、残念ながら紅葉の死のために頓挫した。彼女の業績の中では、特にロシア語から直接行った翻訳によって日本にアントン・チェーホフの小説を紹介したことが広く知られている。紅葉の死後、『チェーホフ傑作集』を発表し、チェーホフの小説や戯曲の訳を『青鞥』にも投稿し、『白樺』とは異なりそこでマイナーなロシア文学の作品を取り上げた。チェーホフの作品を多く翻訳した彼女の業績のおかげで、演劇界においてもロシア文学の影響が強まり、明治から大正時代にかけての日本において、夏葉はロシア文学のより広い普及に貢献したと言える。ロシア語に対する彼女の興味や熱心さは正教会の女子神学校、そして正教会神学士の夫の影響によって生まれたものだったと考えられる。要するに同時代の多くの日本女性にとってキリスト教はその活躍を妨げていたどころか、解放の一つの柱となり、『青鞥』内外を問わず、〈新しい女〉の教育や成長を促していたのである。

---

<sup>238</sup> 村井早苗「『新しい女』とキリスト教」『『青鞥』と世界の「新しい女」たち（日本女子大学叢書6）』翰林書房、2011年、56-59頁。

<sup>239</sup> 中村喜和「瀬沼夏葉とチェーホフ作品の翻訳」『続・日露異色の群像30—文化・相互理解に尽くした人々』生活ジャーナル、2017年、137-138頁。

第2章第1節第1項でも述べたように、キリスト教は日本において一夫一妻制の成立や女性教育、従って女性解放にも重要な役割を果たしたことは疑いようがない。『或る女』の親佐のモデルとされる佐々城豊寿はキリスト教婦人矯風会の副会長だったが、この団体も日本における売春廃止に貢献し、当時の〈新しい女〉たちのためにネットワークを提供していた。そこで活躍していた実業家で社会運動家の広岡浅子は同会を通じ知り合った数人の優秀な〈新しい女〉たちに援助を与えていた。三井家に生まれ、女性であるという理由で教育を受けられなかった広岡浅子は、成瀬仁蔵と知り合ったことをきっかけに、金銭の寄付を含め女性教育を支えるようになり、日本女子大学校設立の発起人の一人になった。成瀬仁蔵の勧めで彼女自身も「神の前に男女の平等を唱えるキリスト教」<sup>240</sup>の洗礼を受けた。成瀬自身がキリスト教の牧師だったと同時に、女性教育の熱心な支持者だったことについては既に述べた。らいてうに女性の能力を信じさせ、女性解放のために努力する力を与えるほどの強い影響力や説得力をこの牧師は持っていた。それは「宗教は民衆のアヘン」と断言したカール・マルクスの教えに基づいて宗教を禁じたソ連、そしてキリスト教が保守的で抑圧的であると度々批判する西欧とは全く異なる受け入れ方であり、日本独特のキリスト教の発見だったとも言える。

『青鞥』以前も、女性たちが様々な形で関わっていた雑誌、もしくは婦人問題を扱っていた雑誌が存在していた。与謝野晶子を含め女性作家が投稿していた『明星』（1900年/明治33年～1908年/明治41年）、女性教育を主に扱っていた『婦女新聞』（1900年/明治33年～1942年/昭和17年）、「賢母良妻」を育てることを目的としていた『女学世界』（1901年/明治34年～1925年/大正14年）及び『婦人世界』（1906年/明治39年～1933年/昭和8年）、社会主義の要素が強い『家庭雑誌』（1903年/明治36年～1909年/明治42年）、現在まで続きもっとも息の長い『婦人之友』（1903年創刊）、そして女流作家を生み出そうとした『女子文壇』（1905年/明治38年～1913年/大正2年）などはその例である。明治34年から38年までの僅か4年間で新しく創刊された婦人雑誌の数は60誌を超えた。<sup>241</sup> 一般向けの雑誌も「女流小説」のアンソロジー（例えば、1910年/明治43年の『中央公論』による「女流作家小説拾篇」）を出しており、明治後期の日本において女性文学や婦人問題が注目を集めていたことがうかがえる。『青鞥』以降も、その社員は『女子文壇』をはじめとする

---

<sup>240</sup> 小林美恵子「日本女子大学校が生んだもう一つの「新しい女」たち—小橋三四と『青鞥』内外の合流」『『青鞥』と世界の「新しい女」たち（日本女子大学叢書 6）』翰林書房、2011年、165頁。

<sup>241</sup> 藤木直美「『青鞥』のメディア戦略」『『青鞥』を読む』學藝書林、1998年、448頁。

雑誌に投稿したり、尾竹紅吉の『番紅花』のように、自分の雑誌を創刊する者もあったが、そんななかでも女性の自覚や創造性を促すことを唯一の目的とし、女性詩人や作家、思想家や翻訳家が交流できる場を与えた『青鞥』が際立っていることは否定できない。男性によって創刊され、主に男性編集者や投稿者によって出版されていた当時の殆どの「婦人雑誌」と異なり、単に女性読者を対象としているというだけでなく、女性の力のみによって成り立った雑誌として『青鞥』は日本のフェミニズム運動史にはもちろんのこと、日本文学史においても特別な位置を占めている。

『青鞥』はらいてうの意志に基づき最初から「女流文学」を発展させる目的を持ち、与謝野晶子や森しげなど、文学界で名前が既に知られていた作家から新人まで、女性作家の小説や詩、評論、翻訳などが掲載された。さらに、その「付録」には女性問題を巡る特集、評論やエッセーなどが含まれていた。自然な流れとして、もともとの目的に女性解放の要素も加わってゆき、『青鞥』は日本における〈新しい女〉の集団、そしてフェミニスト雑誌としての認知を得た。雑誌名は周知のとおり、イギリスの「ブルー・ストッキング」から来ており、その雑誌名の提案についてらいてうは自伝で次のように回想している。

ブリュー・ストッキングという言葉の起こりは、十八世紀の半ばごろ、ロンドンのモンターグ夫人のサロンに集まって、さかんに芸術や科学を論じた新しい婦人たちが、青い靴下をはいていたところから、一般に何か変わったことをする新しい婦人に対して嘲笑的な意味で使われていた言葉ですが、私たちの場合も、仕事をやり出せば、きっと何かいわれるにちがいないので、自分からブリュー・ストッキングを名乗って、先手を打っておこうというわけでした。(…)私たちは生田先生と相談の末、これに「青鞥」という訳字を使うことにしました。<sup>242</sup>

〈新しい女〉という概念はここでらいてうによって数回使われているが、女性解放の先駆者としてのイギリスの「ブルー・ストッキング」は彼女を含め当時の日本人に誤解されていたようである。<sup>243</sup> 急進的な女性の集まりであると信じられていた「ブルー・ストッキング」は、実際女性解放思想とはほぼ関係なく、文学や芸術について議論する上流婦人のサロンだった。しかし、やや保守的な傾向を持っていた「ブルー・ストッキング」のメ

---

<sup>242</sup> 平塚らいてう『わたくしの歩いた道』新評論社、1955年、84頁。

<sup>243</sup> 渡部麻実「『青鞥』とブルー・ストッキング」『『青鞥』と世界の「新しい女」たち(日本女子大学叢書 6)』翰林書房、2011年、44-47頁。

ンバーたちと違い、「青鞥」社員は〈新しい女〉になることを目指し、らいてうの予想通りに、社会から「変わったこと」をする者たちとして恐れられ、かつ嘲笑われていた。『青鞥』のマニフェストとなった「元始女性は太陽であった」において、らいてうは女性解放について次のような思想を述べる。

自由解放！ 女性の自由解放という声は随分久しい以前から私どもの耳辺にざわめいている。しかしそれがなんだろう。思うに自由といい、解放という意味が甚だしく誤解されていしなかつたろうか。尤も単に女性解放問題といってもその中には多くの問題が包まれていたろう。しかしただ外界の圧迫や、拘束から脱せしめ、いわゆる高等教育を授け、広く一般の職業に就かせ、参政権をも与え、家庭という小天地から、親といい、夫という保護者の手から離れていわゆる独立の生活をさせたからとてそれが何で私ども女性の自由解放であろう。なるほどそれも真の自由解放の域に達せしめるによき境遇と機会とを与えるものかも知れない。しかし到底方便である。手段である。目的ではない。理想ではない。<sup>244</sup>

つまり、らいてうが目指した真の女性解放は当時の世界中のフェミニストが目指していた権利獲得だけで完遂されるものではなかつた。その権利が付与された上で、外からの抑圧が取り除かれたとき、ようやく真の解放に近づくのである。だが、それは手段に過ぎず、解放の本質は「潜める天才を、偉大なる潜在能力を十二分に発揮させることに外ならぬ」<sup>245</sup>とらいてうは主張する。各女性に備わっているはずのその「天才」、つまり生まれながら与えられた能力という概念はらいてうが成瀬から受け継いだ可能性が高い。彼はその後『青鞥』を批判することもあったが、女性教育についての彼の先駆的な思想は『青鞥』創刊へのインスピレーションや力をらいてうに与えたと言える。

そもそも、〈新しい女〉という言葉は日本でいつ頃現れたのか。らいてう自身によると、『青鞥』が発刊されてからその言葉は間もなく普及していったそうだが、堀場清子の主張によると、それ以前にもらいてう自身のイメージが「新しき女」と結びついていたという。<sup>246</sup> その原因は、新聞で騒がれた1908年の「塩原事件」に見いだせる。その事件の主役はらいてう及び夏目漱石の弟子だった森田草平であるが、この二人の間にあったことに

---

<sup>244</sup> 平塚らいてう「元始女性は太陽であった」『『青鞥』女性解放論集』岩波書店、1991年、23頁。

<sup>245</sup> 同上、25頁。

<sup>246</sup> 堀場清子『青鞥の時代—平塚らいてうと新しい女たち』岩波新書、1988年、70頁。



については第2章第1節第2項で述べた。実際の出来事を基にした森田草平の小説『煤煙』に続いて、『青鞥』が創刊される直前の1911年に『東京朝日新聞』で彼の「自叙伝」が連載された。その真下には「あたらしき女」という批判的な連載が行われたことは偶然ではないだろう。当時、「あたらしき女」というのは、「従来の規範から免脱する女」を意味していたと、堀場清子は述べている。<sup>247</sup> 同年、帝国劇場ではイプセンの『人形の家』が上演され大人気になり、メディアの言説によって、その主人公のノラも『青鞥』そして〈新しい女〉に関連付けられた。<sup>248</sup> 翌年、『青鞥』の付録としてノラ論の特集が発表された。こうした一連の出来事によって、日本の〈新しい女〉の象徴的な存在としてのらいてうの評判が立ち始めたと考えられる。そして、彼女が率いていた「青鞥」社はお騒がせの〈新しい女〉の集団であるという社会の批判は時とともに強まる一方だった。

『青鞥』が発刊されてから数年間にわたり、「青鞥」社員のプライベートをネタにする記事、そして『東京日日新聞』の「新しがる女」（1912年）など、〈新しい女〉を嘲笑う記事が次々と日本のメディアに現れる。「青鞥」の悪評の基には、ジェンダー規範を逸脱しようとする女性に対する当時の保守的な社会の拒絶があったことは言うまでもない。さらに、らいてうと尾竹紅吉の同性愛関係、そして「五色の酒事件」及び吉原遊廓の見学（「吉原登楼事件」）が広く知られたことによってその非難は強まり、『青鞥』に対する社会の敵意を強めた。らいてうが崇拝していた女子教育の先駆者成瀬仁蔵でさえ、〈新しい女〉が騒がれるスキャンダルに反応し、〈新しい女〉を「お転婆」と呼び、日本の良妻賢母主義の教育を肯定した。その批判にはらいてうが『青鞥』誌上「世の婦人たちに」（大正2年/1913年4月）で合理的に、かつ勇敢に力強く次のように答えている。

（…）私は、私の尊敬する女子教育家の言葉として誠に遺憾に堪えませんでした。（…）今日の我国のあの憐れむべき良妻賢母主義の女子教育を何となさいますか。殊に私ども一世人は新しい女と呼んでいる—に対して、私どもの内に起こって来た新生命に対し、そのやみがたき要求に対して、何らの理解もなく、また理解しようとする気もなく、無智な感情的な多数俗人の偏見と共に、新しく勃興せんとするものに何かとケチをつけたがる野次馬の卑しい言葉とともに「お転婆」だとか、女子の美德を害するとかいったような種類の無反省な言葉をもって平気

---

<sup>247</sup> 堀場清子『青鞥の時代—平塚らいてうと新しい女たち』岩波新書、1988年、68頁。

<sup>248</sup> 同上、82頁。

に評し去ろうとするのは、日本における唯一の女子大学の校長としては、あまりに、不明な、あまりに無責任なことではないかと思いました。<sup>249</sup>

その時期の日本において、〈新しい女〉の概念は罵り言葉のようなものとなっており、政府や世間に怪しまれていただけでなく、らいてうに偉大な影響を与えた先駆的な女性教育者さえ批判を浴びせたということは、既述の通りである。一方、当時の〈新しい女〉たちが集まるはずの集団及びその雑誌を、イギリスで悪目立ちしていた「ブルー・ストッキング」から「青鞥」と名付けたことから、らいてうはそういう社会の嘲笑いや非難を最初から予想していたことがうかがえる。様々な方面から受けていた侮辱に負けず、大正2年（1913年）の『青鞥』の第三巻一号及び第二号において「付録 新しい女、其他婦人問題に就いて」という〈新しい女〉の特集を發表し、さらに同年の『中央公論』にらいてうは「新しい女」という散文詩を投稿する。

『青鞥』の発意者であらゆる意味において中枢といえる存在だったらいてうにとって、〈新しい女〉とは何だったのだろうか。上掲の「世の婦人たちに」で、彼女は無結婚主義について自分の意見を述べている。無結婚主義は彼女や他の「青鞥」社員に特に当てはまらないと言いながら、当時の日本の結婚制度を「一生涯にわたる権力服従の関係」<sup>250</sup>と激しく批判している。また、法律上結婚している男女の極めて不平等な立場に触れ、「こんな無法な、不条理な制度に服してまでも結婚しようとは思いません」<sup>251</sup>と結論付ける。このような姿勢は本章の第1節第1項で取り上げたコロンタイの「独身女性」という概念を思い起こさせる。結局、らいてうもコロンタイも結婚し、母親にもなったが、女性は家族や国家の便宜のために存在するもの、男性の付録であるもの、そして、妻及び母になるのは女性の唯一の天職であるという考え方を両者とも拒否していた。つまり、女性の意志の自由を唱え、女性が自分自身で選んだ道を歩むこと、自らの欲する活躍をすることを希望していた。コロンタイが描いていた〈新しい女〉のイメージはより具体的に見えるが、らいてうが特に重視していた女性の「天職」の概念、法律上、そして恋愛関係や家族における男女平等は、コロンタイの考えでも中心的な位置を占めている。

日本の女性解放思想家として同じ理想や目的を掲げてはいたものの、「青鞥」社員が抱い

---

<sup>249</sup> りいてう「世の婦人たちに」『『青鞥』女性解放論集』岩波書店、1991年、201-202頁。

<sup>250</sup> 同上、204頁。

<sup>251</sup> 同上。

ていた〈新しい女〉のイメージや社会的地位に関する意見は必ずしも一致していたわけではない。日本で紹介され、思想界において反響を及ぼしたヘンリック・イプセンの『人形の家』のノラや『ヘッダ・ガーブレル』のヘッダ、そしてヘルマン・ズーデルマンの『故郷』のマクダという女性主人公は当時の〈新しい女〉の象徴のようなものとなっていたが、同時に、これらのヒロインたちに関する意見は「青鞥」社員の中でも分かれていた。特に批判的な姿勢を取っていたのはらいてうであるが、彼女にとってこれらのヒロインの自己意識には〈新しい女〉としては物足りないところがあったようである。女性が職業を得ることの必要性について説く岩野清子のように経済的自立に焦点を置く「青鞥」社員がいる一方、別居結婚や夫婦別姓を提案していた堀保子のように自由恋愛を特に重んじる社員がいた。そしてらいてう自身は男の便宜のために奴隷にされずあくまでも自我に生きることを〈新しい女〉の不可欠な条件として宣言していた。その姿勢は「独裁を容認しないこと、自我の尊重を求めること」を〈新しい女〉の理想としていたコロンタイの主張に非常に近いものを感じられる。また、旧い家族制度や良妻賢母を育成する教育制度に関しては多くのメンバーが批判していたのに対し、特にジェンダーや性に関しては意見に不一致が見られ、それは『青鞥』における「貞操論争」、「墮胎論争」、「廃娼論争」、そしてその後の「母性保護論争」を引き起こしたのである。

『青鞥』の「新しい女」付録において、らいてうはスウェーデンのフェミニストであるエレン・ケイの『恋愛と結婚』の初めての日本語訳を連載しはじめた。その作品は当時の言論界に反響を呼び、「恋愛結婚」イデオロギーが日本で定着することに重大な役割を果たしたとされる。<sup>252</sup> それは第2章第1節第1項で取り上げたロマンチック・ラブ・イデオロギーと言うまでもなく密接に繋がっており、この場合もキリスト教の概念とフェミニズム思想が日本においてほぼ同時期に、よく似たはたらきをしていたことがうかがえる。ケイの思想との出会い、そして奥村博史との事実婚である「共同生活」に伴う妊娠と出産がらいてうのジェンダー観を新しい方向へ促したと言える。「元始女性は太陽であった」でうかがえるように、彼女は才能の発展や自己主張を何よりも重んじ、個人主義を梃子にしていたが、やがて、母親になる彼女の個人的な体験、そしてそれを裏付けるケイの母性主義フェミニズムと出会って以降、らいてうは母性を肯定するようになった。「青鞥」社員同士の中で「墮胎論争」が起きた大正4年（1915年）には、らいてうは既に、『個人』として

---

<sup>252</sup> 吉川豊子「『恋愛と結婚』（エレン・ケイ）とセクソロジー」『『青鞥』を読む』学藝書林、1998年、244-245頁。

の生活と『性』としての生活との間の論争について（野枝さんに）」において、特定の条件の下で避妊及び堕胎を正当化しながら、日本の法律がもし堕胎を無条件の犯罪とするならば、母親及び子供を保護すべきだと主張している。母性フェミニズムの視点をらいてうがケイから受け継いだことについて既に述べたが、それは、一生をかけて母子保護のために力を尽くし、ソ連で闘ってきたコロンタイの立場に酷似している。

『青鞥』に関わっていた女性たちの多くが母親であったにもかかわらず、その母性保護的な見解をみな共有していたわけではなく、『青鞥』の無期休刊後の大正7年（1918年）から大正8年（1919年）にかけていわゆる「母性保護論争」が起きた。らいてうと与謝野晶子との対立から始まり、そこに山川菊栄や山田わかがそれぞれの立場から加わった。らいてうは母性が国家に守られ、支援されるべきという考えであったのに対し、11人子供を出産した与謝野晶子はその国家の支援は新しい形の「良妻賢母」であると主張し、女性は事情を問わず自立すべきだというやや極端な意見を表明した。山川菊栄も社会主義的な姿勢から、女性の経済的自立のための社会変革の必要性を説き、論争に加わっていた。

らいてうが1920年に新婦人協会を結成したのも主に母子の権利擁護のためだった。らいてう及び『青鞥』のその母性フェミニズムは国家の性管理システムの強化を助長したと批判される<sup>253</sup>こともあるが、それは果たして妥当であろうか。母親になるか、ならないかという女性の自由、言い換えれば生殖権を国家が金銭的に保証するというのは、社会にとって不可欠な人間繁殖を確保することである一方、子供を生むこと、育てることを選んだ女性に対する当たり前の賠償であり、女性の経済的・精神的な自立を支えるという、市民としての女性権利の拡張でもある。この観点から見ると、「母性主義」フェミニズムは「女権拡張型」フェミニズムと必ずしも矛盾しているとは言えない。山川菊栄も、母性保護論争における与謝野晶子と平塚らいてうのそれぞれの立場は必ずしも矛盾していないと述べた。「母性保護論争」から100年経った現在も、国家による母性保護の傾向は、ソ連から母性保護制度を受け継いだロシアやNIS諸国だけではなく、程度はそれぞれでありながら世界中に見られる。

らいてうがコロンタイに影響を受けたことについては残念ながら証拠がないが、社会主義活動家として知られる山川菊栄はコロンタイの活躍に強い関心を持っていた。『青鞥』の

---

<sup>253</sup> 吉川豊子「『恋愛と結婚』（エレン・ケイ）とセクソロジー」『『青鞥』を読む』学藝書林、1998年、260-261頁。

廃刊後の1924年（大正13年）に、彼女はコロнтаイの最初のまとまった紹介として「アレクサンドラ・コロнтаイ女史」という論文を『女性』誌に投稿した。<sup>254</sup> コロнтаイの恋愛観をやはり「ゲニアイズム」と同一視する菊栄は、それを「コロнтаイの恋愛観」論で批判しつつ、活動家としてのコロнтаイを高く評価していた。コロнтаイの論文の日本語訳もいくつか手がけ、その例は1921年に『解放』に投稿した「共産国家と家庭生活」及び「無産婦人の国際的団結」、そして1926年に『婦人運動』に投稿した「新社会と家族制度」<sup>255</sup>である。菊栄が初めて『青鞥』に投稿した1916年には、コロнтаイの思想とおそらくまだ出会っていなかったと推測できるが、当時の彼女の社会主義思想は既にコロнтаイに似通っていた。『青鞥』の当時の編集者伊藤野枝が婦人矯風会の廃娼運動を批判する論文に対し、菊栄は合理的な反論を投稿し、いわゆる「廃娼論争」が起きた。売春をなくすことは可能であり、女性解放のための社会変革とともに必要であるという菊栄の見解は、コロнтаイの姿勢と同様である。残念なことに、同1916年に『青鞥』自体が廃刊となったため、コロнтаイに関する菊栄の関心は『青鞥』では実を結ばなかった。もしも『青鞥』でコロнтаイが紹介されていたとしたら、彼女の思想は日本において異なる形で受け入れられたのかどうかは、推測するしかない。

『青鞥』は既述のように、明治末期の唯一の女性誌だったわけではなく、発行部数から見ても最も人気の女性誌でもなかった。ただ、女性の能力、いわゆる「天才」を発展させることを主な目標とし、発禁処分を恐れず女性に自由な発言の場を与え、女性の力のみによって成り立った雑誌として唯一無二の現象だったと言える。女性の投稿しか載せないという『青鞥』の厳格なポリシーのおかげで、らいてうが目指していたこと—文学における女性の進出だけでなく、思想的な自由や気概を手に入れること—を達成することができた。政府や保守的な社会からの激烈な非難にもかかわらず、発刊から終刊まで5年間という短い間に、その後他の雑誌で活躍していく女性作家にも、女性・男性の読者にも多大な影響を与えた。その読者の中には、評論家で活動家の望月百合子、『女性の歴史』を執筆した民俗学者高群逸枝、そして女性議員で女性解放活動家の河崎なつ<sup>256</sup>などもいた。らいてう自身の人生そのものに刺激された男女を含め、目立たない部分においても、らいてうは『青鞥』によってその発信力を増し、数えきれない女性に当時のジェンダー規範に囚われ

---

<sup>254</sup> 杉山秀子『コロнтаイと日本』新樹社、2001年、147頁。

<sup>255</sup> 同上、187—188頁。

<sup>256</sup> 藤田和美「『青鞥』読者の位相」『『青鞥』を読む』學藝書林、1998年、477—479頁。

ない、より自由な生き方を示したに相違ない。

## 2.2 『青鞥』の作品が描く女性の葛藤

『青鞥』の作品は、日本特有の文学現象とされている私小説のように作家自身の経験に基づき書かれたものが多い。それを創刊号の「そぞろごと」で与謝野晶子は次のような言葉で激励している。

一人称にてのみ物書かばや  
われは女ぞ<sup>257</sup>

文字どおりの一人称ではなくても、『青鞥』の女性作家たちが書いた小説を小林裕子は「告白体の小説」と呼び、そうした小説と男性の懺悔的な小説、また同時代の青鞥外の女性のそういうものとは明らかな相違があると指摘している。<sup>258</sup> それは、同時代の男性作家は性欲や性行為を告白の中心に置くプロットが多いのに対し、『青鞥』の作家たちの作品は肉体関係を扱ったとしても、焦点を精神的な葛藤や恋人同士の疎外に置くことである。そして、『青鞥』外の女流文人と違い、当時の風習や倫理に背いた自身の恋愛関係を旧道徳によって正当化しないという面も見受けられる。むしろ、旧道徳を否定し、それに違反する自身の行動や恋愛関係を肯定しようとする努力が特徴的である。

平塚らいてう自身の評論は広く知られているが、実は『青鞥』の創刊以前、「愛の末日」という小説を発表したこともある。その小説は、愛人に失望し、就職という形で自立の道を見出す女子大学生を通じて正に〈新しい女〉像を描いており<sup>259</sup>、恋愛の代わりに仕事に生き甲斐を感じるヒロインを描くコロンタイの『偉大な恋』を思い起こさせる。残念ながららいてうのこの小説は現在まで残されていないため、その分析も行うことができない。代わりに、「青鞥」社員の努力の結晶である大正2年（1913年）の『青鞥小説集』を取り上げたい。そこに纏まっている18篇に関する文学的な価値の評価は分かれているが、既に文壇で名前が知られていた女性作家にも、全くの新人にも自己表現の場を与えたこと、そして女性の力の

---

<sup>257</sup> 与謝野晶子「そぞろごと」『『青鞥』女性解放論集』岩波書店、1991年、12頁。

<sup>258</sup> 小林裕子「告白体というスタイル—小説」『『青鞥』を読む』學藝書林、1998年、37—52頁。

<sup>259</sup> 渡邊澄子「『青鞥』運動史」『『青鞥』を読む』學藝書林、1998年、518頁。

みによって成り立っていたことが、当時の日本にとって革命的だったということは疑いの余地がないだろう。古いジェンダー規範から脱出しようとし、自分の道を探っている日本女性の苦悩や葛藤を様々な視点から描いたこの小説集は、日本の女性解放運動にも、女性作家による文学の発展にも大きな役割を果たしたに相違ない。

このような小説集を5回出版する予定だったようだが、残念ながら「青鞥」に対する社会の逆風に平塚らいてうの個人的な事情や疲労が重なり、結局一回限りのものとして終わってしまった。一年間あまりの『青鞥』で発表された作品の中から18の短編が選び取られたが、その選択の基準の不明確さについて指摘されてきた。<sup>260</sup> 小説集に例えば既に作家として評判が定まっていた田村俊子の作品が含まれていなかった。らいてうが『中央公論』に寄稿した田村俊子論において、彼女は俊子を〈新しい女〉と見なしていない<sup>261</sup>ことから、上記の「小説集」にはもっともらいてうの感覚に近い〈新しい女〉の作品、もしくは〈新しい女〉を描こうとしている作品が選ばれたのではないかと推測できる。こうした理由で、この18の作品には、『青鞥』の発意者であるらいてう、そして「青鞥」という女性集団そのもののジェンダー観及び〈新しい女〉の概念が含まれているはずである。したがってここでは、『青鞥小説集』からいくつかの小説を選び、コロンタイの小説における問題点やモチーフの類似性という観点から、その分析を行う。

先ず、旧道徳の否定に関しては、荒木郁のかなりスキャンダラスな作品「道子」が挙げられる。横浜で育ち、教会の小学校に通ったことのある道子はフランスの文化に憧れながら、ジョゼフというフランス人と友好関係を結ぶ。彼が東京に引っ越して間もなく、道子は彼を訪れるが、ジョゼフが彼女と性的な関係を望んでいることでショックを受ける。さらに、浅草新福井町にある叔母の家に住み着いてから、横浜のころに憧れていた外国文化の象徴である細工物は、「豚小屋」のようなところで働いている貧乏で惨めな労働者によって作られているという事実を目撃する。抱いていた理想と現実世界のコントラストはあまりにも激しく、彼女は社会の不平等にも、そもそも職業にも「どんなに働いてもあれなんだもの」<sup>262</sup>と失望してしまう。そして、叔母の家を飛び出し、料理屋や下宿屋の女中など様々な経験を重ね、

---

<sup>260</sup> 利根川裕「青鞥社編『青鞥小説集』解説」『『青鞥』の女たち』第7巻『青鞥小説集』不二出版、2003年、4頁。

<sup>261</sup> 同上、5頁。

<sup>262</sup> 荒木郁「道子」『『青鞥』の女たち』、第7巻『青鞥小説集』不二出版、2003年、83頁。

実家に住んでいる妻子を持っている男性と「自由恋愛」的な同棲を始める。その関係は次のように描かれている。

家庭があつてないような彼は、月給の全部で自分と、道子との生活に足りれば好いのであつた。二人の関係は非常に自由なものである。外国にあるとか聞いた自由恋愛倶楽部とか云うものでも此の家庭には、一步を譲るであらうと思われる。兎も角、二人が愛し合つていたという事は事実である。が、然しお互いに女も男も一週間も顔合わせずに過ごすこともある。それは、互いに出歩いたり、また各自の情人の處を尋ね廻ったりするからである。それを二人とも、別に不思議とも思わない。

263

ちなみに、『青鞥小説集』に含まれていない、荒木郁のもう一つの短編「手紙」も社会で受け入れられない恋愛を描いている。当時の日本の法律上、女性には禁じられていた「姦通」を扱っているこの短編小説のために、『青鞥』の1912年（明治45年）4月の第2巻4号は発禁となった。その本文を成しているのは、一見幸せな家庭を持っていながら、不倫関係を持っている女性が愛人に宛てて書いている手紙である。その女性は夫の日常の優しさを認めながらも、お互いの心に触れようとしない薄っぺらい夫婦関係のために、罪悪感を殆ど抱くことなく眠っている夫の隣の部屋で愛人との逢引の約束について手紙を書いている。「人間なら人間らしく真面目な恋に確り抱かれていたい。（…）ふるえて偽りの日を送るよりも、形式はどうであろうとも心と心とをふれ合うことのできる生活に這入りたい」<sup>264</sup>と願う女性主人公からは、アンナ・カレーニナや早月葉子という、「大嵐」を求めるヒロインが容易に連想される。そういうヒロインたちはただ激しい恋愛を求めているだけで、男女関係外の自己表現や自立した生活を検討もしないことから、彼女たちを〈新しい女〉と呼ぶことができないというのは、既に述べた通りであるが、要求する恋愛のために社会規範に背くという彼女たちの心の自由への試みは女性解放のプロセスにおいて重要な段階であり、彼女たちは〈新しい女〉に向けて着実に一步を踏み出していると言えるだろう。

道子を〈新しい女〉と呼べるかどうかはさておき、彼女の恋愛観は今挙げたヒロインよりも激しい形で古い道徳を否定している。妻子を持っている相手と同棲しているだけでなく、

---

<sup>263</sup> 荒木郁「道子」『『青鞥』の女たち』、第7巻『青鞥小説集』不二出版、2003年、86頁。

<sup>264</sup> 荒木郁「手紙」『『青鞥』女性解放論集』岩波書店、1991年、123頁。



他の肉体関係を自由に結び、それを相手に隠そうとしない。二人を結んだ独特で「自由な」愛情はコロンタイの「恋愛の多様性」の理論を思い起こさせる。ただ、他にも愛人を持っていることは、コロンタイが批判していた「ポリガミー」的な関係でもある。『三代の恋』のジェーニャにも比較できる道子は作者に一切否定されず、むしろ終わりの描写によって肯定されているように見える。この作品は正に日本なりの「水一杯理論」を描いており、その道徳に道子がたどり着いたのはおそらく急進的なジェーニャのように理論面からではなく、人生の苦難を散々味わってきたことに起因しているだろう。

ジョゼフに、そして社会全体に絶望したことによって、自分の若いころの外国文化への憧れ、ある意味でのロマンチズムに幻滅した道子はその反動として極めてシニカルになった。シニカルに生まれ変わった道子はお金がなくなった時に改めてジョゼフを訪れ、彼女にとって卑しい存在である彼と性交渉をする代わりに、彼にお金をもらおう。彼女の「自由恋愛」は恋愛の範囲を遥かに超え、売春に近いものになってしまう。シニカルな彼女自身でさえ、嫌な男性を訪れる際「心の底にうづくまっている汚い或るもの」<sup>265</sup>を感じる。それにもかかわらず、最後まで彼女の行動や道徳観が作家に一切否定されないというのは興味深い。道子の悲劇は、旧来の日本家庭の中では自分の居場所を見つけられなかったために新しい道を探ろうとしながら、教育を途中で辞め、自分の能力より、美貌をいかしたいという古いジェンダー規範から完全に抜け出せなかった点にあらう。職業も、信頼できる相手もおらず、結局生活費のために嫌な人に自分の性を売るという解決方法しか見いだせない。『或る女』の早月葉子のように、旧世界と新世界の間でさまよってしまい、古い道徳を捨ててしまっただが、〈新しい女〉としての自分なりの道を結局見つけられないのである。

売春に関するロシア及び日本社会の見解は異なっていたことについては、第2章第1節第1項で既に述べた。芸術界の担い手である「芸者」は、自分の「芸」も性も売るということを生活費のためにやっているが、下層の女性にとって憧れる「職業」であり、女性が社会出世をする稀なチャンスの一つでもあったという点で、日本では独特な立場の存在となっている。浪漫的な雰囲気を帯びた独特な世界と見なされていた「花柳界」とは対照的に、ロシアでは長い間合法であった売春は、キリスト教の影響も強く、また事実上の娼婦の状態を踏まえ、暗く惨めなイメージしか持っていなかった。宗教を一切否定しても、その視点を受け継いだコロンタイを含むソ連の活動家は、娼婦を資本主義社会の犠牲者と見なしていた。売春

---

<sup>265</sup> 荒木郁「道子」『『青鞥』の女たち』、第7巻『青鞥小説集』不二出版、2003年、74頁。

は、本章の第1節で取り上げなかったもう一つのコロンタイの短編『姉妹』のテーマにもなっており、そこからも売春に対する極めてネガティブなスタンスを読み取れる。また、コロンタイも、平塚らいてうも生活のために愛せない相手と結婚するという女性の選択も「売春」と呼んでおり、売春の概念が如何に広く、また如何に密接に女性解放とかかわっているか、ということを教示している。

次に取り上げる短編、後にマルクス主義者かつ社会党の国会議員となった神近市子の「手紙の一つ」でも、日本の当時の〈新しい女〉たちが憧れた「恋愛結婚」とそれに対比されている生活の安全策としての結婚が主なテーマである。この小説は荒木郁の「手紙」と同じ形を取り、そのプロットは第2章第1節第2項で論じた夏目漱石の『三四郎』の結末を思い起こさせる。手紙を送る友達の家で K という男子学生と知り合った女子学生のヒロインは、様々な事情によって K と親しくなる。火事をきっかけに、お互いの両想いが明らかになり、恋で結ばれている二人は幸せな付き合いをしばらく楽しんでいる。ただ、肉体関係を結んでから、K の気持ちに余裕が現れたことに気づき、また「暴君の態度」<sup>266</sup>が現れるようになった。不安になったヒロインは結婚する気があるのか彼を問い責め、彼の曖昧な返事で彼の恋に失望してしまう。その結果、以前から友達関係にあった裕福な B と便宜のために結婚する。その選択を彼女は次のように正当化しようとする。

(…) 自分の生活を安全にし、自分の存在を実際ならしむることは人としての私共の義務では有りますまいか。その方法とし懺の生えた貞節や情操をすてることはそんなに社会の悪の中心となるべきでしょうか。<sup>267</sup>

こういう正当化が必要なのは、やはり時代の流れで「ロマンチック・ラブ」概念の影響の下「恋愛結婚」が〈新しい女〉たちの憧れとなり、また、新しい家族のモデルや新しい夫婦関係を約束するようなものでもあったからだろう。ただ、理想と現実はいつもうまく一致していたわけではなく、『三四郎』の美禰子のように現実世界の困難に行き詰った「手紙の一つ」の女性は、また美禰子のように自分の恋をあきらめ、打算で結婚することを選ぶのである。美禰子の場合は、「謎の女」である彼女の内的な葛藤は不明であるため、読者は彼女の行動に共感をおぼえにくい。また、恋する相手の野々宮の他に、三四郎まで自分に引き寄せたのは、結果的に彼女の「偽善者」としてのネガティブな評価を招いた。前述したように、美

---

<sup>266</sup> 神近市「手紙の一つ」『『青鞥』の女たち』、第7巻『青鞥小説集』不二出版、2003年、226頁。

<sup>267</sup> 同上、232頁。

禰子のモデルとして漱石はらいてうを念頭に置き、それによって「旧い選択」をする〈新しい女〉をおそらくアイロニカルに描こうとしたというのも、いくぶん奇妙なことに見える。らいてうこそはそうした結婚を「売春」として批判し、自分自身で実際、家族制度も、打算も捨て、年下の男性と日常的な苦勞を味わいながらも恋愛に基づいた「共同生活」を選んだからである。

一方、情熱的な恋愛の代わりに安全な“Good-natured daddy”との結婚を選んだ「手紙の一つ」のヒロインの行動は美禰子のように否定的に捉えられがちだが、それは果たして妥当であろうか。当時の日本で普及していたロマンチズム思想から考えると、愛していない相手と自分の人生を結ぶということは確かに人間の本能に対する罪のようなものに見える。ただ、女性解放の視点から見ると、「自由結婚」は必ずしも「恋愛結婚」と一致させる必要はないという点に留意したい。自分自身で選んだ相手と結婚するというヒロインの行為は正に「自由結婚」なのである。そして、もう一つ重要な要素は、美禰子と野々宮の場合のように、恋する二人の結婚を妨げているのは両親や社会などではなく、男性側に結婚の意志が欠如していることなのである。彼女たちを愛しているはずの相手が結婚する願望を全く表していないというのは、ロマンチック・ラブ・イデオロギーにとらわれていた彼女たちにとっては侮辱であり、不可解なことであろう。「手紙の一つ」のヒロインはそうしたことを意識しながら、自分の側に愛情がない結婚でもそれを「勝利」だと考えているのである。

こうして私の美しいゆめは破られ、男性に対して受身に出て居た私迄が男性の奴隷とならぬ爲、性の満足な発達をとげる爲に両性の間にわだかまる永遠の争闘に預ることとなりました。<sup>268</sup>

「手紙の一つ」及び『三四郎』のヒロインたちは相手に結婚する意志がないことを知ったことで、恋によって唯一の運命の相手と結ばれることを前提とするロマンチック・ラブの神話に失望してしまう。「手紙の一つ」ではその女性の葛藤が一人称で描かれているため、当時の日本女性が直面していた挑戦や挫折がよりいっそう明らかになる。また、ロマンチック・ラブや好きな男性の「恋愛ゲーム」に絶望した女性がそのゲームにどうしても勝とうと躍起になっているという点においては、アンナ・カレーニナや早月葉子を思い起こさせる。ただ、「手紙の一つ」のヒロインは、打算結婚という、彼女たちとは全く異なる独特な解決方法を見つける。恋人に侮辱されプライドが高い女性にとって、「性の闘争」で勝つためにこの一

---

<sup>268</sup> 神近市「手紙の一つ」『『青鞥』の女たち』、第7巻『青鞥小説集』不二出版、2003年、231頁。

見「旧い女」的な選択をするというのは、むしろ独創的で合理的にも見える。つまり、恋の代わりに安定性を優先したという「旧い女性」のストーリーとしても解釈はできるが、ロマンチック・ラブ・イデオロギーに失望し、そして性の闘争に目覚め、盲目的で情熱的な恋よりも現実的で安定した生活を選ぶという〈新しい女〉の自由な選択を描くストーリーとしても解釈できる。神近市子の激しい性格や急進的な活動を念頭に置けば、後者の解釈のほうが妥当であるように思われる。

作者の実生活に基づいているとされる、加藤緑の「執着」も「性の闘争」をテーマにしている。岩野清の紹介で「青鞥」に入った彼女は文芸評論家加藤朝鳥と自由結婚し、その成り行きや夫婦間の食い違いを「執着」で描いているとされている。久子というヒロインは結婚後4年経ち、既に子供を儲けた頃に19歳のころを想起しながら、当時の希望や歓楽に満ちた人生と現在の理解不足に悩まされる夫婦生活を対比している。19歳頃の当時、澤野が久子のことを雑誌によって知り、彼女に対する恋心を綴ったカードを久子に送る。男性の感情に既に失望した経験がある久子は面識もない青年の気持ちをそう簡単に信じず、逢引を断るなど、澤野に冷淡である。だが、その冷淡さは彼の感情をさらに盛り上げ、彼は突然彼女の家を訪れる。将来夫になるその男性に対する自分の気持ちを久子は「澤野に対して一種の好奇心こそ持って居たが、別に恋しいとは思わなかった」<sup>269</sup>と思い起こす。同時に、「唯詩的な交際をして居るのが久子の若い心には嬉しかった」<sup>270</sup>ので、青年を特に拒むこともしなかった。「詩的な幻」というプラトニック・ラブを楽しんでいた若い久子は、青年と実際に会うことを望んでいない。彼女は単に恋に憧れ、相手は誰であろうと、その恋を味わいたいだけである。しかし、現代的な言葉でいえば正にストーカーのように澤野に追い詰められ続ける。それで恐怖を覚えながらも、運命である彼の「執着」から逃げられないという考えに久子はとりつかれている。その運命的という要素もロマンチック・ラブ・イデオロギーの一部であり、彼女は永久に苦しめられたとしても、その運命に逆らえないというロマンチック・ラブの罠にはまってしまう。

そんなふうにな久子が迷っているさなか、父親に見合い結婚を勧められ、最初は受動的にそれに従うが、実家に帰った時、久子の中に正に〈新しい女〉の覚醒と呼べるような気持ちの変化が起こる。

---

<sup>269</sup> 加藤緑「執着」『『青鞥』の女たち』、第7巻『青鞥小説集』不二出版、2003年、272頁。

<sup>270</sup> 同上。

(…)心が落ち着くと同時に「自分」と云う者を考えて来た。此の儘犠牲となつて何のなす事もなくて死んで了うのがいかにも惜しい。生まれ甲斐がない。学問した甲斐が無い。どうしても自己を発展させて立たねばならぬ。自分に人間としての天職があるなら其の天職を全ふせねばならぬ。自分は唯狭い「女」と云う名、娘、或は姉と云う名に縛られて此儘朽ち果てべきではない！<sup>271</sup>

ただ、家庭の事情のため、いつか結婚せざるを得ないということも久子は意識しているので、少なくとも自分が選ぶ相手と結婚させてもらえるように、父を説得する。澤野に対して恋心も抱いていないのに、東京に戻っても、彼の熱いラブレターを読んで改めて迷ってしまう。さらに、記者である澤野の友達が彼女のもとを訪れ、澤野と結婚するように激励する。結果的に説得され、久子は澤野と結婚してしまう。彼の情熱的な片思いに同情し、ロマンチック・ラブの罠に嵌り、その「執着」や「運命」という神話のせいで受動的になってしまう。せっかく「天職」があるはずの〈新しい女〉の自覚を持って間もなく、それを好きでもない人のために捨ててしまう。そして、「手紙の一つ」のヒロインが、Kと肉体関係を結んではじめて、彼の気持ちが冷めかけていることに気づいたように、おそらく結婚まで処女性を保っていたと推測できる久子は、結婚後冷めかけた澤野の気持ちに気づき、絶望してしまう。子供を儲けたにもかかわらず、お互いに不満を抱えながら、二人は離縁までも口にしてはいる。それでも、不幸や日常的な食い違いに苛まれながら、夫婦の生活を送り続けている。久子はその理由をまたしても強い「執着」に見出し、超自然的な力によって二人の優柔不断を正当化しようとしている。

夫と出会うころから小説を書いていた久子は、結婚後は主婦の生活や子育てに没頭する。夫との関係さえうまくいってれば、それでも満足できそうだが、「新しい男」である夫は彼女に自立をさせたく、新聞記者になることを勧めている。ただ、久子にとっては「家庭」と「自立」は同時に存在できないものに見える。その矛盾を彼女は夫にぶつけてみる。

「駄目、駄目、又弊害が出て来るわ。男って者は女に対して、無理な要求ばかりするんだから。一方男性的たれ、一方女性的たれ、外に出て活動した上に家の中では従来之女と同じような事を要求するんですもの。全く無理だわ。一つの性を備え

---

<sup>271</sup> 加藤緑「執着」『『青鞥』の女たち』、第7巻『青鞥小説集』不二出版、2003年、282頁。

て居る者が、どうして両性の特質、職分を兼ねられるものですか。」<sup>272</sup>

せっかく先進的な夫が自己表現や発展を激励してくれているのに、なぜか久子はそれに対して憤慨し、否定しているのである。その上、「男は外で働くもの」「女は家を営むもの」という同時代のジェンダー規範を久子は自分自身で肯定しているようにも見える。独身だった時は自分の「天職」を探りたく、そのために勉強もしていた彼女は、結婚後なぜそれを全て捨ててしまったのか。そこはやはり時代背景によって、また完全に変わっていない同時代の男性の意識によって説明できる。いくら「新しい男」の澤野であっても、妻に「自立」を勧めながらも、家事を分担する意志を全く表していない。また、就職のために子供の世話ができなくなるというのは、同時代の日本女性の多くにとって悲しい事実だった。つまり、「家庭」か「天職」という矛盾は久子に避けられないように思われる。小説自体はその自立に関する争いで終わるのだが、結局実家に子供を預け『毎日新聞』の記者となった加藤緑の生活から見ると、夫の願望が叶ったことがうかがえる。澤野との結婚のために〈新しい女〉としての自分を捨てたつもりで久子が、〈新しい女〉としての自分の「天職」を見つけたのは、逆説的だが結局のところ夫のおかげだった。ただ、他人に子供を完全に任せ「捨てた」ことに恐らく大きな未練が彼女に残っていたことが小説から推測できる。仕事も子育て・家事も同時にするのは不可能に近い時代において、日本の〈新しい女〉たちが辛い選択をしなければならなかったことを、加藤緑の「執着」は描いているのである。

---

<sup>272</sup> 加藤緑「執着」『『青鞥』の女たち』、第7巻『青鞥小説集』不二出版、2003年、291頁。

## 終章

〈新しい女〉というのは、どういう女性のことなのだろうか。第1章で触れたロシア作家が生み出した「ニヒリストカ」のように、道徳を含め全てを拒否する中で自分のアイデンティティを見つけていく女なのか。「心の自由」を求め、社会に反抗するアンナや葉子のような「大嵐」の女なのか。夏目漱石をはじめとする日本作家の多くが描いたような、永遠の「謎の女」なのか。自立の道を選び、嫉妬を含め自分の感情の大部分や一夫一妻の「夢」を捨てるアレクサンドラ・コロantaiが理想とした「独身女性」なのか。それとも、「青鞥」社員をはじめとする世界中のフェミニストたちが目指してきた男性と同じ地位に立ち、「ジェンダーレス」の社会を築いていく人なのか。

「ジェンダー」という概念はやや曖昧で、研究者によって理解は様々であるが、その捉え方はだいたい批判的で、男性性及び女性性に関する社会規範、そして「抑圧」に近い「差別」を指していることが多い。ただ、フェミニズムと違い、言語学や生物学などの多くの科学的な分野においては、「ジェンダー」は単純に「性」と同様の概念であり、社会学では「女性性」及び「男性性」、心理学や生化学では「性の自己認識」を指しているのが、一般の人の意識においては混乱を起ししかねない。その一つ、女性解放運動が生まれた19世紀から受け継いだ誤解は、フェミニストの女性が「男になりたい」ということである。それはロシア文学の「ニヒリストカ」のイメージを含め、長い間男性の特質か特権だと思われてきた短い髪形や喫煙の習慣、そしてポリガミーなどを意味していた。同時に、「女性の特徴」とされてきた優しさや感情深さ、貞操を否定することも含んでおり、その理由でトルストイを含む多くの知識人は「女性の女性性」が完全に失われることを恐れ、女性の社会進出に反対していた。

性やその区別に関してはフェミニズムにおける論争は未だに解決されていないと言える。19世紀には女性と男性の体は完全に異なっているという説が一般的であり、女性は子宮のために病的かつ神経質であり、ヒステリーに陥りやすいと考えられていた。トルストイの妻ソフィアや有島の母親もヒステリーの発作を実際に頻繁に起こしていたように、当時の女性にはヒステリーが割と一般的な現象だったようだが、現在それはあまり見られない。同時に、体力的には平均的に女性は男性より劣っているということは現在も否定できないが、それは体力を特に必要としない現代社会の生き方の中で男性の優越性を裏付けることではなくなった。また、避妊や妊娠、月経などという女性の性に関係するものは科学的な

進歩のおかげでさほど日常の支障にならなくなってきた。筋肉量や月経の有無という性的な特徴だけで、社会権利が定められるべきではないことは言うまでもないが、「弱肉強食」的な古代社会において、女性は「弱い性」とされ、日常的に男性に頼るほかに道がほぼなかったのは事実である。それにもかかわらず、多くのフェミニスト論者はその女性のやむを得ない服従を男性の陰謀のようなもののように論じる場合が少なくない。女性解放のためには、そもそも科学的倫理的な進歩、「人権」や「人間の自由」という人道主義的な概念が誕生することが不可欠な条件だったであろう。

ただし、それが誕生してからも、一般の男女の意識が変化するためにはある程度の時間が必要だった。「弱い性」としての女性の劣等を喧伝しようとし、テレゴニーなどの女性のセクシュアリティや自由を抑圧する迷信的な疑似科学の説の類は 19 世紀に生まれ、国によっては 20 世紀の後半までも存在していた。その性差別論に対する反応として、一般的に性の識別を否定するフェミニズム論が誕生してきた。同じ「青鞥」においても、性の識別に対する意見が分かれていた。現在は、クィア理論の影響で、事実としての生物的な性を否定する傾向があり、「ジェンダー」だけではなく、「性」も多義的で曖昧な概念になってきている。セクシュアリティの多様性、自己表現やアイデンティティの自由というのは人間の不可欠な権利であると同時に、男女両性間の独特な緊張感、エロス、もしくはフロイトの概念で言うリビドーは、これまでに人間が生み出した文学や文化のインスピレーションの源であり、生命力の基でもある。その生命力と社会的な抑圧の矛盾、エロスの創造的でありながら破壊的な力については、トルストイの『アンナ・カレーニナ』や有島の『或る女』を例に、本論の第 1 章第 2 節及び第 2 章第 2 節で論じてきた。

育った環境や個性において非常に異なるトルストイと有島であるが、社会や宗教的な思想はもちろん、エロスの捉え方や作品におけるその描写に関しては明らかな類似点がある。もともと、キリスト教における「肉」と「霊」の二元性に影響され、二人ともエロスを否定的に扱っていた。アメリカ留学中にホイットマンの詩によって有島はその姿勢を見直したが、その後もエロスを肯定しつつ破壊的な力として描写していたことが多い。アンナと葉子の像を通して、作者たちはエロスを生にも死にも関連付けていた。エロスが結婚や道徳などに全く抑えられていない場合は、さらに死への方向が強まり、アンナも、また葉子もどちらかという「エロス」＝「死」という方程式を生きることよりも優先する。一方、トルストイはエロスの破壊的な要素を認めながらも、結婚により抑えられたエロスをキテ



イとリョーヴィンの夫婦を通じて描き、それが人生において肯定的な役割が果たせることを認めていた。しかし『アンナ・カレーニナ』を受容するにあたり、有島はこの概念を導入しなかった。彼は人間の本能としてエロスを重んじたが、エロスは破壊的でしかありえないと思いついていたため、心中という形で命を絶つことにしたのかもしれない。

キリスト教に影響された両者のエロスの捉え方などは似通っており、アンナと葉子の悲劇的な人生を描いた二つの長編に多くの共通点が見いだせることもそれによって説明できる。同時に、女性の権利や使命に関する見解はいちじるしく異なり、それによって女性解放においても彼らは正反対の姿勢をとっていた。それにもかかわらず、「アンチフェミニスト」とされているトルストイの女性主人公アンナが「フェミニスト」有島の〈新しい女〉とされてきた葉子像をインスパイアしたのである。この矛盾のように見える事実についてはすでに詳しく述べた。コンテクストを無視した発言や『クロイツェル・ソナタ』などの作品の表面的な解釈のもとでトルストイを「女嫌い」と決めつける紋切り型の解釈が見直され、彼のジェンダー思想が彼の独特な宗教観や世界観にもとづき再評価されることを願ってやまない。

『或る女』の出版から100年以上経った現在から見ると、アンナから様々な特徴を受け継いだ葉子は実際の〈新しい女〉には見えないかもしれない。社会活動家の母親のもとに生まれ、思想家や知識人の知り合いを持ち、同時代の大部分の女性と与えられていなかった教育を受け、多くの面で恵まれた彼女は自身の才能を生かせず、自立することも自我を確立することもできなかったが、『アンナ・カレーニナ』のアンナと同様に、恋愛においてのみ社会に反発し、自分の意志を貫くことができた。それはいずれの場合においても悲劇に終わったが、その原因はヒロインの性質にも見出すことができる反面、大部分の責任は女性の自由意志を抑制する当時の社会にあるだろう。結果的に男に頼ってばかりで、自身の道を見つけられなかった葉子は、アンナ以上に同時代のジェンダー規範の苦しさを実感し、それに悩んでいた。日本のフェミニスト作家とされる宮本百合子は有島武郎が「葉子の現実を徹底的には解剖も解決もし得なかった」<sup>273</sup>と批判し、葉子を「実は平凡

---

<sup>273</sup> 宮本百合子「『或る女』についてのノート」『宮本百合子全集 第十巻』新日本出版社、1980年。

[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000311/files/2883\\_8411.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000311/files/2883_8411.html)]

な」ヒロインと見なしているが、それは過小評価ではなからうか。葉子は当時よく騒がれていた〈新しい女〉として受け入れられ、女性の従順さなどという古い美德をまだ唱えていた時代にとってはスキャンダラスで新しいタイプのヒロインになった。経済的自立や参政権はもとより、「心の自由」を求めた葉子・アンナは、両者ともその後女性が意識を変えていくにあたり、重要な役割を果たしたと言っても過言ではない。

開国に続く明治時代の日本において、近代化や「四民平等」という新しい時代が始まったが、日本女性は100年以上前と同様に親、夫、息子に従うべきだとされ、現在から見ると当たり前権利を持って居なかった。また、妾という形で事実上の一夫多妻制がしばらく存続していた中、女性の不倫は「姦通罪」として厳しく罰されていた。この矛盾は『或る女』のヒロイン葉子のような時代外れの、「余計者」の〈新しい女〉を生み出した。こうした〈新しい女〉たちは大正時代の「大正デモクラシー」の環境の下で日本社会でより多く見られるようになり、活躍を増やすことができた。その顕著な例が「青鞥」社員となった女性作家だった。

らいてうをはじめとする『青鞥』に関わっていた女性たちの〈新しい女〉論や彼女たちが書いた作品を第3章第2節で見た。同章の第1節第2項で取り上げた、ロシアの革命家であり、マルクス主義者でフェミニストのアレクサンドラ・コロantaiが描いたヒロインと、彼女たちは同様の悩みを抱えていた一方、異なる葛藤もあった。ロシア及び日本においてジェンダー規範が疑われ始めた時期は、おおよそ重なっていたが、両国の状況には前述のように大きな相違もあった。ロシアでは十月革命の結果マルクス主義国家が生まれ、それは女性にとって新しい自由や権利をもたらしたが、多くの男女のジェンダー意識はそれについていけず、コロantaiの小説でもうかがえるように、性関係の混乱が起き、多くの場合、男性に有利だった昔ながらのジェンダー神話はまだ有効だった。女性にとって不利な「ポリガミー」はその一つの例であり、また、ちょうど加藤緑のヒロイン久子の場合と同様に、男女平等が宣言されたソ連でも仕事も家事もその殆どを女性が担うようになったのも事実である。日本では明治時代からの開国や新しい思想の導入、女性教育の普及という女性解放にとって有利な状況だったと同時に、いくつかの戦争に伴う「軍国主義」とともに「良妻賢母」という女性の伝統的なジェンダー役割が押し付けられていた。また、宗教（主にキリスト教）を取り巻く状況も両国においては正反対であり、それも見てきた通り、ジェンダー思想の変化や日本女性解放には大きな影響を与えた。

『青鞥』の小説は性や男女関係を中心に置くことについては批判されたこともあるが、それはまた、コロンタイに対するマルクス主義者の批判にも似通う。ただ、男性中心的社会では自分の新しい地位を見つけるには、やはり男女関係からスタートするという事は当然である。女性が家庭内にも、家庭外にも自分の居場所を最終的に見つけられるということは、歴史の流れが証明した通りだが、それでも「性関係」や「結婚」、「家庭」や「家族」という概念を再検討し、その新しい在り方を探る作業は日本においても、ロシア・ソ連においても不可欠だった。同時代の女性の悩みや葛藤は、男性作家の視点による「謎の女」によってではなく、『青鞥』の女性作家たちが描いたヒロイン、そしてコロンタイが描いたヒロインといった例にみられるように、女性自身の声によって提示されたおかげで、両国のジェンダー規範、それと戦う女性たちの葛藤が何よりも立体的に見えてきたといえるであろう。

『青鞥』を発刊した平塚らいてうの目的は各女性に備わっているはずの才能、いわゆる「天才」の発見だった。雑誌としての『青鞥』の寿命は5年間というやや短いものとなり、その上、多くの試みは実現されないまま終わり、『青鞥小説集』の出版は一回きりの出来事となった。その事実を踏まえ、らいてうの目的は達成されなかった<sup>274</sup>とする意見も見られるが、それは果たして妥当な評価であろうか。既に作家として知名度のあった田村俊子や長谷川時雨、翻訳家として活躍していた瀬沼夏葉から、『青鞥』によってデビューができた文壇の新人まで、らいてうはあらゆる女性にその「天才」を表現できる場を提供した。

その女性たちは〈新しい女〉の概念をそれぞれに理解していた。「天才」の発展や「天職」を何よりも重んじていたらいてうと違い、経済的自立やセクシュアリティの自由など、同じ「青鞥」社員でも、人によって〈新しい女〉の条件も異なっていた。国家主義的な「良妻賢母」のコンセプトを信じる山田わかから、国家の敵と見なされていた無政府主義者の伊藤野枝や社会主義者の山川菊枝まで、『青鞥』で発表されていた意見の幅は実に広がった。雑誌の発禁も数回招いたその多様性は、貞操や墮胎、売春についての論争を生み出し、日本のフェミニズム思想発展の刺激となったに相違ない。日本で他に多く存在していた婦人雑誌と比べても、当時のソ連の婦人雑誌と比べても、その大胆さこそ『青鞥』の特徴であ

---

<sup>274</sup> 利根川裕「青鞥社編『青鞥小説集』解説」『『青鞥』の女たち』、第7巻『青鞥小説集』不二出版、2003年、1頁。

り、当時の日本の女性解放思想において先駆的な役割を担った。ロシアにおいては、フェミニストで共産主義者、革命家のアレクサンドラ・コロantaiがそうであったように、日本では、『青鞥』の発意者だった平塚らいてうの存在は思想界や文学界、女性解放思想や日本社会全体に100年が経った現代まで消えない足跡を残した。キャリアや社会的活動、もしくは子育てや家庭の営みを現在の女性が自由に選べるようになったのは、それぞれの国の〈新しい女〉たちが社会に抑圧され、嘲笑われても自身の活躍や男女平等の新しい世界を信じ、誤りを犯しても、現在のフェミニズムから見ると逸脱とさえいえるようなことをしてでも、先に進んでいたからであろう。らいてうが『青鞥』に与えた自由や勇気こそ、真の〈新しい女〉の特徴であるのではなかろうか。

## 参考文献

[日本語文献]

1. 「新しい女」研究会『『青鞥』と世界の「新しい女」たち (日本女子大学叢書 6)』翰林書房、2011年。
2. 阿部軍治『白樺派とトルストイ—武者小路実篤・有島武郎・志賀直哉を中心に』彩流社、2008年。
3. 網野善彦、他『歴史の中のジェンダー』藤原書店、2001年。
4. 有島武郎『或る女』新潮社版、2013年。
5. 有島武郎集、第33巻、角川書店、1970年。
6. 有島武郎全集、第2巻、筑摩書房、1980年。
7. 有島武郎全集、第7巻、筑摩書房、1980年。
8. 有島武郎全集、第10巻、筑摩書房、1981年。
9. 有島武郎全集、第11巻、筑摩書房、1982年。
10. 有島武郎全集、第12巻、筑摩書房、1982年。
11. 飯田祐子『彼らの物語—日本近代文学とジェンダー』名古屋大学出版会、1998年。
12. 石井三恵『ジェンダーの視点からみた白樺派の文学—志賀、有島、武者小路を中心として』新水社、2005年。
13. 上杉省和『有島武郎一人とその小説世界』明治書院、1985年。
14. 江種満子『わたしの身体、わたしの言葉—ジェンダーで読む日本近代文学』翰林書房、2004年。
15. 相賀徹夫『日本大百科全書 (第9巻)』「コロンタイ」小学館、1986年、669頁。
16. 加藤百合『明治期露西亜文学翻訳論攷』東洋書店、2012年。
17. 鹿野政直『婦人・女性・おんな—女性史の問い』岩波新書、1989年。
18. 亀井俊介『有島武郎—世間に対して真剣勝負をし続けて』ミネルヴァ書房、2013年。
19. 北井聡子「コロンタイ思想にみられる『女性嫌悪』—『働き蜂の恋』におけるスチヒューヤの克服」『ロシア語ロシア文学研究 45』日本ロシア文学会、2013年、163—181頁。

[[https://www.jstage.jst.go.jp/article/yaar/45/0/45\\_163/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/yaar/45/0/45_163/_pdf)]

20. 北井聡子「翼が導くユートピア—コロントイの恋愛思想」『ロシア語ロシア文学研究 第43号』日本ロシア文学会、2011年、27-34頁。
21. 小坂晋「『或る女』と『アンナ・カレーニナ』—比較対比研究序説」『岩手大学教育学部研究年報』第26巻第2部、1966年、19-32頁。
22. コロントイ『働き蜂の恋』（高山旭訳）現代思潮社、1969年。
23. 佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』岩波書店、1998年。
24. 佐藤雄亮『トルストイと「女」—博愛主義の原点』早稲田大学エウプラクシス叢書、2020年。
25. 志賀直哉全集、第9巻、岩波書店、1999年。
26. 志賀直哉全集、第17巻、岩波書店、2000年。
27. 柴田勝二『夏目漱石—「われ」の行方』世界思想社、2015年。
28. 新・フェミニズム批評の会『『青鞥』を読む』学藝書林、1998年。
29. 新・フェミニズム批評の会『明治女性文学論』翰林書房、2007年。
30. 杉山秀子『コロントイと日本』新樹社、2001年。
31. 『聖書』日本聖書協会、1991年。
32. 青鞥同人『青鞥小説集』不二出版、2003年。
33. 田山花袋『蒲団・重右衛門の最後』新潮文庫、新潮社、1952年。  
     [[https://www.aozora.gr.jp/cards/000214/files/1669\\_8259.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000214/files/1669_8259.html)]
34. チェルヌイシェフスキイ『何を為すべきか』（神近市子訳）南北書院、1932年。
35. 千種キムラ・スティーブン『『三四郎』の世界（漱石を読む）』翰林書房、1995年、120-131頁。
36. ツルゲーネフ『父と子』（米川正夫訳）修道社刊、1958年。
37. 暉峻康隆『日本人の愛と性』岩波新書、1989年。
38. デジタル大辞泉「夫婦」  
     [<https://kotobank.jp/word/%E5%A4%AB%E5%A9%A6-123017>]
39. トドロヴァ・アルベナ「同棲生活という世界—『アンナ・カレーニナ』と『或る女』における同棲生活について」『現代文芸論研究室論集 れにくさ』3号、2012年、24-36頁。
40. トルストイ全集、第1巻『幼年』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年。
41. トルストイ全集、第3巻『家庭の幸福』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年。

42. トルストイ全集、第4巻『戦争と平和』（上）（中村白葉訳）河出書房新社、1972年。
43. トルストイ全集、第6巻『戦争と平和』（下）（中村白葉訳）河出書房新社、1972年。
44. トルストイ全集、第9巻『クロイツェル・ソナタ』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年。
45. トルストイ全集、第12巻『伝染した家庭』（中村白葉訳）河出書房新社、1973年。
46. トルストイ全集、第15巻『宗教論（下）』（中村融訳）河出書房新社、1974年。
47. トルストイ・レフ『アンナ・カレーニナ1、2、3、4』（望月哲男訳）光文社文庫、2008年。
48. ドストエフスキー『罪と罰3』（亀山郁夫訳）光文社文庫、2009年。
49. 中村唯史「顕示する「私」：トルストイとその受容をめぐる一試論」山形大学紀要（人文科学）14巻3号、2000年。
50. 中村喜和「瀬沼夏葉とチャーホフ作品の翻訳」『続・日露異色の群像30—文化・相互理解に尽くした人々』生活ジャーナル、2017年、132-145頁。
51. 中村喜和『瀬沼夏葉。その生涯と業績』一橋大学研究年報、人文科学研究、1972年。
52. 中山和子、江種満子、藤森清『ジェンダーの日本近代文学』翰林書房、1998年。
53. 永井荷風『腕くらべ』岩波書店、2006年。
54. 長縄光男編『ロシアと日本』第4集、横浜国立大学教育人権科学部長縄研究室、2001年。
55. 夏目漱石『三四郎』角川文庫クラシックス、角川書店、1951年。  
[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/794\\_14946.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/794_14946.html)]
56. ニッポニカ「売春」  
[<https://kotobank.jp/word/%E5%A3%B2%E6%98%A5-112839>]
57. 平塚らいてう『わたくしの歩いた道』新評論社、1955年。
58. 福沢諭吉『女大学評論・新女大学』講談社学術文庫、講談社、2001年。  
[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000296/files/43029\\_23560.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000296/files/43029_23560.html)]
59. 藤尾健剛『漱石の近代日本』勉誠出版、2011年。
60. 堀場清子編『『青鞥』女性解放論集』岩波書店、1991年。
61. 堀場清子『青鞥の時代—平塚らいてうと新しい女たち』岩波新書、1988年。

62. 前田愛『近代文学の女たち—『にぎりえ』から『武蔵野夫人』まで』岩波書店、2003年。
63. 宮本百合子「『或る女』についてのノート」『宮本百合子全集 第十巻』新日本出版社、1980年。
64. 武者小路実篤全集、第1巻、小学館、1987年。
65. 武者小路実篤全集、第3巻、小学館、1988年。
66. 武者小路実篤全集、第4巻、小学館、1988年。
67. 武者小路実篤全集、第15巻、小学館、1990年。
68. 武者小路実篤『トルストイ』大日本雄弁会講談社、1936年。
69. 武者小路実篤『友情』岩波書店、1994年。
70. 望月哲男『「アンナ・カレーニナ」を読む』ナウカ出版、2012年。
71. 森鷗外『雁』新潮文庫、新潮社、1948年。

[[https://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/45224\\_19919.html](https://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/45224_19919.html)]

72. 八島雅彦「日本におけるトルストイの現象」柳富子編『ロシア文化の森へ—比較文化の総合研究』ナダ出版センター、2001年、488-504頁。
73. 柳富子『トルストイと日本』早稲田大学出版部、1998年。
74. ヨコタ村上孝之『性のプロトコル—欲望はどこからくるのか』新曜社、1997年。
75. 吉武正樹「ホンネとタテマエ」石井敏、久米昭元編『異文化コミュニケーション辞典』春風社、2013年、395頁。
76. 渡邊凱一『晩年の有島武郎』渡辺出版、1978年。

[英語文献]

77. Benson Crego, Ruth. *Women in Tolstoy. The Ideal and the Erotic* (Urbana: University of Illinois Press, 1973).
78. De Rougemont, Denis. *Love in the Western World* (Princeton: Princeton University Press, 1983).
79. Farley, Melissa and others. *Prostitution and Trafficking in Nine Countries. An Update on Violence and Posttraumatic Stress Disorder* (Journal of Trauma Practice Volume 2, 2003), pp. 33-34.  
[<http://www.prostitutionresearch.com/pdf/Prostitutionin9Countries.pdf?fbclid=IwAR10w5MpXmuwMQpS22RD5pz7t3RLLbViJ0Cx00jsNq5IvSoWMyx0jQE1aL0>]



80. Mill, John Stuart. *The Subjection of Women* (New York: Dover Publications, 1997).
81. Nabokov, Vladimir *Lectures on Russian Literature* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1982).
82. Natsume Soseki. *Sanshiro. A novel. Translated and with a critical essay by Jay Rubin.* (University of Tokyo Press, 1977).
83. Simmons, Ernest J. *Leo Tolstoy. Volume I. The Years of Development. 1828 – 1879* (New York: Vintage Books, 1960).
84. Stites, Richard. *Kollontai, Inessa, and Krupskaja: A Review of Recent Literature.* (Canadian-American Slavic Studies 9(1), 1975), pp. 84–92.
85. Stites, Richard. *The Women`s Liberation Movement in Russia* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1978).
86. Tolstoy, Leo. *Anna Karenina. Backgrounds and Sources. Criticism* (New York: W.W. Norton&Company, 1995).
87. Whiting, Jeanna Marie. *Tolstoy and the Woman Question* (University of South Florida. Graduate Theses and Dissertations, 2006).  
[<https://scholarcommons.usf.edu/etd/2755/>]
88. Wolf, Naomi. *The Beauty Myth: How Images of Beauty are Used Against Women* (Berkshire: Vintage, 1991).

[ロシア語文献]

89. *Бабаева Н.* Комментарий к докладам первой части международного симпозиума «Лев Толстой: сквозь рубежи и межи» // Лев Толстой: сквозь рубежи и межи / Под ред. Т. Накамура. Саппоро, 2011. С. 41 – 47.
90. *Басинский П.* Лев Толстой: Бегство из рая. М., 2010.
91. *Басинский П.* Святой против Льва. Иоанн Кронштадтский и Лев Толстой: история одной вражды. М., 2013.
92. *Бахтин М.* Автор и герой: К философским основам гуманитарных наук. СПб., 2000.
93. *Белый А.* Трагедия творчества: Достоевский и Толстой. Великобритания, 1971.
94. *Бовуар С.де.* Второй пол. СПб., 2017.
95. *Бреслав Е.* Александра Михайловна Коллонтай. М., 1974.
96. *Бушканец Л.* Лев Толстой и женский вопрос.  
[<http://kpfu.ru/news/lev-tolstoj-i-39zhenskij-vopros39-73577.html>]

97. *Виноградская П.* Вопросы морали, пола, быта и т. Коллонтай // Красная новь. 1923. № 6 (16). С.180.
98. *Коллонтай А.* Дорогу крылатому эросу! (Письмо к трудящейся молодёжи) // Молодая гвардия.1923. № 3. С.111 – 124. [[http://az.lib.ru/k/kollontaj\\_a\\_m/text\\_0030.shtml](http://az.lib.ru/k/kollontaj_a_m/text_0030.shtml)]
99. *Коллонтай А.* Любовь и новая мораль.  
[[http://az.lib.ru/k/kollontaj\\_a\\_m/text\\_1912\\_lubov\\_i\\_novaya\\_moral.shtml](http://az.lib.ru/k/kollontaj_a_m/text_1912_lubov_i_novaya_moral.shtml)]
100. *Коллонтай А.* Новая мораль и рабочий класс. Новая женщина. М. 1919.  
[[http://www.pseudology.org/Bolsheviki\\_lenintsy/Kollontay\\_NovayaMoralRabochiyKlass2.pdf](http://www.pseudology.org/Bolsheviki_lenintsy/Kollontay_NovayaMoralRabochiyKlass2.pdf)]
101. *Коллонтай А.* Свобода и любовь. Большая любовь. М., 2014.
102. *Куликова С.* Российский консерватизм и женское движение второй половины XIX века: к постановке проблемы // Актуальные вопросы общественных наук: социология, политология, философия, история: сб. ст. по матер. VII междунар. науч.-практ. конф. Новосибирск, 2011.
103. *Луначарский А.* О быте. Л., 1927.  
[<http://lunacharsky.newgod.su/lib/o-byte>]
104. *Малькова Я.* «Семейный вопрос» в творчестве Л.Н. Толстого и его обсуждение в критике и публицистике конца XIX – начала XX века. М., 2006.
105. *Мейер М.* Проблема семьи в творчестве Л.Н. Толстого (1850-е – 70-е годы). М., 2000.
106. *Мори Огай.* Дикий гусь; Танцовщица; Рассказы. Вступ. статья Г. Ивановой. М., 1990.
107. *Нацумэ Сосэки.* Сансиро. Затем. Врата. М., 1973.
108. *Николюкин А.* Розанов. М., 2001.
109. *Ожегов С.* Толковый словарь Ожегова онлайн. 2008–2017.  
[<https://slovarozhegova.ru/word.php?wordid=28436>]
110. *Осинович Т.* Коммунизм, феминизм, освобождение женщин и Александра Коллонтай. 1993.  
[[http://ecsocman.hse.ru/data/385/935/1217/018ons1-93\\_-\\_0174-186.pdf](http://ecsocman.hse.ru/data/385/935/1217/018ons1-93_-_0174-186.pdf)]
111. Основы социальной концепции Русской Православной Церкви. 2008.  
[<http://www.patriarchia.ru/db/text/419128.html>]
112. *Полнер Т.* Лев Толстой и его жена. История одной любви. Екатеринбург, 2000.
113. *Розанов В.* В мире неясного и нерешенного. М., 1995.
114. *Сато Ю.* Толстовские героини и непреодолимые «границы» // Лев Толстой: сквозь рубежи и межи / Под ред. Т. Накамура. Саппоро, 2011. С. 5–25.
115. *Страхов Н.* Женский вопрос. // Мужские ответы на женский вопрос в России. Вторая половина XIX в. – первая треть XX в. Антология. Том II / Под ред. В. Успенской. Тверь,

2005. С. 56 – 98.  
[[http://tversocium.ru/library/data/downloads/book7\\_2.pdf](http://tversocium.ru/library/data/downloads/book7_2.pdf)]
116. *Струве Н.* Православие и культура. М., 1992.
117. *Толстой Л. Н.* Анна Каренина. М., 1986.
118. *Толстой Л. Н.* Мысли об отношениях между полами // Мужские ответы на женский вопрос в России. Вторая половина XIX в. – первая треть XX в. Антология. Том II / Под ред. В. Успенской. Тверь, 2005. С. 120 – 167.  
[[http://tversocium.ru/library/data/downloads/book7\\_2.pdf](http://tversocium.ru/library/data/downloads/book7_2.pdf)]
119. *Толстой Л. Н.* Полное собрание сочинений. Т. 23. М., 1957.
120. *Толстой Л. Н.* Полное собрание сочинений. Т. 55. М., 1937.
121. *Толстой Л. Н.* Собрание сочинений в 20 т. Т. 1. М., 1960
122. *Толстой Л. Н.* Собрание сочинений в 20 т. Т. 3. М., 1961
123. *Толстой Л. Н.* Собрание сочинений в 20 т. Т. 12. М., 1964
124. *Толстой Л. Н.* Собрание сочинений в 20 т. Т. 17. М., 1965.
125. *Толстой Л. Н.* Собрание сочинений в 20 т. Т. 19. М., 1965.
126. *Толстой Л. Н.* Собрание сочинений в 22 т. Т. 11. М., 1982.
127. *Толстой Л. Н.* Собрание сочинений в 22 т. Т. 14. М., 1983.
128. *Толстой Л. Н.* Собрание сочинений в 22 т. Т.19. М., 1984.
129. *Толстой Л. Н.* Собрание сочинений в 22 т. Т.21. М., 1984.
130. *Фрейд З.* Введение в психоанализ. М., 1989.
131. *Шифман А.* Лев Толстой и Восток. М., 1971.
132. *Эйхенбаум Б.* Лев Толстой. Семидесятые годы. Л., 1974.